

9512 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第375号 1995年12月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

特集
SDレビュー 1995

SD Review 1995

水戸岡鋭治のトランスポーターション・デザイン
Villa Romana: ローマのヴィッラと庭園

HITACHI

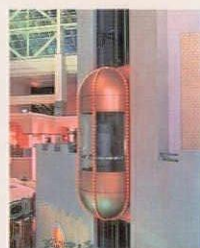
広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の超高速エレベーターや、身近な暮らしの中で利用される車いす用ステップ付きエスカレーター、ホームエレベーターなど、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Hotel & Residence



Public Space



Office Building



Shopping Center



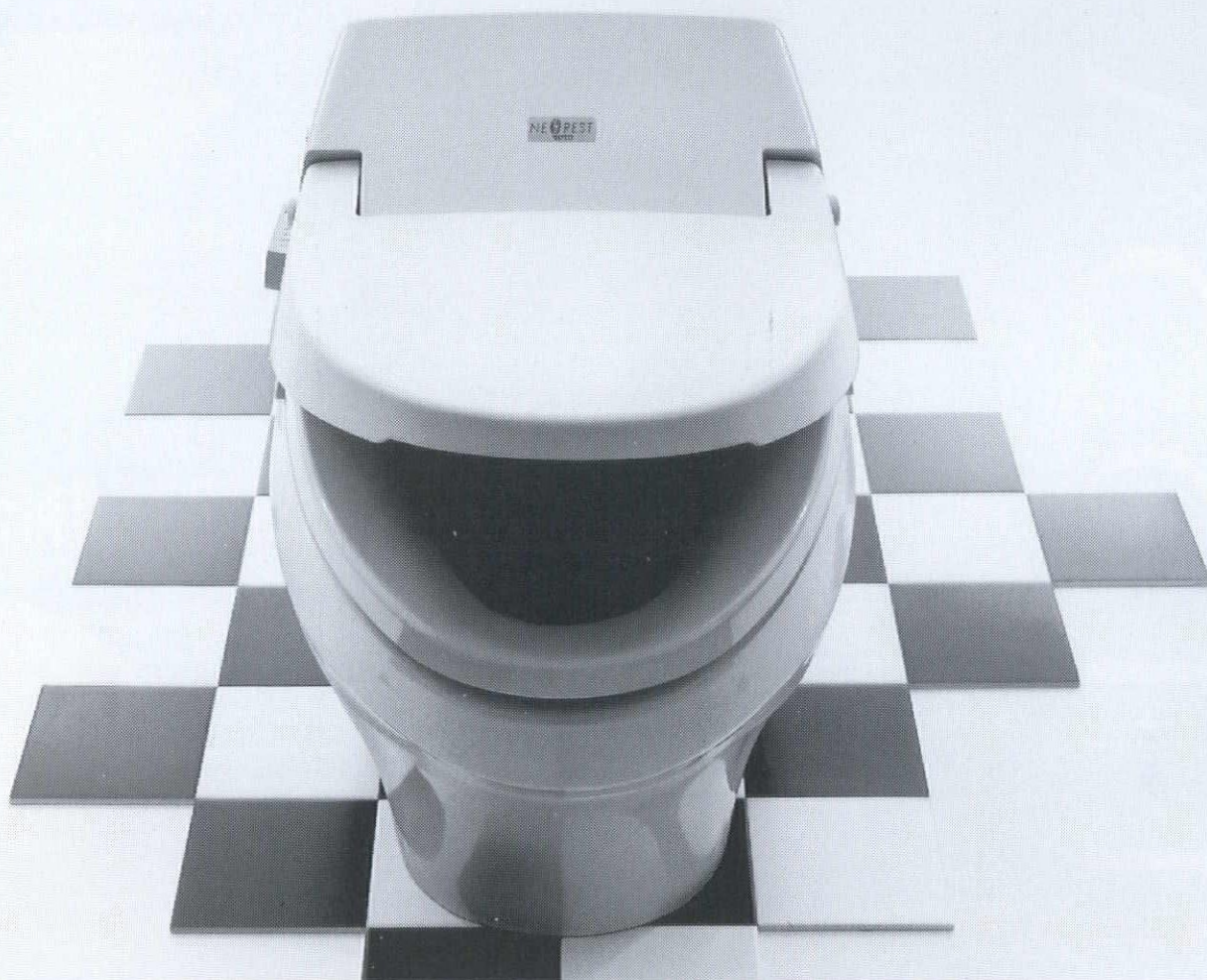
超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



TOTO

「一等賞の便器」

と注文されたら、わたしたちTOTOの中では、このネオレストEXをおすすめします。



一等賞の理由

- ①タンクのいらない水道直結タンクレス便器。
「新洗浄方式(シーケンシャルバルブ方式)」
の開発で、水道管と便器を直接つなげることに成功。タンクに水を貯める必要がないので連続して流せるうえに、給水管もなく静か。1度に使う水の量も、40%程節水できます。
- ②トイレ空間を広く使えるローシルエット便器。
タンクがない分、トイレはスッキリ。収納や窓が広く、大きく、タップリととれる訳です。
- ③使い勝手がとてもいい多機能一体型便器。
ウォシュレット機能をはじめ、オゾン脱臭や室内暖房機能も装備。操作はじつに簡単です。

※カタログご希望の方は、〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝部「EX-1」係まで住所・氏名・電話番号を記入の上ご請求下さい。

NEOREST
(ネオレストEX)

National/Panasonic

A — AUDIO
音響システム

V — VISUAL
映像システム

& — COMMUNICATION
通信システム

C — COMPUTER
コンピューターシステム

C — FOOD
食品流通システム

F — LIGHT
照明システム

T — AIR & AQUA
空調・水管理システム

A — PASSAGE
搬送システム

P — SOFTWARE & SYSTEM
ソフトウェア・システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業(株)システム営業本部
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

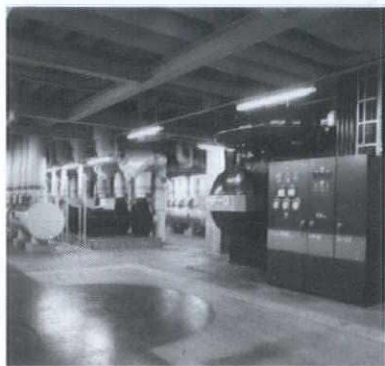
沖縄支店 ☎0988-53-2826

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。

しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、

高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。

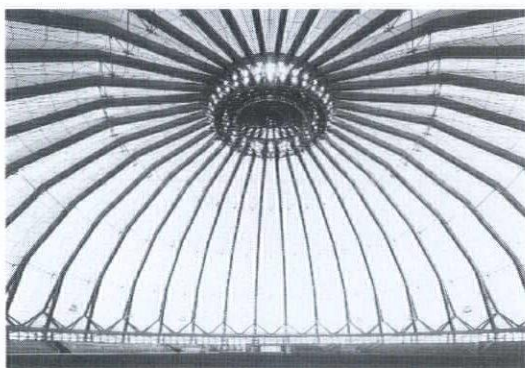
これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。

それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。

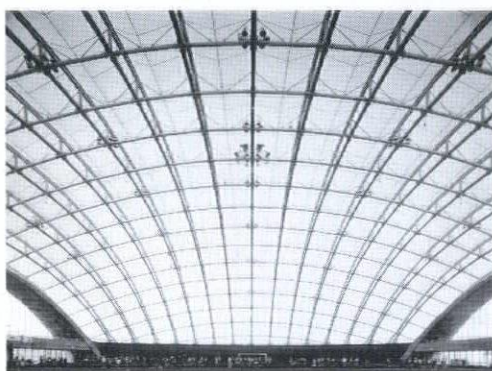
すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、
ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間

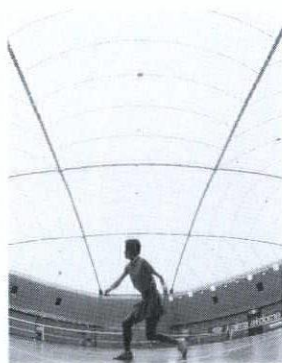




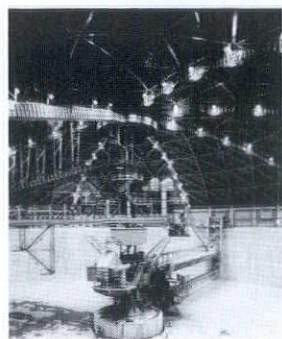
出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド膜構造。



あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペース・アーチによるハイブリッド膜構造。

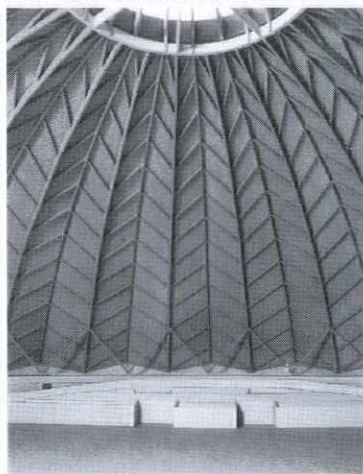


クリエティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気で支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめて採用。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。

大空間の安全を支える 確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対して総合的な観点から最良のものを採用。コンピュータを駆使した構造解析や各種シミュレーションなどにより究極の安全性確保に努めています。

大空間をドラマチックに演出する 照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な設計・施工実績をもとに最新の実験設備による実験・研究を重ね、それぞれの用途に応じたクオリティの高い照明・音響システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる 空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーションや観客席における気流の実測を重ね、これらのデータを基に、最も快適な室内環境実現のための空調設備をトータルシステムで組み込みます。

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

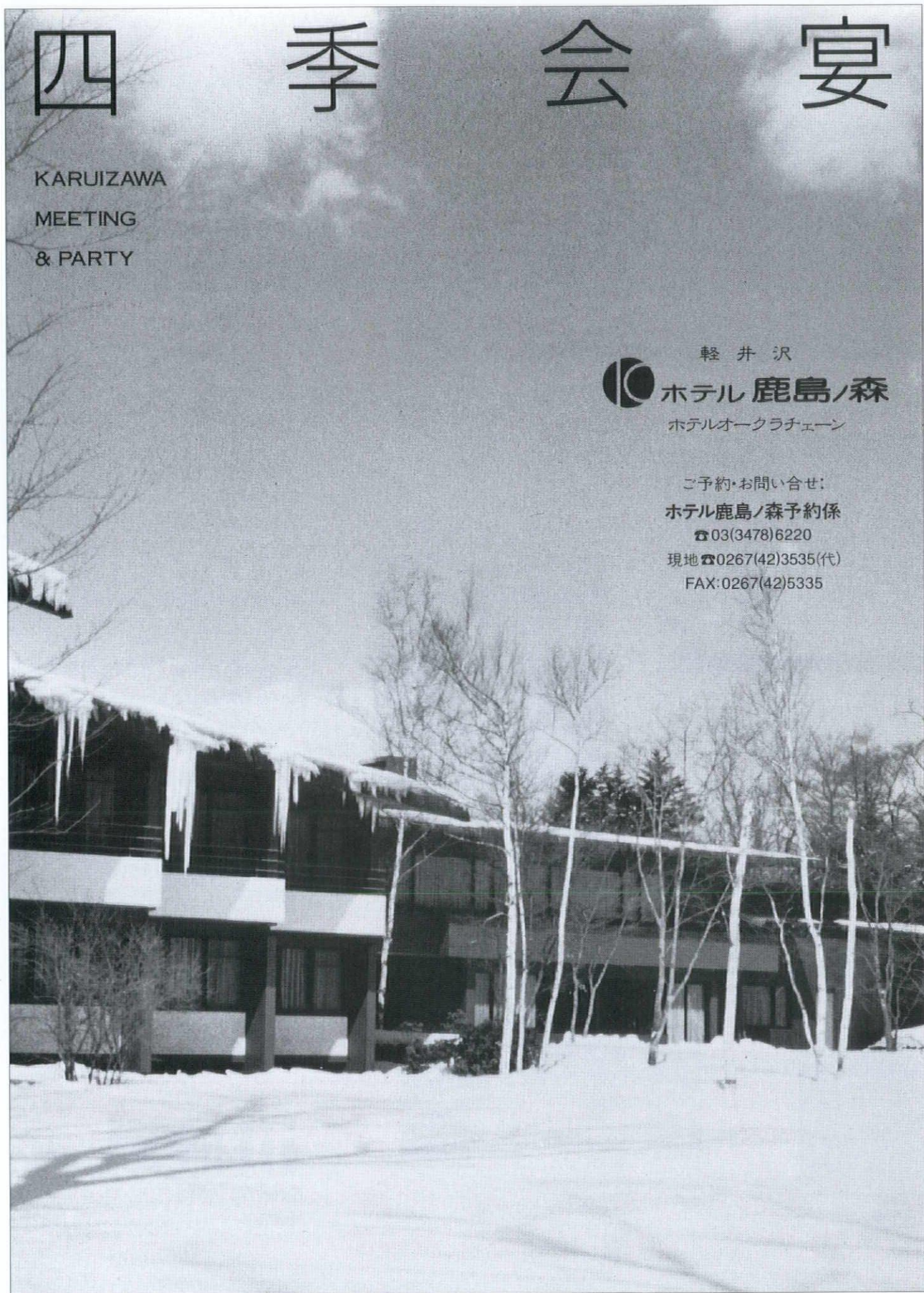
建築技術本部 (03)3404-3311(代)

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

軽井沢
 ホテル 鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

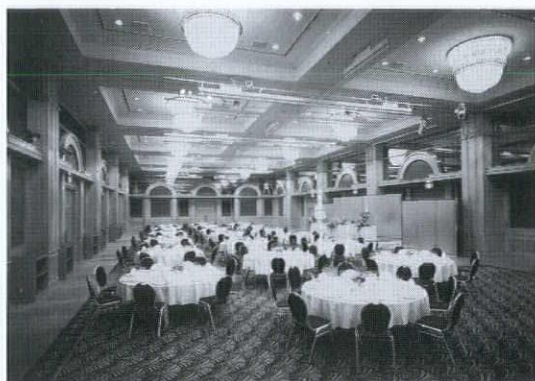
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーテングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
TOKYO

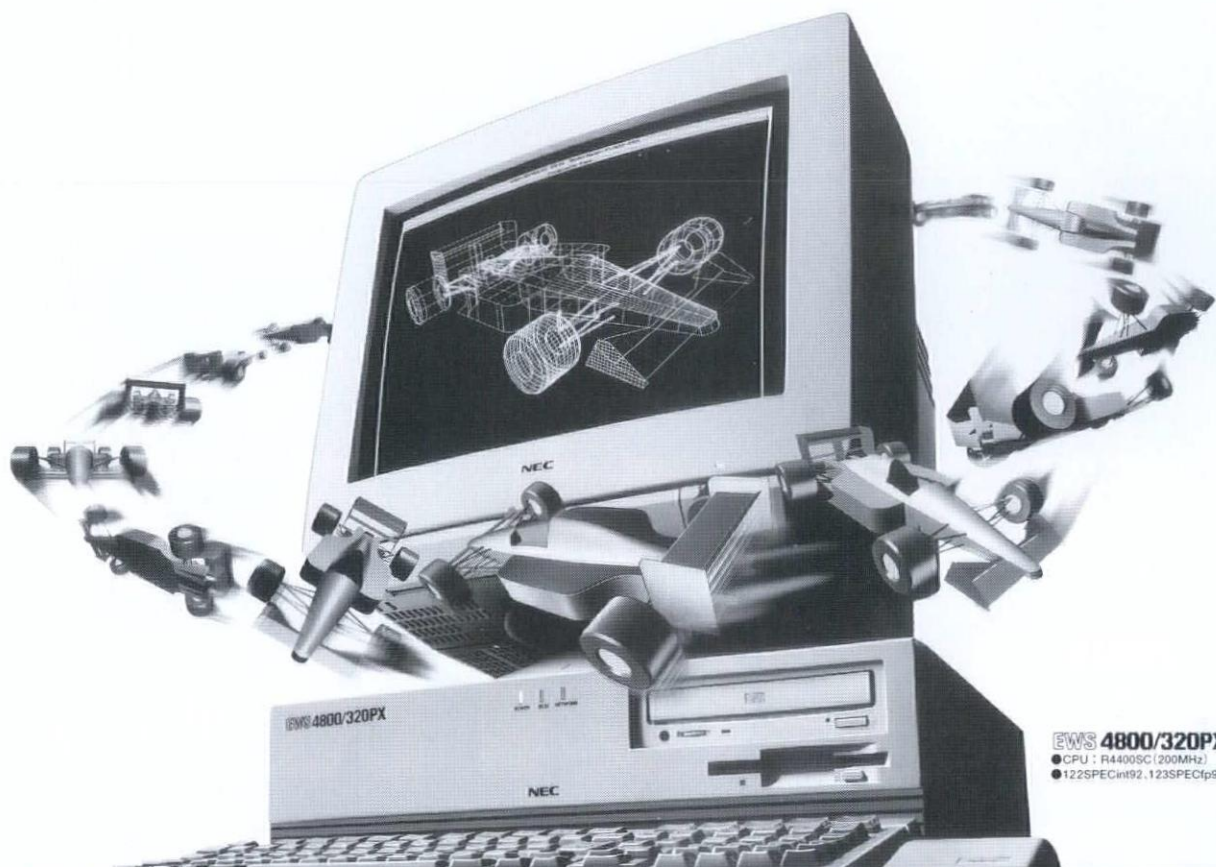
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅〜ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775





EWS 4800/320PX
●CPU: R4400SC (200MHz)
●122SPECint92, 123SPECfp92

世界最高クラスの2次元グラフィックス描画スピード

2D/4,300,000 shortvectors/s*

驚異の3次元グラフィックス能力

3D/750,000 polygons/s*

勝ち抜くのは、この速さ。

新製品の開発競争に、速さで勝つ。
ヨンパチが、エンジニアのひらめきを
世界最高クラスのグラフィックス
スピードでカタチにする。

魅力ある新製品をいち早く市場へ送り出すために、多くの企業が開発競争にしのぎを削っています。このプロダクトイノベーション時代を、世界最高クラスの描画スピードで支えるのがNECの48PXシリーズ。飛躍的に向上した2D描画性能に加え、3D描画性能にいたっては、75万ポリゴン/秒という驚異の処理能力を駆使できます。新製品のアイデアを、瞬く間にデザインへ、シミュレーションへと展開できる48PXシリーズ。この速さは、明日を勝ち抜く力です。

(グラフィックス新基準、48PXシリーズ。)

*それぞれ2次元及び3次元グラフィックスボード装着時のEWS4800/320PXの値です。
shortvectors/s(ショートベクトル/秒): 2次元、3次元グラフィックスの描画性能として使用されており、1秒間に何本の線分を描画することができるかを表す数値です。
polygons/s(ポリゴン/秒): 3次元グラフィックスの描画性能として使用されており、1秒間に幾つもの多角形を描画することができるかを表す数値です。

(48PXシリーズにハイエンドモデル、デビュー。)

EWS 4800シリーズ

EWS 4800/360PX II NEW
●CPU: R4400MC (250MHz) 1~2個
●5,579SPECrate_int92,
6,417SPECrate_fp92(2CPU)



写真はEWS 4800/360PX IIです

(48サーバに、次世代CPU・R10000搭載新モデル。)

UP4800シリーズ

UP4800/760 NEW
●CPU: R10000 (200MHz) 1~4個
●3,100トランザクション/分(4CPU)
UP4800/770 NEW
●CPU: R10000 (200MHz) 1~8個
●4,400トランザクション/分(8CPU)



写真はUP4800/760です

UNIXワークステーション/サーバ

48
ヨンパチ
シリーズ

*UNIXはX/Openカンパニーリミテッドが独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
*X/OpenおよびXマークはX/Openカンパニーリミテッドの商標です。*画面はハメコ合成です。



お問い合わせは NECワークステーション・サーバ販売推進本部 TEL.03 (3798) 6282 〒108-01 東京都港区芝5丁目7-1

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

● General Electrical Work ● Internal / External Wiring for Lighting & Power ● Electrical Work
for Power Stations & Substations ● Design, Execution & Management of Telecommunication Work

テクノロジー&システム

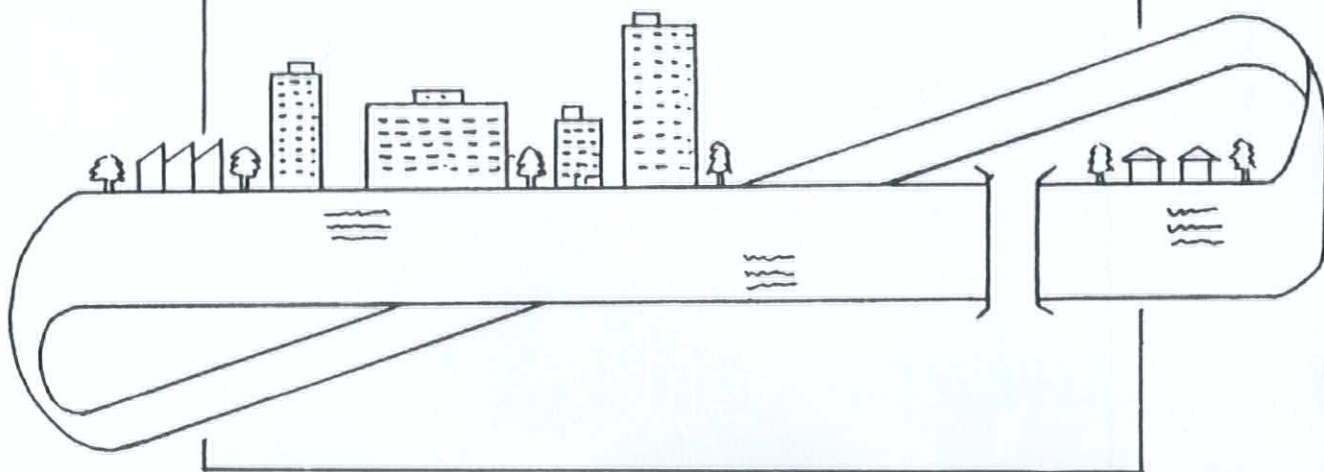


中立電気株式会社

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号4F TEL (03) 3356-2511 代

水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋



日本アス仕様

カスタムEE

ベストロン

NS防水

防水仕様をすべて濃縮!!

それぞれの味を生かし

メルタン21

NPシート

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

ビルオートメーション
ホープンにしたらBAに創造力が生れた。



「オープン」だから、リーズナブル。

高性能で低価格な量産品機器をベースに、きんでん独自のエンジニアリング・ノウハウを生かし機能的で信頼性の高い「A&Aシステム」が実現。お客様にご満足いただける価格でご提供できます。

「オープン」だから、フレキシブル。

制御プログラムをリモートステーションに実装する分散処理システムの採用で、さまざまな建物や施設の運用目的にあわせた対応が可能。将来の拡張にも柔軟に対処することができます。

「オープン」だから、ユーザー・オリエンテッド。

お客様のご要望をじゅうぶんに反映させ、細部にいたるまで、投資コストを生かす最適なシステムを構築。導入後の変更や保守はお客様ご自身で行うこともできます。

総合設備エンジニアリング

株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマンイズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェイトを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富 1163

明石工場 ▶ 〒673-01 明石市二見町南二見 21 番 3 号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号

大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

未来をみつめる目

生活環境の改善から
ハイテク時代に対応した新技術の開発まで
大成温調は最適な空間づくりを追求しております。

● 空気調和・給排水衛生設備



人の呼吸にもっと優しく

大成温調株式会社

〒140 東京都品川区大井1丁目47番1号 TEL.03-3774-1111 (大代)

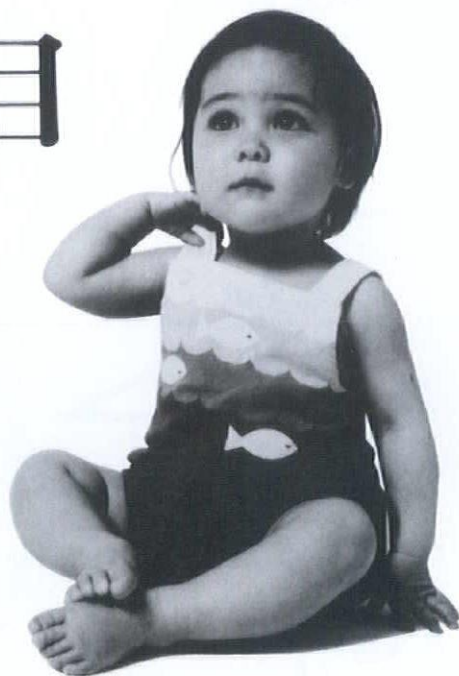
支店・営業所 青森・八戸・盛岡・秋田・山形・仙台・郡山・いわき・水戸・宇都宮・前橋・大宮・千葉・川崎・横浜・
甲府・新潟・長岡・金沢・静岡・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・高松・福岡・長崎・鹿児島・那覇

技術研究所 〒134 東京都江戸川区東葛西2-3-4

TEL.03-3877-3770

横浜技術センター 〒226 神奈川県横浜市緑区川向町806

TEL.045-471-1801



人とエネルギーの間に私たちの技術があります。

TOE/NEC

21世紀をリードする総合設備企業

私たちトーエネックは、先進の総合設備企業として、
電気工事・情報通信・冷暖房空調事業の分野を
通じて豊かな環境づくりの提案をしています。

株式会社 トーエネック

(旧東海電気工事株式会社)

本店／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎052-221-1111

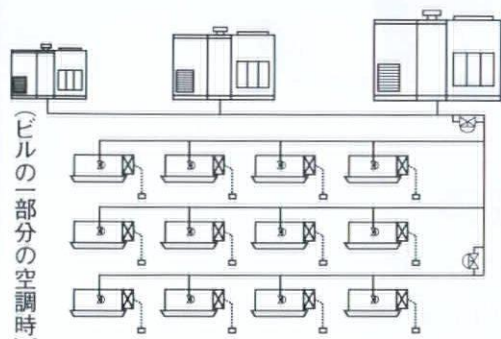
支店／東京・大阪・名古屋・岡崎・静岡・三重・岐阜・長野・飯田

あつ
もつたない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
トロールパネル[DCP]のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

札幌支社 TEL.011-852-2914 名古屋支社 TEL.052-833-8415 中国支社 TEL.0829-23-2115
仙台支社 TEL.022-284-9115 大阪支社 TEL.06-458-4825 四国支社 TEL.0878-33-3336
東京支社 TEL.03-3298-3140 北陸支社 TEL.0764-41-6516 九州支社 TEL.092-411-4835

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111(代)
振替:00160-2-180883

年間定期購読料
25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9312 SDレビュー1993 2400円

第12回SDレビュー誌上発表。クライン・ダイサム・アーキテクツ、和田克明、計画意匠研究所/片木篤十有馬立郎、吉本剛/吉本剛建築研究室、他。関西国際空港旅客ターミナルビル

9401 原広司 3500円

地球外建築、空中都市、梅田スカイビル、JR京都駅、原邸、グラーツ・影のロボット、ヤマトインターナショナル、他。論文:原広司、B.ボグナー、三宅理一、他。写真:宮本隆司、大野繁

9402 台湾現今設計観察 1950円

建築と都市を中心とした台湾現代デザインを紹介。台湾建築李祖原、吳增榮、潘冀、陳瑞憲、他。グラフィック:劉開、陳龍宏。写真:陳春緯。取材・監修:村松伸、小嶋一浩

9403 バイオクライマティックタワー 1950円

自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家ハムザ&ヤング。文:池田武邦、ケン・ヤング、他。[都市を考える——The Cell Cityの提案]大都市を複数の細胞に区分する新提案

9404 堂夢の時感/木島安史の世界 3000円

作品:寿聖庵、孤風院、YAS居、球泉洞森林館、折尾スポーツセンター、設計競技作品、他。文:木島安史、桐敷真次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。随筆:作品データ、執筆一覧

9405 東ドイツの近代建築 1950円

旧東ドイツの近代を席巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ヘルツォーグ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真:長谷川章

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円

「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D.F.ハンセン。アーティスト:アンドレア・ブラム、他。企業等:IBM、ブリティッシュ・カウンシル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円

アメリカランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、パーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円

フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所、他。文:D.マンドレリ、堀池秀人、他。[異界の僧院——モルドバのルーミア正教会堂] 写真:平剛、文:山崎雄史

9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向 1950円

B.シャーデル&ギブニス、マイケル・ソーキン、他。文:松崎強、他。[「手法」から「縁起」へ/吉川油堀寄宿舍]TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真:堀内広治

9410 トロハの適した構造と空間 3000円

鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。[芸術都市への誘い/イタリア・ジベリーナの試み]地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円

世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルの技術的、デザイン的可能性を探る。シャルルドゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他



9412 SDレビュー1994

第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J.ビザル+P.ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田堀繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。[国際競争プロジェクト/オシグイエンチム孤児院] 1950円

9501 山本理顕

作品:緑園都市、岩出山町立統合中学校、痴呆性老人デイケアセンター、保田産第一団地、他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。鼎談:横文彦+植田実+山本理顕 3000円

9502 南イタリアのパロック建築

地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのパロック建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正光、岡田哲史 1950円

9503 集合住宅の現風景

近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文:作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋 1950円

9504 テクノスケープ

テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貢、永瀬雅、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ 3000円

9505 メガ・アーキテクチャ

巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルルドゴール空港、TGV-RER駅、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成:坂本勝比古 1950円



9506 デジタル・アーキテクチャの可能性

インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性:笹田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真:浅川敏 1950円

9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール

作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤康、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真:村井修 2700円

9508 まちのパブリックスペース

人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明 1950円

9509 丹下健三

最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。 3800円

9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作

近年、海外での活躍が目立つペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ——「タワー・アート in 通天閣:ヴァナキュラーな電脳都市展」より] 1950円

9511 長谷川透子:1985-95

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川透子の現在を紹介。作品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文:ビーター・ワック、他。対談:多木浩二+長谷川透子 3000円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭雄、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。横濱館、ノアビル、聖アキラ館、昨宵軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野幹一郎、白井晟一。座談＝大江宏・藤井正一郎・宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、中佐美生司、他。

4000円



横文彦

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群。その初期から1985年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、延び延びた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。雑陣 I、III、他。

3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙で紹介した。早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリンス、成城文庫点の家、アトリウム、他。

4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英 X 安村孝。

3708円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峽に臨む自邸、ヴァイナル通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレンゴの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える。精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



磯崎新 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの塊に分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディバレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



磯崎新 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム デイズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



安藤忠雄 1985-1991 part 2

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクト II、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦 X 豊原敬 X 小澤恵一、他。

5000円

SDレビュー 1995

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚リズ
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

6	審査員総評
8	由田 徹+岡本美樹
10	季 鐵男／CHI'S WORKSHOP
13	トム・ヘネガン+安藤和浩+梶 直樹／アーキテクチャー・ファクトリー
16	西沢大良
19	佐藤光彦
22	手塚貴晴+手塚由比
25	大林直高／KAJIMA DESIGN
28	長坂 大／Mega
32	市原 出
35	遠藤秀平
38	中東壽一／乃普創..設計工房
41	長田直之+筏 真司／I.C.U.
44	佐々木聡+中村宏美
47	山口 賢+BEAM STUDIO
50	藤本壮介
52	吉田 進+松本哲弥+有馬浩一+森吉直剛／大成建設設計本部
55	SDの時代
56	SDレビュー1995経過報告

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大坂屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：1,950円
[本体1,893円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み

表紙：プラスチックハウス
表紙写真：堀内広治
表紙デザイン：小泉均

Villa Romana: ローマのヴィッラと庭園

文+写真=長谷川正允

61

ヴィッラ・アドリアーナ	ピオ4世のカジノ	ヴィッラ・メディチ
ヴィッラ・デスケ	サクローボスコ	ヴィッラ・アルドブランディーニ
ラ・ファルネジーナ	パラッツォ・ファルネーゼ	ヴィッラ・ファルコニエリ
ヴィッラ・マダーマ	ヴィッラ・ランテ	ヴィッラ・ドリッパ・パンフィーリ
クイリナーレの庭園	ヴィッラ・ジュリア	ヴィッラ・アルバーニ

65 地誌としての楽園

長谷川正允

水戸岡鋭治のトランスポーター・デザイン

85

特急ソニック883	リニューアル・デザイン	高遠船「ビートル2」	JR九州西鹿児島駅計画
特急つばめ	サインデザイン	バス「レッドライナー」	

96 私のデザイン作業

水戸岡鋭治

100 鉄道とデザイン——その流れと今

木村一男

58	連載：apple tomology MOVE FORM トムの時空形象学3 不安定 構造論	戸村 浩
102	展覧会レポート：「生命のある都市」の可能性 明日へ——震災復興と大阪湾ベイエリア 安藤忠雄建築展	佐々木葉二
103	展覧会レポート：トロントの四畳半 「4+1/2 The Internal Landscapes of Tokyo展」	福島加津也
104	書評	
106	展覧会レポート：メトロポリス vs アーキテクチャ O.M.A. in Tokyo レム・コールハースのバブリック・アーキテクチャ展	吉良森子
107	新刊紹介	
108	お知らせ	
109	海外建築情報ミックス：政治・経済 その3 「ぐにゃぐにゃもの」	
117	SD1995年総目次	

Special
Feature:

SD Review 1995

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 (Management)
03.5561.2555 (Editing)
FAX:
03.5561.2561 (Management)
03.5561.2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 128

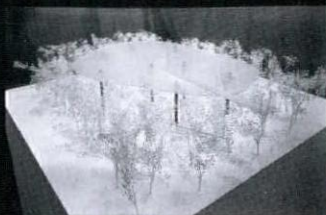
cover: Plastic House
photo: Koji Horiuchi
Cover Design:
Hitoshi Kozumi/NID

6	Comments from the Screening Committee		
8	Toru Yoshida+Miki Okamoto		
10	Ti-Nan Chi/CHI'S WORKSHOP		
13	Tom Heneghan+Kazuhiro Ando+		
	Naoki Kaji/THE ARCHITECTURE FACTORY		
16	Taira Nishizawa		
19	Mitsuhiko Sato		
22	Takaharu Tezuka+Yui Tezuka		
25	Naotaka Obayashi/KAJIMA DESIGN		
28	Dai Nagasaka/Méga		
32	Izuru Ichihara		
35	Shuhei Endo		
38	Hisakazu Nakahigashi/Nofuzou		
41	Naoyuki Nagata+Shinji Ikada/I.C.U.		
44	Satoshi Sasaki+Hiromi Nakamura		
47	Ken Yamaguchi+BEAM STUDIO		
50	Sosuke Fujimoto		
52	Susumu Yoshida+Tetsuya Matsumoto+		
	Kohichi Arima+Naotake Moriyoshi/Taisei Corporation		
55	The Age of SD	Chiaki Arai	
56	SD Review 1995: A Progress Report		

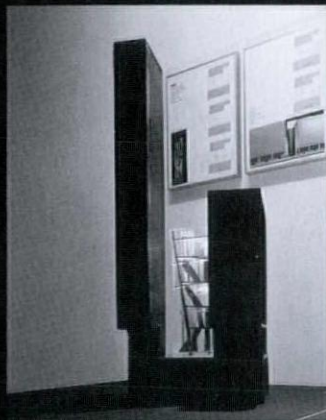
61	Villa Romana	Villa Adriana	Casino di Pio IV	Villa Medici	text+photographs: Masanobu Hasegawa
		Villa d' Este	Sacro Bosco	Villa Aldobrandini	
		la Farnesina	Palazzo Farnese	Villa Falconieri	
		Villa Madama	Villa Lante	Villa Doria Pamphili	
		Giardini del Quirinale	Villa Giulia	Villa Albani	
65	Gardens in Topography				Masanobu Hasegawa

85	Transportation Design by Eiji Mitooka			
	Sonic 883 Express	Renewal Design	Beetle 2	JR Kyushu Nishikagoshima Station Project
	Tsubame Express	Sign Design	Red Liner	
96	My Approach to the Work of Design	Eiji Mitooka		
100	Railways and Design	Kazuo Kimura		

58	Series:	MOVE FORM	Hiroshi Tomura
	apple tology 3	A Study of Changeful Structures	
102	Exhibition Report:		Yoji Sasaki
	From the exhibition "The Architecture of Tadao Ando"		
103	Exhibition Report:		Kazuya Fukushima
	From the exhibition "4+1/2 The Internal Landscapes of Tokyo"		
104	Book Review		
106	Exhibition Report: Metropolis vs Architecture		Moriko Kira
	From the exhibition "Rem Koolhaas and The Place of Public Architecture"		
107	Book Information		
108	Announcements		
109	Eminent Works Abroad: Politics and Economics 3		
	The Elusive and Amorphous		
117	SD 1995 Index		



由田徹 + 岡本美樹



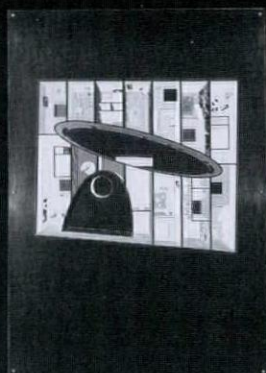
李 鏡男 / CHI'S WORKSHOP



トム・ヘネガン・安藤和浩・梶直樹
/アーキテクチャー・ファクトリー



西沢大良



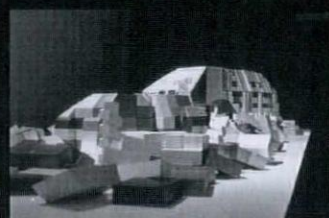
佐藤光彦



手塚貴晴 + 手塚由比



大林直高 / KAJIMA DESIGN



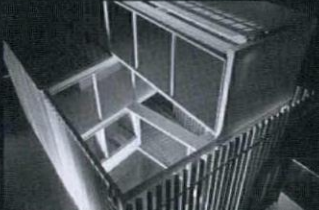
長坂 大 / Méga



市原 出



過藤秀平



中東壽一 / 乃普創 設計工房



長田直之・筏真司 / I.C.U.



佐々木 聡 + 中村宏美



山口 賢 + BEAM STUDIO



藤本 社介



吉田 進 + 松本哲弥 + 有馬浩一 + 森吉直剛
/ 大成建設設計本部

特集

SDレビュー1995

第14回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SPECIAL FEATURE

SD Review 1995

The 14th Exhibition of
Winning Architectural Models and Drawings

高橋 誠一

SDレビューの審査は今年で2回目になりますが、始めにひと通り目を通した段階では、前の年に比べてやや迫力に欠ける印象をもちました。クリティックの中で迫力などという意味不明な言葉を用いるべきではありませんが、これをやや具体的に言えば、提出作品のひとつひとつに込められた作者の抵抗への意志が読み取り難いということかも知れません。審査員全員で200点近くの作品を繰り返し眺めているうちに、不思議なことにその幾つかは、明らかに他と違った建築への表情と内容を見る者に訴えかけてきます。それらを再度整理し、個々に検討を加えながら絞っていった結果が、ここにノミネートされた16作品ということです。

こうした決定の過程の中で、私を不安にさせたひとつの傾向は、その作品、一建築が総体として周辺のすべての環境や社会の中でどのような位置付けをもつものであるかということが、そのプレゼンテーションからは皆目読み取ることができない作品が、年ごとに増えてきているということです。別な見方に立てば、ひとつの作品があたかも耐久消費財的な自己完結型のコンセプトの中に封じ込められて、他を見ることをしないとといった閉鎖的思考の産物のように思えて仕方がないといったところが多く見られたことです。さらに言うなら、その作品にはいかなる地の力が作用しているかという推測を不可能にするような表現方法である。混乱の極みに達しつつある我が国の都市建築の様相が、そっくりそのままひとつの縮図として、この200近い作品の中に見られるような気がしたのは私ひとりであるのでしょうか。何かをしなければならぬ、新しい模索の中から、何かをつかみ取らねばならぬといった焦燥の中で、時間切れになってしまったような作品が目につきます。なぜもっと時間をかけて、当り前の、けれど建築という存在の宿命というべきものを、真正面から見据えてじっくりと考えることをしないのでしょうか。理論の空転と、ひとりよがりの建築が、どれほど多くの人に、多くの迷惑と不快感を与え続けてきたかというこの国の状況を出発点とした作品をつくるべきです。賞与えられた3つの作品に対する私のクライテリアのもっとも大きな部分も、実はこの点にあると思います。台湾から出品された季さんの作品も、ともすれば両隣（恐らくごく当り前のオフィスビル）と同じ運命——破壊と再建——の狭間の中でギリギリの自己主張と存在の意味を見出そうとする熱い試みが、見るものに何事かを訴え続ける——不安定な都市構造の中での精一杯のふんばりに、私はある程度の共感を覚えます。状況との対決という言葉をもう一度新たな角度から洗い直して、新鮮な、そして息の長いひとつの試みとして、さまざまな角度から見るものに迫る——若者らしい鋭利さとエネルギーをそこに見たのです。

●たかはし・ていいち／建築家

坂本一成

今年のSDレビューの審査は私にとって2回目になります。前回は、審査することの楽しさと共に厳しさを経験させてもらいました。今回も、審査の楽しさは変わりませんが、その厳しさには、さらに厳しいものを感じました。それは、このSDレビュー賞が回を重ねて14回となって賞の重みが益々増したからということばかりでなく、この審査で前回以上に私自身の建築観が試されていると感じたからだだと思います。

SDレビューは実現する建築を前提としていること以外は、特定な課題を持たないわけです。そこでは多様な条件の、そして多様なビルディング・タイプの建築を、同じ土俵で見ることになります。こうした場合、どうしても住宅のような小規模のプロジェクトに可能性の多くを見てしまいます。大きなプロジェクトは、条件等の現実的な問題も多く、建築のコンセプトをストレートに表現して実現することは難しくなります。こうしたことを含め、配慮して審査するわけですが、プロジェクトの段階でこれらの優劣を決めるのはやはり困難といえます。他のコンペティションと違って、多様なビルディング・タイプを同列にして審査するこのSDレビューでの審査の厳しさは今回も強く感じました。

昨年と比べて今年は、実現の可能性について特に心悩まされました。必ずしも実現することが前提とならないアイデアコンペでは比較的自由な視点で審査できるのに比べて、実現を前提としたこのコンペでは、このことを真摯に問わなければなりません。特にコンセプトualな、あるいはイメージ的な作品であればあるほど、架構等の構造のリアリティが気になりました。本年の作品には本当に実現を前提にしているのか、不安なものが幾分見られたからです。

審査員として一番試されていると感じるのは内容の読み取れぬ応募案、理解しにくい案に対してです。特に魅力的で印象的な作品であれば尚さらです。選抜審査に次なる可能性を期待したものもありますが、再プレゼンテーションにその可能性を見いだすことができず、残念なものもありました。読み取れぬ内容に出展者の方々との認識のギャップを感じた所もなくはありません。

こうしたなかで200点近くの応募案を検討し、出展選抜審査でその中から16点を選出し、結果的に3点の入選作品が選出されたわけですが、その他にもこの入選作と優劣の付けにくい作品があったことを述べておきたいと思います。他に例のないこの賞の意義に貢献することができたら望外の喜びです。

●さかもと・かずなり／建築家、東京工業大学教授

コンペにおいて審査員と、応募者の立場というのは全く違うというのがよくわかりました。応募者は自分の提案をする、ある意味では気楽な立場で、審査員は、落選者を選ぶような憎まれる立場になってしまいます。入選者より落選者の方が圧倒的に多いわけで、そこに投下された膨大なエネルギーを考えると、審査というのは、本当ならまともな神経ではできない作業です。

落選案の中にも、魅力的な作品が数多くあり、現実には建ち上がったときには、かなり良い建築になるだろうというものもありました。ただ、SDレビューというのは、メディアの中での表現の場であるわけですから、ある程度の表現力の優劣は問われるわけで、その部分は審査上割り切りざるを得ませんでした。

SDレビューというコンペは、様々な解釈が可能な不思議なコンペです。プロジェクトの表現力が優先されるのか、あるいは最終的に現実のものとなるであろう建築の質を問うのか……。実際に審査にあたってみた私なりの結論は、解釈は自由だけれどそれらを貫いているエッセンスのようなものが基本的には問われているのだ、ということです。2次審査に残った諸案、入選案にはやはりそこにスジが通った何かがあって、それを我々が感じ取った結果なのではないかと思っています。

いずれにしても、自分のことは棚に上げて人を批判するのはあまり気分の良いものではありません。その一方で、いろいろな建築の見方、表現の仕方に出会い、刺激になったことは事実です。この点はSD誌に感謝すべきところです。今回は、応募する側から審査する側になって複雑な心境です。

最近、私自身で気になっていることがあります。今年になって日本国内でいろいろな事件がありました。例えば阪神大震災やオウム真理教の事件がそうです。これをデザインがどう受けとめるのか、あるいはそれを受けとめた後、デザインは変わるのか、もしくは答えを見出せずに変化しないのか、いずれにしても建築デザインの今後の在り方を皆さんがどう考えているのかを知りたいと思いました。

結論から言いますと、どの作品もすばらしく、優劣がつけにくいのですが、まだ出口が見つからない、答えの出せない状態なのかなという気がします。あるいは私には読み取れないのかも知れません。もう一度これらの問題を、各作品をじっくりと見直して考えていきたいと思っています。

●ないとう・ひろし／建築家

SDレビューの審査員を初めて務めさせて頂きました。私事で恐縮ですが、まだ事務所を始めたばかりの頃に、初めて自分がSDレビューに応募して賞を頂いたことが思い出され、自分の事のように大変緊張しました。

自分も不安の中で日々建築について考えたり、つくることを行っているわけですから、どうしても問題意識を共有できるものを選択してしまうことを感じました。そういう意味では、異なる人が審査を行えば、これとはまた異なる結果が現れたことだろうと思います。そんな中で私としては、全応募案を見せていただいて、少なくとも現段階では（できあがれば、また全く違った局面をみることができるとは思いますが）、様々な刺激を受け共感しながらも、それでも圧倒的だと思わされた案にはぶつかりませんでした。もちろん、これはこちら側の想像力の至らなさにもよると思いますが、自分も含めて、皆試行錯誤しているのだと言う感想を持ちました。SDレビューだからこそ示せることがあると思います。それは誰にでもいつでも用意されているわけではなく、ある限られたときにだけ可能のような気がします。いずれにしろこのような過程から、いつか誰かが、突然新しい建築をつくり出すことができるのでしょう。

最後に、そんな中でもプラスティックハウスには、大変興味を引かれました。まだまだいろいろ考えるべき点があるとは思いますが、その上で完成したものを本当に見てみたい建物だと思いました。こちらが大変勇気付けられように思います。がんばって素晴らしいものを実現してほしいと思います。

●せじま・かずよ／建築家

プラスチックハウス

内藤：ストラクチャとして、少々疑問が残りました。FRPの屋根は成立しますが、厚みの薄いカーボンファイバーの柱にリアリティがありません。カーボンは圧縮に弱く、座屈の恐れがあります。ここまでおもしろいできなら、そこをもう少し追求してほしい。ああと一歩のツメがあればイメージばかりでなく、リアリティのあるすばらしいものになったと思います。

高橋：FRPを構造物および主要構成材として、ひとつの建築を丸ごとつくってしまおうという意欲にあふれた案です。自由度の高いFRP可塑性の利点をフルに活用して、極めてアモルファスな空間を形成している。素材の見極めには、まだまだ時間がかかるにしても、その可能性をとことん追及してみようとする大らかな若さに期待したい。でき上がったときには是非見たい建築です。総評に指摘した通り、これが建築になるためのすべての条件として明瞭ではありませんが……。

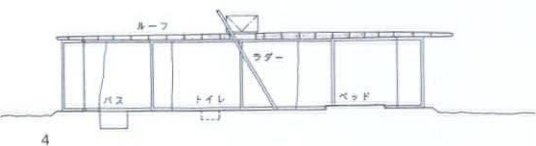
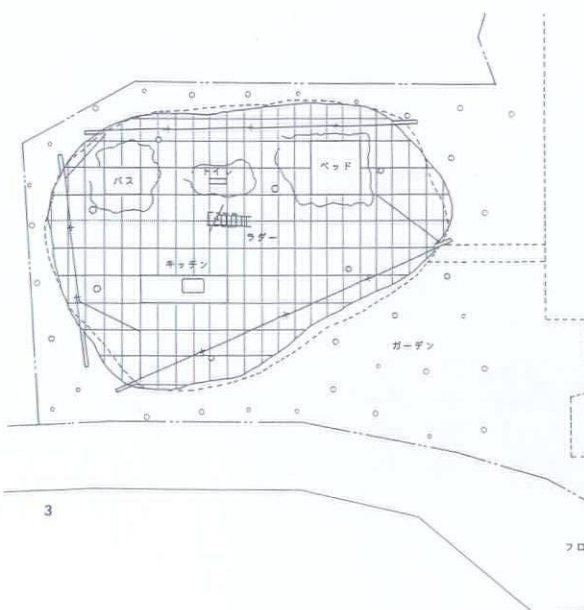
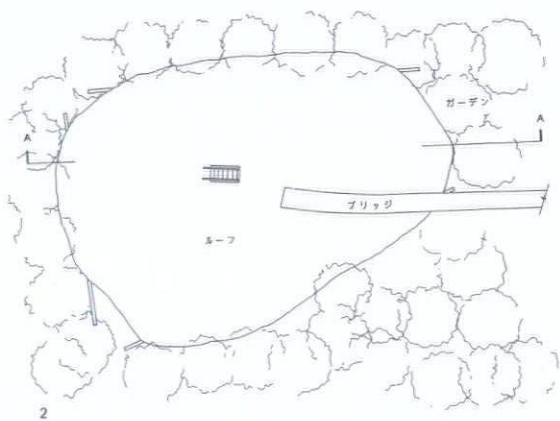
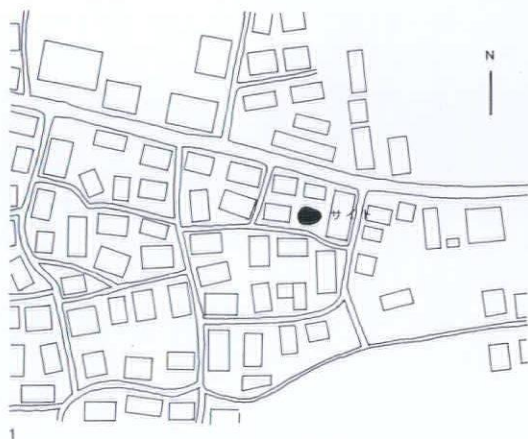
内藤：多分上から見ると、屋根がぼーっと明るく見えるというのを狙っているのでしょうか。坂本：SDレビューは実現を前提としていますから、構造のリアリティは大きな意味をもっていると思います。私もこの案には惹かれますが、リアリティが気になります。例えば、防水性などはこの素材で保てるのでしょうか。でも、大変評価しています。

内藤：今後、細部の存在は必要になってくるとは思います。屋根素材のFRPはボートでも使われていますし、可能だと思います。いろいろ問題もありますが、今回の応募作の中で案の持つチャミングさでは他を抜いていたという印象です。

妹島：完成したのを見てみたいと強く思いました。アイデアあふれる建物だと思います。ただ、平面がもう少し考えられてもよいという気がします。

由田 徹
1965年 石川県生まれ
1988年 豊橋技術科学大学建築学科卒業
1990年 豊橋技術科学大学大学院修士課程修了
1990年 北川原温+ILCD入社
現在、北川原 温建築都市研究所勤務

岡本美樹
1966年 徳島県生まれ
1990年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1992年 東京都立大学大学院修士課程修了
1992年 北川原温+ILCD入社
現在、東京都立大学大学院博士課程



用途：専用住宅
所在地：石川県能美郡辰口町
主体構造：コンクリート土間スラブ+カーボンファイバー複合材+FRP
主要仕上材：床：大理石/柱：カーボンファイバー複合材/屋根：FRP（透明）/サッシ：カーボンファイバー成型枠+ポリカーボネード
敷地面積：143.2㎡
建築面積：68.3㎡
延床面積：67.5㎡
工事予定期間：1996年4月-12月

住居の全体像とは、何を意味するのだろうか。

現況では、3次元空間に記憶と情報が混在した多次元空間の中に、人々は紛れ込んでしまっている。

現在人々を取り巻く環境の中では、部分部分が互いに協調し、あるひとつの全体像を形成するという奇跡は絶対に起こらないし、部分から全体を組み上げることも、もはや不可能である。

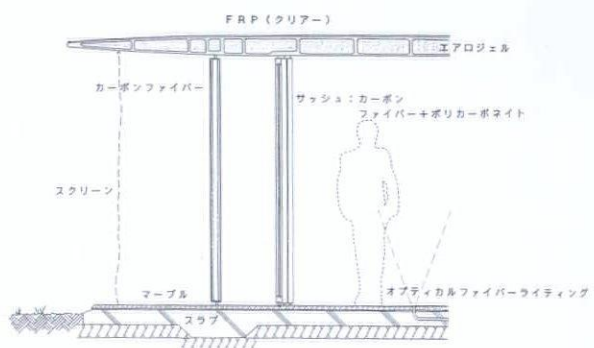
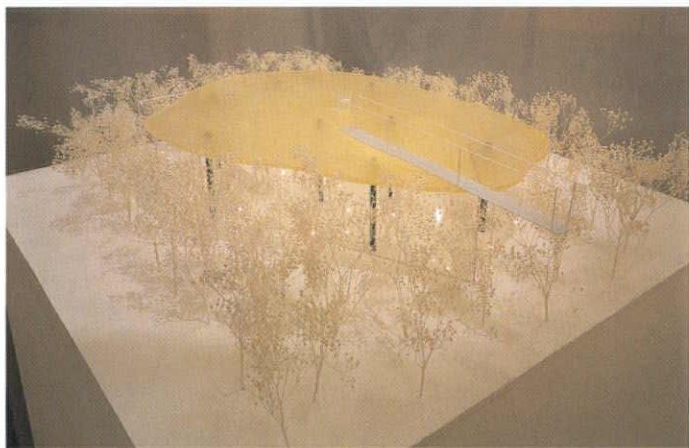
住居の全体像を描くことは、視界ゼロの乳白色の媒質に真っ白な輪郭線を描くほどに無意味である。

住居はもはや輪郭をもった外皮（シェルター）によって統合されない。

計画地は、200戸余りの集落にあり、都会のように粗悪な環境や社会はここにはなく、澄んだ環境へ開かれた純粹な多次元空間としての住居を構想できる。

既存の母屋は、100坪の在来建築の住居であるが、木造建築の暗さ、束縛から生活を解き放ってくれる、解放された空間として創ることを目的とした。私たちは素材の選択と配列によって、プラスチックなイメージを創った。領域の輪郭はプラスチック（柔軟）であり、プラスチックなヴェールのみによって立ち上げられている。

- 1: 配置図 S=1:5000
- 2: 屋階平面図 S=1:250
- 3: 1階平面図
- 4: 断面図
- 5: 詳細図 S=1:70



季 鐵男
 1957年 台湾台北市生まれ
 1981年 東海大学（台中市）建築学科卒業
 1985年 新建築コンペ「2001年の様式」で
 2等入選
 1986年 イェール大学大学院修了
 1989年 東海大学建築学科副教授
 1993年 CHI'S WORKSHOP（季鐵男工作
 所）設立

[朝倉賞]

Z邸

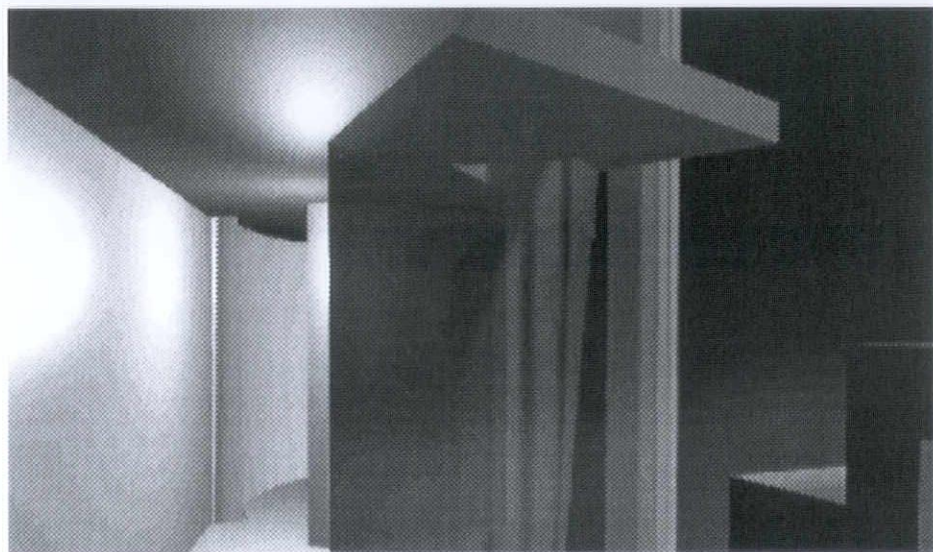
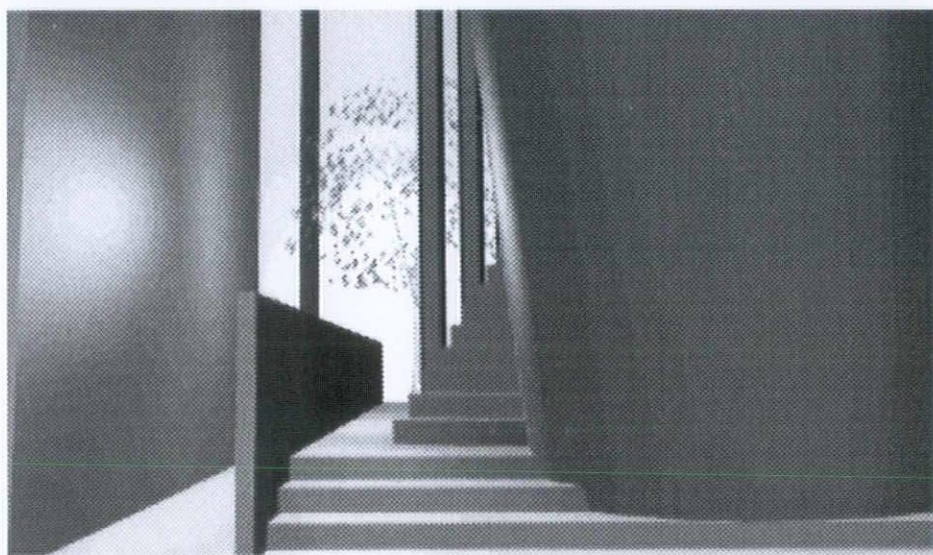
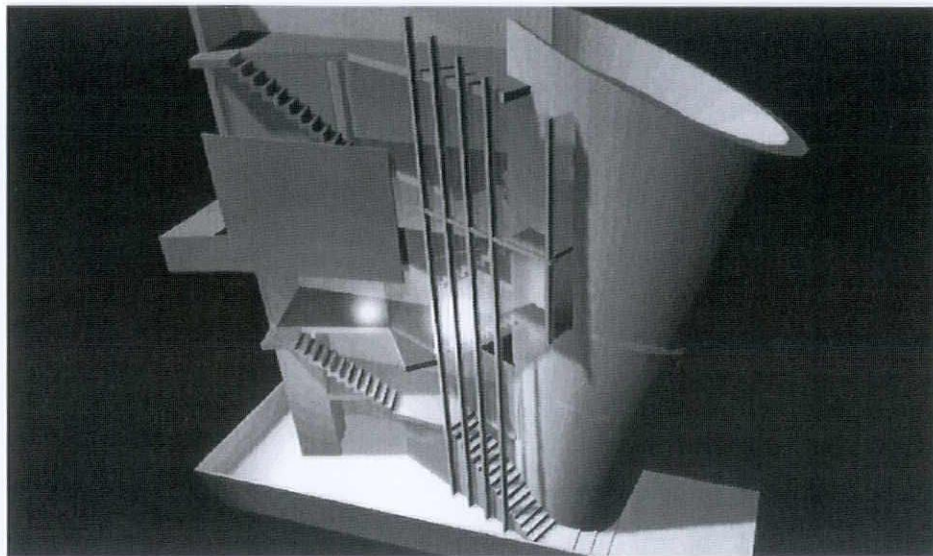
内藤：猥雑な都市に過激に住みたいという
 うな気分が模型や形から出ていて、高度成長
 している台湾の街の中ではこのくらいの形が
 挿入されないと、消されてしまうような、日
 本とは違った状況があるのではないでしょ
 うか。敷地はビルの谷のような、ファンクシ
 ナルな組み合わせとか、コンポジションなど
 が無効になるくらい、そのくらい弱者の立場
 にあるスペースです。そう考えると、ここで
 存在しようと思ったら、形に頼るしかない
 ということが理解できます。また内部空間も住
 居から下の方が、ライブラリーとかリサーチ
 ルームなどのパブリックにつながってゆくと
 ころは面白いと思いました。住居を社会と個
 人のあやうい接点として、「最後の家」とする
 意識はわかります。世の中が動いているとき
 に、どこを拠り所とすべきかという気分がよく
 出ているんじゃないでしょうか。

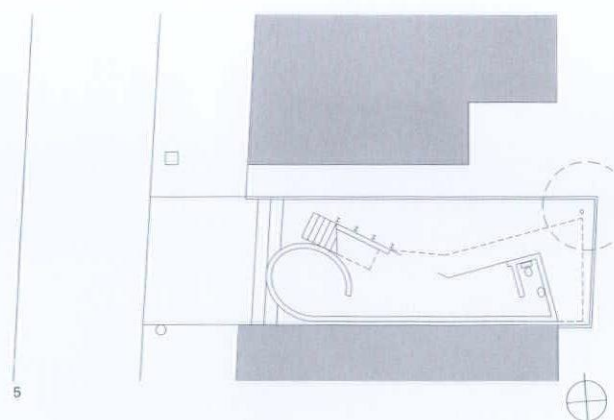
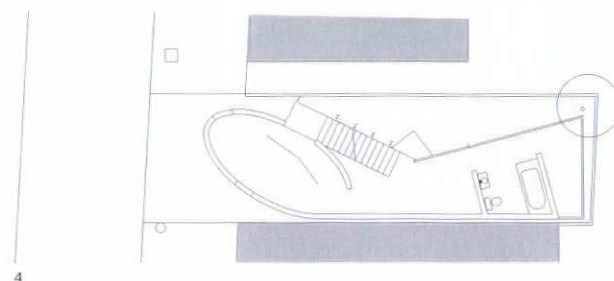
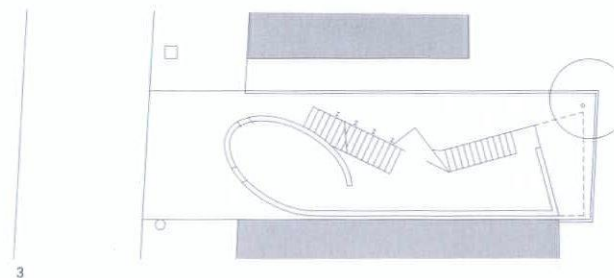
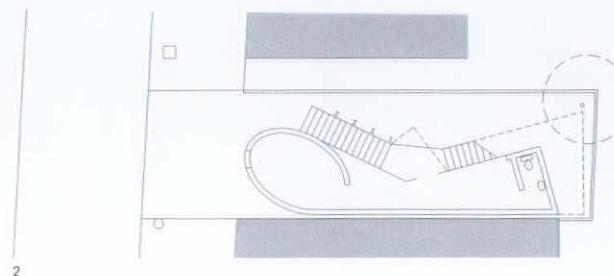
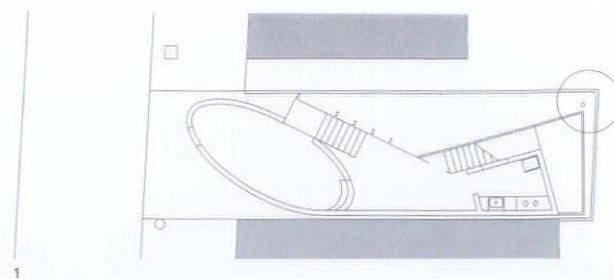
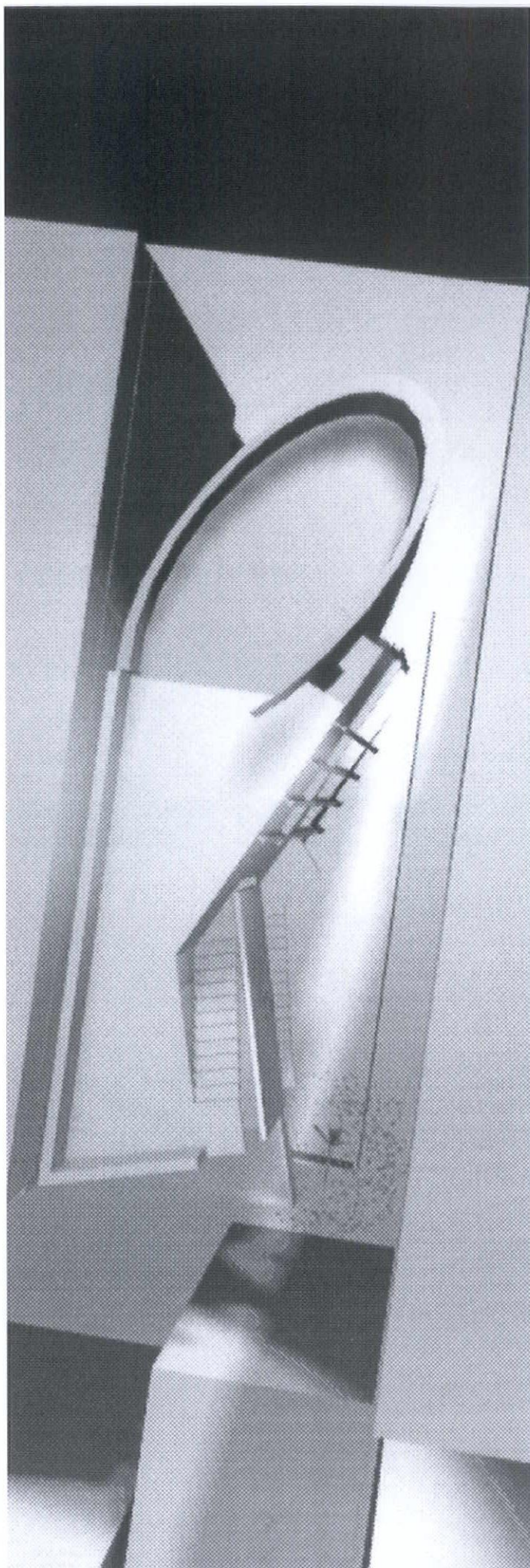
高橋：他の展示作品よりも、存在のリアリ
 ティを強く感じました。都市の中のネガティ
 ブなスペースをどのようにサバイバルしてゆく
 かということに対する、ひとつの提案だと思
 います。

台湾からの作品、日本とほぼ同様のスクラ
 ップ・アンド・ビルドが続く都市部での強い
 意志をもった提案。ビルの狭間に建つが故の
 強い自己主張はやや古風な形態ではあっても、
 それだけの力強さが感じられる。両サイドの
 ビルが建て替えられた後でも存在しうるよう
 な造形力がここでは要求されることになろう。
 そうしたリアリティすら感じられる程に、こ
 の作品には力がある。コンセプチュアルな意
 味では決して新しいものではないが。

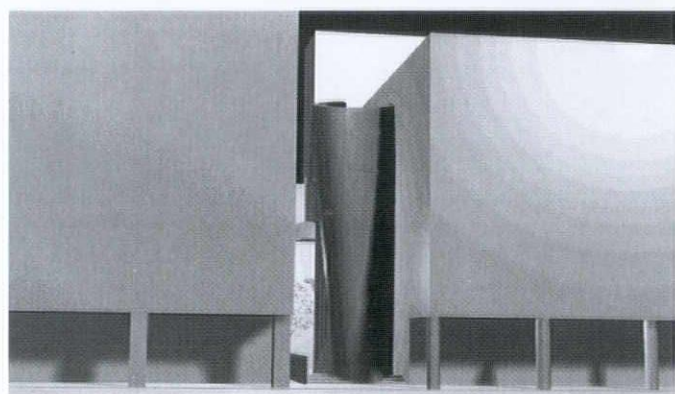
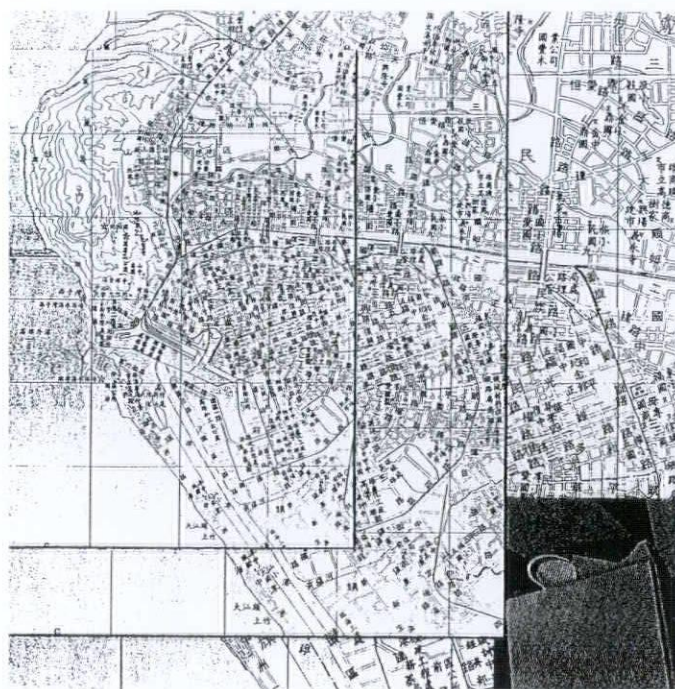
坂本：私は、上手いなと思ったのですが、建
 築形態を都市の中に現す、一種の彫刻のよう
 な作り方に「古さ」を感じました。設計主旨
 文は観念的で、そういう建築の在り方にも同
 様のことを感じます。台湾の事情は違うとい
 うのは分かりますが、私にはこれを現代の空
 間として位置付けるわけにはゆきません。し
 かし作品の上手さの水準は十分あると思いま
 す。

妹島：私も同感です。もう少し、現在に住む
 ということが提案されていても良いのではな
 いかという思いが強く残りました。





1: 5階平面図 S=1: 300
 2: 4階平面図
 3: 3階平面図
 4: 2階平面図
 5: 1階平面図



共同設計者：陳秀杏、陸緯、黃瓊芬、
邱婉婷、郭穎聰
用途：研究所、住居
所在地：高雄、台湾
主要構造：RC造 + S造
敷地面積：91㎡
建築面積：57.5㎡
延床面積：195.5㎡
工事予定期間：1996年3月－9月

家は感情、願望、そして憂鬱を形に表している。それはもはや人間たちの様々な活動を包み込んだ満杯の箱でも、怒りや恐れをしまいこんだクローゼットでもない——むしろ精神と世界、敷地と周辺環境、あるいは個人と社会との接点、または緩衝地帯のような存在であり、しかもどのようなわけか非常に脆く、浸透性のあるものなのである。

情報やコミュニケーション、交通一般の現在の状況を考えれば、住まいの空間をつくらうといういかなる試みも非現実的である。伝統的な感覚で住宅を設計することも、もはや適切ではない。今や建築家にとって、建物のオーダーや倫理は、それが時間、空間そして物的存在の変化と発展への理解を促すものでない限り、歴史とはなり得ない

のである。

この〈最後の家〉は、形式化された中央コートヤードやブリッジといった類のものを拒絶する。そして建物の北側を窪ませることによって、中央のないオープンスペースを設け、曲線的な空間とフォルムの連なりによって半閉鎖的な「部屋」を構成しそのアイデンティティを確立することで、一定の「家らしさ」を保っている。そして様々な活動を通しての変化を待っているのである。

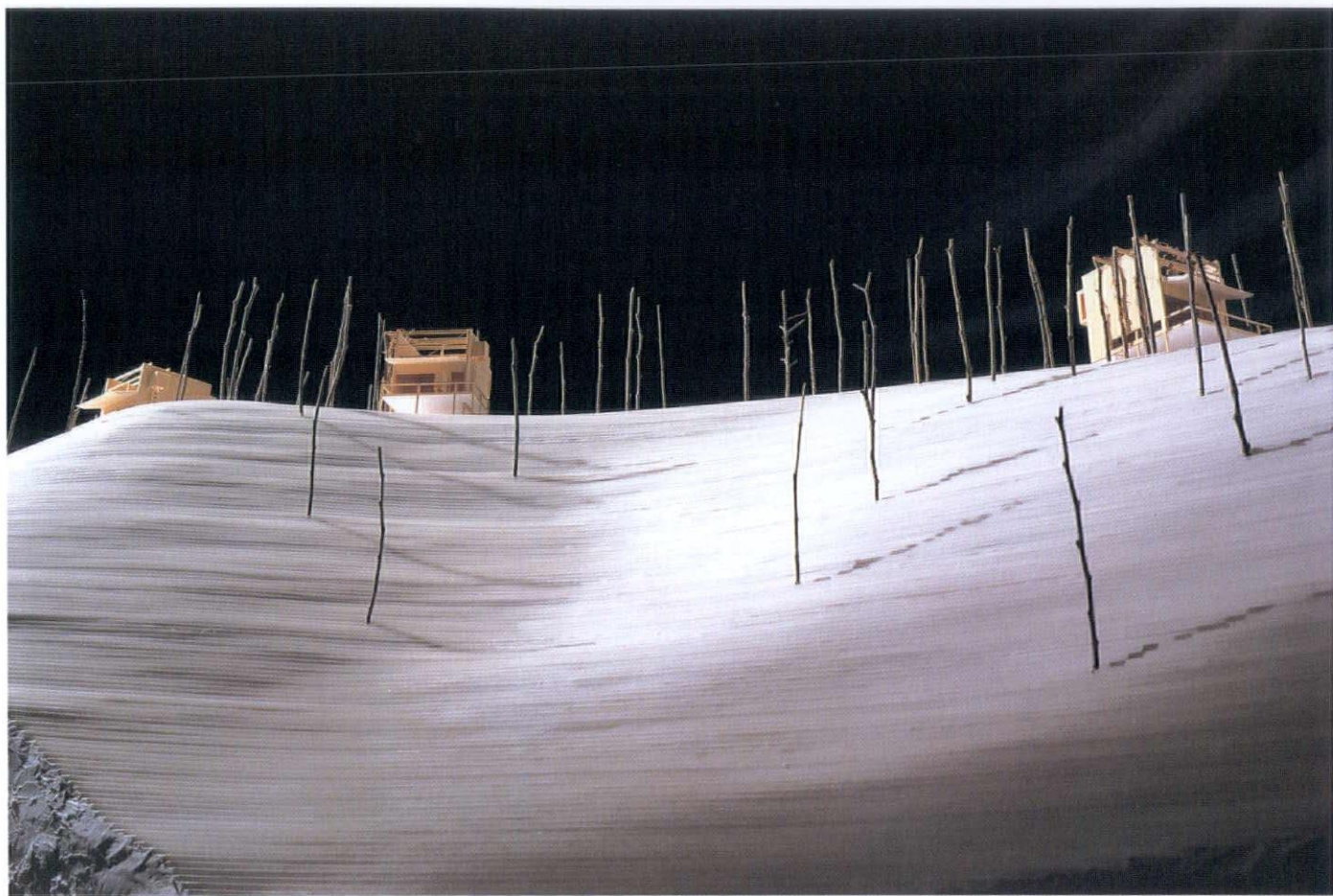
家は、ただ「家」としてあるのではなく、常にその瞬間瞬間が「最後の家」なのである。

トム・ヘネガン+安藤和浩+梶 直樹
/アーキテクチャー・ファクトリー

Tom Heneghan + Kazuhiro Ando + Naoki Kaji / THE ARCHITECTURE FACTORY

[SD賞]

灰塚ダム湖畔の森：三良坂町キャビン



坂本：スケールもいいし、プロポーションも綺麗で、空間的によく収まっています。知的でチャームングです。この計画で特徴的なのはこの屋上ですが、よくわからないのは、この屋上へのアプローチが中からではなくて、外からだけということです。空間構成上は可能なのに、このことで構成が分断されている感じがします。

高橋：彼のつくり方は基本的にプリミティブなのです。屋上へ中からアプローチするようにつくると、ディテールが出てきて、例えばガラスの箱が屋上から飛び出すとか、そんなことを嫌うんです。プリミティブなデザインを追求しようという意図があるのでしょう。

つくりながら、えっへっへと笑っている作者の声が聞こえます。カリカチュアなのか真面目なのか。恐らくこの両方をともに含むようなところにこの作品の面白さがある。ずるさがある。けれど、決して逃げてはいない。真正面から作って、これでいいじゃないのと言っているところが作者の誠実さなのでしょう。壁面の際に立つ、蔓草のからんだ木が根をもった生きている木だとしたら、蔓草の屋根は次第に勾配をもって、優しく屋根を包んでくれるに違いない。

内藤：諧謔的な、キッチュなデザインだと思います。立方体、正方形をベースの言語として使っています。開口部、出窓、エレベシ

ョンすべて正方形の組み合わせになっている。しかし外のエッジは、普通ならキュービックな幾何学性を暗示するために直線を明確に立ち上げるところを、あえて自然木を使っています。建築デザインとして、いろんな読み方ができて面白いのですが、ここを使う青少年には関係なく、建築家だけが喜ぶというところがあるのが気にかかります。プリミティブに見せて、実は操作している。そのところの仕組みが複雑すぎるところが気になります。妹島：屋上でば一つとできるというのは非常に魅力的だと思いました。作者のつくるチャームングさとは今回は少し異なるものを感じました。

トム・ヘネガン
 1951年 イギリス・ロンドン生まれ
 1975年 新建築住宅設計競技1等
 1976年 AAスクール卒業
 1976-90年 AAスクールにて教鞭をとる
 1990年 東京にアーキテクチャー・ファクトリーを設立
 1994年 熊本県草花産産研究所の設計において日本建築学会賞

安藤和浩
 1962年 東京都生まれ
 1984年 武蔵野美術大学卒業
 1990年 大阪花博フォーリーNo.5をピーター・クックらと共同設計
 1990年 アーキテクチャー・ファクトリー設立
 1991年 富山まちのかおプロジェクトにプロジェクトコーディネーターとして参加

梶 直樹
 1965年 神奈川県生まれ
 1990年 東京電機大学卒業
 1990年 包建築設計工房に入所
 1994年 アーキテクチャー・ファクトリーに参加

協力者：一條 典（構造）

模型制作：有田佳生＋三井島文子

用途：青少年宿泊施設

所在地：広島県双三郡三良坂町

主体構造：木造

主要仕上材：

[外部]テラス床：ビラー板すのこ張り／外壁：杉縦羽目板張り（厚15mm）／屋根：カラー亜鉛鋼板（厚0.4mm瓦棒葺）／開口部：木製建具およびアルミルーバー窓／屋上ベンチ：ビラー材すのこ張り

[内部]床：ならフローリング張り（厚15mm）／壁：しな合板突き付け張り（厚5.5mm）／天井：しな合板突き付け張り（厚5.5mm）／シャワー室：桧縦羽目板張り（厚15mm）

敷地面積：6,040㎡

建築面積：30.15㎡

延床面積：28.35㎡

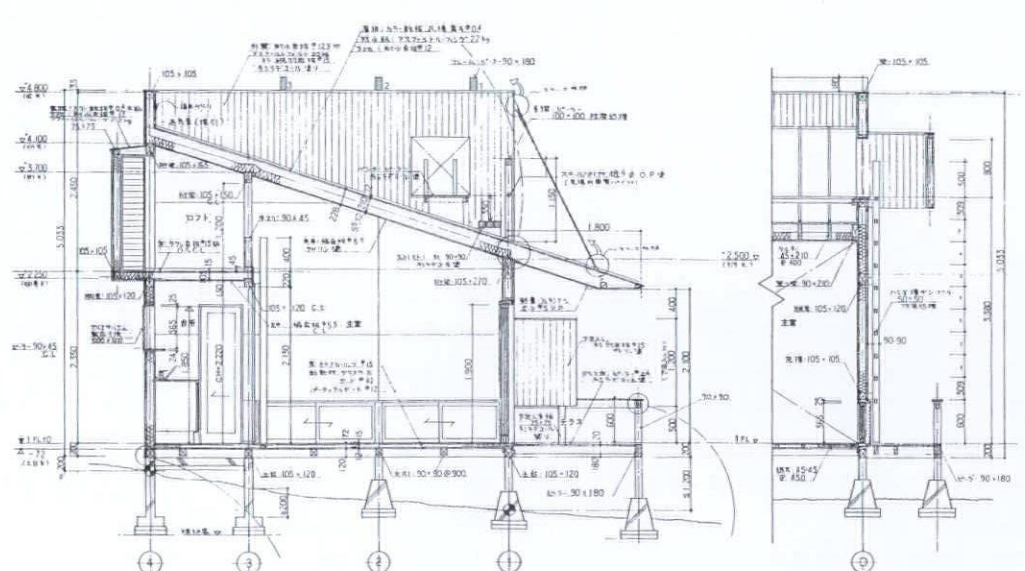
工事予定期間：1995年1月-7月（1期工事）

馬洗川の溪谷を望む、美しい森の中にあるこのキャビンは、子供達のための夏季宿泊施設である。アカマツとアシビの原生林に見え隠れする小さな建物は、キュービックな形態を与えられ、周辺と建築の対比を作りだすことでアイデンティティを得ている。その上で建物が提供する経験を通じて、このキューブと周辺環境を縫合していくことを試みている。

建物は、天井の高い主室とロフトから成りたっている。主室の地窓は、周辺の森と、室内空間を視覚的につなげるものであり、かつ、上部ロフトの窓へ風を抜く自然換気を行なうために計画された。また、谷側に向かって傾斜する屋根面と、その上に影を落とす外壁は日射による輻射熱を避けるためのしくみである。

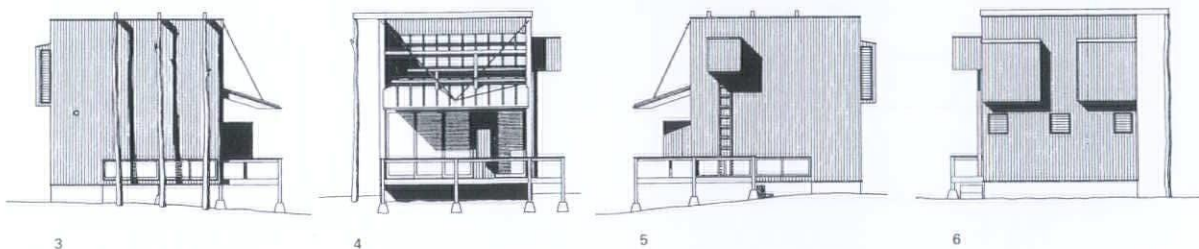
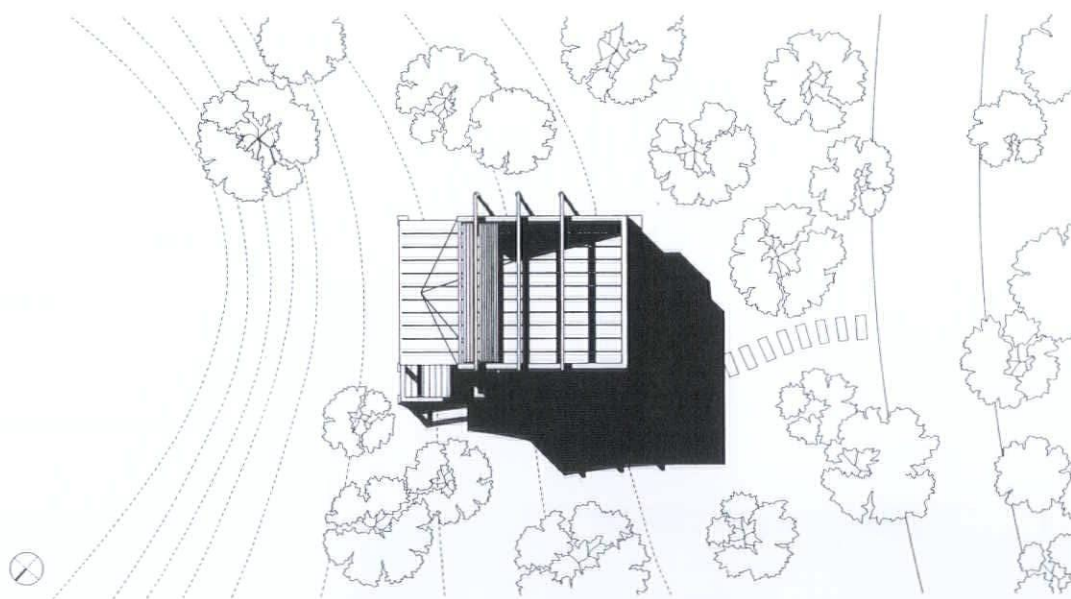
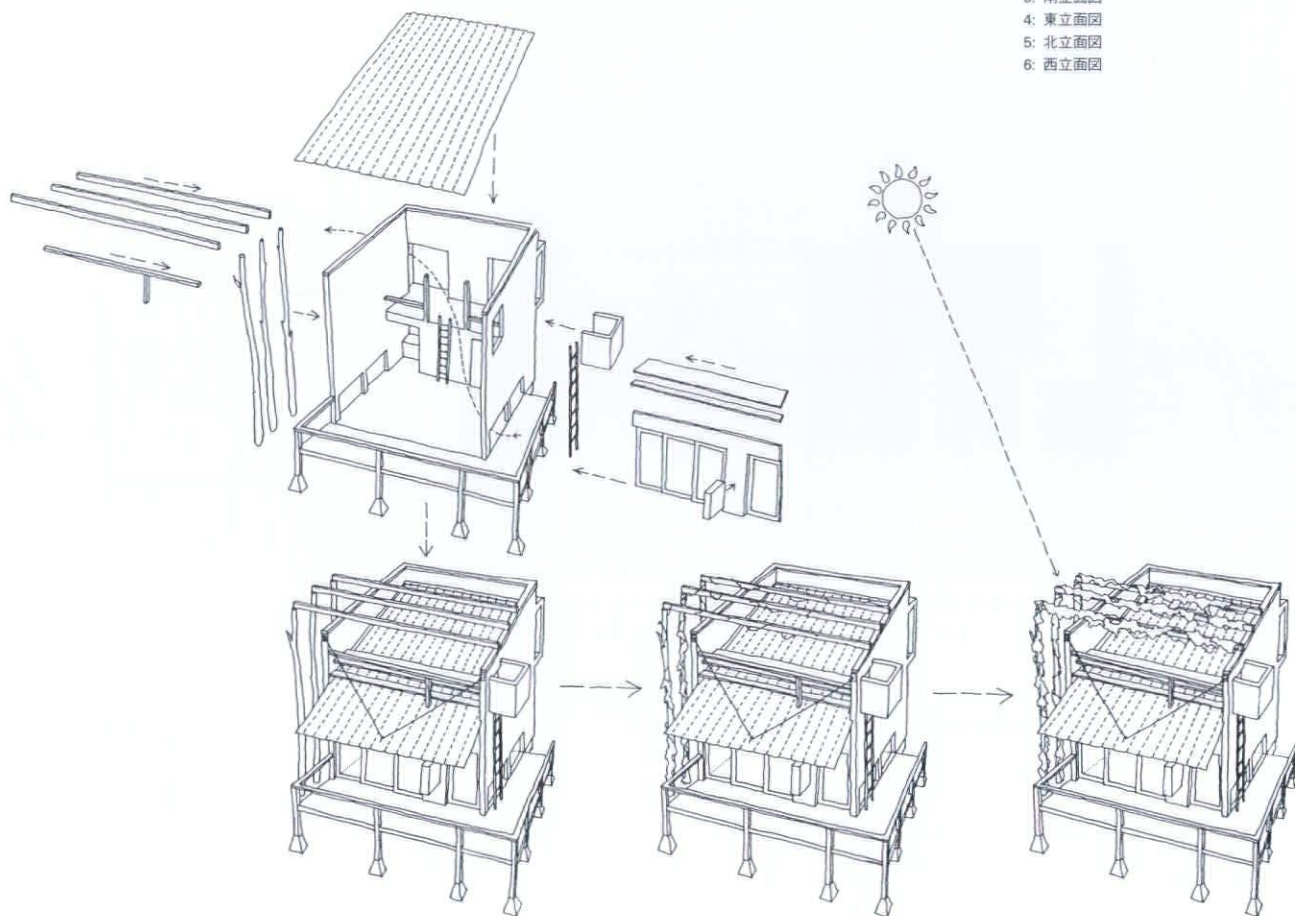
テラスからはしごで屋根の上に登った子供達は、周囲の木々と同じ高さに座り、谷を見下ろし、そして夜には星を見上げる。ベンチの上の3本の梁はキューブの横に立てられた3本のアシビの木につながれている。その根本に植えられたツタはやがて梁に到達するまで成長し、夏の強い日差しから子供達を守る「パーゴラ」となるだろう。その時このツタは、小さなキューブを森の中に溶け込ませる建築の一部となる。

私達は、この小さくシンプルなキャビンが、訪れた子供達に様々な予期せぬ体験を与えると同時に、風土や気候に敏感に反応する機能を持つ、ファンタシー・ボックスとして計画した。



1

- 1: 矩計図 S=1: 100
- 2: 配置図 S=1: 200
- 3: 南立面図
- 4: 東立面図
- 5: 北立面図
- 6: 西立面図



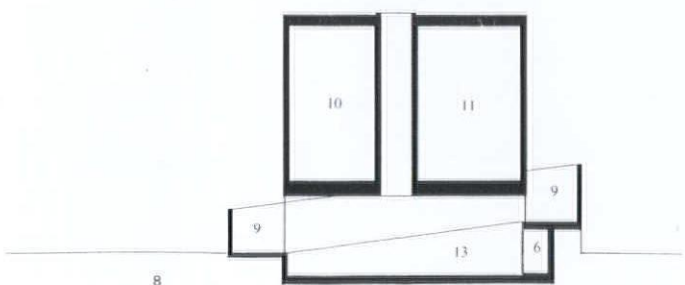
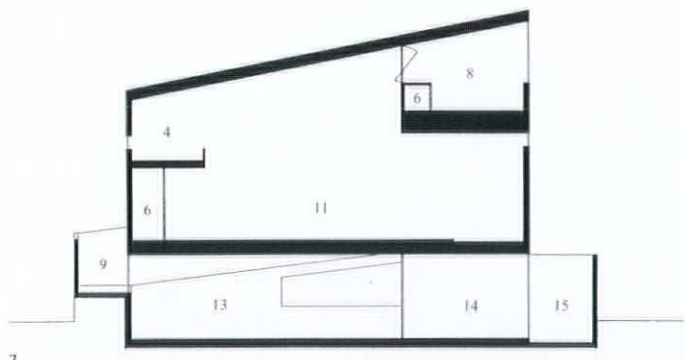
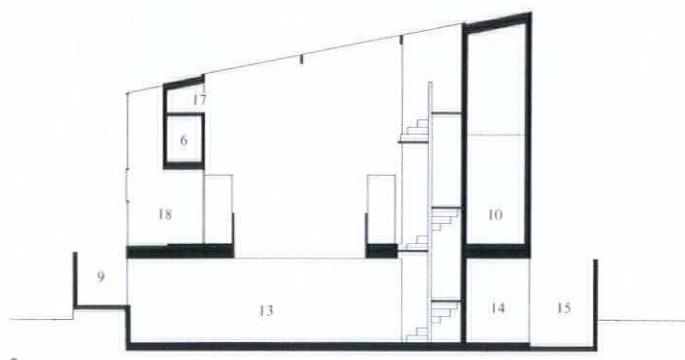
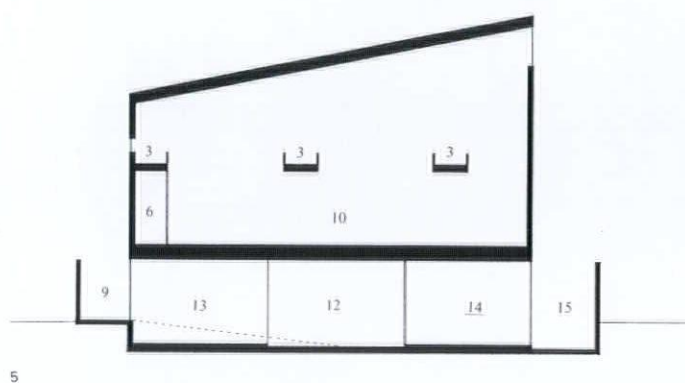
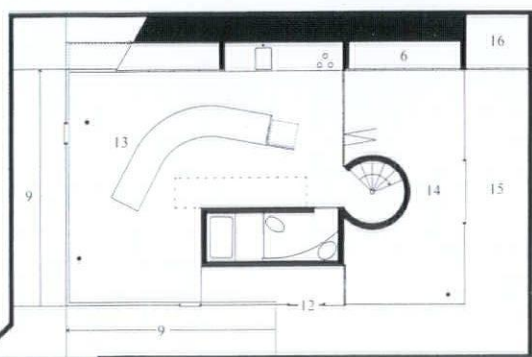
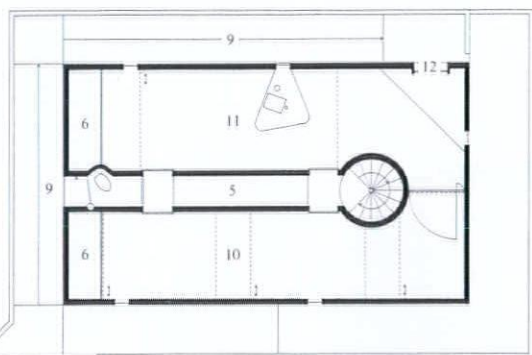
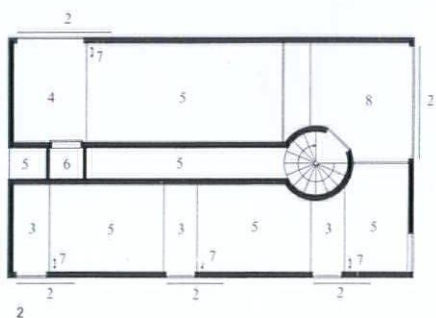
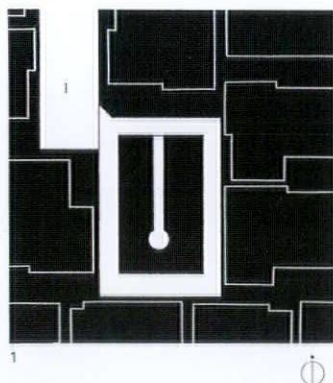
西沢大良

Taira Nishizawa

小平のハウス

1: 配置図 S=1:600
2: 3階平面図 S=1:200
3: 2階平面図
4: 1階平面図
5: 断面図 S=1:200
6: 断面図
7: 断面図
8: 断面図

- 1: 道路
- 2: ふとん用バー
- 3: 小ベッド
- 4: 大ベッド
- 5: 吹抜
- 6: 収納
- 7: ハシゴ
- 8: スペア・ルーム
- 9: スロープ
- 10: 西リビング (小人用)
- 11: 東リビング (大人用)
- 12: エントランス
- 13: 北リビング (全員用)
- 14: 南リビング (老人用)
- 15: ドライエリア
- 16: 室外機置場
- 17: サーキュレーター
- 18: シャワールーム





坂本：プログラムが空間にどこまで関わるかということ、具体的な使い方がどの様に空間化できるかということが現代の住宅の重要な課題のひとつであると思いますが、それに対してのかなり積極的な提案であると思い、私はこの作品を評価しました。現実の空間ですから、これ以上のことは難しいでしょうし、現実の中でこういった実験をしていることを評価します。空間そのものの善し悪しと言うよりも、空間の構成の問題として見たいと思います。

高橋：1階は南北で分けて、2階は東西で分けているなど、メカニカルというか、図式的な面白さがある。しかし、このプログラム上の、生活のリズムがよく分かりません。ストーリーが分かりにくく、不思議な家です。

坂本：私は逆にリアリティを感じますね。個室がなくて、居間の上へ上がって寝床があるなんていうのは。

高橋：なるほど昔風の現代的空間です。

内藤：私は、プログラムを空間化する、そのされ方に少し無理を感じます。もし、プログラムの空間化ということで評価するならば、このプログラムは、状況が可塑的に変わったときにハードウェアが一切対応できないという欠点を逆に抱え込んでしまうのではないのでしょうか。

またデザイン・コンセプトとしてプログラムがベースにあるならば、この回り階段がかなりシンボリックに現れ過ぎるのではないのでしょうか。このヘソを本当につくるべきだったかどうかは、このつくり方として気にかかることです。むしろ、プログラムよりも「形」の世界がそこに見えてきます。

高橋：子供というものは大人になるものですからね。例えば、この子供のベッドは不十分だと思うのです。この作品はすごくセマティックで図式的な分割法でしかないような気がします。

妹島：なかなか面白い計画だと思いましたし、意識的な作品だと思います。プレゼンテーションは魅力的ですが、今回の場合は大きな模型を作った方がよりおもしろさを伝えられたのではないのでしょうか。

共同設計者：

梅沢構造研究所(構造設計)、システムデザイン研究所(設備設計)

用途：専用住宅

所在地：東京都小平市

主体構造：RC造+木造

主要仕上材：

[外部]屋根：ガルバリウム鋼板、平葺き／外壁：押出成型セメント板、U.P.／擁壁：コンクリート打ち、U.P.／スロープ+ドライエリア床：コンクリート直押え、U.P.

[内部B1階]床：リノリウム貼り／壁：モルタル金ゴテ、カンレイシヤ、A.E.P.／天井：プラスターボード、カンレイシヤテープ、A.E.P.

[内部1、2階]床：シナ合板、O.S.C.L.／壁：プラスターボード、カンレイシヤテープ、A.E.P.／天井：シナ合板、O.S.C.L.

敷地面積：127.1㎡

建築面積：72.3㎡

延床面積：158.4㎡

工事予定期間：1995年7月-1996年1月

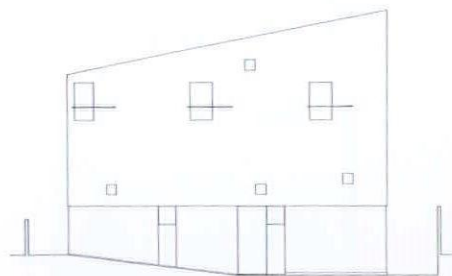
38坪の団塊地に、常時6人・最大14人が居住する計画である。

敷地は袋小路のつきあたりに位置し、四方すべてに木造家屋が密接している。日照と通風を確保するため、建物を敷地のほぼ重心に置き、建物の周囲において、日照と通風のための恒久的なゾーンを設定した。同時にこのゾーンを、

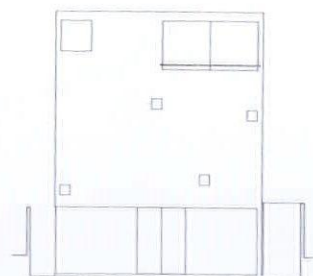
外部スロープとして利用し、半地下階と地上階へ、別々にアプローチできるようにした。これに面する外壁は、半地下階では全面サッシとし、地上階では壁面を多くして、必要な開口を随所に設けている。

屋内においても、日照と通風のため、細長いスリット状の吹抜を、建物のほぼ中心に設定した。全面トップライトのこの吹抜スペースは、夏季には重力換気のため、また冬季には日照とサーキュレーターの集熱のためのスペースとなり、同時に、すべての動線を集約した、住居者どうしの緩衝帯ともなっている。

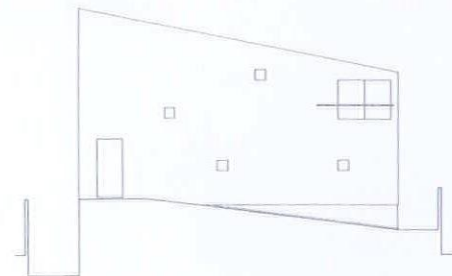
住居者数は常時6人(老人1・大人2・小人3)、夏季10人(老人1・大人4・小人5)、冬季7人(老人2・大人2・小人3)であり、さらに年に十数回、14人が終日滞在する(老人1・大人6・小人7)。これら各人に対し、独立した室を設けることは、面積上不可能である。ここではこの人数を、活動量が異なる3つの集団に分類し、3つのリビングを設けた上、4つめのリビングに、延べ14人が集合できるようにした。このうち、地上階においては、2つのリビングの南端を連続させる一方、ベッドをすべて上部へ浮かせて床面を開放し、全長21mのリビングとしても使用できるようになっている。結果、屋内のほぼすべてがリビングとなり、寝室が消えた住宅となった。



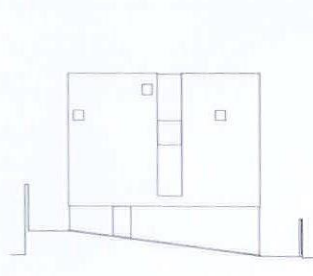
9



11



10



12

Mホテル計画

用途：ホテル

所在地：茨城県水戸市

主体構造：RC造

主要仕上材：

屋根：アスファルト防水／外壁：コン
 クリート打放し、大理石張、ガラスブ
 ロック／開口部：アルミサッシ

敷地面積：624.8㎡

建築面積：484.9㎡

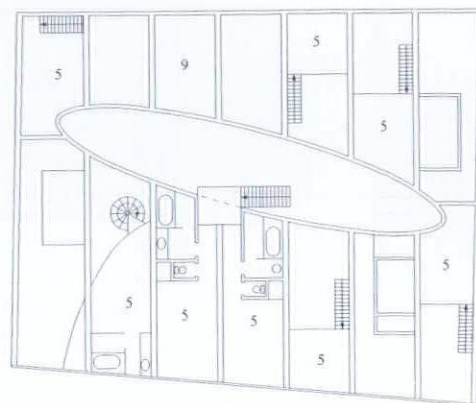
延床面積：1132.3㎡

工事予定期間：1996年ー

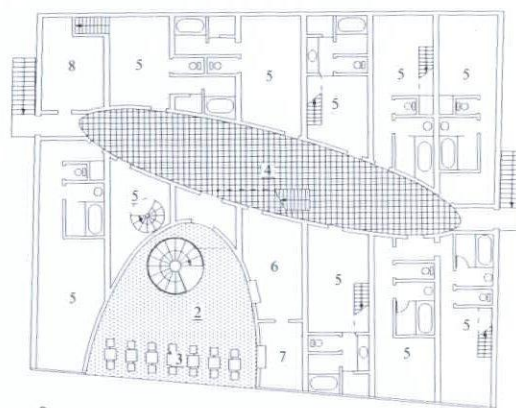
水戸駅から車で5分ほどの市街地に位置する、客室数12の小さなホテルの計画。この種のホテルは様々なタイプの客室が要求される一方、それぞれの客室からの眺望や外部との関係は考慮する必要がないという性質がある。

1階は客室数＋サービス車両用の駐車台数を確保するため全て駐車場とし、ピロティの上に建蔽率いっぱいの平面と2層分の高さを持つ均質な（どこに客室が位置しても等価な）ヴォリュームを想定した。次にこのヴォリュームを均等に3.5m巾に分割し、川を望む位置にロビーを、中央に全面のトップライトを持つホールを、それぞれヴォリュームからくり抜くようにして設けることにより、様々な平面と断面をもつ12の客室をつくり出している。これらの客室にはそれぞれ異なった仕上げと造作が施される。

ほとんどの客室は2・3階のメゾネットとなっているが、1階を道路面より低くし、2階から直接地上に避難する動線を設けて避難階とすることによって、防火区画をなくしている。

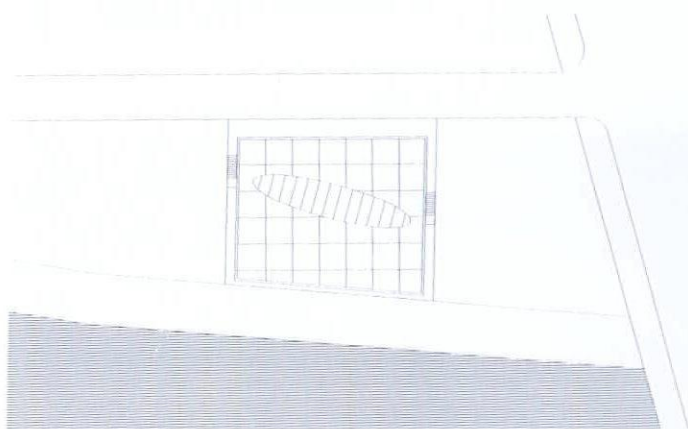


2

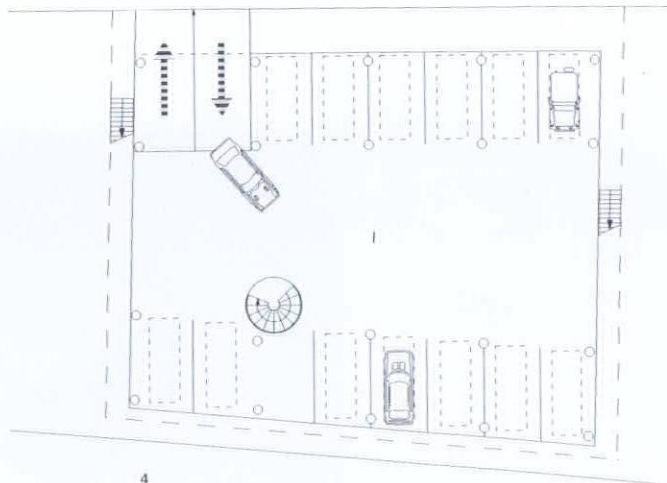


3

- 1: 駐車場
- 2: ロビー
- 3: カフェ
- 4: ホール
- 5: 客室
- 6: 事務室
- 7: 厨房
- 8: リネン室
- 9: 機械室

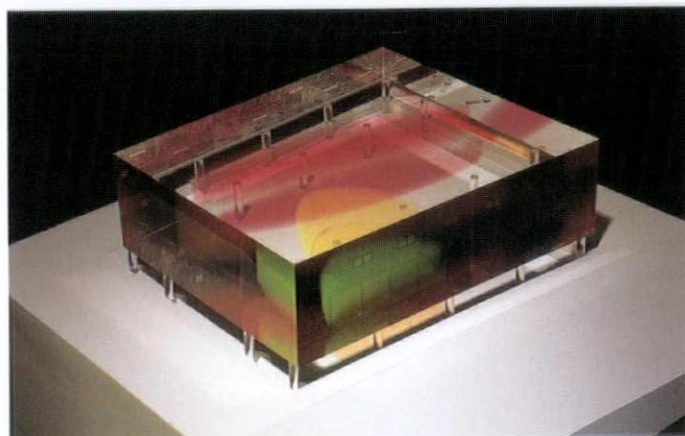
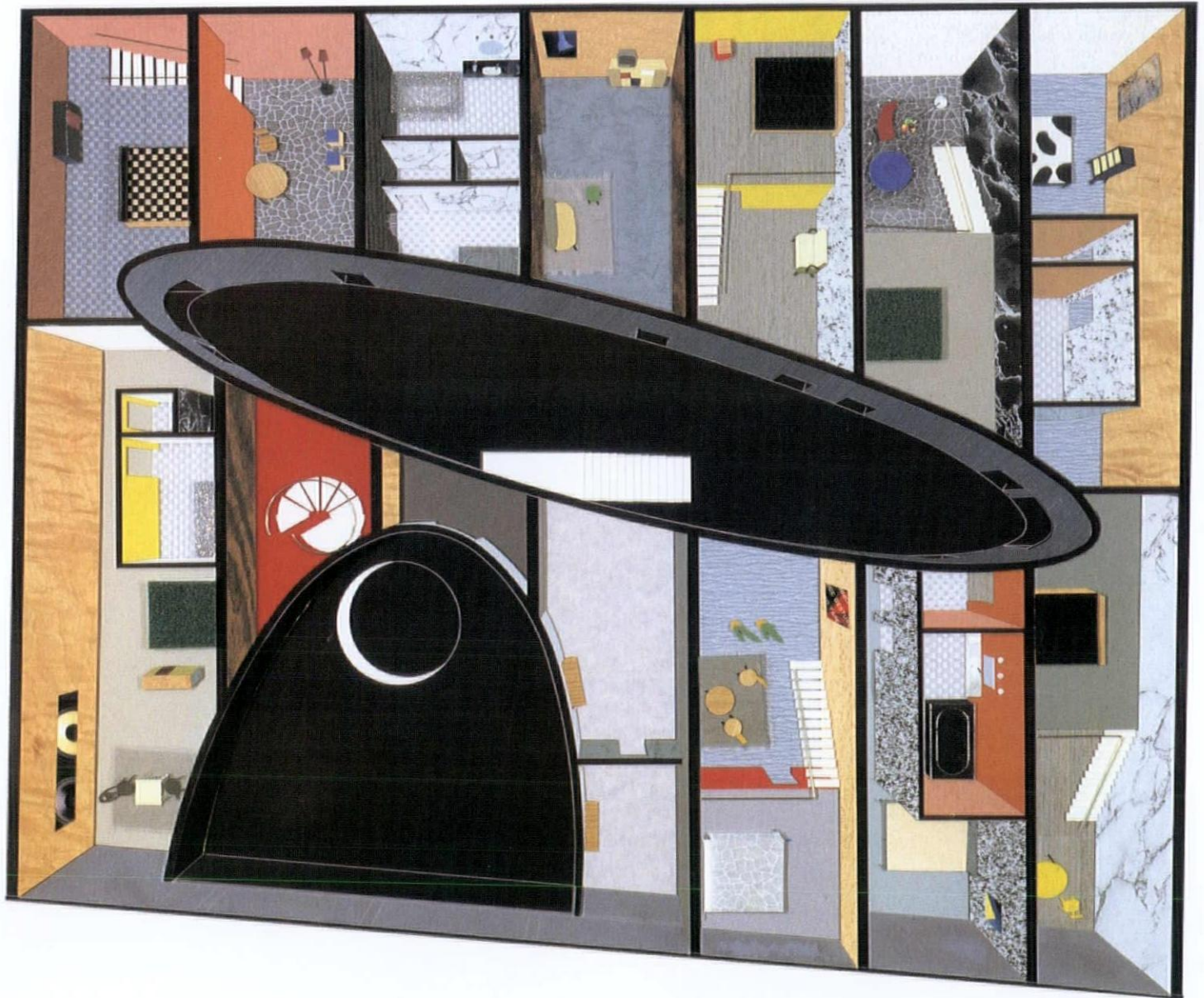


1



4

佐藤光彦
 1962年 神奈川県生まれ
 1986年 日本大学卒業
 1986—92年 伊東豊雄建築設計事務所勤務
 1993年 佐藤光彦建築設計事務所設立



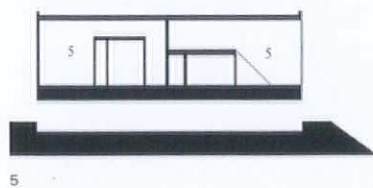
5: 断面図 S=1:600
 6: 断面図
 7: 断面図
 8: 断面図
 9: 断面図
 10: 断面図
 11: 断面図
 12: 北立面図
 13: 南立面図

内藤：プランが短冊になっていて面白いというのが第一印象ですが、模型を見ると、コールハースのような感じです。やっぱり、手法は似てもいいけれど、その手法で、どういう空間、どういうオリジナリティをその手法の延長に作ったかというのが重要です。アクリル模型は、それ自体すでにジャーナリズムで言語化されたことを表現しているに過ぎないので、もっと新たな方法を見いだす方向で考えてもらいたかった。

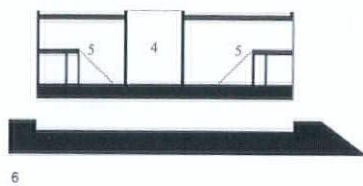
高橋：中庭を掘り下げていることに、どんな意味があるのでしょうか。パーキングに使われるのでしょうか。全体のプランも特に面白いと思われませんでした。こういうホテルって街中にもっとあってもいいような気がするんですけど、でも、だからといって魅力はないし、ひとつの解として認められません。

坂本：手法的には見慣れていて、できたものを想像すると、図式的であるに過ぎず、空間的な何かを獲得できていないんですね。ただ、これは敷地一杯の計画なので、こういった手法でのやり方は評価できるのではないかと思います。

妹島：平面をよく見ると図式的でありながら、それほどクリアな図式になっていないと思います。そのあたりについては、どちらが良いか私自身考えさせられる問題です。掘り下げるのは、ヴォリュームを低く落としたからではないですか。アクリルの模型はとても美しいと思いましたが、この建築を示すのにはどうでしょうか。



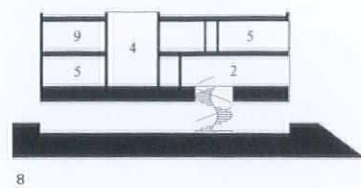
5



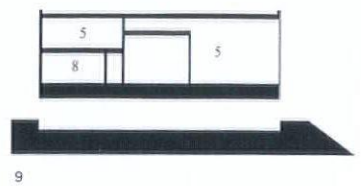
6



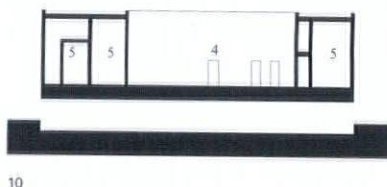
7



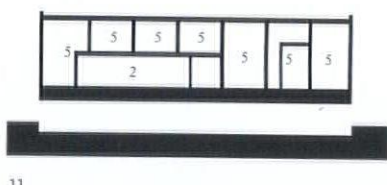
8



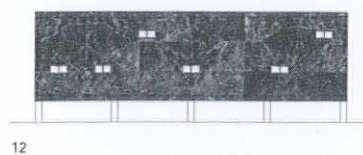
9



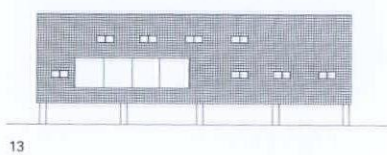
10



11



12



13

副島病院



内藤：単純に気分のいいスペースを作ろうとしているのが、よくわかります。模型自体が空間を表現しようとしている、それは古いスタンスと言われるかも知れないけれどやはり大事なことで、支援をしたいと思います。昔、サーリネがサンスクリーンを作りましたがそれに似ているところがあって、30、40年も時代を飛ばして現れたという気がします。模型としてはやや雑な所がありますが、実際にできあがる建物は、なかなか良いものになる

のではないのでしょうか。

坂本：相対的に言って、今回は観念的だったり、形態を操作していたり、技巧的に凝ったりしているものが多いような気がします。そんな中で、非常にストレートに、我々が幾分飛ばし忘れてきてしまったものを提示してくれました。しかも、収め方は現代的な対応をしています。

妹島：私も非常に好感を持ちました。プレゼンテーションからは妙な古さを感じるのです

が、何かがちょっと変わると全く違ったものになるような気がしました。

高橋：若者らしくストレートに、自分たちのもつ、病院というイメージの変革に立ち向かっている。見ていて清々しい。それだけにひとつ間違えば、普通の建物（作者の意志が消えてしまう）になりかねない。これも周辺の状況のより詳細な説明なしには細部まで読むことはできません。ディテールの中に、その存在感を確かめようとする姿勢に共鳴できる。

手塚貴晴
 1964年 東京都生まれ
 1987年 武蔵工業大学卒業
 1990年 年間最優秀デザイナー賞、
 シャンク・ウッドマン設計競技2位
 1990年 ペンシルバニア大学大学院卒業
 1991-94年 リチャード・ロジャース・
 パートナースhip・ロンドン/
 ベルリン・ブラウン・ブルウネンビル
 設計競技1位
 1994年 手塚建築企画設立

手塚由比
 1969年 神奈川県生まれ
 1992年 武蔵工業大学卒業
 1992年 ロンドン大学バートレット校
 (ロン・ヘロンに師事)
 1994年 手塚建築企画設立

1: 4階平面図 S=1:600
 2: 3階平面図
 3: 2階平面図
 4: 1階平面図

用途: 総合病院

所在地: 佐賀県佐賀市

主体構造: S造

主要仕上材: ガラス、亜鉛メッキルー
 バー、アスロック

敷地面積: 2,227㎡

建築面積: 1,415㎡

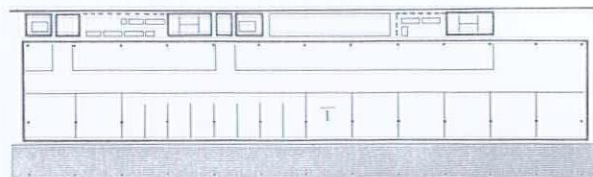
延床面積: 4,079㎡

工事予定期間: 1995年3月-1996
 年3月

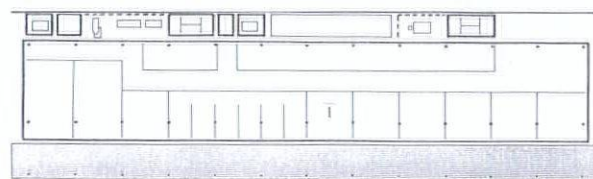
新病院は北側に長く横たわり道路の騒
 音を遮断、南側に佐賀特有の掘端の静
 かな遊歩道を提案する。

病室はすべて南側に並び、長さ78m幅
 4mのルーバー・バルコニーが直射日光
 をコントロールし、かつプライバシー
 を保つ。従来閉じられがちなブラインド
 は殆ど必要とされない。病室にはベ
 ッドからの視線を遮る腰壁が無い。患
 者はひたすら空を眺め天国への思いを
 魅せるよりも、移ろいゆく山の色を臨
 み、街の喧噪を見おろし、社会復帰へ
 のエネルギーを充電するべきである。
 病室空間は、窓面を越え広々としたルー
 バーの上へと連続し、病状の安定して
 いる患者は、この上に出てデッキチ
 ェアで茶を楽しむのもよいであろう。

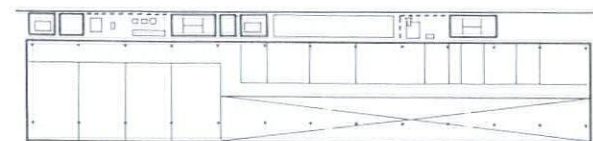
待ち合いはルーバーに包み込まれた明
 るい水辺のコロネードと平行し、対岸
 の並木は揺らめく影をルーバー面へと
 落とす。



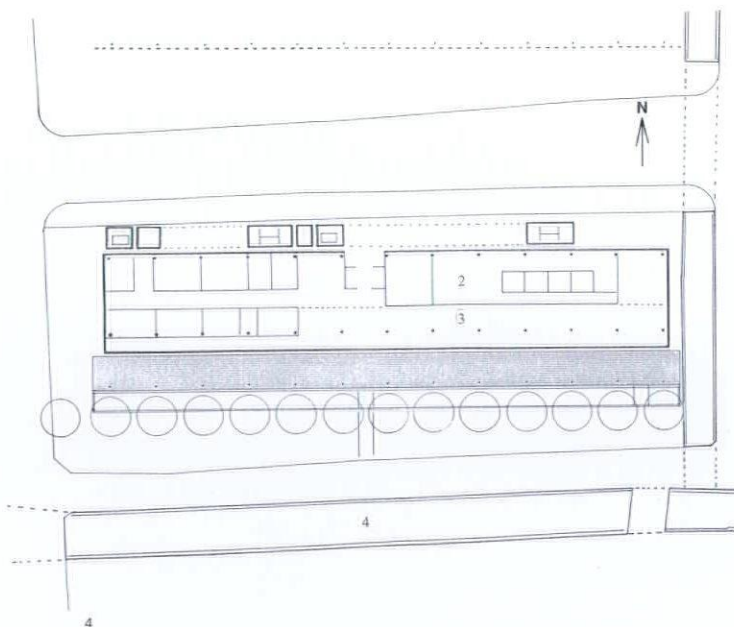
1



2

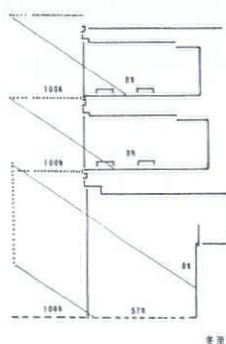
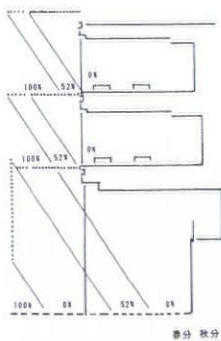
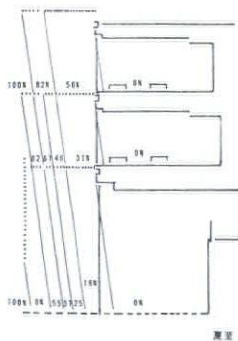


3



4

1: 病室
 2: 診察室
 3: 待合室
 4: 廊



S Building Project

大林直高

1968年 香川県生まれ

1984-87年 プロダクトデザインを独学

1991年 工学院大学建築学科卒業

1993年 明治大学建築学科大学院修士課程

修了

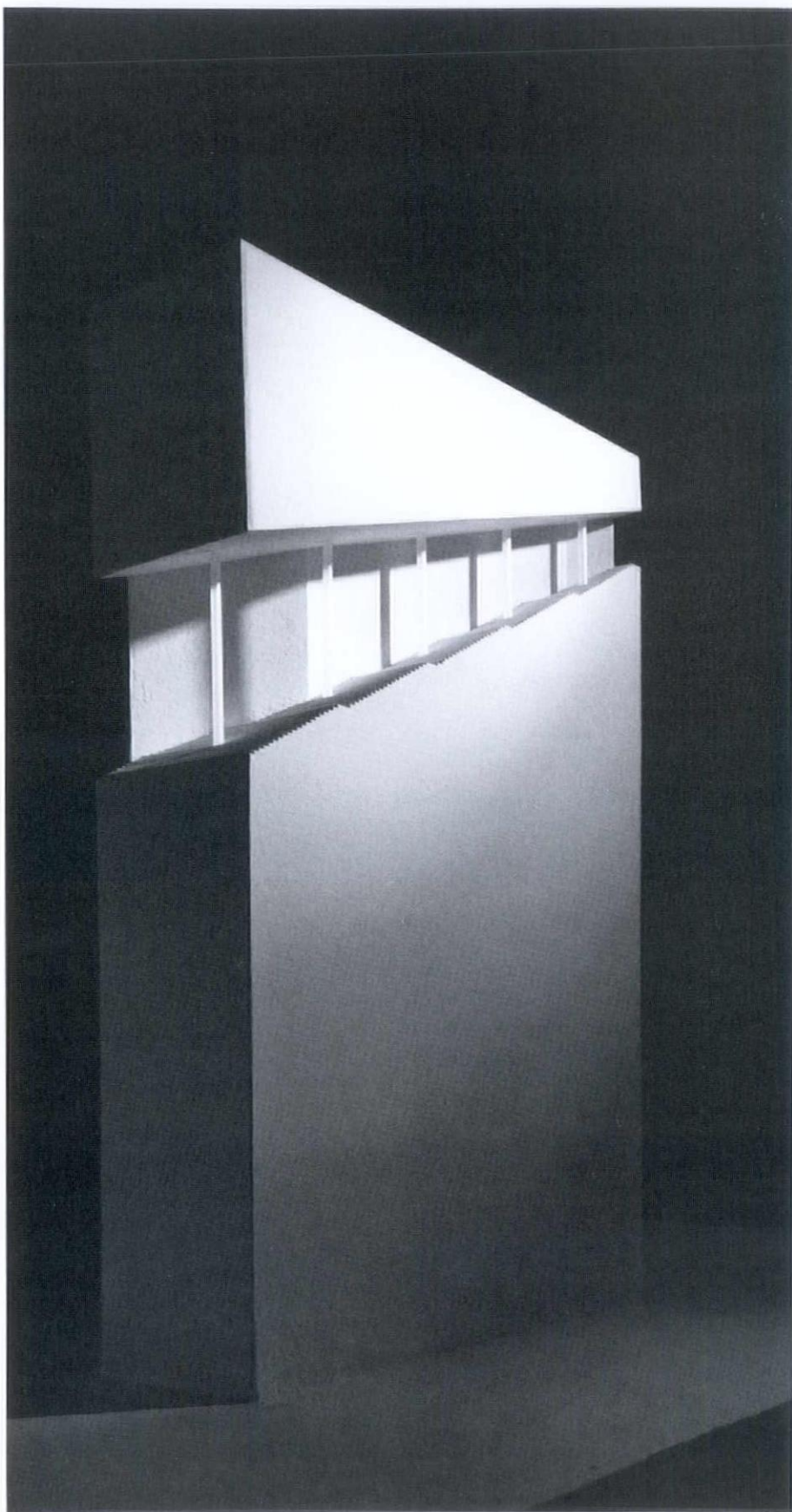
1993年- KAJIMA DESIGN

高橋：そこで生活する人たちが、その中で上部と下部がどのように組み合っていくのか疑問です。このスペックのなかで、例えば周辺の状況ですね。それこそ、ステップだけが唯一のクレパスが残るヴォイドと言っているんだけど、それならそのヴォイドのところに向こう側からガラスが、内部を垣間見せるのはおかしい。向こう側がガラス壁であるなら、中の表情は内部空間に影響するわけだから、その辺のところが煮詰まっているならこれは面白くなりそうだと思うけれども、そういう生活部分をきちんと考えてないといけません。ここにエレベーターが小さく付いてますが、これでは不足です。階段もこれで間に合っているのでしょうか。この作品は、今のところ形態的な面白さだけでもっているような気がします。ですから機能とプログラムをもっと詰めていたら面白いものができる気がします。

坂本：彫塑的な内部空間がテーマで、それだけが表現されています。しかし、現代の空間として評価するなら、もうひとつ何かないといけません。今回はそれを期待していましたが、応募案から受けた情報と変わっていません。これが他の部分との関係の中で表現されていないのが残念だなと思います。

内藤：もう少しシェイプアップして、リアリティを持たせれば、興味をもてたのですが。形も綺麗です。これをやりたいのなら、実現するための執念みたいなものをもっとあった方がいいという気がしました。実際にできたら面白いと思います。

妹島：このような計画において現在どういうことが考えられるか、それを考えてみることは重要だろうと思います。非常に明解で、きれいな計画だと思いますが、少しその点について物足りないように思います。



- | | |
|------------------|----------|
| 1: 配置図 S=1: 1200 | 8: 平面図6 |
| 2: 断面図 S=1: 500 | 9: 平面図5 |
| 3: 北立面図 | 10: 平面図4 |
| 4: 西立面図 | 11: 平面図3 |
| 5: 東立面図 | 12: 平面図2 |
| 6: 平面図8 S=1: 500 | 13: 平面図1 |
| 7: 平面図7 | |

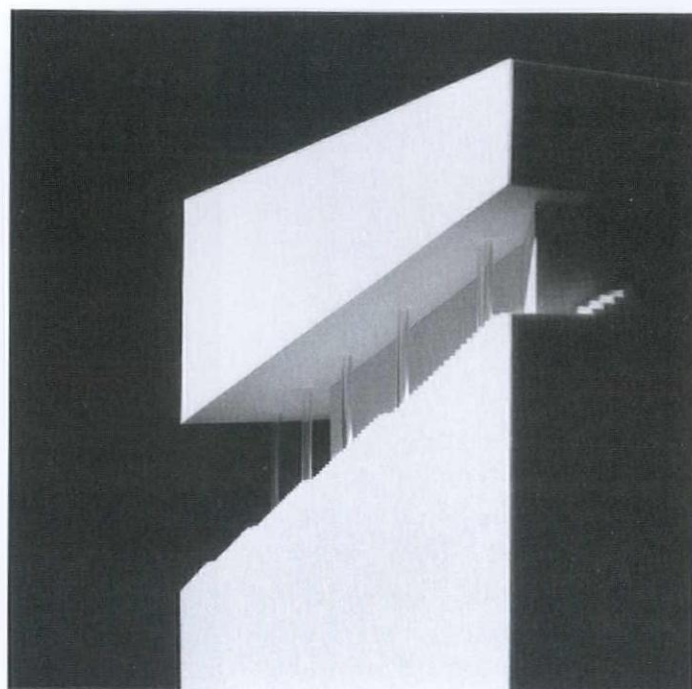
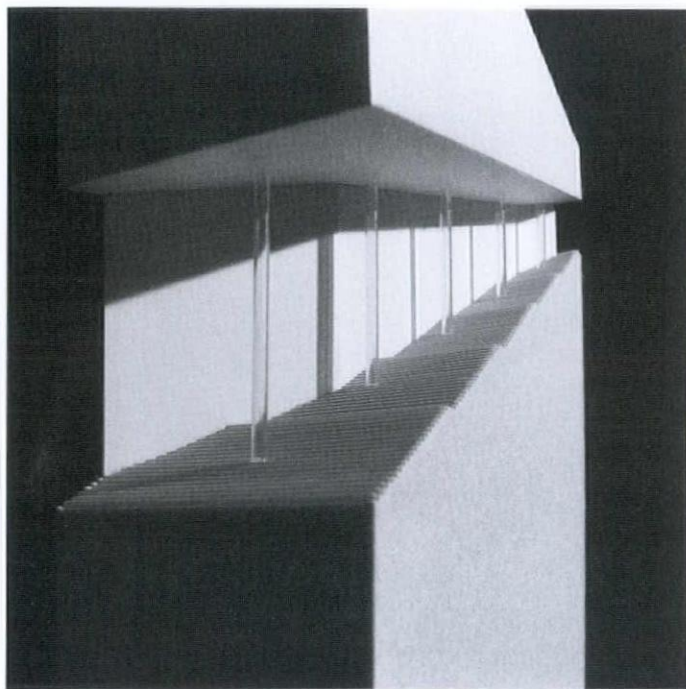


写真: 大林直高 (同左)

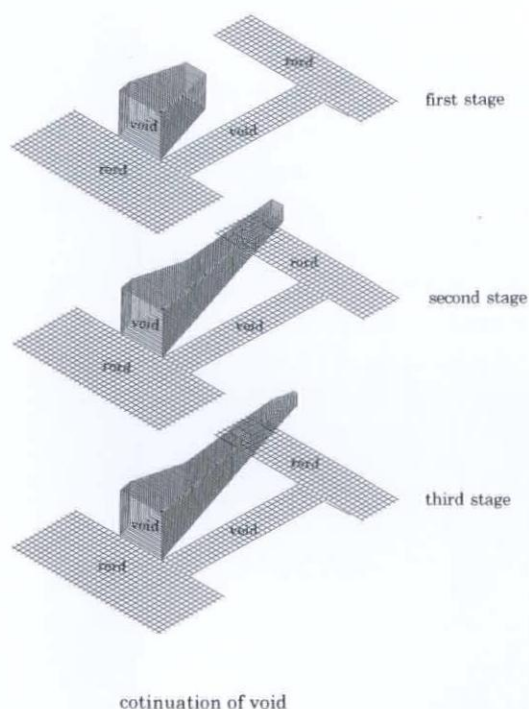
協力者: 中村昌子、小野田綾子
 用途: 店舗+事務所
 所在地: 東京都中央区銀座
 主体構造: SRC造 (一部鋼管コンクリート柱)
 主要仕上材: コンクリート打放し、ガラス
 敷地面積: 230㎡
 建築面積: 227㎡
 延床面積: 2,240㎡
 工事予定期間: 1996年1月-1997年4月

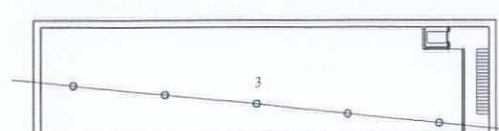
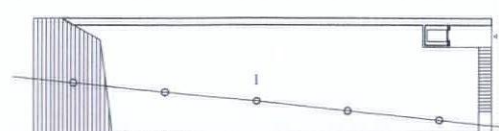
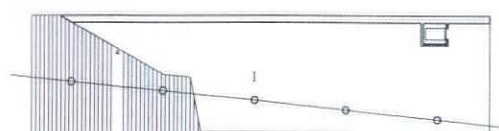
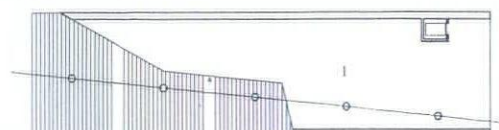
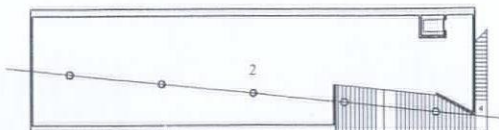
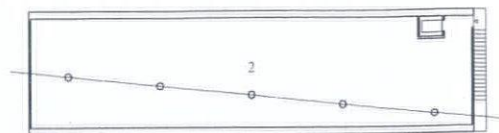
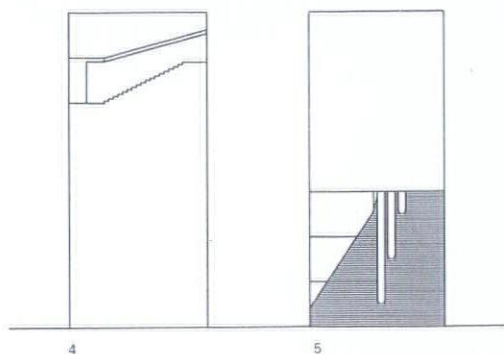
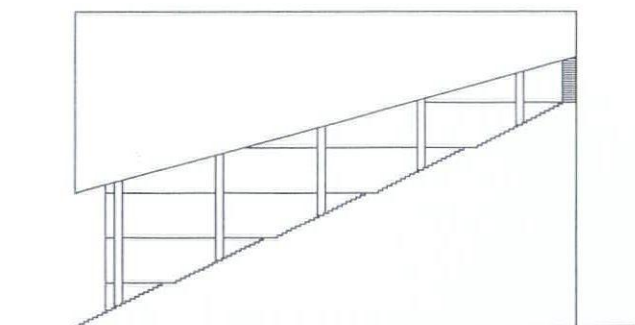
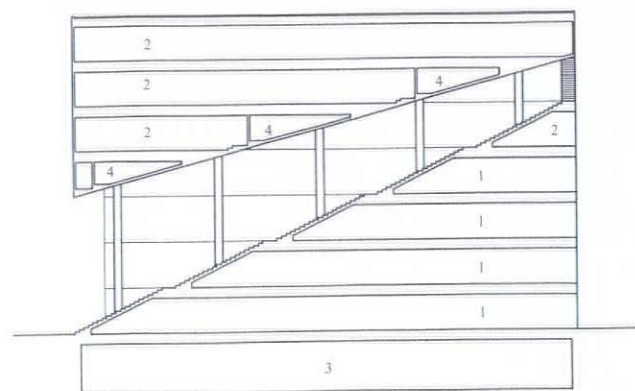
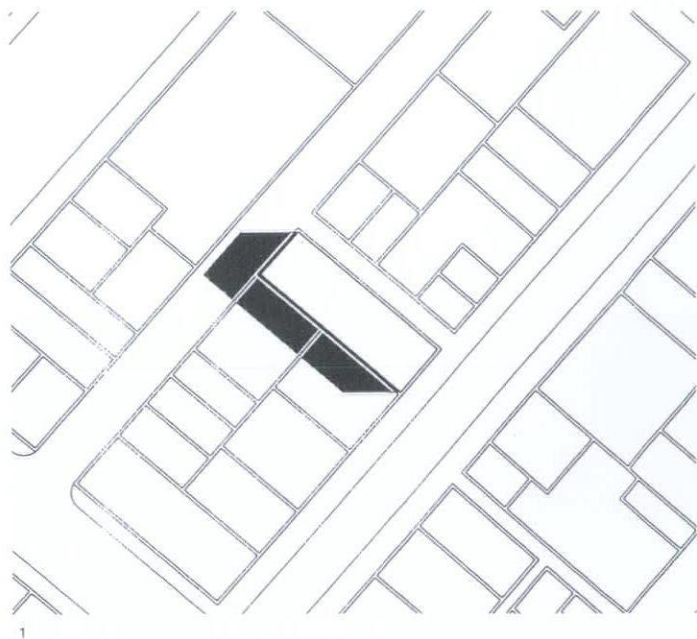
この計画は、中央区銀座に位置し、3面の前面道路を持つ敷地に、商業施設である下層部と、オフィスからなる上層部により構成される。

前面道路に接続されている階段は、緩やかな勾配をとりながらマスをパースペクティブに削削している。この削削により連続するヴォイドが形成される。ヴォイドと隣接する内部空間は1枚のガラスにより仕切られ、各フロアレベルで接続される。様々な人、物、情報がヴォイドを上下することにより、この空間は動く時間と事象を提示する。

ヴォイドにより分割された上部のマスは、列柱により高く持ち上げられ、都市の中に浮かび上がり、その存在を意識させる。

マスとヴォイド、閉鎖と開放という対立した概念を持つこの形態は、造形上の特徴を決定づけ、都市に対してダイナミックな表現となる。





- 1: 店舗
- 2: 事務所
- 3: 飲食店舗
- 4: 設備スペース

MANSION 26

長坂 大

1960年 神奈川県平塚市生まれ

1982年 京都工芸繊維大学住環境学科卒業

1982年 松永巖・都市建築研究所

1985年 原広司/アトリエ・ファイ建築研究所

1989年 京都工芸繊維大学造形工学科助手

共同設計者：

Méga / 森本明雄、松井正樹、安田哲也
(旧所員)

北川構造研究所 / 北川恵昭

協力者：長坂喜代子、岩井健一

用途：共同住宅（分譲マンション）

所在地：京都府京都市西京区

主体構造：鉄筋コンクリート造

主要仕上材：ウレタン塗料、浸水性舗

装材

敷地面積：1,054.59㎡

建築面積：631.83㎡

延床面積：2,100.30㎡

工事予定期間：1995年12月～1997
年6月

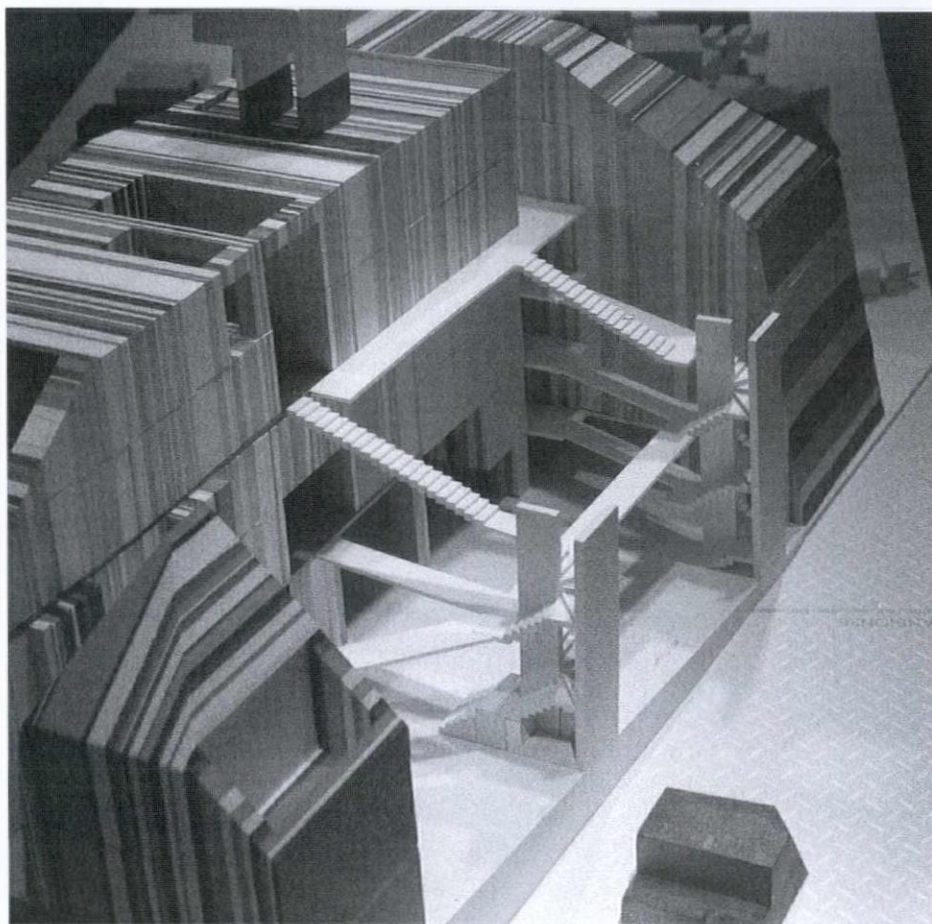
分譲マンションの規格は販売戦略上の
きめ細かなルールから成立している。

この商品は原則として建物が竣工（着
工）するまでに完売するため、住居空
間は購買者に理解可能な、記号化され
た標準空間の組み合わせで説明できる
必要がある。もともと畳という単位寸
法を使いこなしてきた国民にとって、
これほど受け入れ易く壊しにくいシス
テムもないだろう。

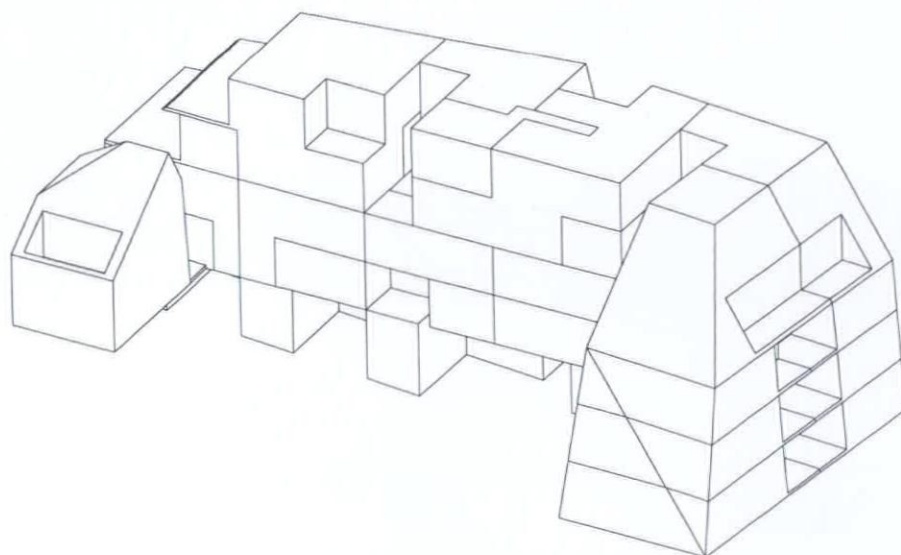
この計画では販売システムそのものへの
挑戦ではなく、システムが見落とし
てきたものを見直すという観点から、
住居タイプとアクセス経路の関係およ
び駐車場空間を敷地条件（法的条件）
にあわせて厳密に考えることにする。

各住戸プランは建物量塊内の場所的条
件の些細な違いをタイプの違いとして
反映させ、その累積効果を集住体の結
合システムに生かす。一方駐車場空間
は、量塊から切り取られた肯定的中庭
空間として、取り囲む切断面としての
外壁、床仕上げ、階段、ブリッジ、外
部廊下等を効果的に計画する。

建物は、マンションというゲームのル
ール適用座標空間が視覚化された、鮮
やかな色彩の積層物質から切り出され
ている。



写真：岡本博





MANSION22
100% COTTON
100% COTTON

- 1: 1階平面図 S=1:500
- 2: 地下1階平面図
- 3: 4階平面図
- 4: 2階平面図
- 5: 断面図

高橋：全体模型の縞模様に意味がないし、階段とコリドールだけが面白そうです。しかし、よく見ると、中の組み合わせは面白そうに見えます。すごく複雑な住戸タイプをこの中に入れて詰め込んでいる。だから、時間がかかっていると思うんですよ、このスタディは。しかし、展示はマスを表現しただけでしょう。むしろ中を見せて欲しかったですね。組み合わせがもっと分かるように。解法としては面白いものになり得るのですが、プレゼンテーションは残念です。

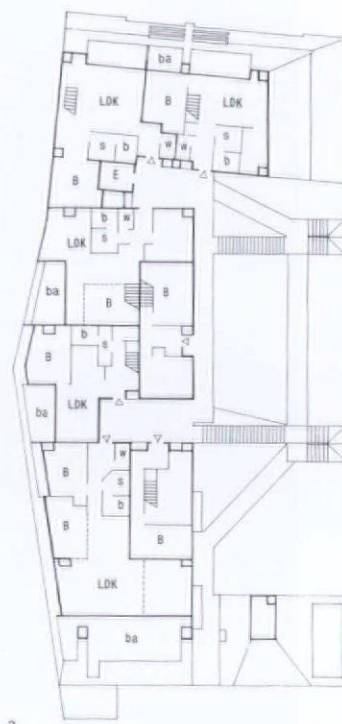
坂本：動線の問題とか、プランのつくり方などにいろんな可能性があって、もう少し見たいと思います、選抜したのですが、その期待には応えていただけなかったかなと思います。プレゼンテーションで見せる構成は、外形だけだと不足です。ただ、分譲マンションというのは非常にシビアな世界の産物ですので、そこでがんばっていることは評価します。また書かれている文章は少々疑問に思いました。

内藤：集合住宅は、住戸の個性と全体性をどう対置させるかが基本的な問題となりますが、完成模型の縞々が個性より全体性を強調して作られており、バラされた住戸の色と全体模型の色の在り方が、全然違うと思いました。確かに皆さん言われるように、住戸に関する努力は大変なものだと思うのですが、この模型に関しては、事の本質の表現が違ってんじゃないかという感じを受けました。

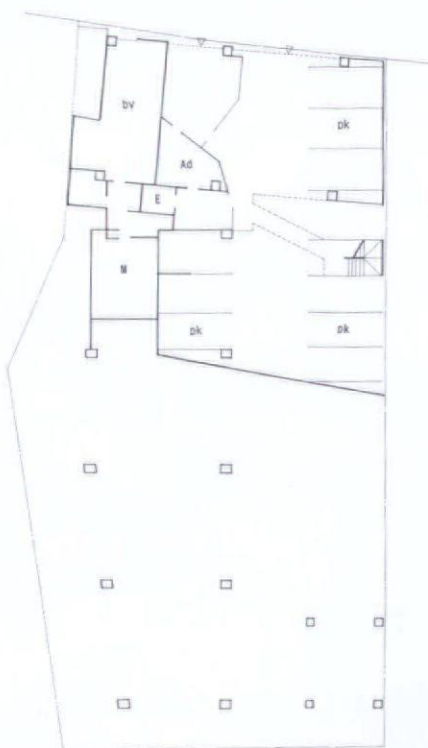
妹島：私も、もう少しこのアイディアを支えるものを今回のプレゼンテーションでは見せてもらいたかったと思います。



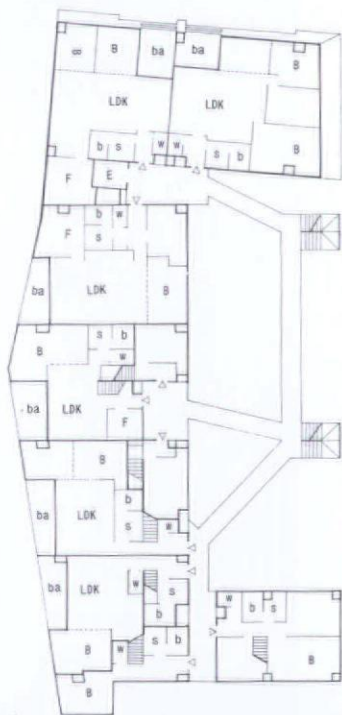
1



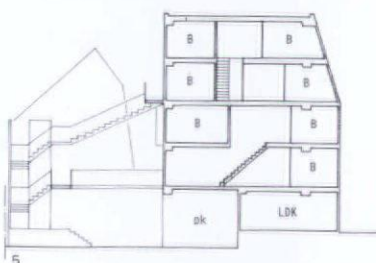
3



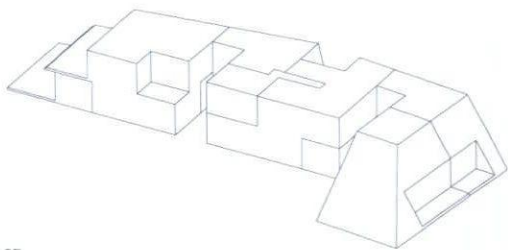
2



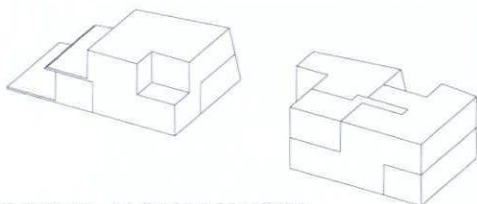
4



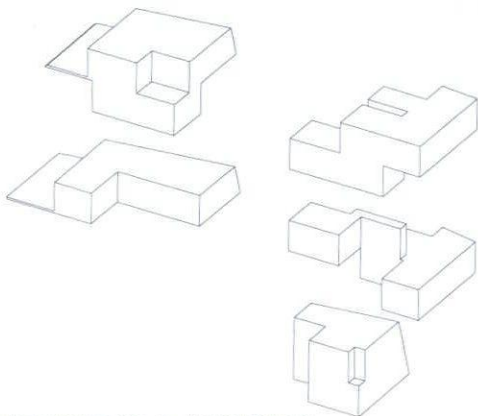
5



4.5F
80㎡以上のメゾネットを中心とする住戸群。
EVは4Fまで。これらの住戸はすべて4Fからア
クセスする。



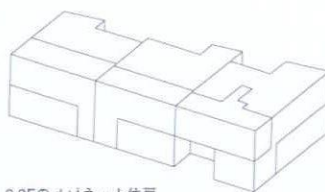
4.5Fの住戸ブロックも基本方針は2.3Fと同様で
ある。異なる点は、セットバックの条件に対応
して、床面積（内部空間）と、ルーフガーデン
のバランスのよいやり取りが行われる事である。



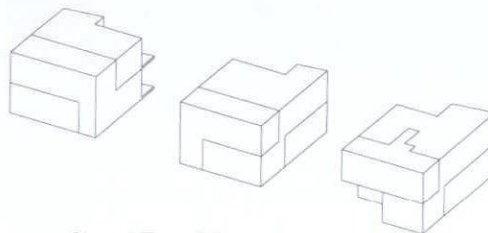
各住戸は結果的に“互い違い”の基本形から応
用形へと進み、左のブロックではフラットとメ
ゾネットの組合せ、右のブロックではメゾネッ
ト3住戸の組合せとなっている。



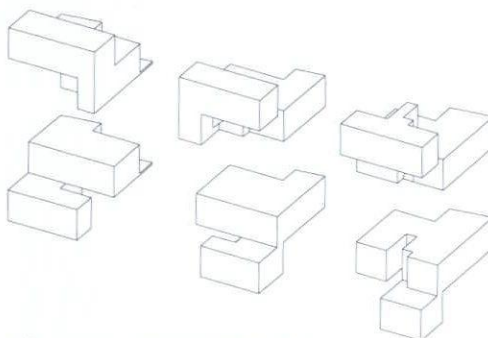
2.3Fのメゾネット住戸
アクセスは他の2.3Fのメゾネット住戸と同じ。
駐車場／中庭に張り出し、その外部空間の構成
要素として、独立した形態を持つ。



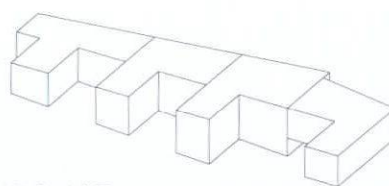
2.3Fのメゾネット住戸
階段により2Fの玄関へアクセスする。住戸数
に対して、玄関の位置を集約して外部廊下を小
さくし、プライバシーの高い北側居室を多く取
っている。



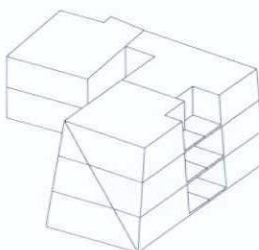
2.3Fのメゾネット住戸は、2住戸でワンセッ
トのブロックとなっている。



各ブロックでは、上下の住戸の南側の「LDK」
と北側の「B」互い違いにつなげる事で、玄関
位置の集約を実現すると同時に、各住戸内での
「B」のアイデンティティーを獲得している。



1Fフラット住戸
勾配のある駐車場／中庭より直接アプローチ
するため、エントランスレベルは相互に異なる。
南側に庭を持つ。



エレベーターまわりのフラットタイプ住戸

市原 出

Izuru Ichihara

IC2

市原 出

1958年 福岡県福岡市生まれ

1981年 東京大学建築学科卒業

1983年 東京大学大学院修士課程修了

1983-87年 宮脇檀建築研究室

1987年- 市原出建築設計事務所

1990-91年 ペンシルヴァニア大学Ph.D.プログラム

1993年 東京大学大学院博士課程修了、工学博士

1994年- 東京工芸大学助教授

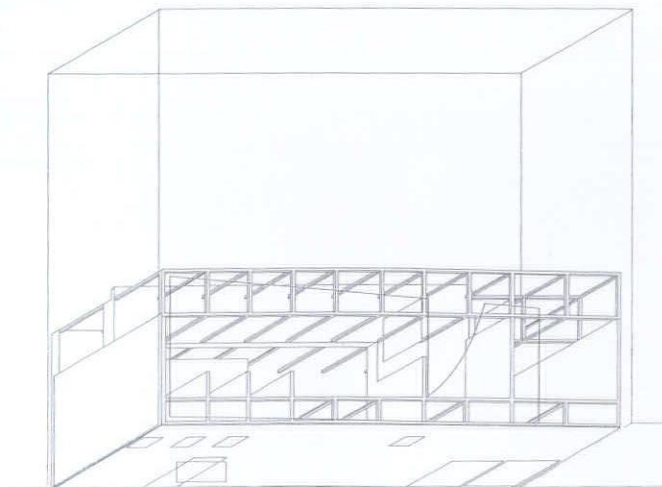
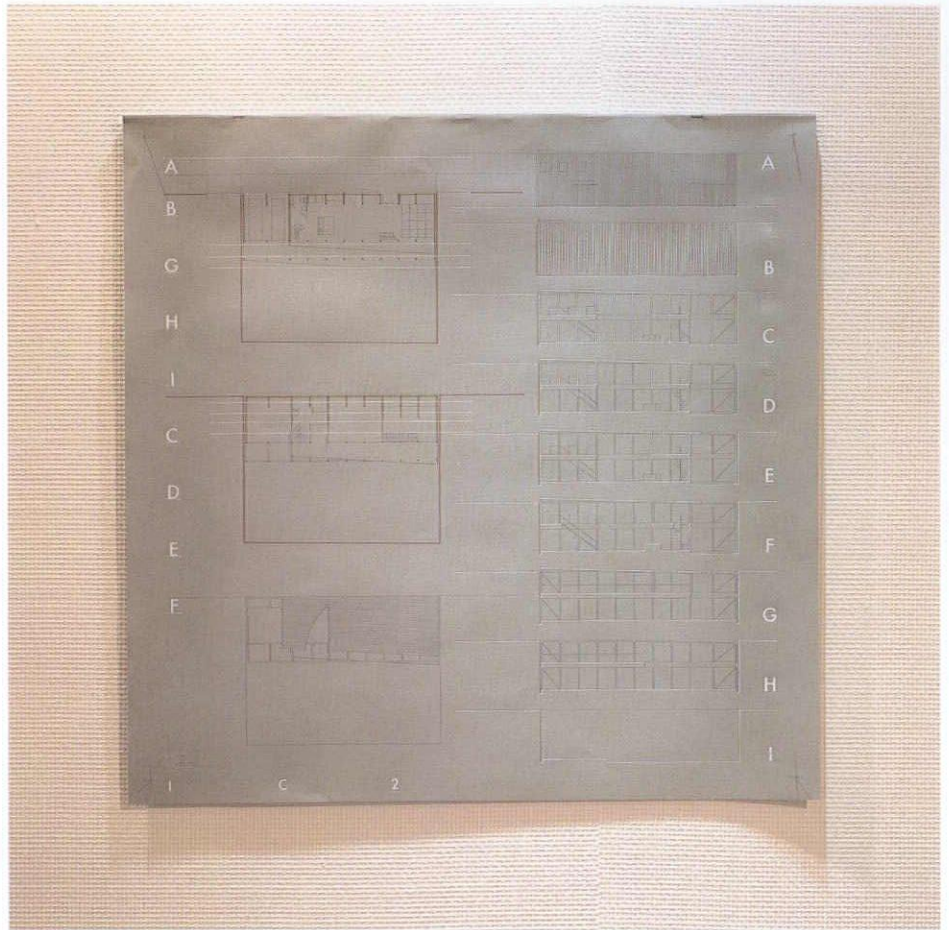
坂本：模型が彫像作品みたいになってくるとこの計画の意図が理解しにくくなります。周辺の状況を示してくれた方がよかった。フェティッシュな表現になると内容が一方で閉じてしまう。もっと全体性のある表現によって伝えてほしかったと思います。

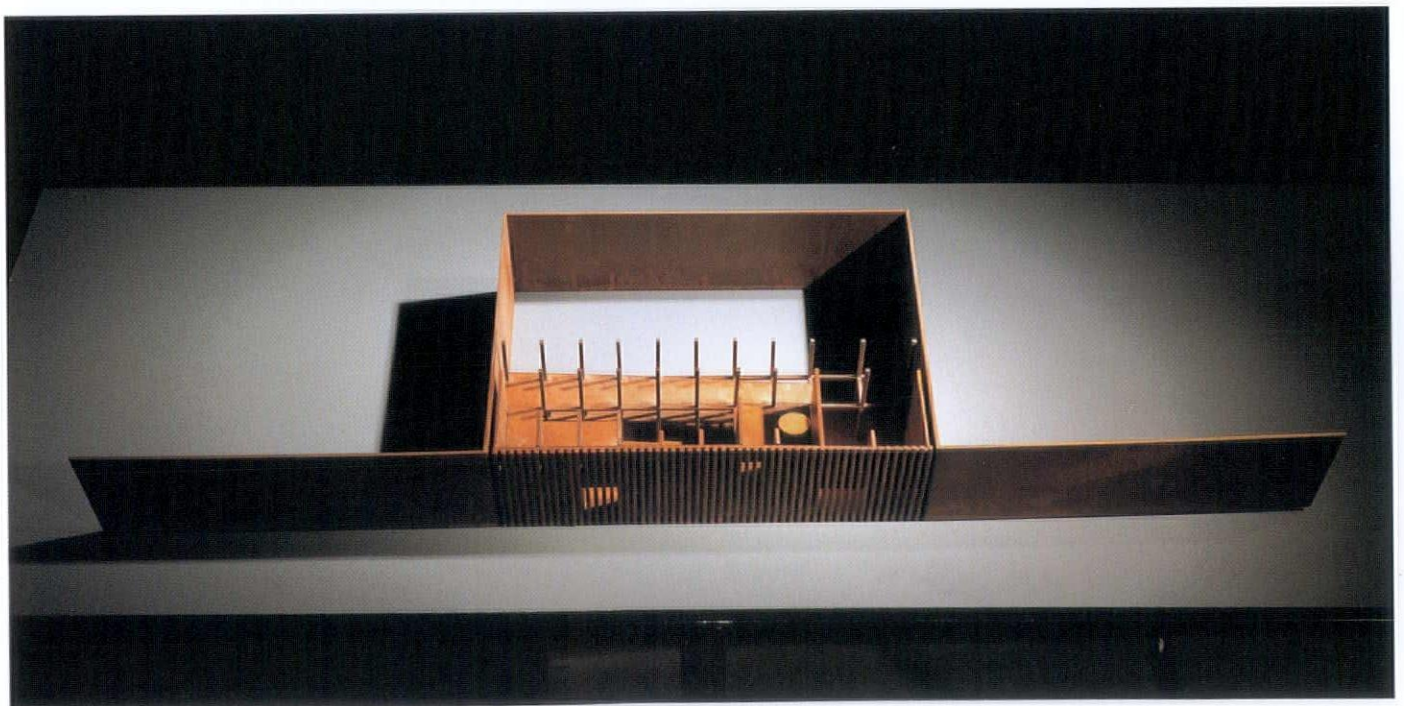
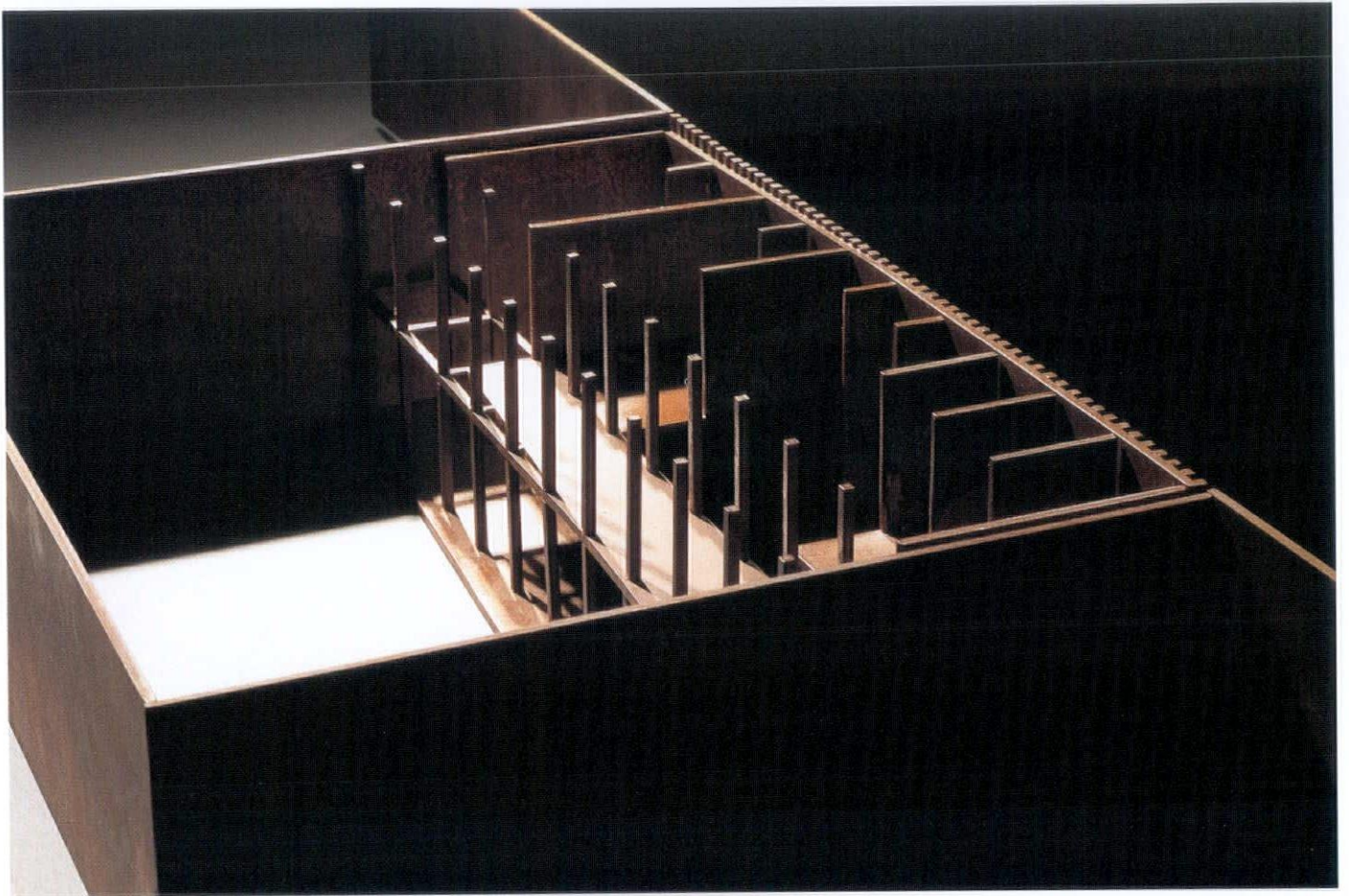
高橋：あれだけ高い塀を周りに巡らせた真意が分かりません。こういう家のつくりだと、まず周辺との状況の中で語るべきものでしょう。

内藤：応募案の非常にシステマティックな美しさが、同じように透明感のある内部空間を作らせるのだろうと思いました。模型自体は綺麗で精度が高いのですが、表現されたものが彼のやりたかったことなのか。内部空間の在り方をどう表現するか、もっとこだわっても良かったんじゃないかと思います。吹き抜けなどを工夫していますが、十分ではありません。もっと自分の意図を割り切って作っても良かったのでは。例えば、模型をよく見ると、縦格子が表現されていますが、縦格子がそれ自体意味を発生してなくて、裏の開口部を隠すことしかしていない。この辺が気になります。

高橋：基本的に、この展覧会は何を主題としているのか、何を提起しているのかははっきりわかるようにするほうが良いと思いますね。

妹島：住宅のスケールにおいて、敷地の周りをヴォリュームとして、敷地をヴォイドにするのは少し無理なように思います。高い壁だけが目についてしまいます。





1: 2階平面図 S=1:250

2: 1階平面図

3: 断面図

4: 断面図

協力者：さいとう工房(模型)、内田るりこ、小泉知子、小坂香(ドローイング)

用途：住宅

所在地：宮崎県延岡市

主体構造：木造

主要仕上材：

[外部]壁：杉板張りキシラデコール塗り／屋根：亜鉛基金板瓦葺き

[内部]床：杉板張りOSUP塗り、畳敷き／壁：杉板張りOSCL塗り／天井：杉板張りOSCL塗り

敷地面積：386.72m²

建築面積：97.25m²

延床面積：142.00m²

工事予定期間：1995年11月～1996年5月

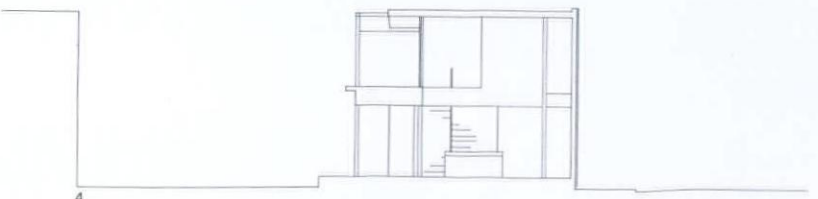
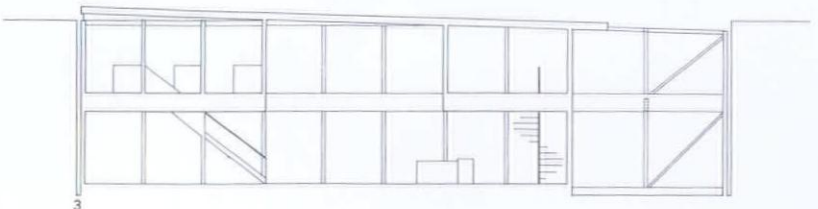
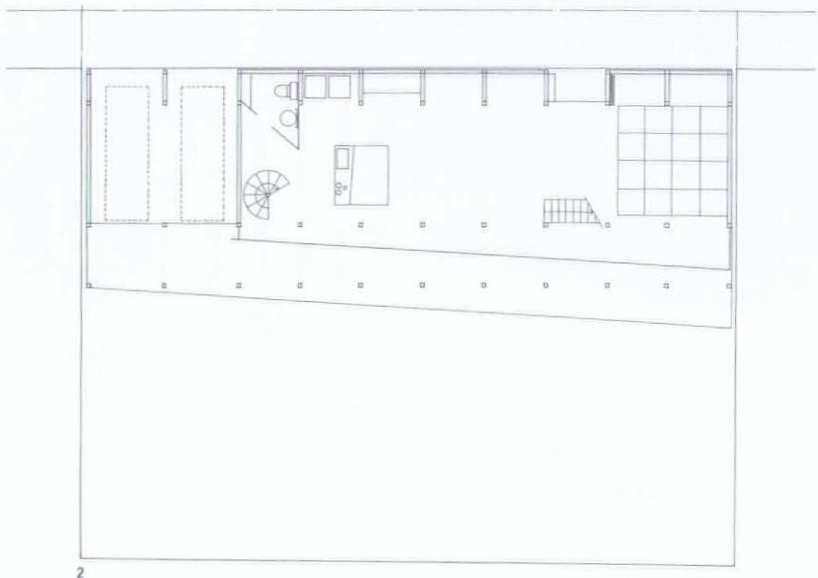
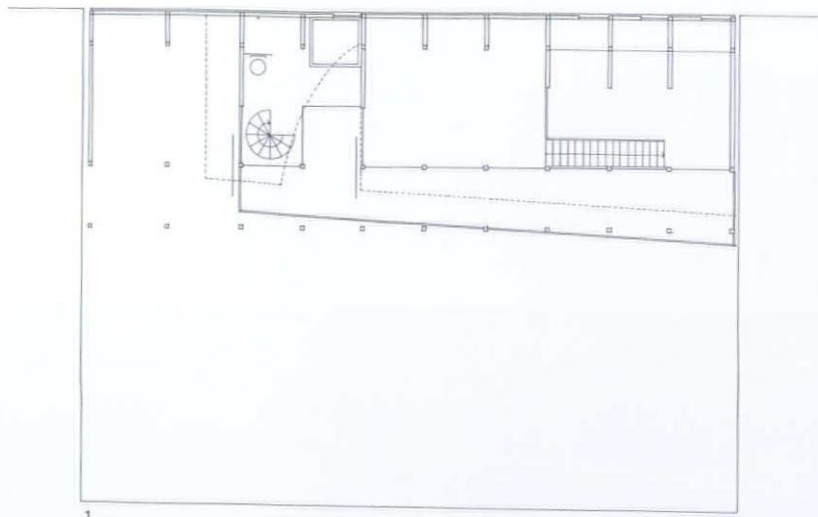
延岡市の中心近く。低層の建物、車庫、庭、車、犬小屋、洗濯物、木々、自転車、遊具、ポリバケツ…。雑多なものが、ただ寄せ集められた海綿のような塊が、道路によって切り分けられている。

敷地はその塊から、およそ20m四方を切り出した直方体のヴォイドである。

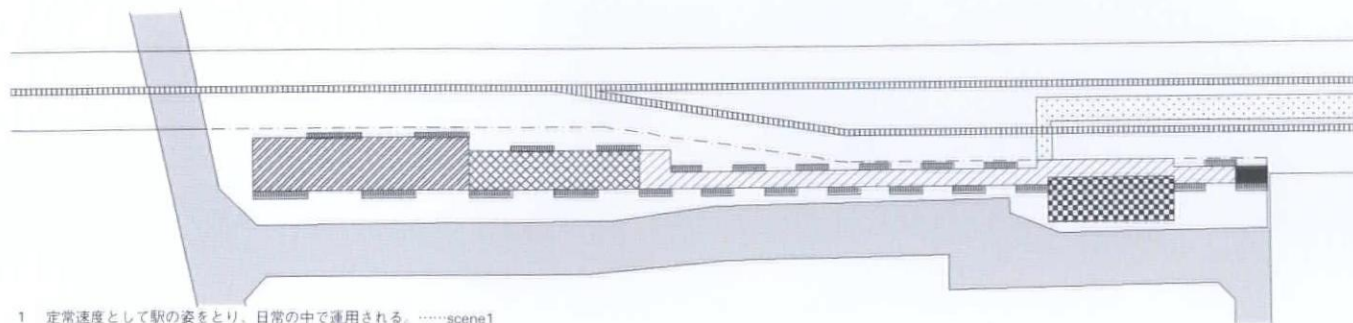
北側を道路に開き、三方を高さ6m程の海綿で囲まれた敷地は既に、(外部的)外部としての道路に対し、(内部的)外部を形成している。

ここで意図したことは、まず細長い住宅を道路側に配し、それらふたつの外部性を強化すること、そして住宅自体を外部との関係において層状に構成し、ふたつの外部性に対し個別な関係を形成することである。

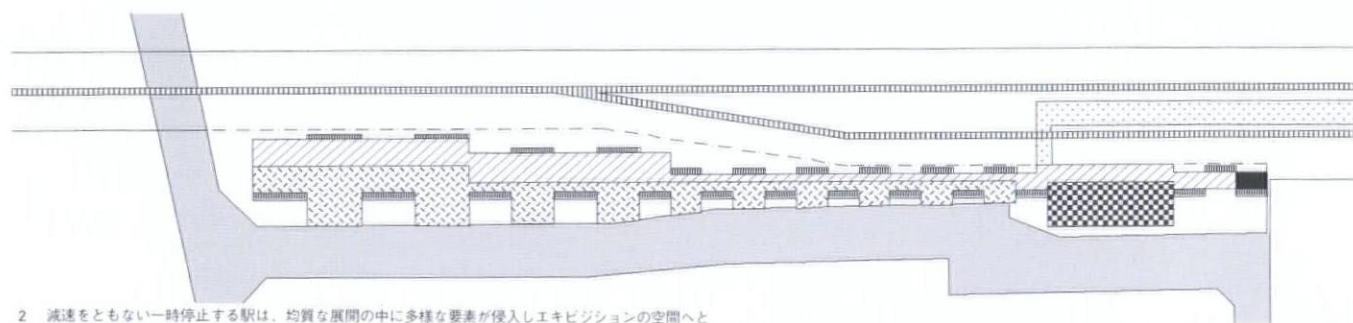
つまり、道路に面する閉鎖性の強い有孔壁によって都市の意味の連続を維持し、同時に内部の匿名性を確保する。そして、住宅自体の内部的内部、外部的内部、内部的外部という空間の層は、(外部的)外部と峻別され、(内部的)外部に対しては徐々に開かれている。



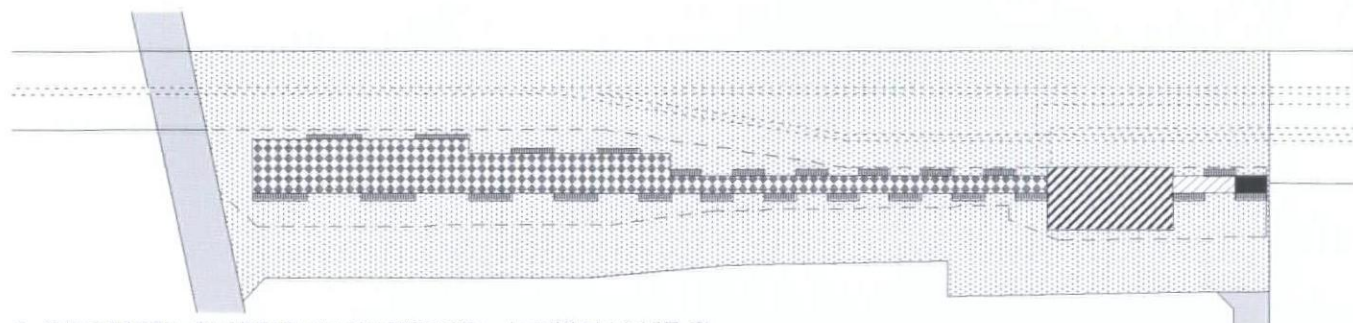
TRANSTATION大関



1 定常速度として駅の姿をとり、日常の中で運用される。……scene1



2 減速をともない一時停止する駅は、均質な展開の中に多様な要素が侵入しエキジビジョンの空間へと拡散する。……scene2



3 停止から消滅に至り、姿なき軌道を取り込み多様な関係性が交錯し、人々に接触をもたらす公園／劇場へと変容する。

	道路		通路		展示スペース
	プラットフォーム		駐車スペース		舞台
	ポイント切り替え機械室		駐輪スペース		楽屋／事務局
	線路		トイレ		スクエア／ギャラリー

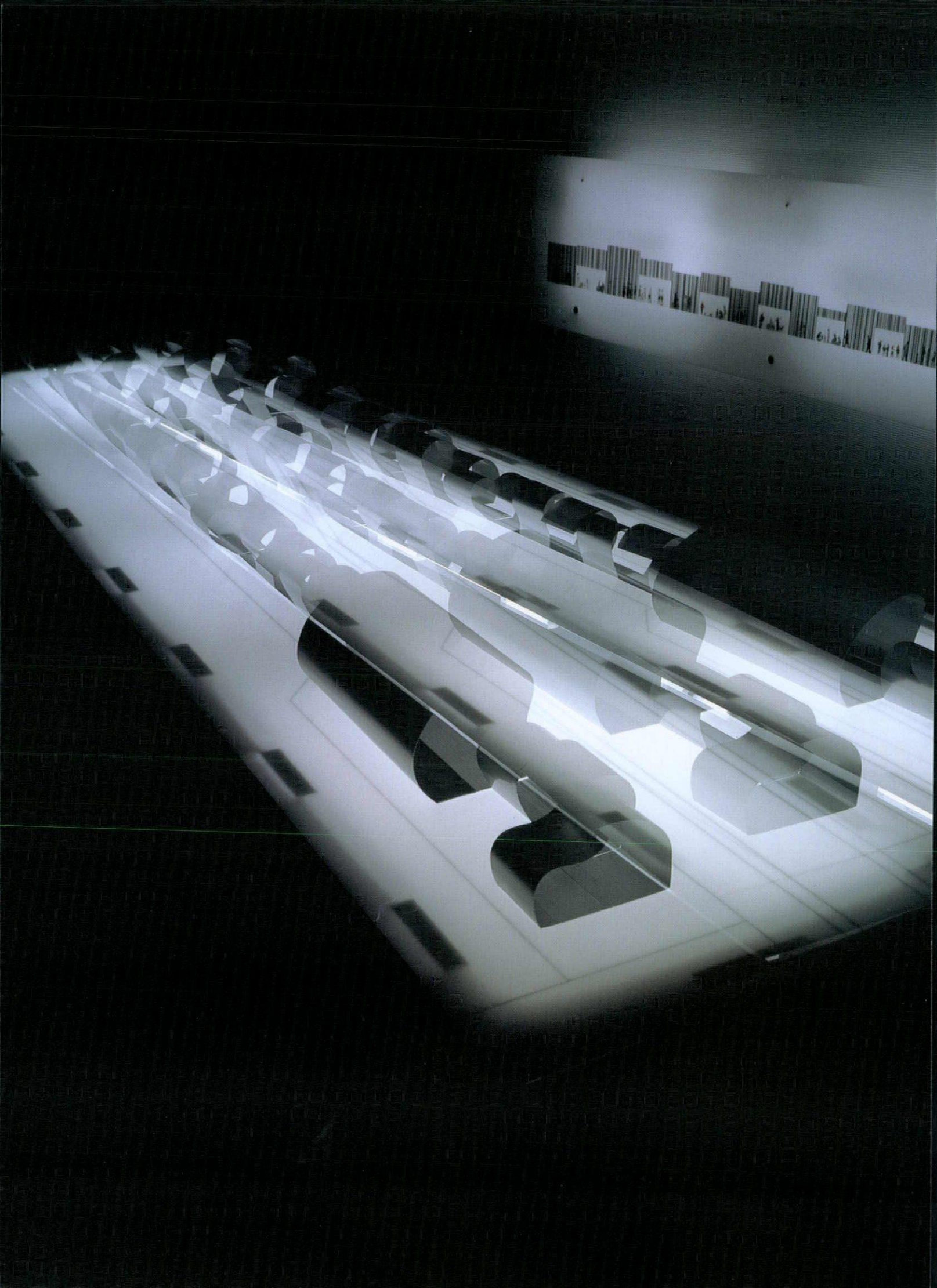
内藤：展示作品を見ると、思ったよりも連続体を見通したときの面白さが無いというのが残念でした。応募案のドローイングに見られた柔らかさとか、曲面の構造体が連続していたときの内部空間の在り方に面白さを感じていたのですが。今度の模型を見ると、むしろこの曲面の形の恣意性が邪魔しているように思われます。そこのスタディがもっとされていると良いのではないのでしょうか。

坂本：これは内部空間の在り方の問題ではないので、評価できるポイントは恣意的な形の美しさですが、この曲面はそれほど魅力的になっているとは思いません。

高橋：あんなにプチプチ切らなくても良いと思います。もっとひとつひとつのベイに意味が発生していて、長短があっても良いのではないのでしょうか。例えば、長い部分にベンチがあり、短いところは喫煙所とか、スリット

からは光が漏れたり……。いろんなアクティビティがなければ。単にぶつ切りにして、形だけで見せるのでは不足です。

妹島：連続したものを目指しているのか、切ることなのか、そのあたりが曖昧です。違った形でもよいのではないかという思いを持っています。非常に難しいだろうと思いますが、その辺りが、もう少しはっきり示された方が良いでしょう。



遠藤秀平
1960年 滋賀県生まれ
1986年 京都市立芸術大学大学院修了
1986年 石井修/美建設事務所
1988年- 遠藤秀平建築研究所

共同設計者：藤岡あおい、半場三博、
稲田敦士、福田哲也、清貞信一
協力者：第一技術開発、ナカミツ
用途：駅舎
所在地：福井県坂井町
主体構造：鋼板構造
主要仕上材：コルゲート鋼板
敷地面積：940㎡
建築面積：300㎡
工事予定期間：1995年12月-1996
年10月

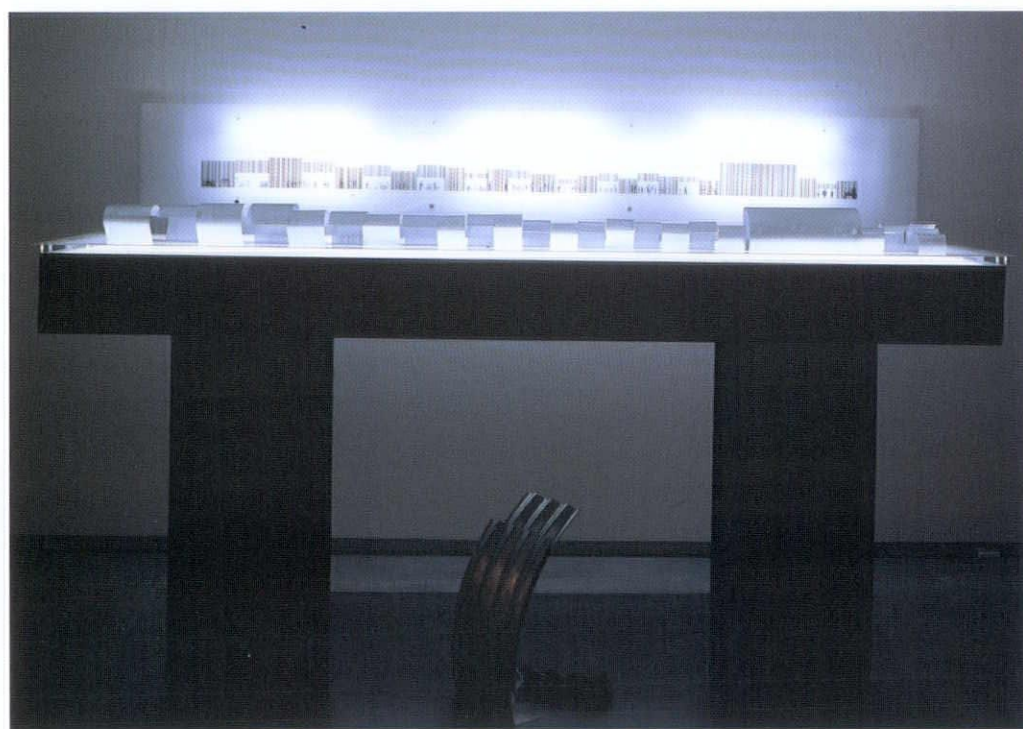
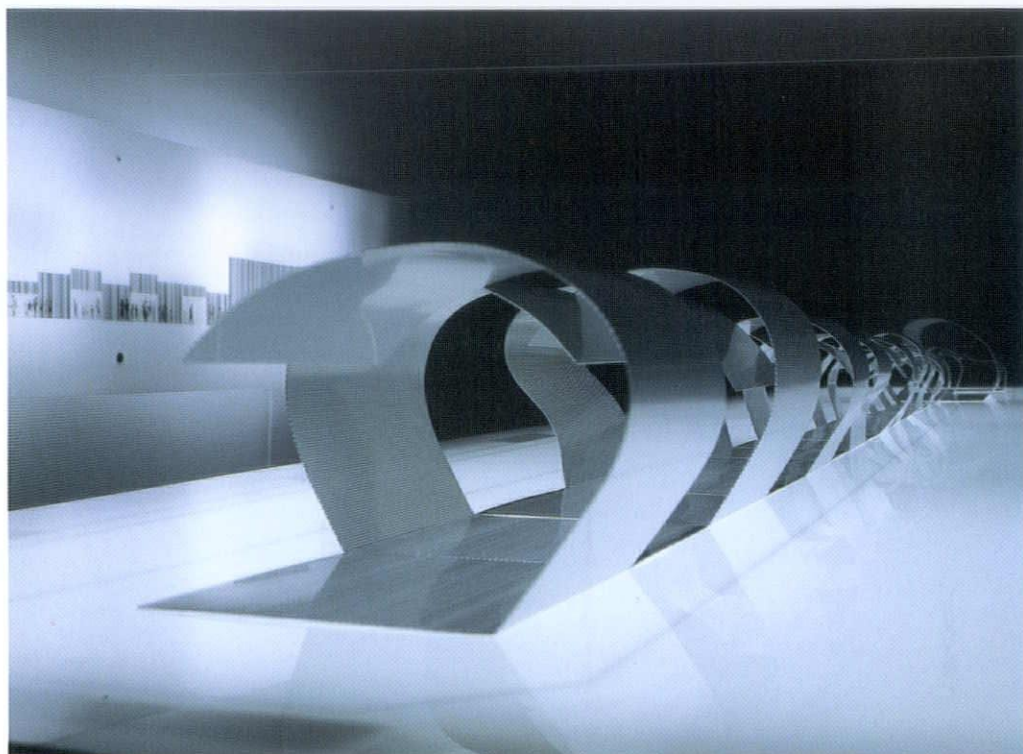
TRANSTATION（減速から停止へ）

地方の無人駅舎の痕跡をとどめる計画である。
この支線は、将来廃線となることが危ぶまれている。
危機に直面する前に、人々の関心の高揚と注目を目指した。
しかし、この敷地が可能としたことは、駅の拡散と消滅に他ならない。

新たな無人駅は、軌道が持つ公共性の流出により変容する。線路は通過目的を遮断するが、集合・停止には優位をもたらす。駅は解放され、乗車目的から新たな公共的空間へと拡散・変容する。

ローカル電車が必ず与えてくれる横揺れは、空気の振動とともに人々の記憶の中に痕跡を留める。将来、電車が消えようとも、新たな接触の場としての駅が生み出される。

減速により接触可能な駅は、永久停止により新たな公共性を獲得する。



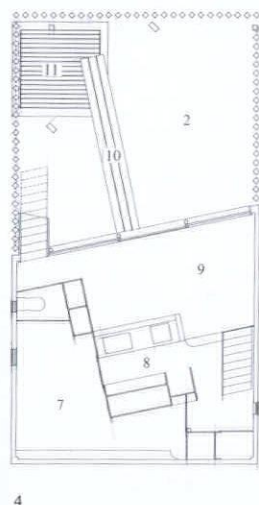
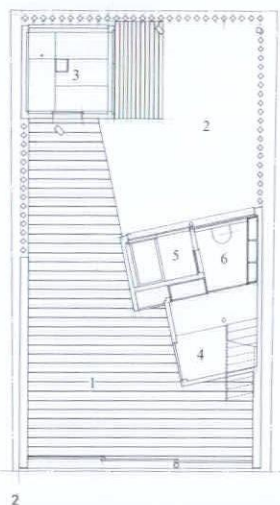
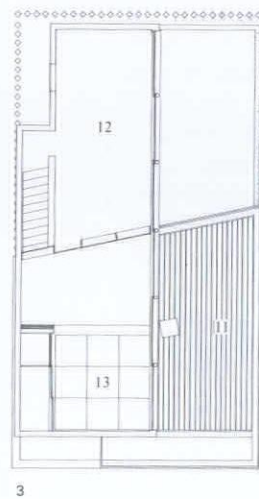
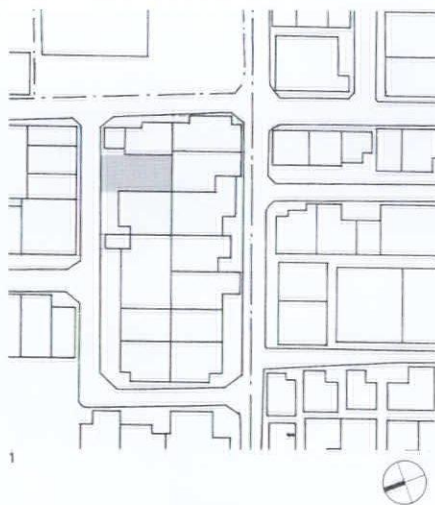
木屋舎

1: 配置図 S=1:2000
2: 1階平面図 S=1:300
3: 3階平面図
4: 2階平面図
5: 断面図 S=1:200

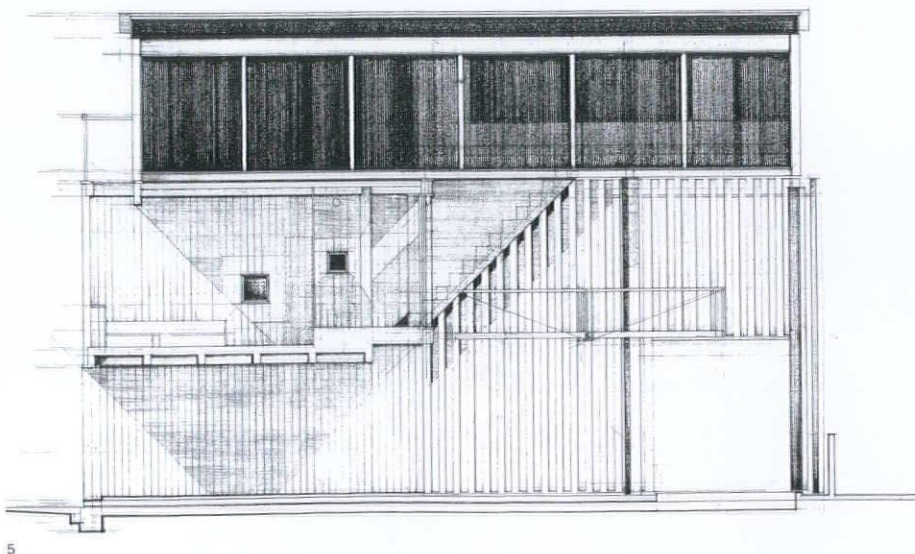
高橋：模型も良くて、見るほどに面白い作品です。しかし、ディテールの収め方が難しいと思います。茶室の上のフラットルーフなどは特にそうです。ところで、茶室の上はどのように使うのでしょうか。内と外との関係というのがこの建物では面白い。少し「和」を意識し過ぎるという声がありますが、私はそれはあまり気になりません。逆にこのような手法をもう少し煮詰めて、より凝縮したディテールが感じられるようなところまで突っ込んでいった方が面白かったのではないのでしょうか。磨けばより美しくなる作品だと思います。

内藤：ドローイングの掛け方や、そこに映っている木の年輪のような絵柄も総じて「和」を意識し過ぎたんじゃないでしょうか。模型もドローイングも「和」的な空間をどう表現するかに集中しすぎて、私個人としては、抵抗があります。この住宅はかなり建て込んだ所にはめ込まれるわけで、条件としては実際厳しいわけです。その中で現れてくる形はやはり、季さんのような強い空間であるべきでしょう。力作なので実際にできあがるものに期待したいと思います。

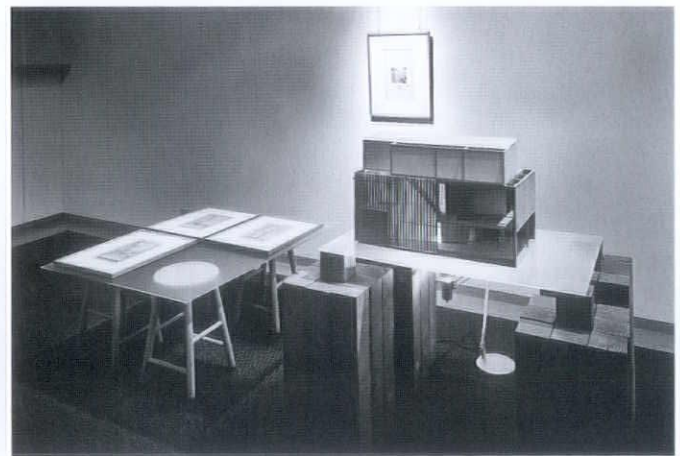
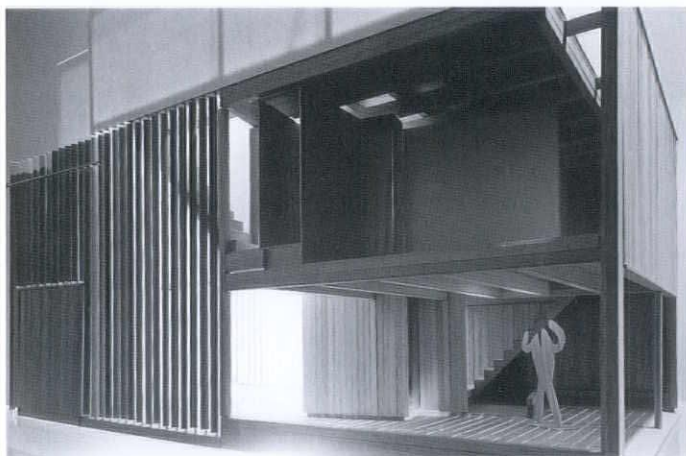
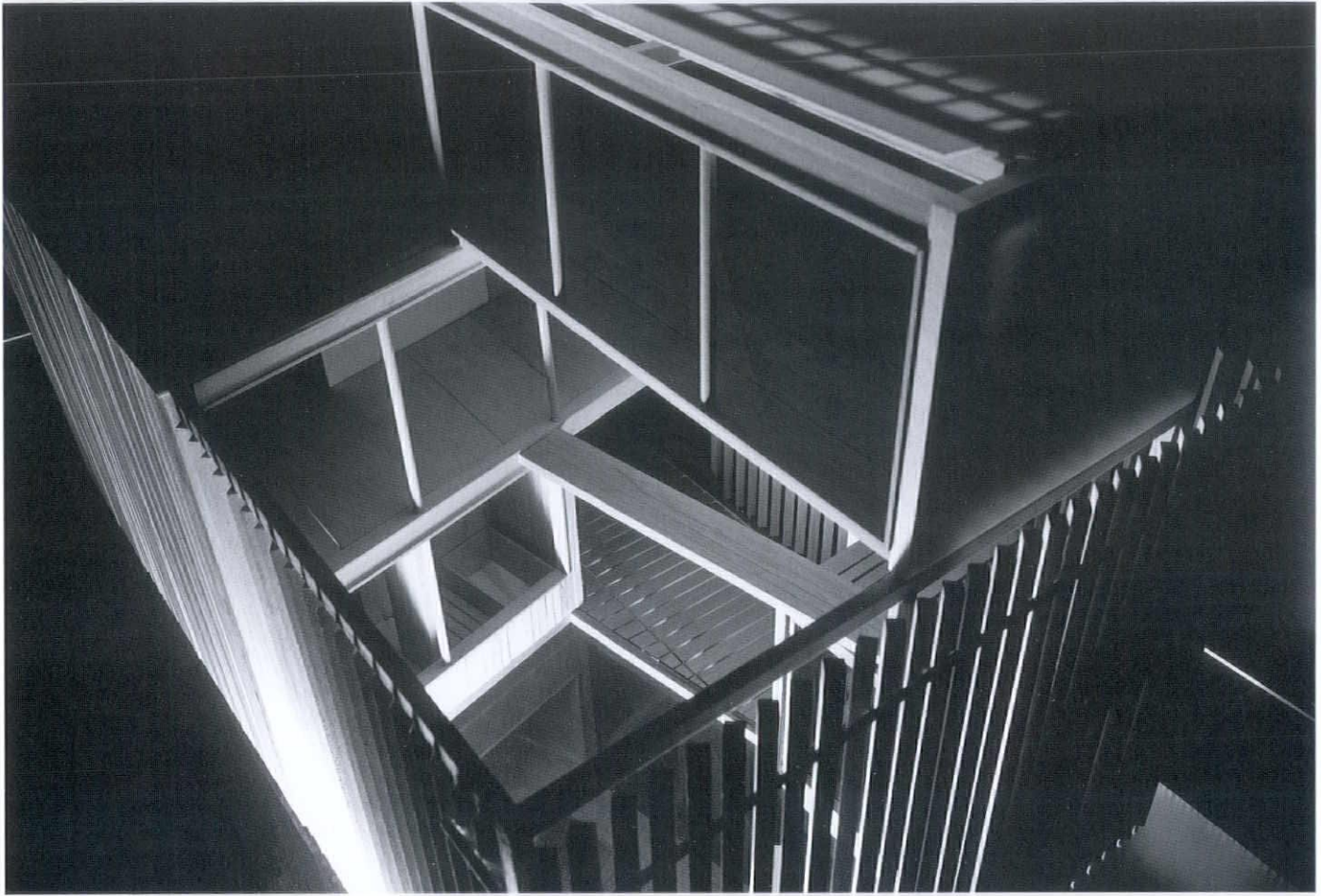
坂本：不思議な作品に思われました。どこか、合理主義的な思考も感じられるのに、大変情緒的、感覚的空間となっています。しかも、フェティシズムも見られて、形容しにくい作品となっています。この強すぎるフェティシズムにはいくぶん参ります。



- 1: パーキング
- 2: コート
- 3: 茶室
- 4: 玄関
- 5: 脱衣室
- 6: 浴室
- 7: 主寝室
- 8: 台所
- 9: 居間
- 10: ブリッジ
- 11: テラス
- 12: 子供室



中東壽一
 1951年 大阪府生まれ
 1972年 大阪工業高等専門学校建築学科卒業
 1972—76年 小河建築設計事務所
 1977年 中東建築設計事務所設立
 乃普創設計工房に改称



共同設計者：芦田行宏（乃普創...設計工房）
 協力者：模型製作：永野安廣（乃普創...設計工房）
 用途：専用住宅
 所在地：大阪府寝屋川市木屋町
 構造：木造
 主要仕上材：木、ガラス、スレート

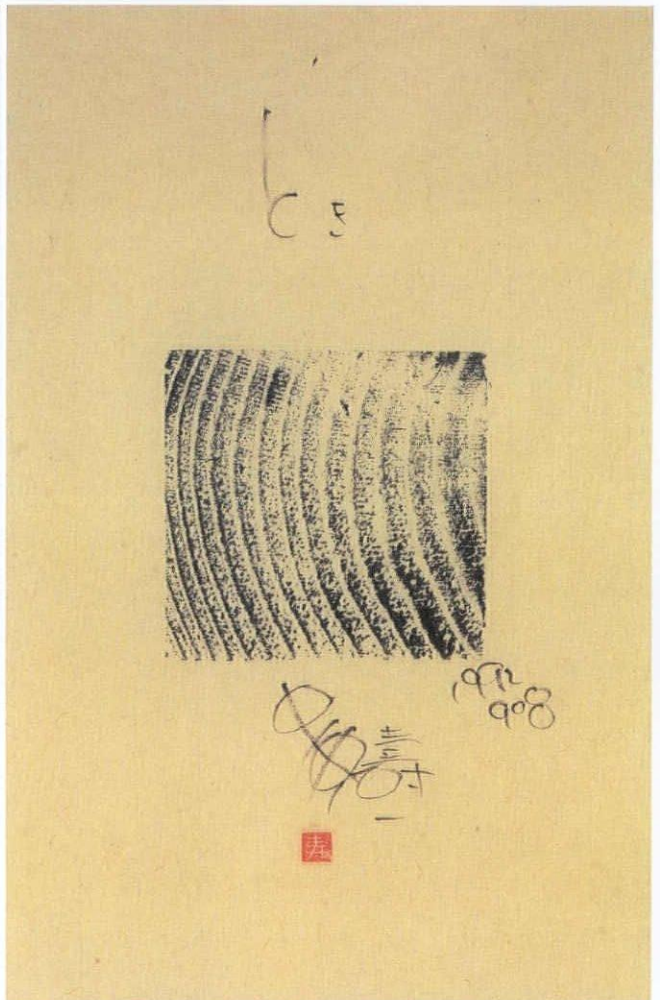
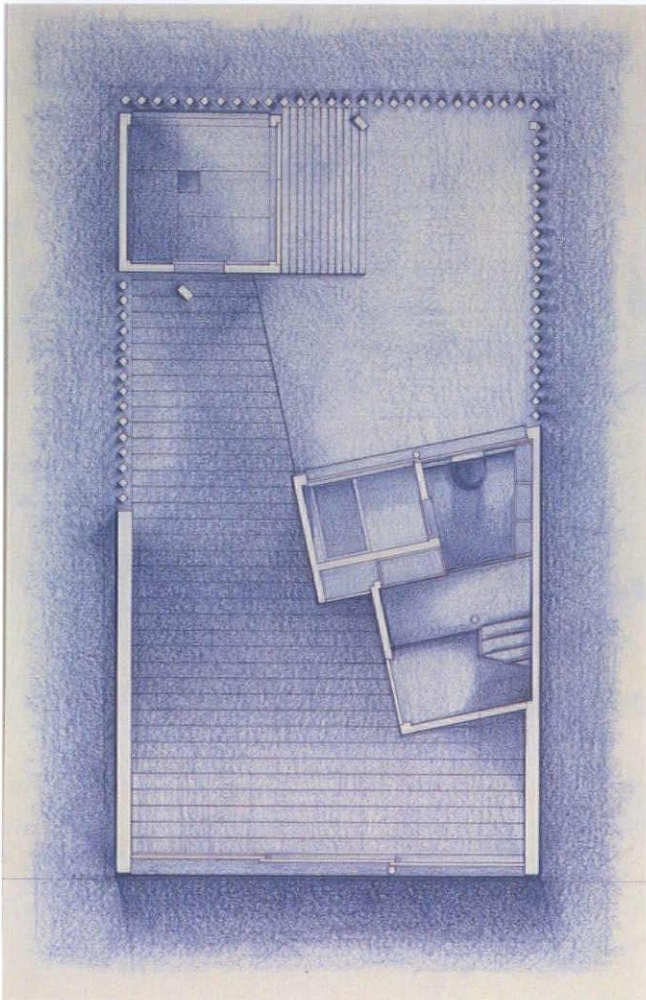
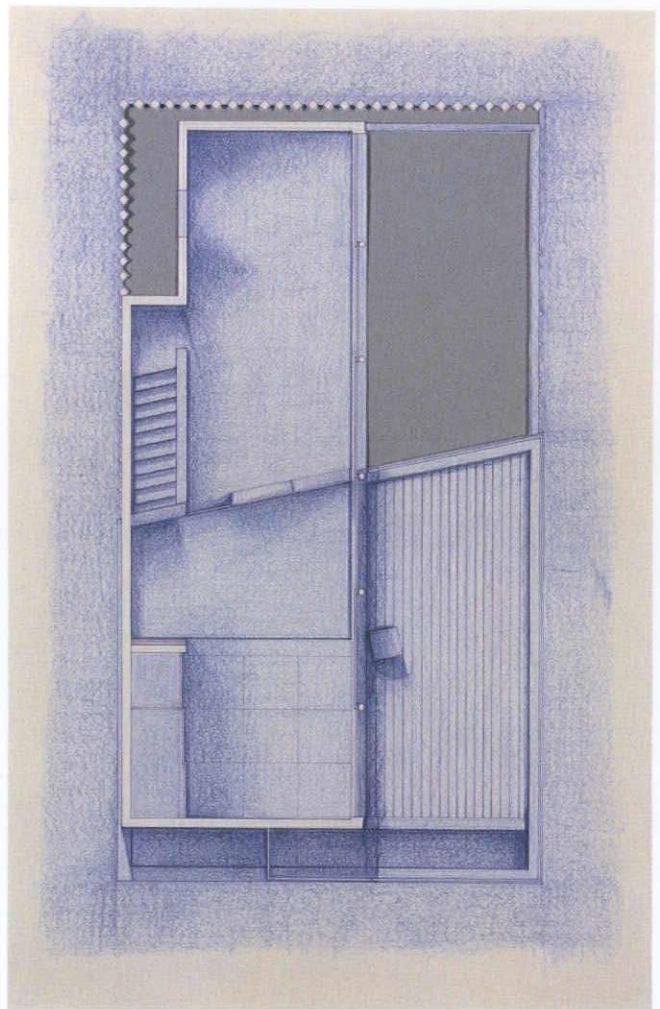
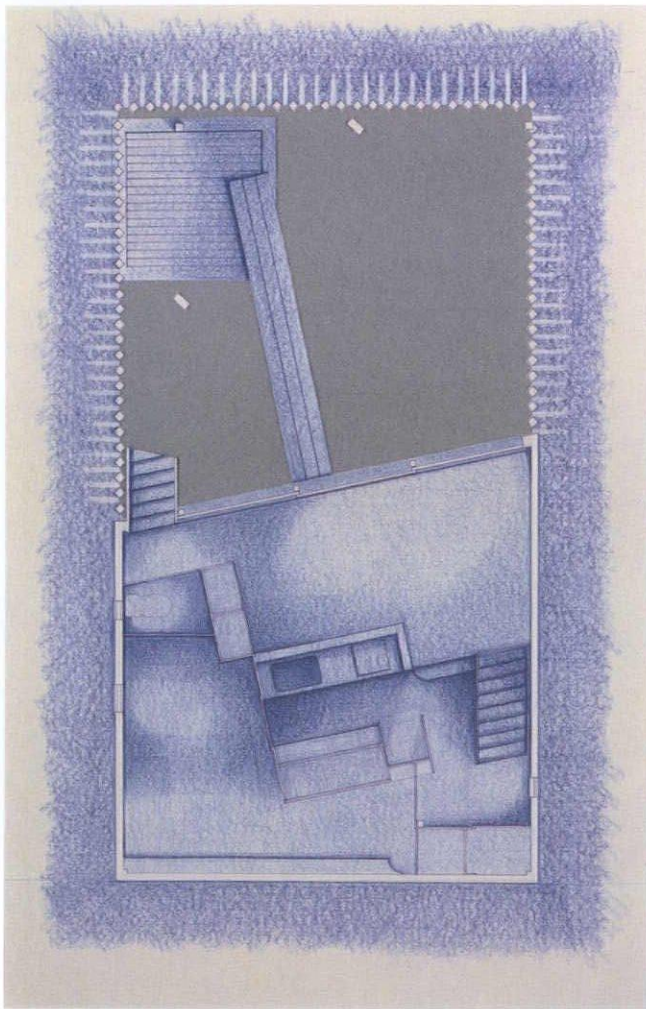
敷地面積：107.01㎡
 建築面積：59.88㎡
 延床面積：92.69㎡
 工事予定期間：1995年1月—9月

敷地は、住宅密集地。南、東、西には隣家が近接する。北には幅4mの道路と隣家。面としての家々の豊からは深さ

6m、間口7m、奥行14mの直方体のくぼみ。

この計画は周辺の家々の麓レベルを地上と地下の境とし、重層する建物が地下に埋まっている。そのボリュームは地上に向かって各層ごとに拡大し、自然と対話する。

架空のグランドレベルを設定し、隣家の壁面を土留めの壁としてドライエリアに舞い降りた限られた自然の粒子を、外なる空間と内なる空間に同化させ、場のもつ個有の世界に導こうとしている。

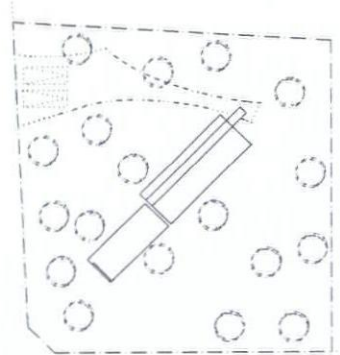
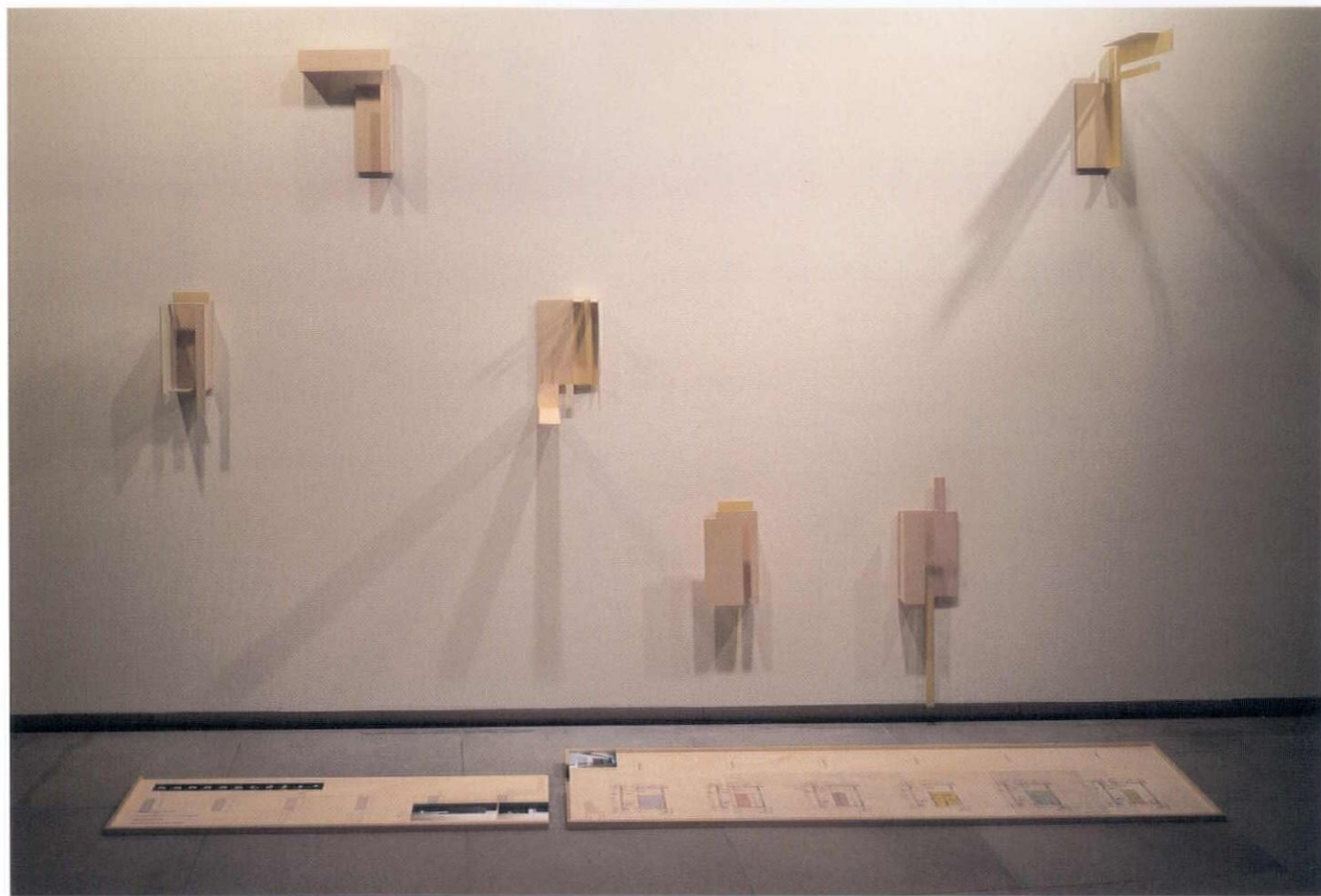


長田直之+筏 真司 / I.C.U.
Naoyuki Nagata+Shinji Ikada / I.C.U.

HIYOCOHOUSE

長田直之
1968年 愛知県名古屋市生まれ
1990年 福井大学工学部建築学科卒業
1990-94年 安藤忠雄建築研究所
1994年 I.C.U.-Osaka設立

筏 真司
1967年 富山県生まれ
1990年 福井大学工学部建築学科卒業
1990-94年 妹尾正治建築事務所
1994年 I.C.U.-Tokyo設立



5

高橋：もっと中味を解りやすく整理するべきだと思いました。ミース・ファン・デル・ローエのファンズワース邸の比例を遵守したとか、情報量がどうのこうのというのは、何か意味があるのでしょうか。

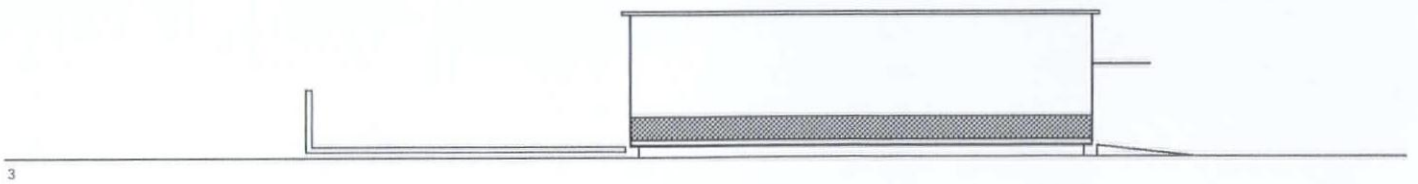
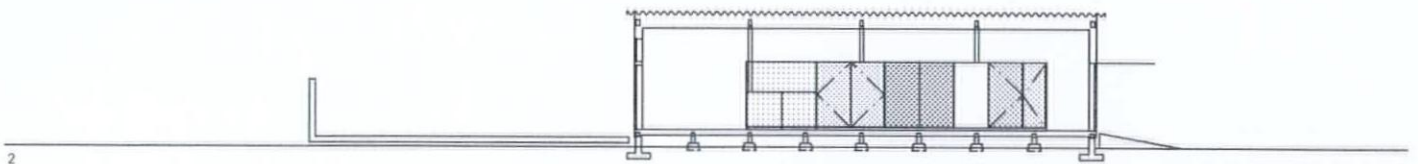
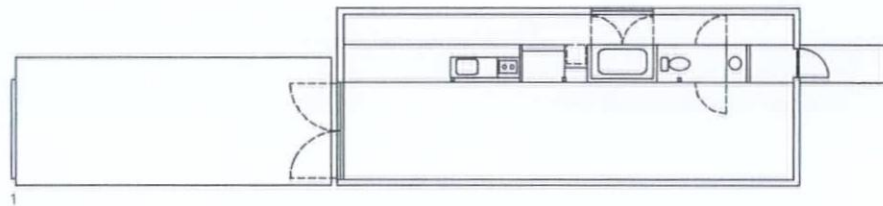
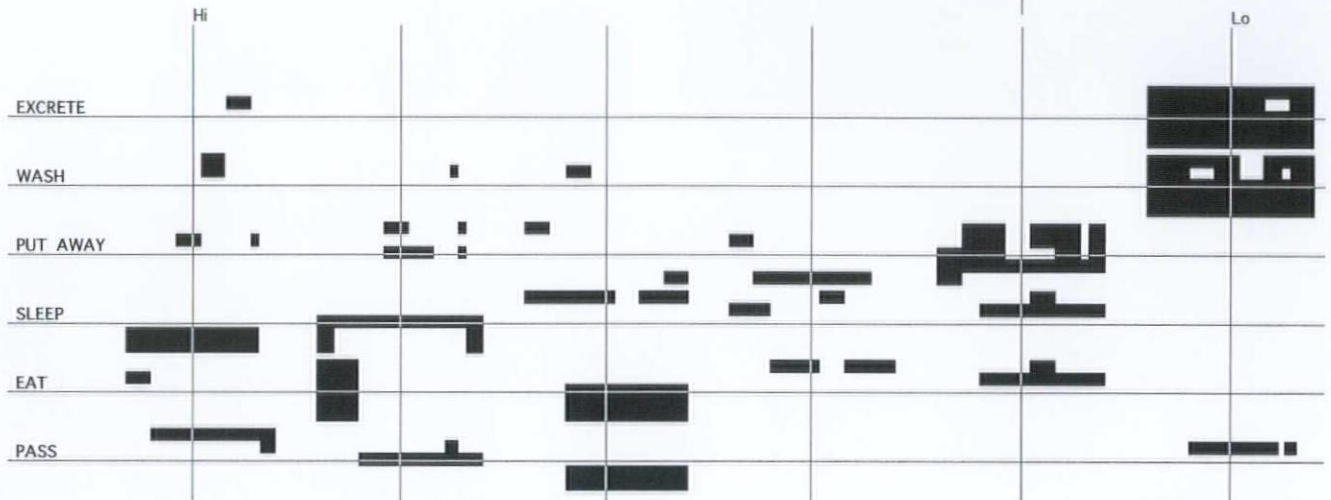
内藤：これは、たぶん想像するに、普通だったら何も発生しないような非常にシンプルな平面とプログラムを、ハードウェアとして与えておいて、そこに関わる人間の形態に対する認識のパターンによっていろんな空間ができるということを表現したのだと思います。単純な直方体でも、人間の行動はそのパターンによっていろいろな展開をするということを言いたかったのでしょう。しかし、そんなこと言わなくても、提示されたシンプルな形態は美しかったわけだから、もっと素直にそのことを表現した方が良かったと思います。

ちょっと言い過ぎかなという気がしました。

妹島：私も非常に美しいボックスだと思いました。しかし、プレゼンテーションされていることについての面白さは、申し訳ないのですが私には理解できません。

坂本：プレートとボックスがあって、空間というものはその配列にあり、そこにどういう可能性があるかを言っているのではないのでしょうか。そうしたドライな操作を展開しているんだけど、そのやり方をしているにしては、思い込みが激しくて展示を見る人とのコミュニケーションが今ひとつ取れていない気がします。ただ、興味のあるボックスです。非常に綺麗です。私は最初、このボックスの美しさを評価していたようなところがあります。しかし、本人が言いたいのは、今私が理解できない部分なのでしょう。

□ CHOICE OF ACTIONS (fig-2)



1: 1階平面図 S=1: 200

2: 断面図

3: 北立面図

4: 東立面図

5: 西立面図

6: 配置図 S=1: 800

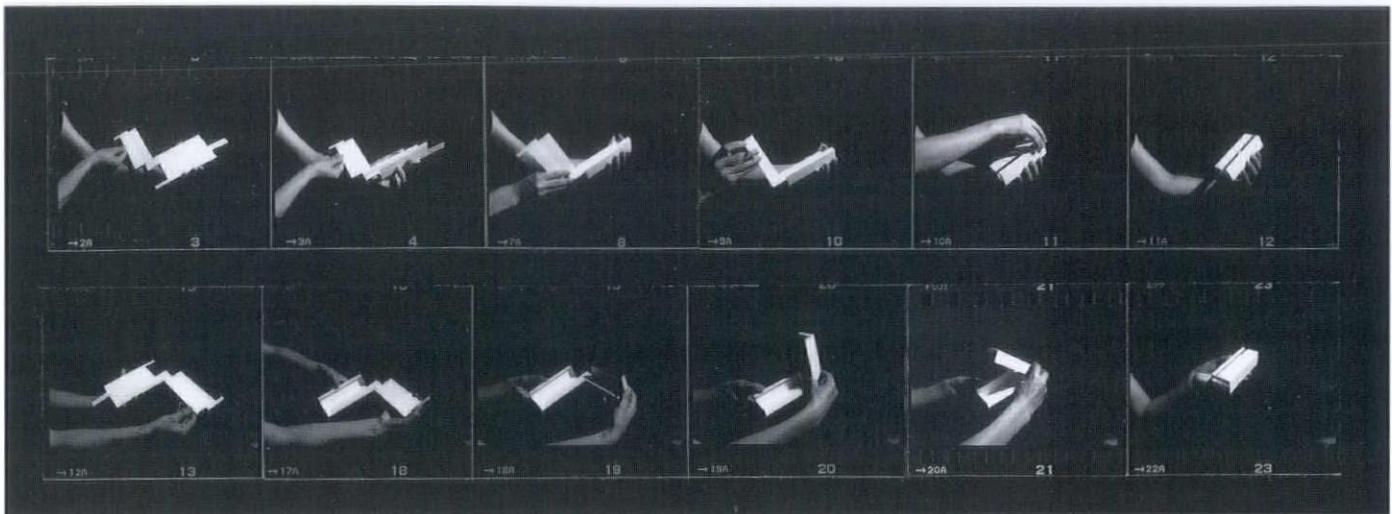


写真: I.C.U.

協力者: 熊澤栄二

用途: 週末住宅

所在地: 長野県南佐久郡小海町

主体構造: 木造平屋建て

主要仕上材: 外部: 杉小巾板横羽目 /

床: フローリング / 屋根: カラー鉄板

折板 / 建具: 木製建具

敷地面積: 1,095.1㎡

建築面積: 55.8㎡

延床面積: 55.8㎡

工事予定期間: 1995年9月-11月

HIYOCOHOUSEは、八ヶ岳を望む別荘地に計画された週末住宅です。

日常的に私たちは住宅を「単一の使用目的を与えられた空間の配列」として認識しています。(この「均質さ」は

物理的な点においてではなく、空間と空間の使用という点においてです) この計画は、それぞれの目的を対照的なものとしてとらえ、「複数の使用選択性による均質な空間の広がり」を提示しようとしています。

建物は12.4m×4.5mのボックスと、8.4m×3.4mのプレートから構成されています。

使用選択性の少ない空間は、浸透性の高い材料(エキスパンドメタル等)でラップされることによって、複数の選択性へと開かれていきます。さらにボックス(立体)は展開され、プレート(平面)において3回の操作によって、(その過程においても)複数の選択性=均質なものとなります。

このような複数性・均質さは不規則な操作によってではなく、以下のような規則的な操作による結果です。

01. 使用する形態は、ミースのファンズワースハウスの比例関係を守る。

02. 使用選択性は、「情報量」を指標に次の式によって表す。

$$H(X) = -\sum P_i \log P_i$$

03. n次元での操作はn-1次元の操作によって行う。

上記のような内容をより具体的な形で提出するため、今回のSD REVIEWでは以下のような操作を行いました。

■Open Box Operation

この操作によって、ひとつの面は複数の面からできていることに気づきます。単一の中にも常に複数性が隠されていることが分かります。

■Diagram

空間を単一の使用選択性ではなく複数の使用選択性の拡がりとしてとらえ、ある空間においてある行為を選択するときの可能性/不可能性を決定する情報量の分布を演算 $[H(X) = -\sum P_i \log P_i]$ によって指し示す。

■Exhibition

建築として実現するであろうひとつの箱についてではなく、その箱が持つ複数の可能性を示そうと考えました。あるひとつの空間を想定しても、その中に複数の空間が含まれているということをです。

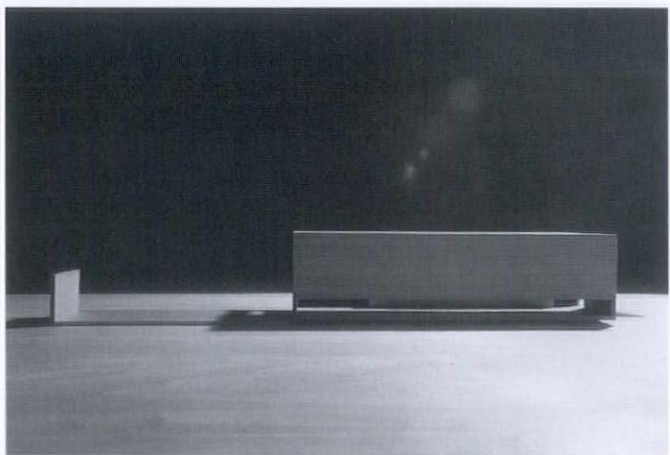
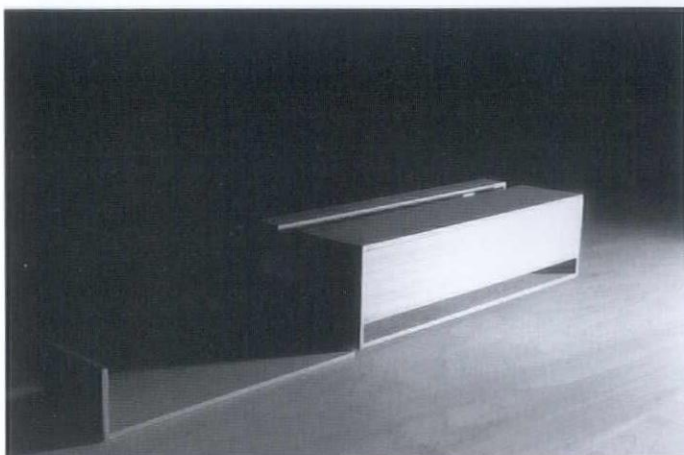


写真: I.C.U. (同左)

本宮の家：ひとつ屋根の下設計MEMO

用途：住宅

所在地：福島県安達郡本宮町

主体構造：木造

主要仕上材：リシン+亜鉛鉄板+杉板

張/中庭面：中空シート張+ガラス

敷地面積：433.66㎡

建築面積：172.44㎡

延床面積：234.09㎡

工事予定期間：1995年7月-12月

A：敷地環境——建築協定による制限のある住宅団地。陸屋根禁止、2階建以下、木造とする事。駐車場とアプローチの位置固定、変更不可。法規以上の斜線、後退距離。生垣以外、塀は不可。色彩制限……等々。さらに和風のスタイルを望まれた。
→協定は景観パーツの共通コードにすぎない。

but.おかげで将来を約束された日照がある。

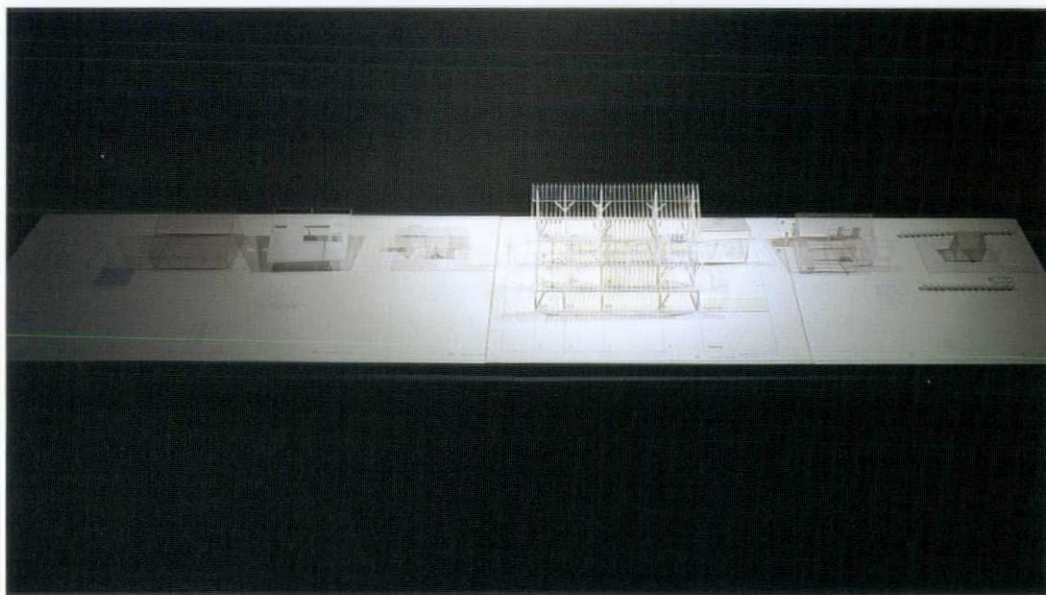
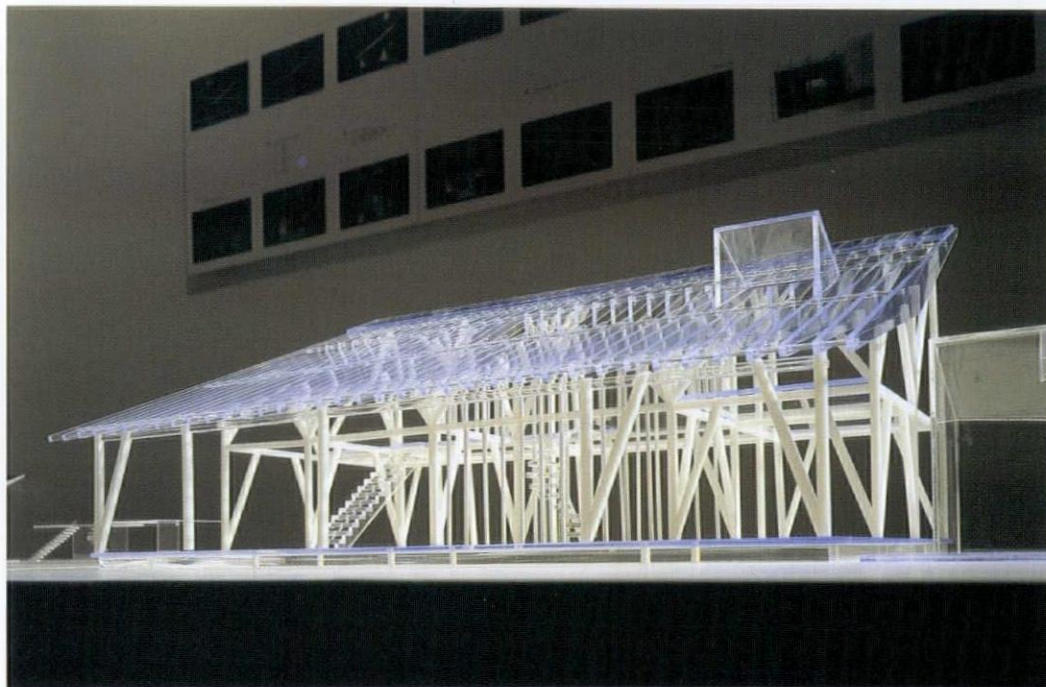
B：内部条件——住み手は現代的な一般人。将来的な3世代住居を前提に、部屋数、収納を多く望んでいる。
→いまだに住居は3LDKとか4LDKとか、部屋数によって大きさを計られる。

そこで以下のプログラムを組んだ。

A：制限による木造勾配屋根に、本来の環境の意味を込める。——環境屋根づくり

B：この屋根の下に、場数で住み手の生活づくりを展開する。——CELL(セル)群による場づくり

地域環境から身体的な環境を考慮したひとつの屋根の下で、様々な機能の「CELL」たちが場所を奪い合う。固定しがちな枠組に変換可能な「N-CELL」を与えると、やがて将来を見据えて良好な関係を結ぶまでのドラマをつくる。この関係は、光・熱・風・水・人の動線・視線などを媒体に、「CELL」間のみならず屋根から環境を結ぶものであり、部屋数を望む家型への試案である。最も初源的なコンピュータ・デバイスによって、このドラマを構成し、メモリーしようと考えた。



佐々木 聡

1959年 茨城県生まれ

1982年 東北大学工学部建築学科卒業

1984年 東北大学大学院建築学専攻修士課程

修了

1984年 長谷川逸子・建築計画工房入社

1995年 SGM環境建築研究所設立

中村宏美

1961年 神奈川県生まれ

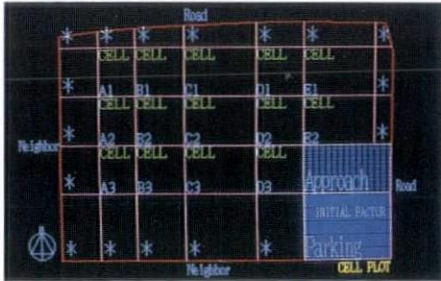
1982年 桑沢デザイン研究所インテリア・

住宅デザイン研究科卒業

1982年 長谷川逸子・建築計画工房入社

1988年 ファーストコミュニケーションズ

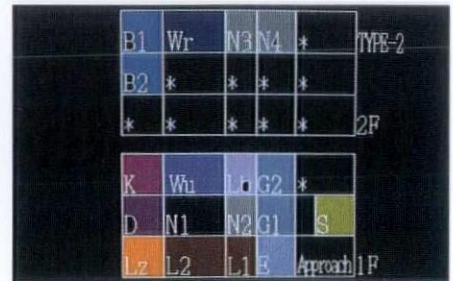
設立・参加



MEMO-1: CELL PLOT



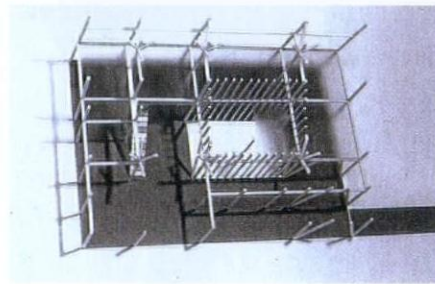
MEMO-2: FIRST CELL VARIATION+SHED ROOF



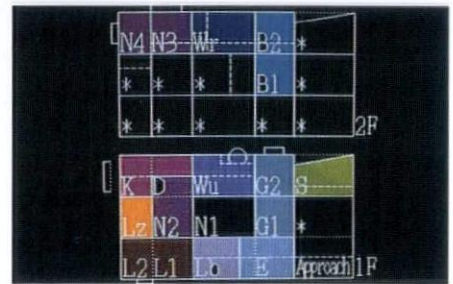
MEMO-3: CELL WORK+SOLAR ROOF



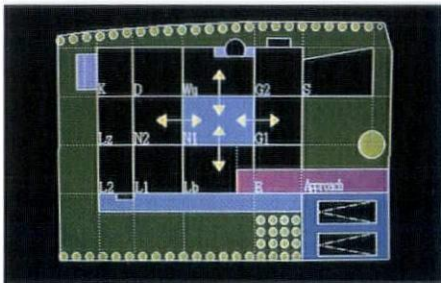
MEMO-4: FREE CELL CHANGE CELL



MEMO-5: STRUCTURE UNDER ROOF



MEMO-6: CELL CHANGE



MEMO-7: GARDEN AND CELL IN THE NEAR FUTURE

MEMO-1 CELL PLOT

* (配置) 一後退等、配置不能CELL
[Parking], [Approach] は、協定による初期値

MEMO-3 CELL WORK+SOLAR ROOF

N1: ニュートラルCELL (フリーセルとして付加)

N2.3.4: 住み手要望の不確定要素(ニュートラルセルとして置換)

N (ニュートラルCELL) を導入する事により「CELL」は流動し、
生活内容により最適な場所を求めていく。

MEMO-5 STRUCTURE UNDER ROOF

「CELL」間のシーケンスに対応した構造が登場する。

ROOF PLATE: 2×4 PANELS

FRAME: BRACING&STRIPE

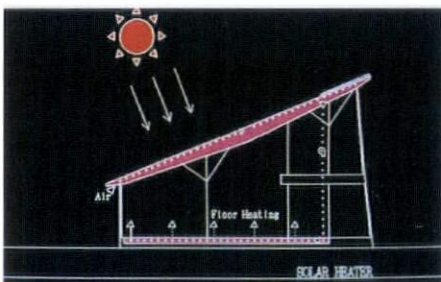
MEMO-6 CELL CHANGE

最適な場所を確保した「CELL」は、

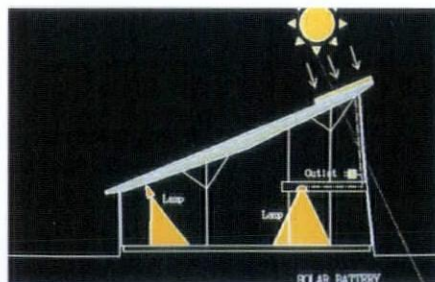
住環境やさらなる条件を得て、

分割、変換を経て収斂する。

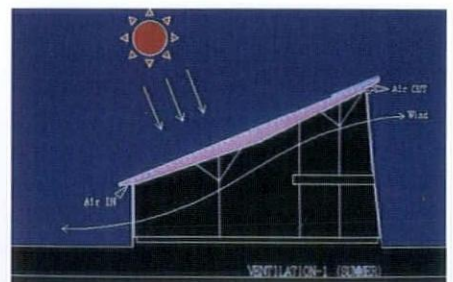
凡例: P.46



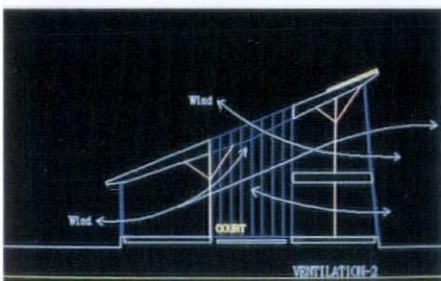
Solar roof-Heater



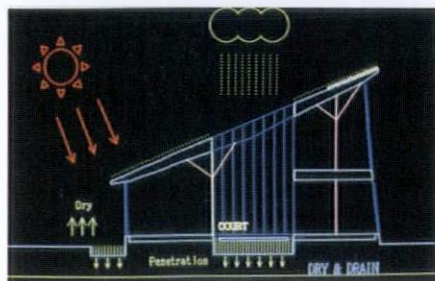
Electric roof-Solar battery



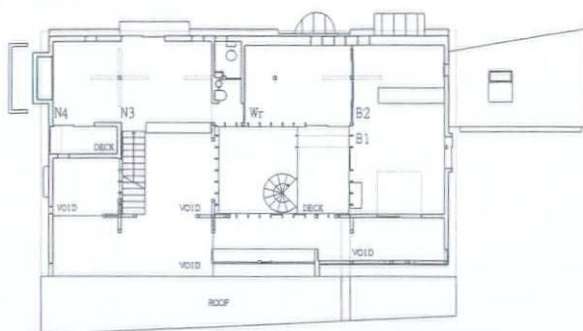
Roof cooler-Ventilation



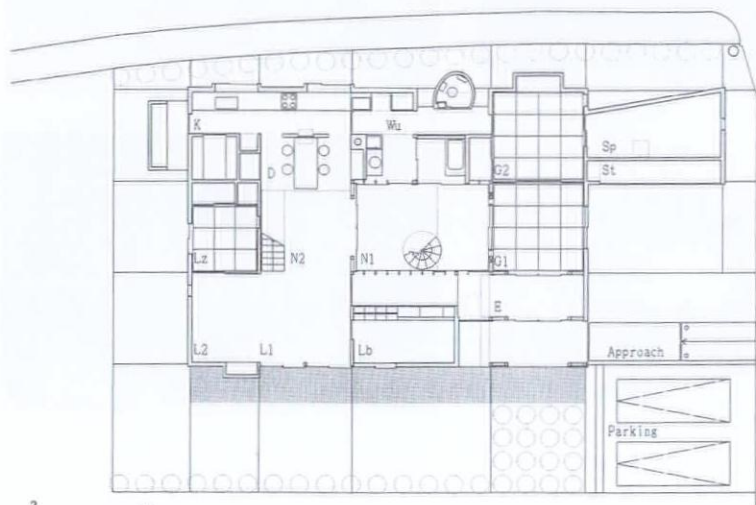
Windy court-Ventilation



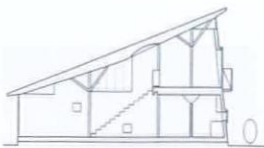
Drainage



1



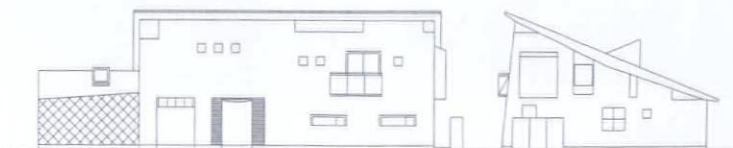
2



3



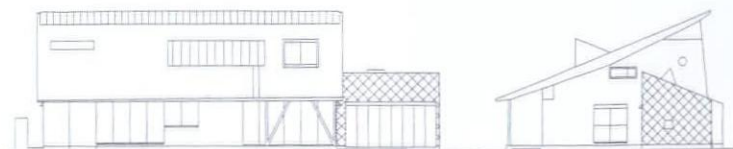
4



5



6



7



8

- 1: 2階平面図 S=1: 300
- 2: 1階平面図
- 3: 断面図 S=1: 400
- 4: 断面図
- 5: 北立面図
- 6: 南立面図
- 7: 西立面図
- 8: 東立面図

坂本：断面が魅力的だと思いました。一見ありそうな断面だけど、そこには普通とは違ったかなりパッシブな考え方が見られます。その関係の中で面白い建築的な在り方が提案されるかと思いました。しかし出てきたものは、応募案で読みとったものとあまり変わっていません。もちろん、必ずしも変わる必要はないんですが、この魅力がまだ最初の印象以上にならないのが残念です。

内藤：応募案選抜の時に、環境条件からアプローチしたのが魅力的で推しました。しかし展示作品は、このパッシブ的に空けられた中庭がどういう空間なのかとか、そのシステムがどういう美しさを獲得しているのか、そういうことが表現されてないと最終的な評価を得るのは難しいでしょう。架構の模型を見ると、木造在来工法で作ってもこのくらいの美しさは出るのではないかと思います。システムだけにこだわってプレゼンテーションしたところが難点でしょう。

高橋：これなら僕は、池を備えたイスラム建築のパティオの方が魅力的に感じます。エンパイロンメンタルだし、蒸発熱が奪われて涼しいし。

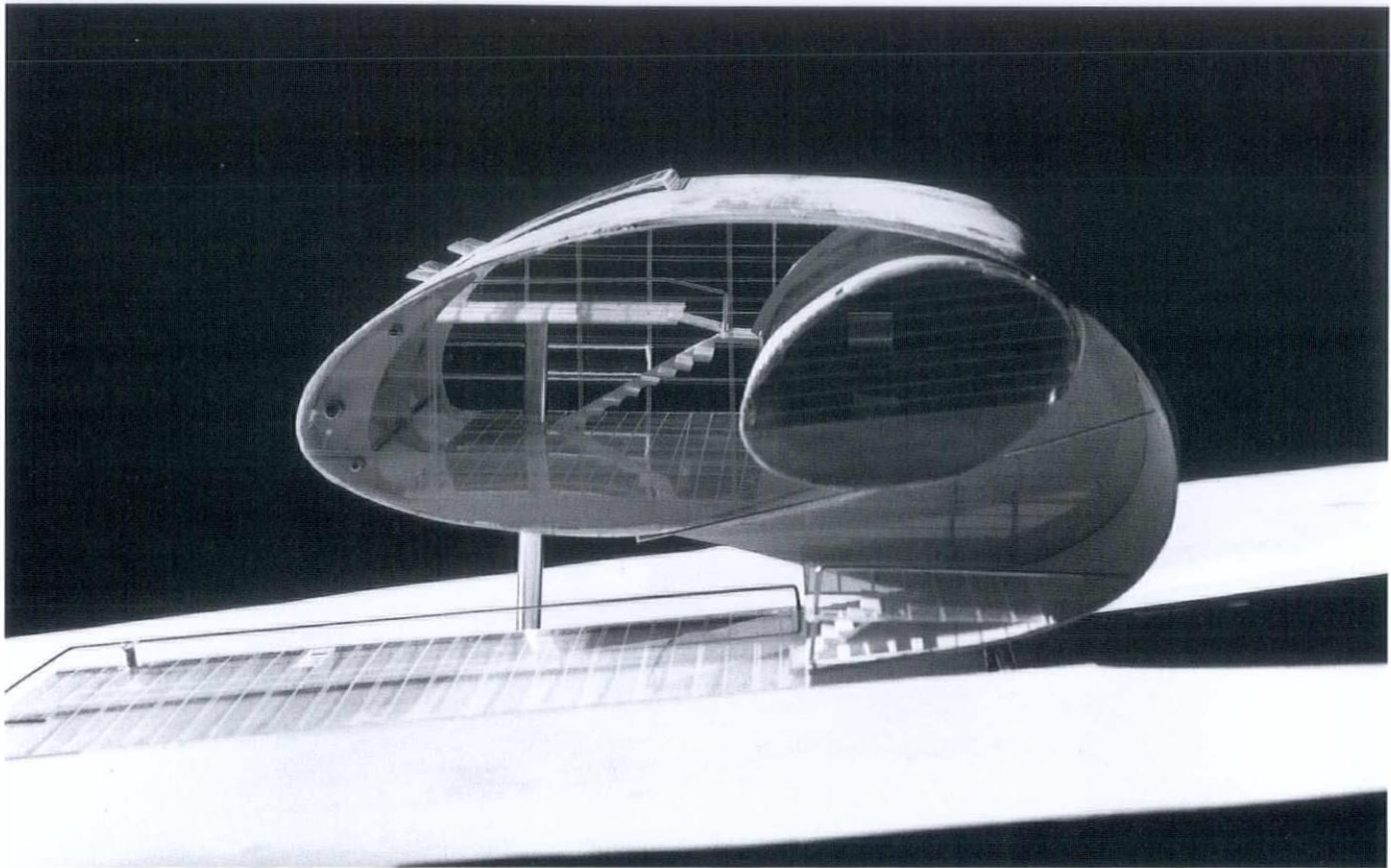
妹島：断面には確かに魅力を感じましたがパッシブから考えた場合、平面がああなるのか、何かもう少し違ったものがあるのではないかという思いを持ちました。

- N1: ニュートラルCELL (フルーセル) →COURT→+ see through deck
- N2: ニュートラルCELL (L-D) →Step Hall (L-D)
- N3,4: ニュートラルCELL (住み手要望の不確定要素) →Step Hall + piano space
- *: Void Cell
- L1: Living
- L2: Living→Laudio
- Lb: Library
- Lz: 茶の間→Lzashiki
- D: Dining
- K: Kitchen→long kitchen
- E: Entrance→En (縁) + Approach
- Wu: Water Utility
- G1,2: Guestroom
- S: Stock→St (Stock) + Sp (Spareroom)
- Wr: Workroom→Wife Utility + Loft
- B1,2: Bedroom

in the near future

- N3→STEP HALL + piano space (+ CHILDREN)
- N4→CHILDREN
- G1+2+Sp→PARENTROOM
- B1+2+Wr→BEDROOM+CHILDREN+STOCK

OnO HOUSE



協力者：藤川伸(写真)、宮本明彦、棚次淳子

用途：別荘

所在地：栃木県日光市霧降

主体構造：鉄骨造

主要仕上材：テフロンシート、アルミ

パネル、プリズム入り強化ガラス

敷地面積：360㎡

建築面積：181.15㎡

延床面積：未定

工事予定期間：1996年4月～11月

林道に接した敷地は、北に向かって穏やかに傾斜する鬱蒼とした杉林に囲まれ、吹き抜ける柔らかな風と木々の間から差し込む静かな光が充滿している。

長期的な滞在を目的とした別荘。美術工芸品のプライベートギャラリーを兼ねる。

耐候性に優れたテフロン膜をスパイラル状にロールし、内部用途に従って非幾何学的に空間を分節する。

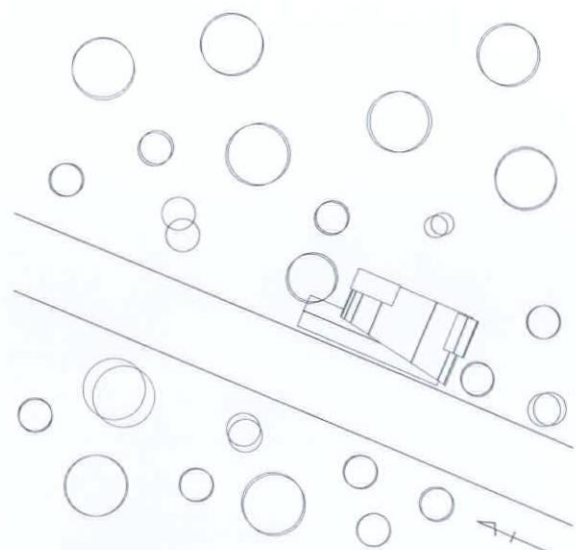
エントランスは敷地境界線と平行に配置され、スムーズな導入部を構成する。

ギャラリーを兼ねたリビングルームは最大級のヴォリュームが用意され、空間全体が膜の透過光で満たされる。

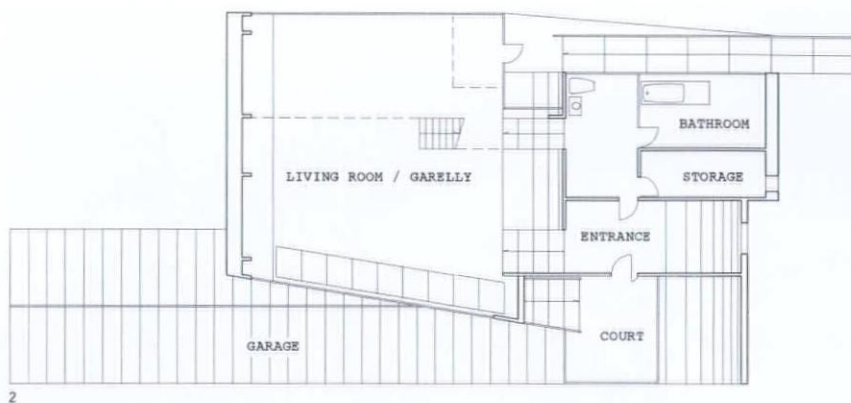
東側の全面ガラス開口に面する最も祝福された場所に、リビングを見渡せる形でキッチンとダイニングが浮かぶ。床は強化ガラスで組まれ地面の草木を楽しむ。

ベッドルームやバスルームは入れ子状に大空間部分を貫き、床や天井に設けられた開口部から切り取られた内部空間を楽しむようになっている。

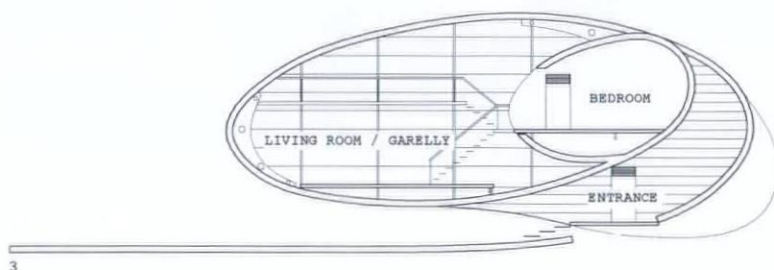
なお、建物下部への草木の導入のため、最小限の構造体の他は空中に浮かんでいる。



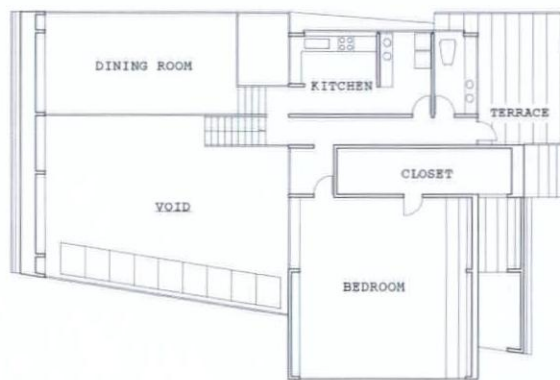
- 1: 配置図 S=1:1200
 2: 1階平面図 S=1:200
 3: 断面図
 4: 2階平面図
 5: 断面図



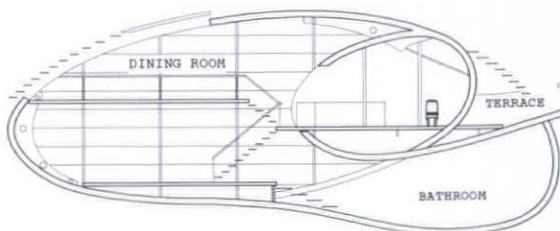
2



3



4



5

高橋：こういうストラクチュアは素直ではありません。フレームでもっているだけで、梁がなく、柱の効果も疑問です。開口部の方向からの横力に弱いかも知れません。開口方向の両面が剛であるか、コルゲート板が地中に埋まって固定されていれば別ですが。また、ねじれも出るでしょう。この形態は、自分で安定する構造じゃないんです。これを実現させるには、いろいろな補助材をもってこなさなければならず、そうすると空間をぶち壊してしまう恐れもあります。プランについてはあまり魅力を感じません。

坂本：構造は中空に浮かせる支持が問題で、それを解決すればいけるんじゃないかと思いますが。

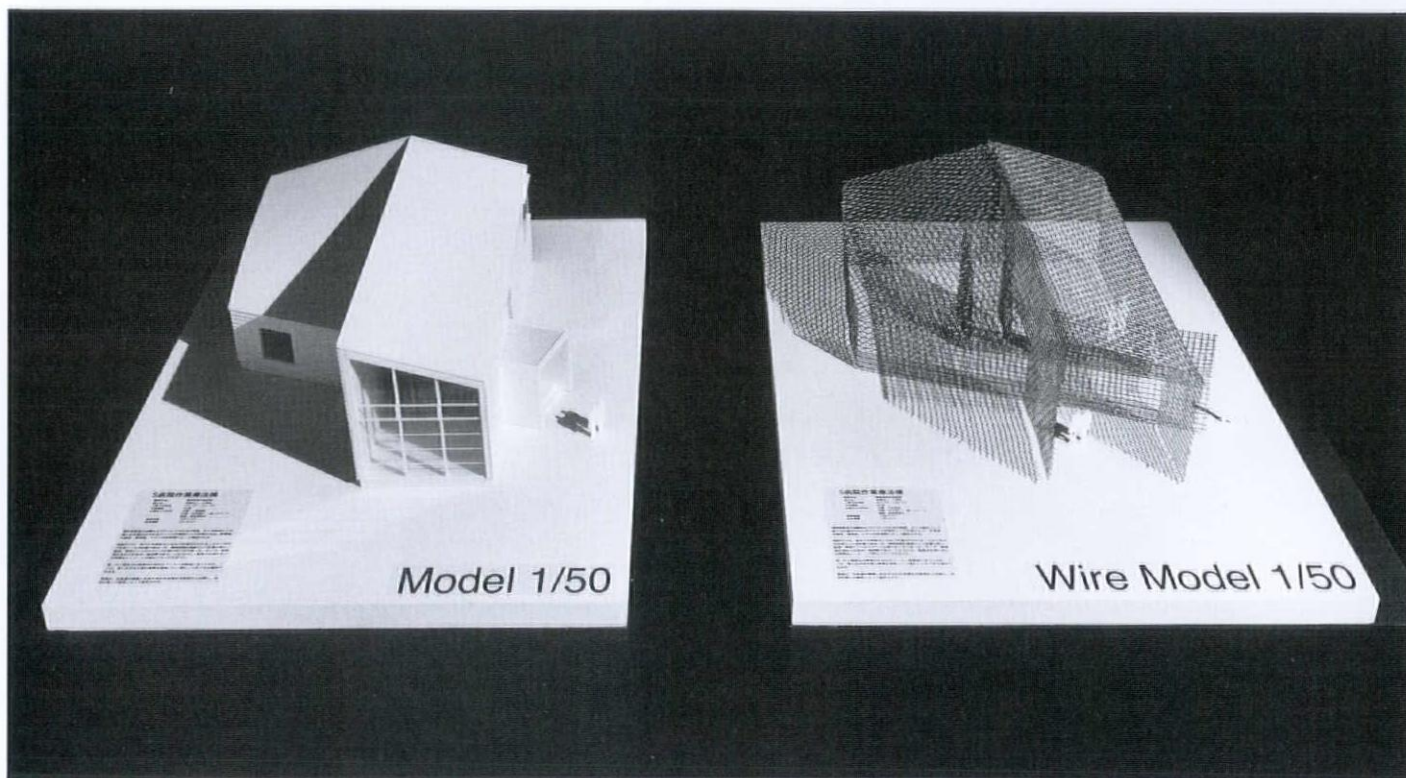
内藤：構造を考えると、圧力側をピンでといて、ブレーシングをすればできなくはないと思います。それよりも、そうまでしてこの形をつくるべきかというのが疑問です。空間のつくり方ですが、真ん中のシャフト、横方向のシャフトに設備的なものが入ったり、ベッドルームとペアになっているなど、たまたまできた形を使いましたという印象が強いのです。そこが弱点だと思います。形は面白いと思いますが、この形態に必然性があるところを表現してゆく必要があります。

妹島：応募時点では、強引さを多少感じていましたが、今回のプレゼンテーションでなかなかうまくできているのだなと感じました。構造的なことはスタディを詰めればなんとかなるのではないかと、私は思います。

坂本：このエキセントリックなやり方に、魅力を感じました。よく見るとなかなか良いんです。一枚の板をただ巻いてできたスペース。その中にどうやって住み込んでゆくか。そうした新しい空間を見出したいという意志を感じて、評価しました。構造的には、柱1本で浮かせるのは問題で、慎重に検討する必要があると思います。

高橋：どんな形態も、コンピュータにかければそれなりの答えは出てきます。しかし、それに終始してしまうと、本当の意味でのフォルリスティック・デザインが失われてしまいます。何を、どういったシステムでつくりたいのかを追求すべきです。

S病院作業療法棟



共同設計者：(有)石黒設計事務所(構造)、(株)東成建設工業(施工(予定))
用途：病院施設

所在地：北海道上川郡東神楽町

主体構造：RC壁式

主要仕上材：屋根：鉄板横葺き／外壁：下見板貼り(外断熱)／内装：RC打放し、一部シナベニア

敷地面積：28,267.55㎡

建築面積：168.51㎡

延床面積：182.81㎡

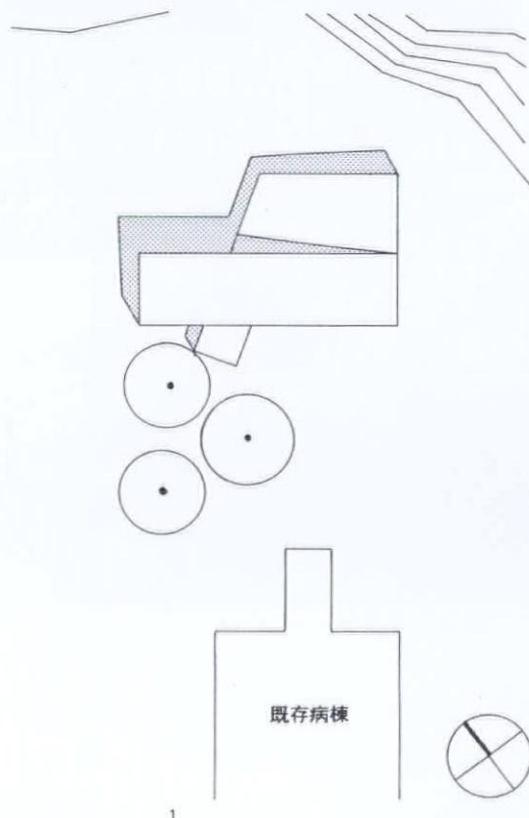
工事予定期間：1995年10月～1996年6月

精神病患者の治療およびリハビリのための施設。木工を初めとして、様々な作業が行われるアトリエ的施設として計画された。作業室、休憩室、管理室、トイレの各部屋によって構成される。

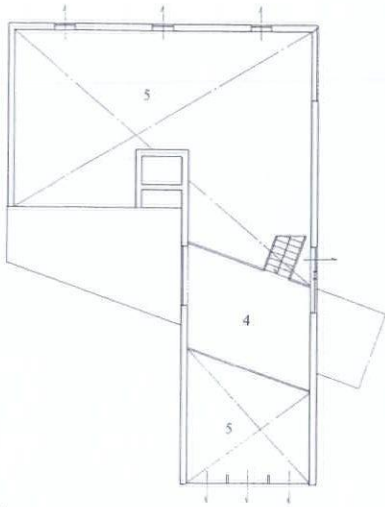
施設内では、多少とも危険をとまぬ作業が行われることから目の行き届くことが必要である一方、精神病院の施設という言葉の持つ、監視、管理といったイメージは避けるべきであった。そこで管理室を含めて全体が一室空間であり、しかも中心＝監視点を持たない空間構成として、このようなプランが生まれた。

唯一の2階部分は患者のためのスペース＝休憩室に当てられた。ここは、東に広がる大雪山連峰を屋根越しに望むことができる場所でもある。

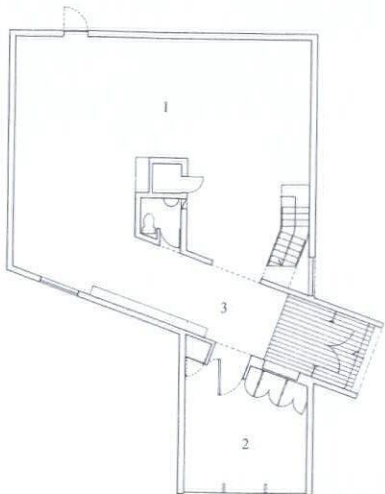
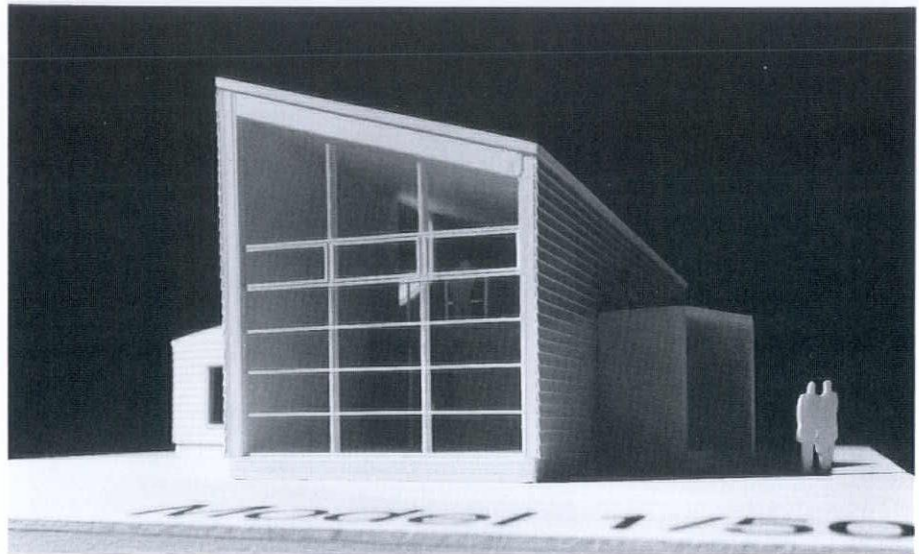
屋根は、北海道の積雪に対応するため単純な切妻型から出発し、内部空間との関係によって変形された。



- 1: 配置図 S=1: 600
 2: 2階平面図 S=1: 300
 3: 1階平面図
 4: 断面図
 5: 断面図



2



3

妹島：スパイラルというアイデアが今ひとつ、うまく使われていないと思います。

高橋：これは、昨年出展していただいた吉松さんと似た雰囲気を感じます。全体のスパイラルの形が、空間の中にもっと生きてくると良かったですね。ここで切れているところが惜しい。

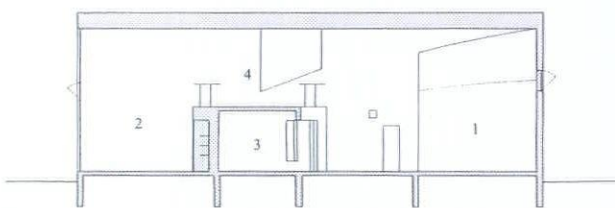
内藤：これは精神病院で、ある種の監視が必要なのです。すると、そのファンクショナルな要求と、行き止まりの螺旋形態がうまくマッチしているとも言えます。

高橋：精神病院という難解なテーマをどう読むか、そしてそれにどう答えようとしている

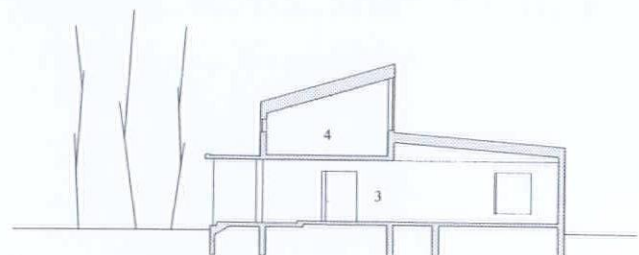
か、この作品は明快にその意図を読むことができる。ただ全体的にもうひとまわりスケールがあれば、この外皮に囲まれた空間が、もう少し美しく変身したに違いありません。惜しまれます。

坂本：この作品は、構成が機能と重なっているわけですが、形態自体はそれほど魅力的とは思われません。たまたま、このスパイラルの形が機能に対応できるから当てはめているだけで、それ以上の積極的なつくり方がないように思えます。もっとその表現が積極的であって欲しい。

- 1: 作業室
 2: 管理室
 3: エントランス
 4: 休憩室
 5: 吹抜



4



5

Project Q

協力者：Itoh Claude Anne、萩原篤、
二宮茂幸

用途：複合ビル

所在地：熊本県

主体構造：S造

主要仕上材：フロートガラス、アルミ
パネル、アルミサッシュ、スチールパ
ネル

敷地面積：4,250㎡

建築面積：2,280㎡

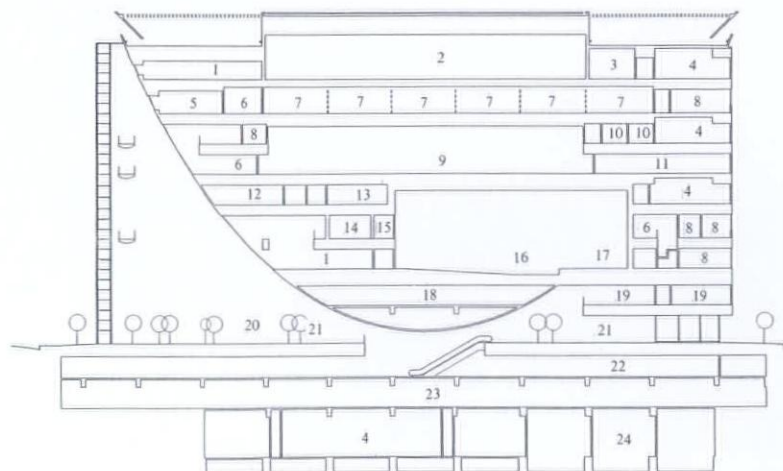
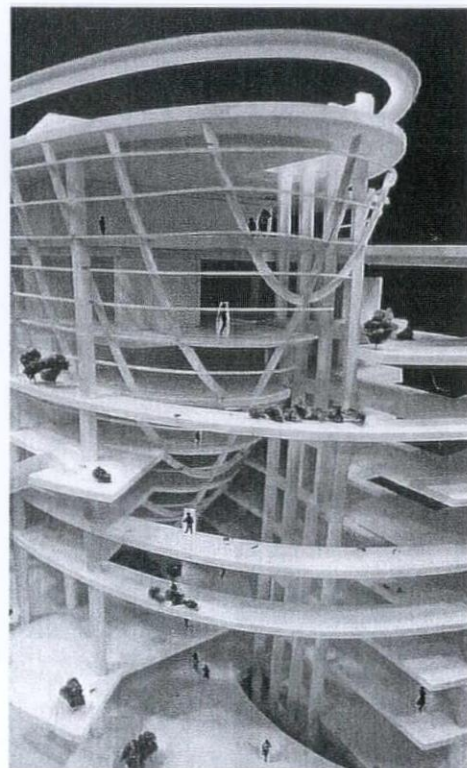
延床面積：28,760㎡

工事予定期間：1996年10月－1999
年1月

Here comes the ship

怪しく光る巨大な宇宙船
知性を持った生命体のように
ゆったりと脈打ちながら都市の上空を
浮遊していく
中に展開するのは知と情の無限回路
—コンサートホール・バンケット・
コンベンション—
ありとあらゆるドラマを乗せて
都市空間を曳航する

宇宙船を包む透明な羊水
命に溢れたこの無重力空間を
上下左右にブラウン運動する人々
ここは静と動の交錯する立体路地
—ロビー・ホワイエ・ギャラリー・
ショールーム—
ありとあらゆる人間が
ドラマを求めて漂っていく



1

- 1: 断面図 S=1:1000
 2: 4階平面図 S=1:1000
 3: 3階平面図
 4: 2階平面図
 5: 1階平面図

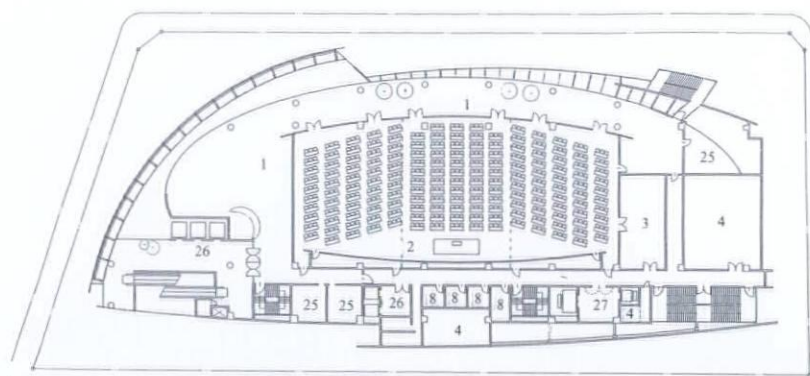
高橋：模型を見るだけでは球体の機能がいまひとつ読みとれなかったのですが、ストラクチュアとしては面白いと思います。

内藤：内部の球体は、映像などの情報伝達の媒体という機能があるように感じましたが……。この球体の内部がひとつの大きな空間だと良かったのですが、いくつかの層に分かれてしまっているのが残念です。

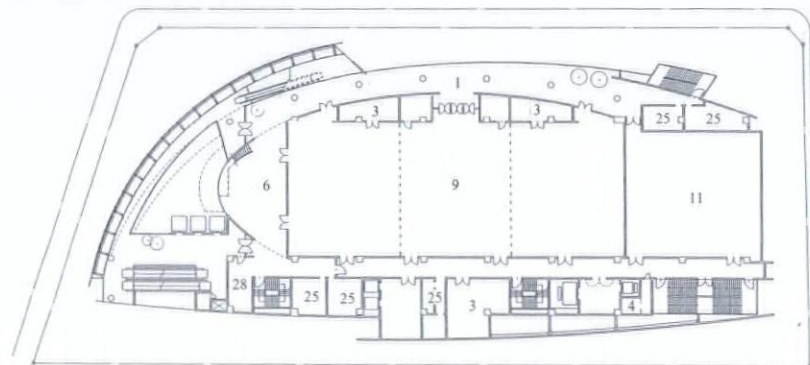
高橋：球体が分割されている内部に入ると球体というのがまるで実感できなくなってしまうのが惜しい。

坂本：内部空間の構成がいくぶん曖昧ですね。プレゼンテーションからはわかりにくいですが。どちらかという形を先に考えてできた空間という印象があります。でも大変頑張っている設計だと思います。

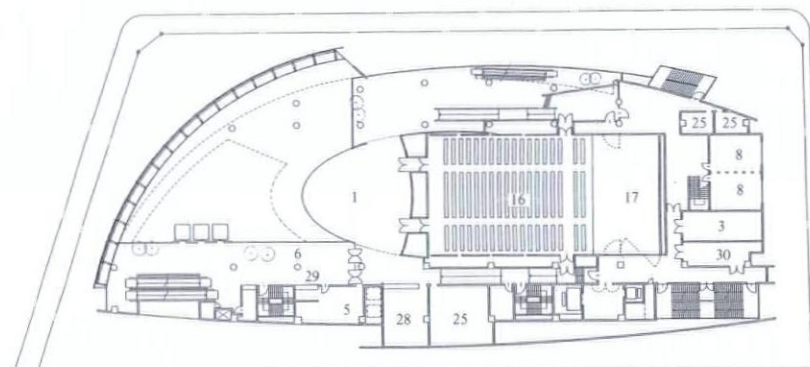
妹島：こういうものを実現するのは、それだけで大変なことだと思いました。でも、その必要があるのかというのが疑問です。



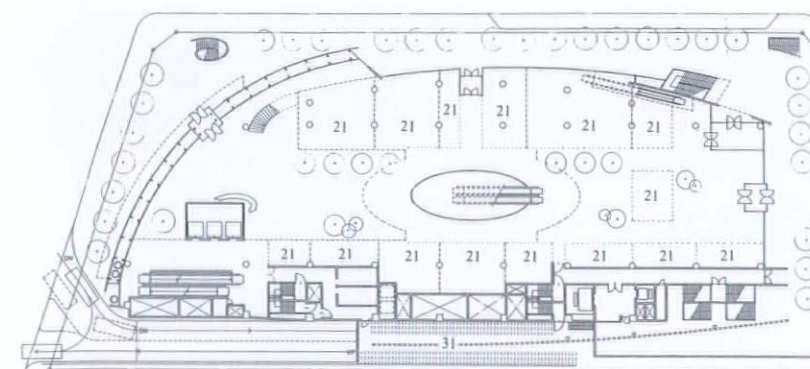
2



3



4



5

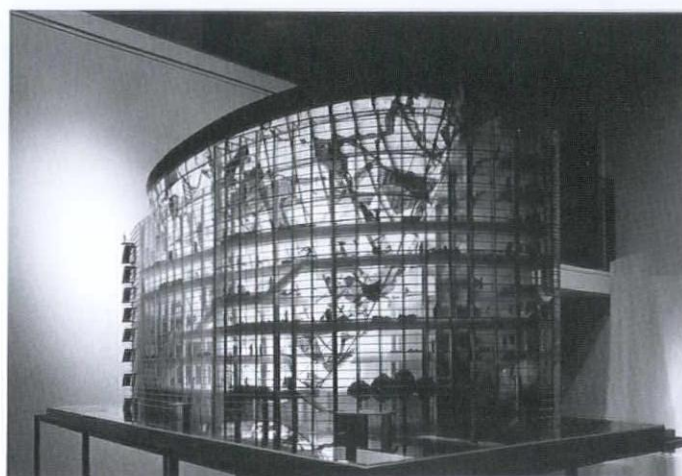
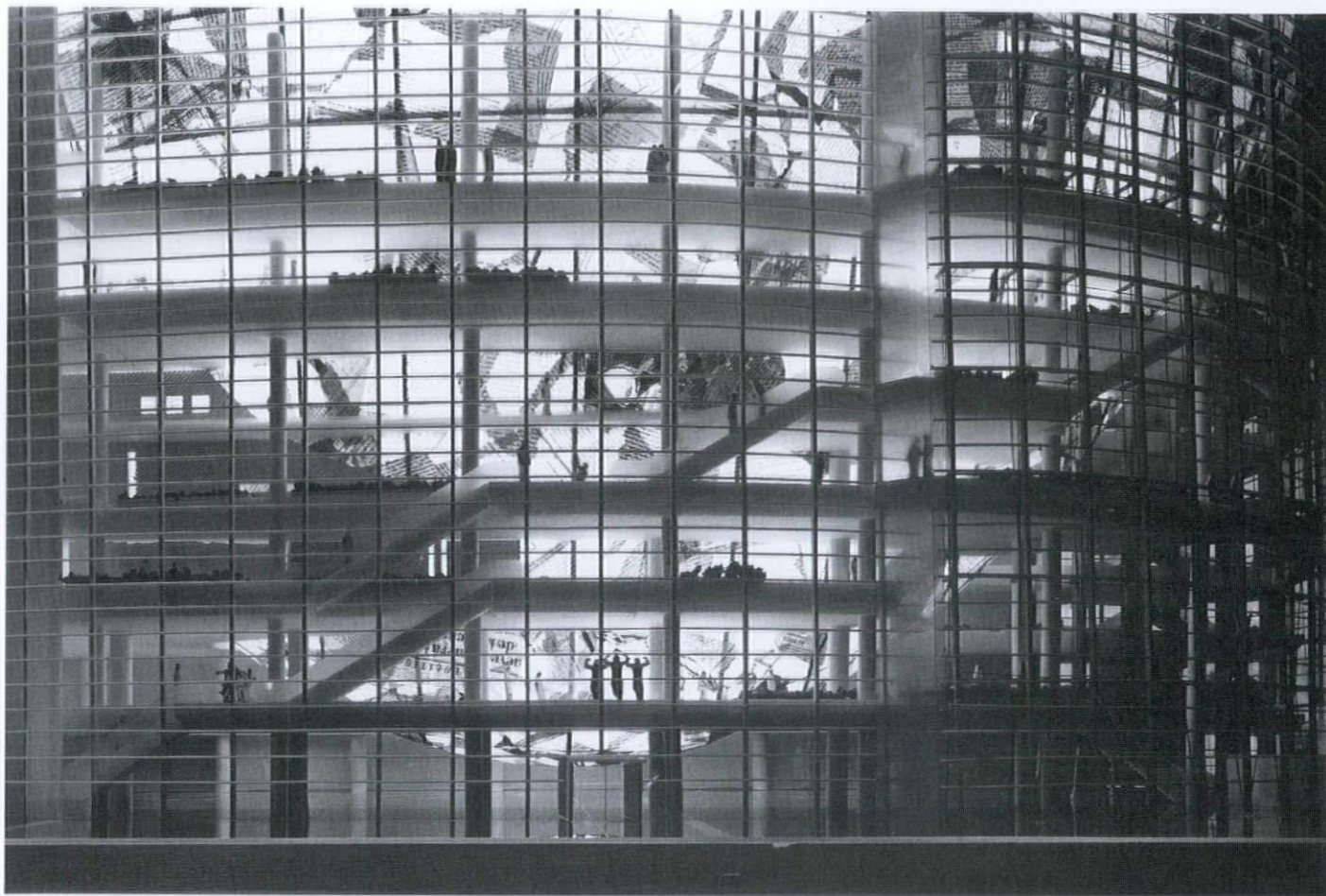
- 1: ホワイエ
 2: コンベンションホール
 3: 倉庫
 4: 機械室
 5: 事務室
 6: ロビー
 7: 小会議室
 8: 控室
 9: バンケットホール
 10: 更衣室
 11: 厨房
 12: 結婚式場
 13: 写場
 14: 練習室
 15: 調整室
 16: コンサートホール
 17: 舞台
 18: ショールーム
 19: 教室
 20: エントランスホール
 21: 店舗
 22: 飲食店舗
 23: 駐車場
 24: 蓄熱槽
 25: トイレ
 26: エレベーターホール
 27: 東降ロビー
 28: クローク
 29: インフォメーション
 30: ピアノ室
 31: 駐輪場

吉田進
 1950年 大阪府生まれ
 1975年 京都大学工学部建築学科卒業
 1975年 大成建設入社
 1979年 全日本パワーリフティング選手権大会
 優勝

松本哲弥
 1962年 東京都生まれ
 1986年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
 1988年 早稲田大学理工学研究科修士課程修了
 1988年 大成建設入社

有馬浩一
 1965年 大阪府生まれ
 1990年 京都工芸繊維大学工学部建築学科
 卒業
 1992年 京都工芸繊維大学工学科学研究科修
 士課程修了
 1992年 大成建設入社

森吉直剛
 1967年 徳島県生まれ
 1991年 京都大学工学部合成化学科卒業
 1993年 京都大学工学部建築学科卒業
 1995年 京都大学工学研究科修士課程修了
 1995年 大成建設入社



SDReviewがスタートして、今回で14回になる。発案者である横文彦は幾つかの若い世代に影響のある発言や仕組みを作った。野武士達の時代として、石山修武、石井和紘、毛綱毅曠、長谷川逸子らを位置付け、その次の世代の発掘ということで、SD Reviewを企画した。横文彦、鈴木尚、元倉真琴、布野修司による審査員によって1982年にスタートしたSDReviewの第1回目には、安藤忠雄、谷口吉生、クリフトファー・アレグザンダー、東孝光らの著名人の応募があり、事務所を始めたばかりの僕達の世代に強力なインパクトを与えた。1982年というバブル期の始まる前の、景気の良くない混沌とした時代であった。ちなみに吉田五十八賞は1980～1983年の4年間に作品賞の該当者無しを3回も出し、建築学会賞も1979～1984年の6年間で該当者無しを2回も出した。きつい時代だった。そして建築も建築家も古い意味でのモダニズムのマンネリズムか、ポストモダンの走りであり、そんな時のSD Reviewの出現はとてもタイムリーであった。

SD Reviewは1982～1986年の横文彦を中心とする第1期の5年、1987～1991年までの原広司を中心とする第2期の5年、そして1992年以降の穂積信夫、高橋航一と続く審査員の回転が少し早くなった第3期に今のところ分けられる。第1期では、横文彦が1985年に述べているように、高松伸、アモルフ、鈴木了二、小宮山昭の活躍が際立っていた。また次の第2期の原広司の期間の橋渡しとして、山本理顕や、その潮流の板井宝一郎、石田敏明、シーラカンスら（いずれも最多出展＝4回）の形態から余白へ向かう流れや、團紀彦のように形式あるくずれた形等があった。僕はこの頃なかなか建築に辿り着けず、独立以来3年間設計していた特別養護老人ホーム（1987年東北建築賞受賞）を1984年に出したが落選して、同年の吉田研介のSD Reviewのコメントの「図面からは分からない、実体から読み出ようなのが評価されない」ということに共感した。1985年になって初めて道のプロジェクトでSD Reviewに入選した時、招待作家として高松伸の機関車のような「ひなや本社第3期工事」が飾られていて、すごいと思ったのを覚えている。翌年1986年には僕の最も好きな作品のひとつであり、1985～1990年

の僕達の事務所の傾向を作り出した「アローエース・ゴルフ・クラブハウス」が落選してがっかりした。1987～1991年までは第2期の原広司の時代になる。第1期からの石田敏明、シーラカンス、妹島和世による軽さや、人の移動等に関する余白の部分にフォーカスを与えるという流れや、渡辺誠のオブジェの一連の作品、小川晋一のシンプル、團紀彦の形式のあるくずれた形、そのほか桂英昭や長島孝一、中村勉らの木造建築、栗生明の作品が印象に残る。僕はこの期間には3つ出している。1988年に「エースプラザ」というクラシシズムやドームの構成のある非常に複雑な建物を出して落選、その傾向の水戸市立西部図書館が1989年に入選した。全体には建築の形象、形態、形式をどう解釈するかに興味があつた。軽さや余白やそして全体として住宅のスケールを好んだこの5年も僕は傍流だった。1990年にコンクリート打ち放しの全体が浮遊する構成の「下馬の地区会館」を出したが、これも落選した。第3期の1992年からの傾向はなかなか読めない。今までのふたつの影響を受けた世代でまだゴツゴツ煮の感じがする。第2期の最後の1991年牛田英作+キャサリン・フィンドレイの作品のあくの強さや、1991、92年の新井清一、1992年のジョージ国広、松岡恭子+王大君、小川晋一ら16作品中、7人のアメリカ留学組のいわゆるアメリカンタイムが記憶に残っている。僕自身は1992年に出した集合住宅を最後に、SD Reviewに出すのをやめた。1991年までの常連だった石田敏明、渡辺誠、妹島和世も出なくなった。1992年がコロンビア大学風のアメリカンドローイング手法とすれば、1993年は建築の内容よりも、馬鹿でかい模型の目立つ年だった。この辺を境に軽い建物、デコン風のもの少しずつ無くなった。また女性の建築家がこの頃より増えてきている。1992年の井坂幸恵、松岡恭子、1994年の加茂紀和子、石黒由紀、細田みぎわ、益田滋子、1995年の手塚由比、中村宏美、岡本美樹らがどう活躍するか興味がある。特に細田みぎわの空間が面白い。第3期は日本の他の建築状況もそうだが、少し元気がない。また第1期の高松伸や、第2期のシーラカンス、妹島和世のような個性の出現はまだ無い。プレゼンテーションも1993年の巨大な

オブジェ的な物から段々シンプルになってきている。また第2期の頃の華やかさがなくなっている。軽い感じの建物もデコンも消えた。鈴木明の言う「擬き」が急激に減少している。元倉真琴が1982年に危惧していたプレゼンテーションにのめり込んで行く危険性、実作との遊離ということに関して、原点帰りしている。特に今年のSD Reviewはつまらないという人も多かったが、数は少ないが今までの傾向とは違う、ある種の芽が育ちつつあると感じた。特に山口賢の別荘は非常に知的で、空間もあるし好感が持てた。彼の案や、手塚貴晴+千塚由比の福島病院、由田徹+岡本美樹のプラスチックハウスに共通する単純な空間、新しい素材等々、今後の新しい建築を作り出すと思えた。これらの建物には完成時にはかなりのディテールワークが必要であり、ジョイントやそれらの部分が美しくないとつまらない物になってしまう。これは1982年の小宮山昭たちが目指したある種の技術をもっと洗練して、日本に育だたなかったプレ近代の技術を使った知的な建築、それは関西空港や東京フォーラム、リチャード・ロジャーズたちの流れでもある。また市原出、中東壽一、長由直之+筏貞司の住宅は、今までの軽い住宅や、透明性の高い住宅、余白に着目した住宅とは一線を画して、極めて閉鎖性の強い住宅である。SD Reviewはその時その時の時代性を映し出す。これらの閉鎖性の強い建物が好きか嫌いかは別にして、バブルがはじけた後のある種の日本を表現しているのかもしれない。14年間の入選256作品のうち、アトリエ、個人は全体の約93%、大組織事務所、建設会社は全体の約7%の実績。それは横文彦が目指した新人の発見や通常ではなかなか世に出られない若い人達を確実に世に送り出している。学会賞や吉田五十八賞、新人賞等に数多くの候補者を出し、インパクトを社会に与えて来たSD Reviewの今後に期待したい。

●あらい・ちあき／建築家

1995. 05 公募開始

SD 5月号にて応募要項を発表し、作品募集開始。

1995. 07. 03 作品受付開始

1995. 07. 07 作品受付締切

応募総数186点は、昨年より約1割減。実作プロジェクトの減少を反映する。

1995. 07. 20 審査

例年と同じく審査会場は、鹿島出版会大会議室。4人の審査員による審査の結果例年より1点多い、16点の作品が入選。

1995. 07. 21— 展覧会出展依頼

各入選者に展覧会出展の依頼をし、出展作品の制作にとりかかってもらう。出展条件は以下の通り。

- ・模型: 1個でも分割されていてもよいが、全体で以下の制限以内とする。
 大きさ (模型台も含めた全長): 幅+奥行+高さ=4m以内
 重さ: 10kg以内
- ・ドローイング: 枚数は自由。ただし、合計の面積がA0用紙と同面積以内、つまり1m²以内

1995. 09. 20 展覧会開催 (—10. 01)

例年、東京展はヒルサイドフォーラムの2フロアで開催されたが、今年は2階の朝倉ギャラリーも加わり、全部で3フロアの展示会場となり、面積は約2倍に増加。

会場: ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
 +朝倉ギャラリー
 東京都渋谷区猿樂町18-8

1995. 09. 22 座談会

展覧会場での作品展覧の後、審査員4人の座談会を行う。座談会では、全出展作品の講評とともに、鹿島、朝倉、SDの3賞選出を行う。3賞入賞者は以下の通り。

鹿島賞: 由田徹+岡本美樹 [プラスチックハウス]
 朝倉賞: 季鐵男/CHI'S WORKSHOP [Z邸]
 SD賞: トム・ヘネガン+安藤和浩+梶直樹
 /アーキテクチャー・ファクトリー
 [灰塚ダム湖畔の森: 三良板町キャンビン]

1995. 09. 22 展覧会オープニング・パーティ

座談会の後、審査員、出展者を交えてのパーティを行う。出展者以外の参加も多数。

SDレビュー1995

第14回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

〔審査員〕

高橋純一 (建築家)
 坂本一成 (建築家、東京工業大学教授)
 内藤廣 (建築家)
 妹島和世 (建築家)

〔後援〕

朝倉不動産株式会社

〔協賛〕

ノール・インターナショナルジャパン

〔展覧会場構成〕

元倉真琴+スタジオ建築計画

〔主催〕

株式会社鹿島出版会SD編集部

〔作品写真撮影〕

堀内広治
 泉 弘子
 松本 崇
 (新写真工房)



審査会



展覧会オープニングパーティー



座談会



展覧会場

WONDERLAND EXPRESS INTERCITY KYUSHU SONIC 883



九州でしか乗れない

ソニックにちりん

ソニック883は「不思議の国」から来た列車、たのしい驚きが詰まっています。乗降口はおしゃれな広場、なかほどには公園のようなオープンスペース
かわいい動物がずらっと並んだような客室、ポップな色彩…大人も子供も文句なくたのしめるワンダーランドエクスプレスです。ソニック883は九州初
の振り子式特急。制御付振り子システムの採用によってカーブ通過速度が大幅にアップし、乗り心地もぐんとよくなりました。

博多—大分 2時間9分



Train designed by Eiji Mitooka

九州旅客鉄道株式会社





戸村 浩

MOVE FORM——不安定構造論

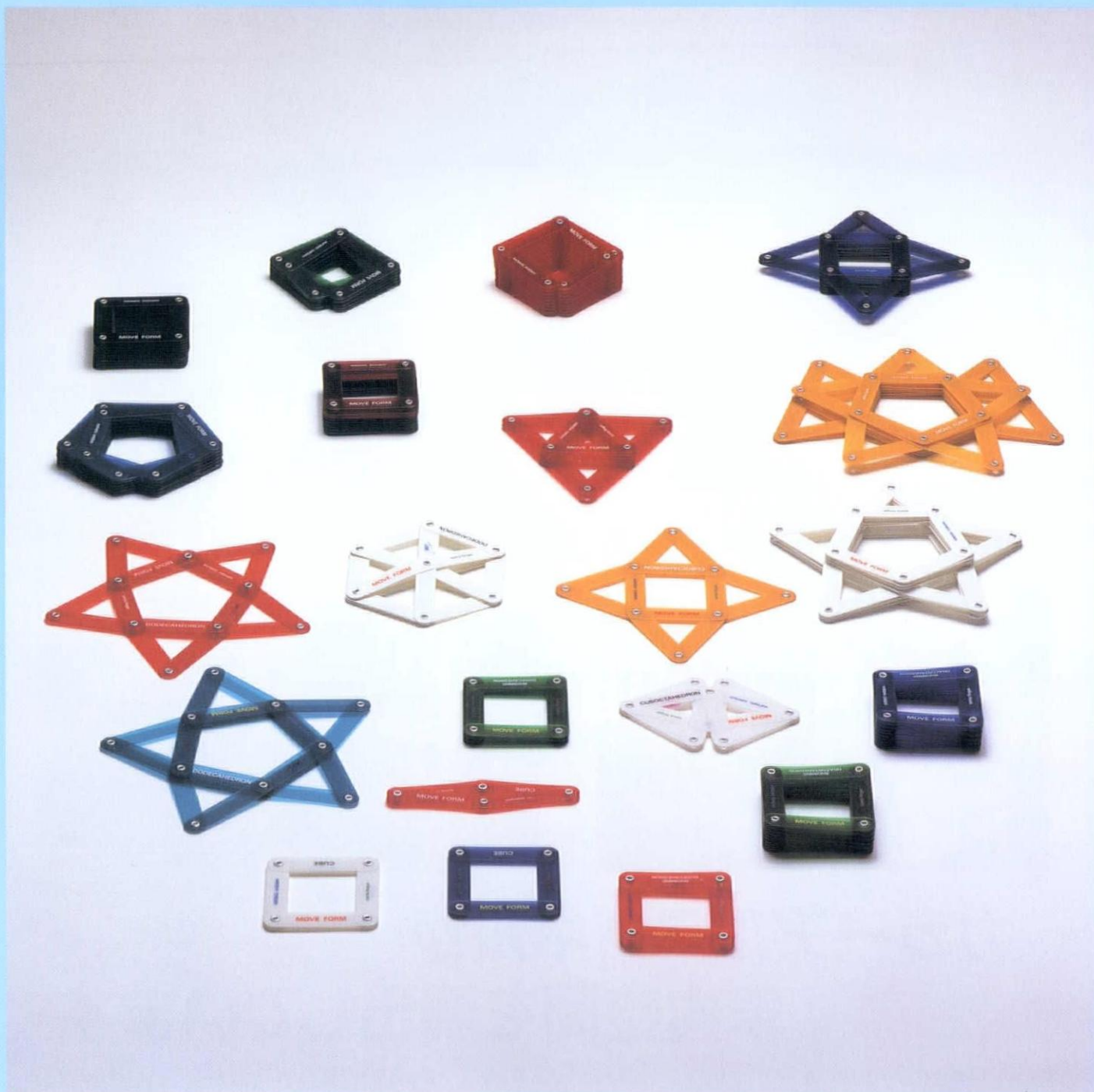


このおもちゃ箱をひっくり返したかのような賑わいは、92面体や122面体の動一ムと同じ、トポロジカルな MOVE FORM の作品群である。これらは、そのほんの一部だが、色とりどりのこのムーブ・フォルムは、私の創作活動の主軸をなす「不安定構造論」という考えのもとに考案されたものだ。まるで、定まった形がないかのように、揺らぎ、縮み、反転し、振れて、気ままに戯れた後、それぞれ、右の正方形や星形のかわいい形へと折りたたまれた。そして、シルバー・グリーンの、小さなトランクに収められ、あちらこちらへと旅をする。

“最小の力で最大の効果”をモットーとするフラー・ドーム。その完璧に張り詰めた球形の皮膜は、設定された半径のみに限定された空間の表皮である。そのジオデシック・ドームを代表とするフラーのダイマキシオンの世界は、経済的で安定した空間を作り出すために、主に正4面体、正8面体、正20面体などの、力学的に強いデルタ多面体をベースとしている。それに反して、不安定構造論のムーブ・フォルムは、その安定した構造と相対的な関係にある多面体、立方体や、菱形12面体、菱形30面体などのパラレル多面体と、正12面体、切頂正20面体で

NAME:

RAINBOW ARCH RED RAINBOW ARCH GREEN FUNGUS
SILVER TOWER RAINBOW TOWER MOVEMAN
RAINBOW ARCH BLUE TRUNCATED CUBOCTAHEDRON
REGULAR DODECAHEDRON TRUNCATED ICOSAHEDRON
CUBOCTAHEDRON RHOMBIC TRIACONTAHEDRON
CUBE RHOMBIC DODECAHEDRON



撮影/田中昇

ある32面体のような、稜線のための骨組みでは、大変不安定な構造体を主体としている。

このように、不安定構造論とは、ダイマキシオンが最初から力学的に安定した構造を求めるのに対し、まず自由自在に形を変えることの出来る、不安定な構造を基本的に設定し、時には、目的に応じて、最小の力を加え、安定した構造に作り上げようとする動的構造理論である。

大地には静寂、時の流れに平安、事物に不変を、願い求め続けて来た人類の長い歩みは、今や、外空間へ向けて、より多様でダイナミッ

クに流動する動的の世界へと踏みだそうとしている。

これらのムーブ・フォルムは、その宇宙空間を目指して思考する構造体であり、これからの多次元の無窮空間を闊歩するための、オーガニックな乗り物でもある。

かつて、このムーブ・フォルムを空間の腸ネンテンと呼んだ美術評論家の東野芳明氏は、アメリカの友人が付けてくれた MOVE FORM という名を、逆に動形（ウゴケー）と翻訳してくれた。

●とむら・ひろし/造形美術家



特急ソニックにちりん (SONIC883) 博多ー大分



特急つばめ

カラーアルミパネルが 車内空間を演出しています

●アルミ内装カラーパネル●カウンターテーブル●スクリーン●ドアハンドル●各種フック●手摺●照明器具(スタンド・スポットライト)●卓上用灰皿

TOYO Proposal
Ohshima

東洋シャッター株式会社 オーシマ事業本部

東京営業部 〒106 東京都港区六本木6-3-18 第一地所麻布ビル
Phone.03-3470-7011 Fax.03-3470-7029

大阪営業部 〒530 大阪市北区与力町7-12 グランドメゾン与力町1F
Phone.06-353-4626 Fax.06-353-9651

Villa Romana

ローマのヴィッラと庭園



イタリア式とも呼ばれる幾何学庭園術は、
噴水・オペリスクなどのランドマークと
モニュメンタルな街路とのネットワークに代表される
近代都市計画の多くの手法の原型ともなり、
わが国の伝統的な庭園術の対極にあるかのように考えられているが、
自然と人間との「高貴な関係」と言い得る底通する本質も見出される。
西欧の庭園は自然・歴史観、神話性などを主題とし、
特にローマにおいては「場所性」に基づきながら、建築の外部に、
視覚的かつ領域的に、自然と人間とを繋ぐ空間を構築していった。



ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ（現在、市立公園および国立彫刻ギャラリー）



ヴィッラ・アルバーニ（現在、トルローニャ財団所有）

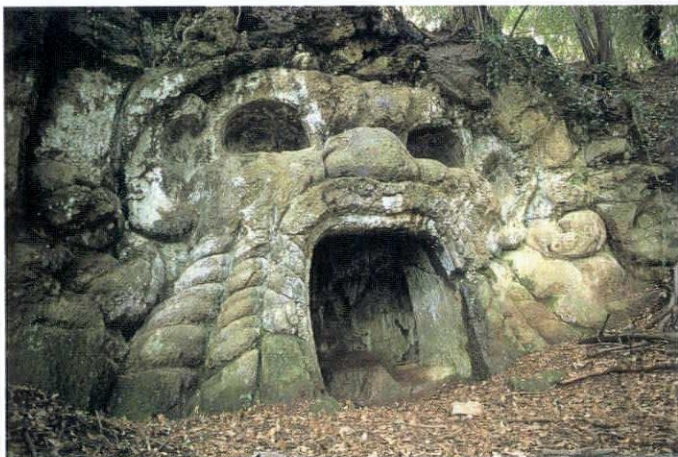
SD9512



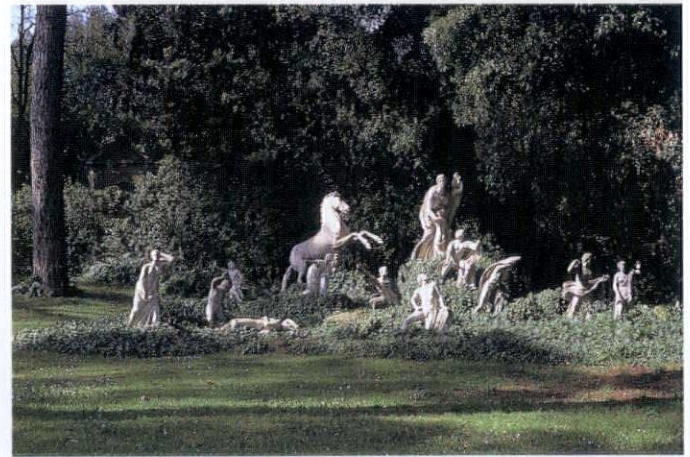
ヴィッラ・ファルコニエリ



ヴィッラ・アドリアーナ



ヴィッラ・アルブランディーニ



ヴィッラ・メディチ



ヴィッラ・メディチ



ヴィッラ・ファルネジーナ (ヴィッラ・キージ 現在、リンチェオ・アカデミー)

SD9512

庭園都市ローマ

かつて古代ローマ帝国の首都であった歴史都市ローマは、中世以降、キリスト教カトリックの中心都市、すなわちヴァチカンの都として繁栄し、19世紀後半に近代国家イタリアが統一した後に、その首都になった。そして、20世紀初頭に大規模に行われた古代遺跡の考古学発掘、さらにはその後の大都市化、戦後の観光都市化とによって、今日の「永遠の都」という都市のイメージが形成された。今日のローマには、2千年余りの時間の流れの中でこの都市に堆積した、さまざまな時代の痕跡や断片が幾重にも重なり合い、重層しているが、今世紀の近代考古学発掘によって「保存・修復」された古代都市遺跡、ルネサンス・バロック以降の教会・修道院群の都市規模でのネットワークとならぶ歴史都市の特質として、さまざまな歴史的ヴィッラと庭園を見いだすことができる。

これらのヴィッラは既に断片化して、現代都市ローマに点在している。すなわち、エトリリア博物館に転用されたヴィッラ・ジュリア (P.76)、リンチェオ・アカデミー本部に転用されたラ・ファルネジーナ (ヴィッラ・キージ、P.72)、フランス・アカデミーに転用されたヴィッラ・メディチ (P.77)、外務省迎賓館に転用されたヴィッラ・マダーマ (P.72)、フィンランド・ローマ研究所に転用されたG・ロマーノ設計のジャンニコロのヴィッラ・ランテ (図1)、公共公園に転用されたヴィッラ・ボルゲーゼ、ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ (P.79)、ヴィッラ・アーダ、等は、現代ローマの都市施設に転用されたヴィッラと庭園である。また、ヴィッラ・アルバーニ (P.80)、フラスカーティのヴィッラ・アルドブランデ

ーニ (P.78) のように、今日なお個人所有のままあまり改変されることなく、ヴィッラとして現存するものも幾つかある。しかし一方で、フォロ・ロマーノおよびパラティーノの丘の考古学発掘によって失われたヴィニョーラ設計のリ・オルティ・ファルネジアーニをはじめとする幾つかのヴィッラ群、マクセンティウスのバジリカの遺構を利用して建設されたヴィッラ・シルヴェストリ、ディオクレティアヌス帝浴場遺跡に建設されたリ・オルティ・ベッライアーニ、ヴィッラ・モンタルト (図2)、ピエトロ・ダ・コルトーナ設計のヴィッラ・サッケッティなど、少なくとも59のヴィッラと庭園が、後世のさまざまな都市開発のために取り壊され、失われた。

今世紀の大都市化へ至る以前の時代へと遡るならば、およそ1、2世紀前までのローマには、主に支配階層やヴァチカンの聖職者、等の裕福な人々の「ヴィッラ (庭園付別荘)」が都市内外に多数存在し、ローマの都市空間の重要な特質になっていた。1870年に至るまでに、アウレリウスの都市城壁の内部地域の約5分の3にあたる面積が、こうしたヴィッラによって占められていたことから、かつてローマはヴィッラの都市、言い替えば「庭園都市」だったとすることができる。

ローマにとってヴィッラは、豪華で独特な建築、驚くべき庭園、優れた「考古学」的収集品やフレスコ画・彫刻などの美術品を収蔵する博物館・美術館といった以上の意味があった。ルネサンス以降、15～18世紀に行なわれた新たな都市開発では、さまざまな軸線を設定した都市街路の新設、古代・中世期の都市建築群を基礎にした街区の新設が行われたが、それと同時に、ヴィッラ建設に伴う街路

の新設や「ヴィッラ地域」 (図3) を形成することも多かった。数多く建設されたヴィッラはしばしば互いに隣接していたが、道や付属施設群、ヴィッラ周辺に生まれた小集落によって分節・配列され、それらを相互に繋ぐ街路網とともに、「都市」を形成していったのである。

ヴィッラ

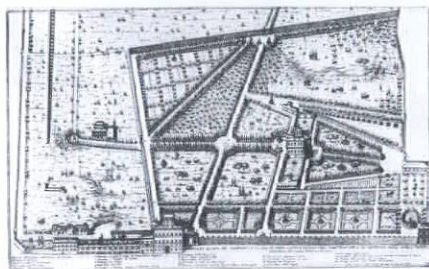
ヴィッラ (villa) という呼称は、通常、生産を目的とした農地とも関係するが、主に春から秋にかけて滞在するための支配階層の別荘を意味している。それらは中心的な住宅建築 (主建築) と、それに隣接する最も労力をかけた庭園、その周囲に広がるより自然の状態に近い庭園・菜園・果樹園、そしてそれらの中に配置した付属建築物などから形成されていた。もちろん小規模の住宅建築と庭園だけの場合もあった。

こうしたヴィッラは、14世紀頃からイタリア各地において、主として狩場としてつくられはじめた。初原的な段階において、建築も庭園も未発達な、ささやかなヴィッラをヴィーニャ (vigna) ともいい、特に庭園に注目する呼称としてはオルティ (orti/orto、農園の意) ともいう。トスカーナ地方においては、ヴィッラは小高い丘陵の葡萄畑やオリーブ畑に囲まれ、ラツィオ地方においては、オリオーロ・ロマーノ、カブラローラ (P.75) にみられるように、所有者の居住目的だけでなく、周辺地域の開拓事業・農本社会の拠点となる支配階層の複合施設として建設されていた。

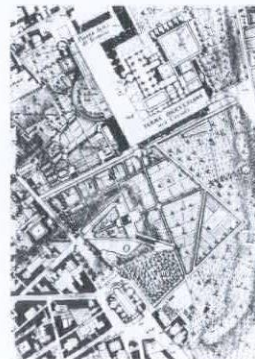
ローマの北80kmほどに位置するヴィテルボは、中世以来の法王庁の衛星都市だが、ルネサンス期の有力者達はこの周辺に、ブラッチ



1: ヴィッラ・ランテ



2: シスト5世のヴィッラ・モンタルト (現存せず) ファルダの版画



3: リ・オルティ・ベッライアーニとヴィッラモンタルト (共に現存せず) ノッリの地図1748年

ヤーノ湖岸のオルシーニ家の城塞にある「ヴィーニャ・グランデ」、ヴィコ湖岸のファルネーゼ家の狩猟ロッジ（ヴィニョーラ作）等、狩場などに利用する簡素な施設を建設した。16世紀後半には、パニャイア（P.74）、カブラローラ、ボマルツォ（P.75）などの山岳都市に、ヴァチカンの有力者達の壮大なヴィッラと庭園が相ついで出現した。パニャイアは、ヴィテルボの東方約4kmの小山岳都市であり、両者の中間には、歴代の法王パオロ2世、パオロ3世、シスト4世、ユリウス2世らが15世紀中頃から約百年かけて建設した法王庁の拠点、ドメニコ修道会のサンタ・マリア・デッラ・クエルチャ教会があった。1580年頃にグレゴリオ13世（在位1572-85年、グレゴリウス暦の制定者）がこの教会を訪問するには、ティヴォリのヴィッラ・デステ（P.71）とともに、カブラローラのファルネーゼ家、パニャイアのガンバラ家、ボマルツォのオルシーニ家の3大ヴィッラを法王の一行が順訪する行事が行われ、それぞれのヴィッラでは歓迎のための追加整備が行われた。

このように16～17世紀にはいと、広大なヴィッラは、財力や豪華さを誇示する特質を示しはじめようになった。主建築だけでなく、手のこんだ庭園や、ロτζァ、ニンフェオ、付属建築物、主建築物内部から外部の庭園へと繋がる噴水や彫刻を駆使したスペクタクル装置、といった古典主義的な意匠や趣向が付加されていった。

ルネサンス、バロック期の古典主義的な庭園の原型は、ブラマンテによるヴァチカンのベルヴェデーレ（図4）のテラス（段丘）式庭園だと言っていいだろう。主軸線上の最終部分に配置された巨大なニッチへと延びる庭

園を「ブリッジ」によって段丘状に3つに分節した手法は、古典建築に通じるとともに、独特な建築形式であった。ラファエッロは、ヴィッラ・マダーマ（P.72）において、こうしたブラマンテの庭園分節手法やそれらに付加する凹状空間手法を発展させ、円形劇場、エゼードラ、樽状のニンフェオ、といった古典建築言語をさらに展開しながら、各部分の関係を均衡させ、建築と庭園とをひとつの壮大な様式に統合した。

ルネサンス以降のローマのヴィッラは、ブラマンテのベルヴェデーレ、ラファエッロのヴィッラ・マダーマが確立した古典主義を、普遍的な方法として展開していった。それらの最高例のひとつが、ヴィッラ・ジュリアである。その構成は、軸線に沿って主建築に続くふたつの中庭、列柱が分節するポルティコと障壁、大理石・スタッコ・金細工・フレスコ画・床モザイクを駆使した装飾、といったルネサンス・ローマの古典主義建築の特質を、高密度に展開するものであった。

ローマとその周辺地域においてとりわけ重要な特質は、古代ローマの建築遺構がある場所がヴィッラの建設場所の重要な動機になるとともに、古代遺構自体を庭園に取り込みながら、壮大さや豪華さを醸し出していったことである。主建築物を設計する建築家は庭園もデザインすることが多くなり、透視図法の空間構成とともに、ヴィッラの敷地全域には、主建築や付属施設或いは噴水を、ひとつひとつの「到達点」として相互に繋ぎ、庭園を幾つかの部分に分節する回遊経路や遊歩道を整備した。庭園の植栽には、幾何学的に刈り込んだ低い生け垣や花壇、貴重な植物や花などの収集・栽培といった特質があり、その他に

も、果実・薬用等の植物園（柑橘類、ザクロ、銘葡萄、薬草、野菜、等）、灌木林の庭園、狩猟用或いは地球規模の交通がもたらした世界各地からの貴重な動物を放飼する原林なども含まれた。これらの歴史的なヴィッラは、古代建築遺構と新しい建築物、古代彫刻と新しい彫刻、庭園や果樹園とともに、フレスコ画、スタッコ・レリーフ、噴水、モザイク装飾、ルスティコ、といったさまざまな要素を神話的、文学的な文脈と重ねあわせて統合した、非常に総合的な文化環境だったといえることができる。

ルネサンス、バロック期のヴィッラと「古典古代」

ルネサンス、バロック以降に建設されたローマのヴィッラが、「古典古代」と分かち難い関係をもっていたことは、ローマの都市形成、ルネサンス以降の古典主義建築文化など、さまざまな点で特筆に値するが、そのことは、基本的に次に述べる4つの特質に集約される。すなわち、ヴィッラが歴史的意味が濃密な古代遺構の上に、或いはそれらを取込みながら構築されたこと。ヴィッラが、古代ローマの建築遺構やそれらの研究成果から引き出された、さまざまな要素を新たに意図的に採用することによって、「古代」を喚起し続けようとしたこと。ヴィッラの建築物のファサードが古代の彫像やレリーフを収集し、陳列するためにデザインされていったこと。そしてなによりも、ヴィッラが、その内部空間だけでなく、屋外の庭園部分においても、彫像や彫刻作品、碑文、など考古学収集品を所蔵する多様なミュージアム（博物館）であったこと。

ブファリーニ（1551）、カルターロ（1576）、

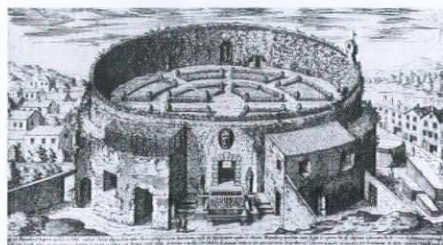


4：バチカンのベルヴェデーレ

SD9512
66



5：ヴィッラ・メディチとヴィッラ・ルドヴィジ ファルダの版
画1670年



6：アウグストゥス豊廟内のソディアラーニの庭園 E-Du Pérac
の版画1575年

デュ・ペラック（1577）らが描いたルネサンス期のローマの都市図を観れば、16世紀のヴィッラと庭園は、古代遺構と植栽とを高い水準で環境化していたことがわかる。特に都市城壁内のヴィッラは、パラッツィーナ・ジェンティーリのように、都市城壁を構造支持体を利用したり、ピンチオ（図5）のヴィッラ・メディチやボルタ・ピンチアーナのヴィッラ・ルドヴィシのように庭園外周の輪郭に利用したりした。ヴィッラ・メディチではベルヴェデーレ（展望台）のバヴィリオンも古代都市城壁を利用して建設された。

庭園内部でも、水道橋、神殿、墳墓等の遺構が取り込まれていた。ヴィッラ・シルヴェストリでは、マクセンティウスのバジリカが部分的に埋設され、そのアーチ構造体のひとつがクローチフィッソの舞台背景として再利用された。ラテラーノのヴィッラ・ジュステニアニでは、クラウディオ帝の水道橋が巨大な遺構として、庭園の境界に利用された。クイリナーレ広場のヴィッラ・コロンナでは「太陽神殿」の断片的な遺構が、また、ピンチオのヴィッラ・メディチでは「フォルトゥーナ神殿」の遺構が庭園に取り込まれた。このような造園術は、豊富な古代遺構が集積したローマにおいてのみ可能だった。逆に言えば、驚異的な庭園を築くための場所として、まさしく歴史遺構が堆積する都市ローマが望まれ、それらの場所へとルネサンスの人文主義者や詩人達が集まってきたのである。

16世紀初頭、カンピドリオの丘にはヨハン・ゴリッツの庭園があり、レモンの果樹園と古代の彫像、碑文などが調和するように構成されて、庭園に集う文学者達は、詠んだ詩を樹木に吊り下げようになった。また、アウ

グストゥス帝の霊廟（図6）の場合は、1575年のデュ・ペラックの版画からも明らかだが、遅くとも33年頃にはソデリーニ家の所有になって、内部が求心的に花壇を配置した庭園に整備されていた。

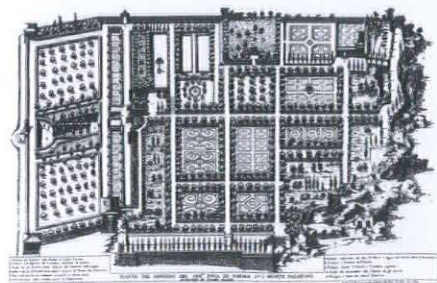
ローマの「7つの丘」に数えられる、パラティーノの丘とチェリオの丘（図7）には、古代ローマ都市遺跡とルネサンスのヴィッラとが一体になって、独特な庭園が形成されていた。チェリオの丘の頂上にはヴィッラ・マッティがつくられ、チルコ・マッシモに面してはヴィーニャ・クルテッリが、コンスタンティヌス帝の凱旋門に向かってはヴィーニャ・イングラミ、ヴィーニャ・ヴェヌーティ、ヴィーニャ・カブラニカが築かれた。丘の斜面の裾野には、ヴィッラ・ガッティ、ヴィッラ・リッビが築かれた。パラティーノの丘の北斜面には、世界最古の植物園ともいわれるリ・オルティ・ファルネジアニ（図8）がそびえた。このヴィニョラの作品は現存しないが、古代遺構とルネサンス建築とが驚異的な統一感を醸し出していた。スロープ、ポルティコ、階段、テラス、といったヴィッラの各部分は、ティベリウス帝の古代宮殿の遺構の一部を利用して建設された。エントランスの巨大な門は現在はサン・グレゴリオ通りに移築されてしまったが、この門の上にそびえたベルヴェデーレ（展望台）からは、ティトゥス帝の凱旋門やコロッセウムから、数々のフォーロ（古代都市広場）遺構、カンピドリオの丘までが一望のもとに見渡せ、劇的な眺望を楽しむことができた。このようにして古代遺構は、ルネサンスのヴィッラの一部に組み込まれていったのだが、17世紀以降の建築家達は、それ以前と同様に古代都市・庭園

の遺構を新しいローマのヴィッラと庭園の一部に組み込んで再整備していく一方で、庭園に「偽りの廃墟」を付加するという新古典主義的な手法もあみだしていった。

デュ・ペラックのローマ地図（1577年）には、現存しないリ・オルティ・ベッライアーニ（図9）、すなわちジャン・ドゥ・ペライ枢機卿のヴィッラが最も完璧な状態で描かれている。16世紀半ばに建設されたこのヴィッラは、約360mにおよぶディオクレティアヌス帝の浴場の一辺、すなわち現在の共和国広場に当たる浴場のエゼードラ遺構と、その両端のふたつの矩形建築物と円形ホール（円形ホールのひとつは1593年以降、サン・ベルナルド教会に転用された）のほぼ全体を取り込むものだった。デュ・ペラックのローマ地図やデ・ロッシのローマ地図（1623年以降）に描かれたとおり、浴場の遺構の上に新たに建設されたものは、3連アーチ形式のポルティコに3連アーチのロジャと3角形のベディメントを重ねた小パラッツォと、低層の短い両翼部であり、それらがエゼードラ遺構の中央部分に挿入され、ヴィッラが構成された。半円状に迫り出した両翼部の中央に主建築を配置し、両翼部の先端に矩形平面の付属建築を対称に配置するタイポロジーに注目するならば、1541年から57年にローマに滞在し、ヴィッラ・マダーマのスケッチも残しているパッラーディオ（図10）も、この重要なヴィッラを訪問している可能性があり、彼とローマのヴィッラとの関係を示唆している。ピッコ・リゴーリオも精力的に考古学研究を行い、その成果をヴィッラ・デステやヴィッラ・ピア（P.73）に集大成していったが、特にヴィッラ・ピアの、障壁で囲んだ楕円平面の中庭、中庭玄関のた



7：チェリオの丘のヴィッラ・マッティ ファルダの版画1676年



8：リ・オルティ・ファルネジアニとパラティーノの丘 ファルダの版画より



9：ディオクレティアヌス帝浴場のリ・オルティ・ベッライアーニ Du Péraaの版画1577年

めのふたつのエディコラ、壁面に古代彫刻を配置したふたつの住宅といった構成は、同傾向の建築配置の事例と言っていだろう。

ヴィッラと古代彫刻

ヴィッラの主建築ファサードを考古学発掘で得た彫刻やレリーフによって装飾する手法は、考古学的収集に関連して、「古代」に対する関心を示す要素として興味深いものである。1550年直後に建設されたヴィッラ・ジュリアの内壁や中庭の障壁、ニンフェオ前部などは、その著名な事例である。ヴィッラ・ジュリア以降、ヴィッラ・メディチ庭園側ファサード、ヴィッラ・ドリッパ・パンフィーリなど、大理石彫刻を用いてファサードを装飾する手法は一般化し、レリーフは切断されたり、欠損部分を付加したり、或いは長い装飾フリーズをつくるためにサクロファゴを部分的に再利用したりしながら、より自由な意匠に発展していった。

16世紀のヴィッラ・メディチや、ボルタ・デル・ポポロの外にあったヴィッラ・ジュステニアニ、17世紀のヴィッラ・ルドヴィシ（図11）、ボルゲーゼ、ドリッパ・パンフィーリなどでは居住機能は部分的になって、当初から古代彫刻ギャラリーとして建設された部分が多くなり、ヴィッラ・カルペーニャは古代彫刻等の収集品のために建設された。

庭園にも彫像の野外博物館と言い得る特質があった。16世紀半ばのヴィーニャ・カルビ、オルト・デル・ブファロー、エステ家のクイリナーレの庭園（P.73）、ヴィーニャ・グリマーニ、リ・オルティ・ペッライアーニ、リ・オルティ・ファルネジアーニなどが、典型的な庭園博物館だった。ヴィッラ・メディチの

庭園には、数多くの彫像が配置され、現在ウフツィ美術館が所蔵する「ニオベと息子達（ギリシャ神話）」の群像も、遊歩道の終端に設置されていた。オベリスクもまた、庭園の重要なエレメントだった。現在スペイン階段頂上にあるオベリスクは、16世紀初頭にはオルト・デル・ブファローの庭園にあり、18世紀中頃に法王クレメンテ12世がサンジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂前広場に移動したオベリスクは、ヴィッラ・ルドヴィシの失われた庭園に置かれていたものだった。

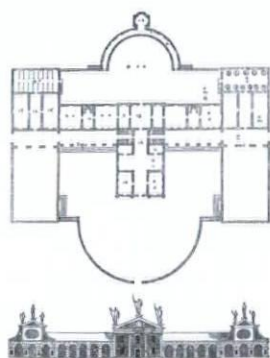
ヴィッラ建設と「古代田園都市」の復興

ルネサンス期に最初に発掘された古代遺構は、既に荒廃して約千年を経ていたヴィッラ・アドリアーナ（P.70）だったといわれる。テーヴェ川の支流、アニエネ川の滝で知られる風光明媚な山岳都市ティヴォリは古代名をティブールといい、古代ローマ共和制末期から既に有力者達の避暑地として、多くの神殿やクインティリオ・ヴァッロなどのヴィッラが建設された。ヴィッラ・アドリアーナの遺構をルネサンス期に最初に発見したのは1450年のF・ピオンであり、61年には、ピエンツァの広場で名高いピッコロミニ家の法王ピオ2世がはじめて遺構を訪れた。引続き15期末には、アレクサンドロ6世が始めて本格的な考古学発掘調査を行い、16世紀中頃には、法王庁の考古学官でもあった建築家ピロ・リゴーリオが、ティヴォリのヴィッラ・デステやヴァチカンのヴィッラ・ピアを研究・収集の拠点として、この遺構の大がかりな調査を行った。

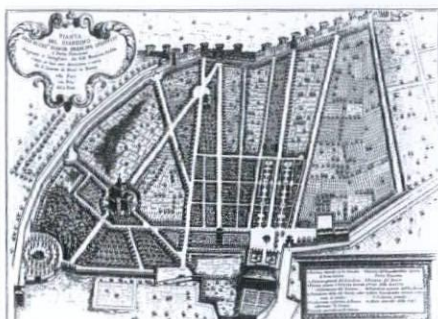
ローマ南東のコッリ・アルバーニー帯も、古代ローマ期に壮大なヴィッラが多数建設さ

れた地域であった。チャンピーノのヴィッラ・モレーナ、アンツィオのヴィッラ・サリシーナをはじめ、ルネサンスの教養人だった枢機卿達が、この地域において、壮大な古代ヴィッラ遺構の場所に新たなヴィッラ建設を数多く行ったことは、ヴィッラ建設と「古代」との関係を示す好例といえるだろう。16世紀以降、プリニウスやキケロの古典文献、ウィトルヴィウスによる浴場や噴水に関する建築書といった書物、そして何よりもローマと周辺地域に豊富に現存した古代ローマ遺構の調査研究を、精力的に行っていたのであった。

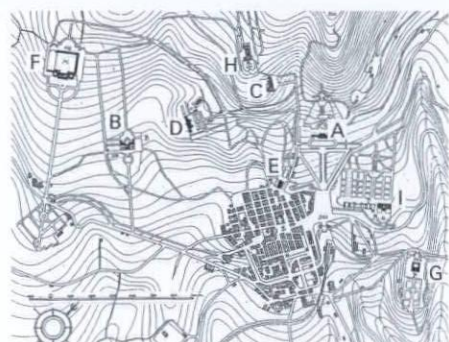
ローマ南東約20kmのフラスカーティ（図12）は、近郊のグロッタフェッラータとともに、古代からトゥスクリム（Tusculum）と呼ばれ、共和制古代ローマ期（BC 2～1世紀）には既に、支配階層にカトーなど当地出身者が数多くいたし、キケロ、ルクルスのようにこの地にヴィッラを営む文化人も多く、ティヴォリ周辺と同様、郊外の田園都市だった。ローマ帝国衰退後、中世以降は概ねコロンナ家の封土であったが、12世紀には荒廃し、中心地域はやがて廃墟になった。15世紀半ばになって、ルネサンスの文人P・ブラッチョリーニが古代トゥスクリム跡からキケロのヴィッラ遺構を発見し、さらに約30年後、法王ピオ2世が古代と田園への憧憬故にこの地を彷徨するにおよんで、トゥスクリムは再び歴史の舞台へ上がっていった。1537年に教会領となった後、この地の司教座から法王になったパオロ3世は、フラスカーティの街路、都市城壁などの再整備に着手し、古代田園都市は復興していった。中世の集落も古代都市の遺構上に築かれていたが、古代田園都市の復興は、中世共同体から、多数のヴィッラ建設を特質とする



10: ヴィッラ・バルバーロ計画案 バッラーディオ「建築四書」



11: ヴィッラ・ルドヴィシ ファルダの版画



12: フラスカーティとヴィッラ群 グロモール1931年

ルネサンス政治都市への変貌を意味していた。初期のトゥスクルム復興の機運は、ペトラルカが提唱した「自然の中の静かな洗練された個人的田園生活」を希求するルネサンス文化を示し、16世紀半ばにルフィーニ司教が整備したヴィッラ・ラ・ルフィーナ（図13）（後にヴィッラ・ファルコニエリ（P.78）として、ボッロミーニが大改修した）が、その特質を実現していた。しかし、続く四半世紀のうちに、トゥスクルムの地誌的風景に喚起された「古代への瞑想」は形骸化し、「古代神話の寓意」を媒介にしながら、公式行事化した法王一行の行列といった「喧噪や諧謔」への変質も生んだ。「ヴィッラの生活」は、一方で静かな「古代への瞑想」を賛美し続けたが、同時にヴィッラの装飾や装置意匠が直接示す「古代神話の寓意」を約束事にした「驚きの表現」も求めていったのである。

17世紀以降のヴィッラと庭園

古典主義のヴィッラの系譜は、16世紀の巨匠達の作品をさらに展開する形で17、18世紀へと継承され、ヴィッラ・サッケッティ（図14）、ヴィッラ・ボルゲーゼ、ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ、ヴィッラ・アルバーニ（P.80）といったヴィッラと庭園が生まれていった。

ピエトロ・ダ・コルトーナ設計のヴィッラ・サッケッティは現存しないが、円弧状に迫り出した両翼部とともに、主建築前方のテラスを曲線と直線とを組み合わせた古典主義の意匠で統合していた。それは、古代ローマ建築術を超えて、ブラマンテやリッポリが達成した空間のリズムを喚起するものである。また、ダ・コルトーナは、リッポリ、ヴィニョーラから、古代彫刻や古代レリーフを壁面のニ

ッチへ収納する意匠も継承した。

ヴィッラ・ドリア・パンフィーリでは、ボローニャ出身の建築家、アルガルディとグリマルディとが、中央に円形平面のホールとクーポラ（クーポラは計画案のみ）を配置した、2階建てのパッラーディアン・スタイルの主建築を手掛け、その内外壁面を大理石の古代彫刻や美しいスタッコ装飾で飾った。

新古典主義の姿勢でもっとも考古学的特質を押し進めたヴィッラのひとつとして、アルバーニ枢機卿の収容品を収容するためにマルキオンニが設計したヴィッラ・アルバーニがある。そしてローマにおける「古典的ヴィッラの系譜」を継承し、建築の理想としての古代を追究した最後の事例は、ノメンターナ街道沿いにあるドン・アレクサンドロ・トルローニャのヴィッラ（図15）であろう。イオニア式神殿モチーフのファサードやドリス式ポルティコが特徴的な主建築（ヴァラディエール設計）、偽りの廃墟、オベリスクや装飾柱、敷地内の古代ローマ遺跡、多くの古代彫像、今世紀初頭の街道の拡張で失われた野外円形劇場など、16～17世紀以来の古典主義的な「ローマのヴィッラ」の最後の事例として、壮大な庭園が整備された。トルローニャ家はやがて、この伝統的な精神に基づいてヴィッラ・アルバーニも所有し、今日に至っている。ノメンターナ街道沿いのヴィッラ・トルローニャは、1925年から43年まで同家の客人としてムッソリーニが滞在したが、敗戦後、約30年間に荒廃した。77年にローマ市の所有となり、現在、建築物は保存・利用計画がなく、荒廃したままだが、庭園は植生の豊かな市立公園として公開されている。

ルネサンス以降のヴィッラと庭園の特質だ

った幾何学庭園術は、「イタリア式」ともいわれ、西欧に広く普及したが、逆に18世紀末から流行した「英国式自然主義庭園術」は、ヴィッラ・ボルゲーゼ、ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ、クイリナーレの庭園など、ローマの幾何学庭園にも取り入れられ、過半部分を「英国式」に再整備した庭園も少なくなかった。ローマのヴィッラと庭園は、こうした「北ヨーロッパ文化」の影響、或いは近代の都市開発など、後の時代に少なからず断片化され、また改変を受けた。しかし、地勢や水系或いは動植物といった固有の自然と古代ローマ都市建築の直接間接の遺産とを統合した、ルネサンスの人文主義と考古学が求め続けた「楽園」としての数々の存在は、既に失われてしまった多くのヴィッラの記憶とともに、今日なお、この都市の重要な特質であるといえるだろう。

●はせがわ・まさのぶ／建築家

参考文献

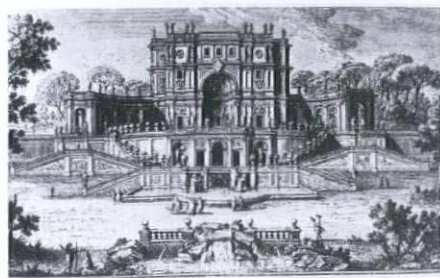
- I.B.Barsali, "Ville di Roma", 1970, 1983, Milano
- I.Insolera, "Roma, le città bella storia d'Italia" 1980, Roma-Bari
- I.B.Barsali, "Ville della Campagna Romana", 1975, 1981, Milano
- I.B.Barsali, "Conoscere le Ville di Roma e del Lazio", 1982, Roma
- D.R.Coffin, "The Villa in the Life of Renaissance Rome", 1979, Princeton
- C.N.Schulz, "Architettura Occidentale", 1979, Milano
- Guida d'Italia del T.C.I., "Roma e dintorni", 1977, Milano
- John B. Ward-Perkins, "Architettura Romana", 1974, Milano

図12の解説

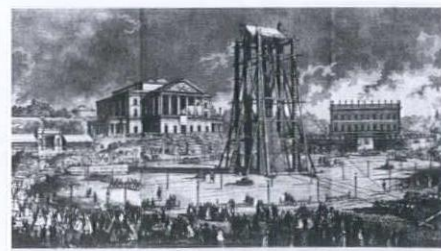
- A: ヴィッラ・アルドブランディニ
- B: ヴィッラ・ボルゲーゼ
- C: カプチン・修道院
- D: ヴィッラ・ファルコニエリ
- E: ヴィッラ・ランチェロットティ
- F: ヴィッラ・モンドラゴネ
- G: ヴィッラ・パッラヴィチーニ
- H: ヴィッラ・ルフィネッラ
- I: ヴィッラ・トルローニャ



13: ヴィッラ・ラ・ルフィーナ グロイターの版画1620年



14: ヴィッラ・サッケッティ（現存せず）ヴァージの版画



15: ヴィッラ・トルローニャ ガスパーロの版画1842年

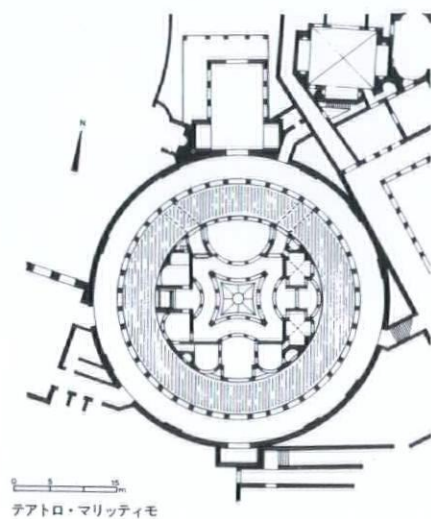
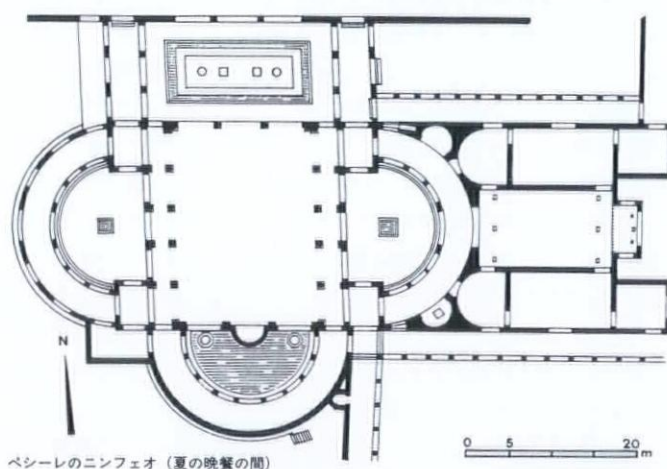
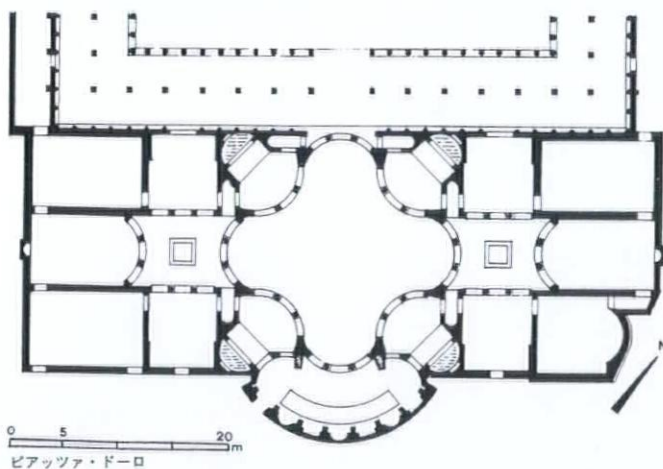
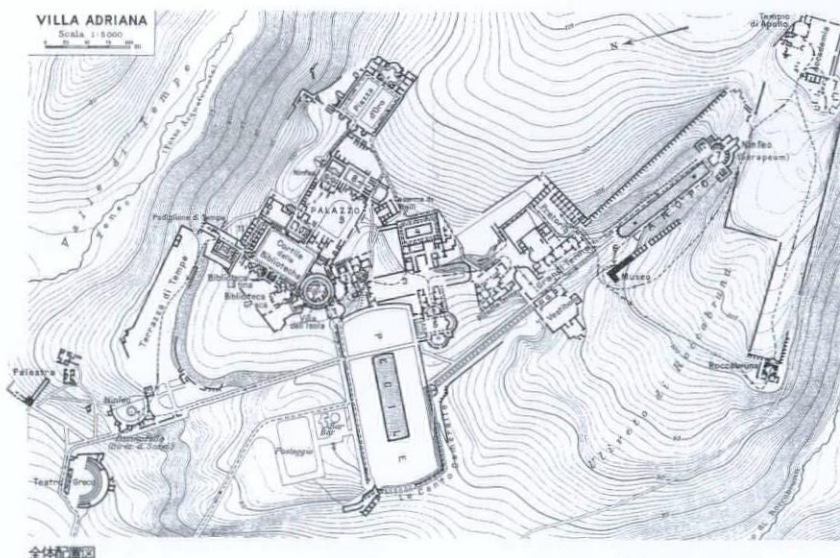
ヴィツラ・アドリアーナ

ティヴォリ近郊、ローマ北東 118-134

Villa Adriana

Tivoli, Roma, 118-134

カプリ島のアウグストゥス帝やティベリウス帝のヴィッラ、アンツィオのネロ帝のヴィッラ、シチリア島ピアッツァ・アルメリーナのヴィッラなど、地中海沿岸に建設された数多くの古代ローマ皇帝のヴィッラの中でも、最大規模（約18km²）の〈ヴィッラ・アドリアーナ〉は、帝国最盛期といわれた五賢帝時代の第3代ハドリアヌス帝のヴィッラである。当時の帝国は地中海全域を支配し、彼自身もエジプトなど幾多の遠征を行って、遠方の見聞や収集品をヴィッラの実現に注ぎ続けた。晩年、完成後まもなくこの地を離れて陰棲した彼は、ヴィッラの生活をあまり享受することなく病死し、相続した後継者達がもて余すうちに、その豊かな建築と収蔵品は強奪され、主都ローマとともに廃墟と化していった。居住施設、彫刻ギャラリー、浴場、図書館、神殿、ニンフェオ、庭園など、周囲の自然と巧みに調和した壮大な複合施設の遺構は、建築に限らず、ルネサンス以降の西欧文化に多大な影響を与えた。



ヴィッラ・デステ

ティヴォリ、ローマ北東 1560-72

建築：P・リゴーリオ

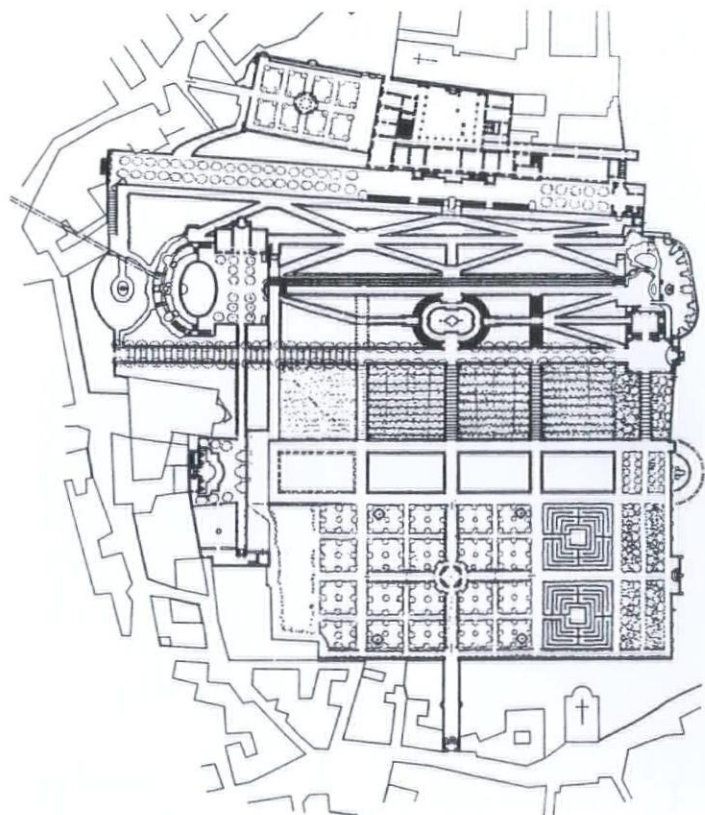
Villa d'Este Tivoli, Roma, 1560-72

Architect, P. Ligorio

フェッラーラの枢機卿イッポリート・デステは、1550年に法王ユリウス3世からティヴォリの統治者を任ぜられ、彼の「考古学官」だったリゴーリオが、近郊にある〈ヴィッラ・アドリアーナ〉の発掘を直ちに開始した。ピオ4世が法王になった1560年夏以降、ようやく彼はティヴォリの都市城壁西端にあるフランチェスコ会修道院と一体になった簡素な建物をリゴーリオの設計で整備し、サンタンジェロ山、アニエネ川の2箇所から給水を得て、多様な噴水装置を配置した庭園を構成し、〈ヴィッラ・デステ〉を築いた。ヴィッラを特徴付けるさまざまな噴水は、主建築内部のグロッタ（洞穴風の噴水）などから流れだし、庭園へと展開していく。庭園は、現在閉鎖されている北西側庭園正門から〈ドラゴンの噴水〉（庭園をヘリベリスの庭園に見立てた守護神ヘラクレスの主題は、グレゴリオ13世の訪問で、退治されるべきだった法王の家紋ドラゴンに変更された）を経て主建築中央へ達する主軸線（到達軸）と、直行するふたつの軸線、すなわち主建築寄り北東側の〈ティヴォリの噴水〉から南西側の〈ローマの噴水〉へ流れ、ティヴォリ＝ローマの地誌とテーヴェレ川とを象徴する軸線（地誌軸）、そしてその北側に平行配置した、〈オルガンの噴水〉から未完の〈ネプチューンの噴水〉へと延びる、自然神ナトゥーラに捧げた軸線（循環軸）とによって分節され、庭園全体が古代ティブールの都市グリッドを想起させている。庭園には、水が全てに生気を与えながら循環し、あらゆる芸術と技術とが自然神に捧げられるという当時の擬人化した神話的世界観が満ちている。



ローマの噴水



全体平面図



ふくろうの噴水

ラ・ファルネジーナ

(ヴィッラ・キージ 現在、リンチェオ・アカデミー)

ローマ 1505-11 建築：B・ペルッツィ

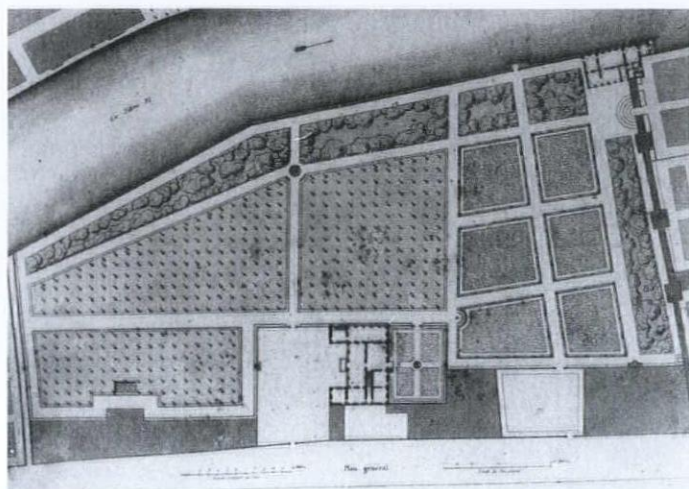
la Farnesina

(Villa Chigi, Accademia Nazionale dei Lincei)

Roma, 1505-11, Architect, B. Peruzzi

デーヴェレ川を挟んでバラッツォ・ファルネーゼの対岸、そしてサン・ピエトロ大聖堂（当時はいずれも工事中だった）からもさほど離れていない位置にある「ラ・ファルネジーナ」は、シエナ出身の裕福で教養ある銀行家アゴスティーノ・キージ（1465-1520年）のヴィッラとして、ペルッツィの建築設計、造園、フレスコ画やスタックレリーフをはじめとする室内装飾とによって、1511年に完成した。小規模ながら端正な主建築は、ペルッツィがラファエロと協同したフレスコ画で著名な中央部分の「礼節のロジャ」をはじめ、ペルッツィ自身による「遠近法の広間」、ラファエロと弟子達の作といわれる「精神の広間」といった大作フレスコ画が特に著名であ

る。庭園には、当時の他のヴィッラのように、グロッタや噴水、多くの古代彫刻が配してあった。また、今は失われてしまったが、新古典主義理論家ミリーツィアの記録などによれば、百頭以上の馬を入れたラファエロ設計の壮大な馬舎も建設されていたといわれている。また、デーヴェレ川に面しては、「朝食のためのロジャ」が主建築と同じ頃に建設され、約20年後の洪水で倒壊した後、18世紀に再建された。ラ・ファルネジーナはその後アレクサンドロ・ファルネーゼ枢機卿の所有となり、やがて19世紀半ばにナポリのスペイン大使ベルムデスの所有になるまでの間に荒廃した。その後、1927年に国有となり、国立リンチェオ・アカデミー本部になっている。



全体配置図



庭園から主建築ファサードを見る

ヴィッラ・マダーマ

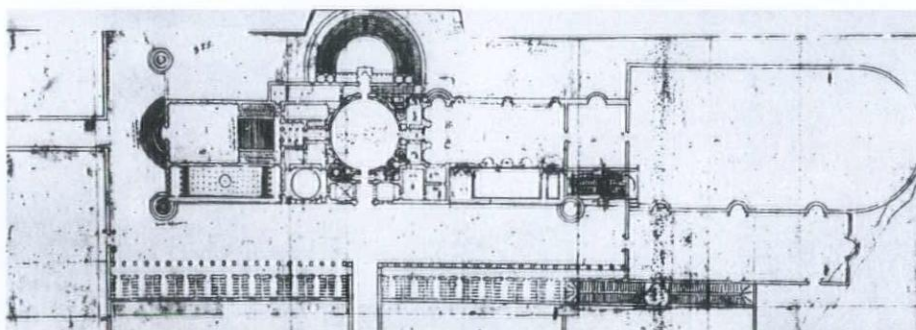
(現在、外務省迎賓館)

ローマ 1520 建築：ラファエロ・サンツィオ

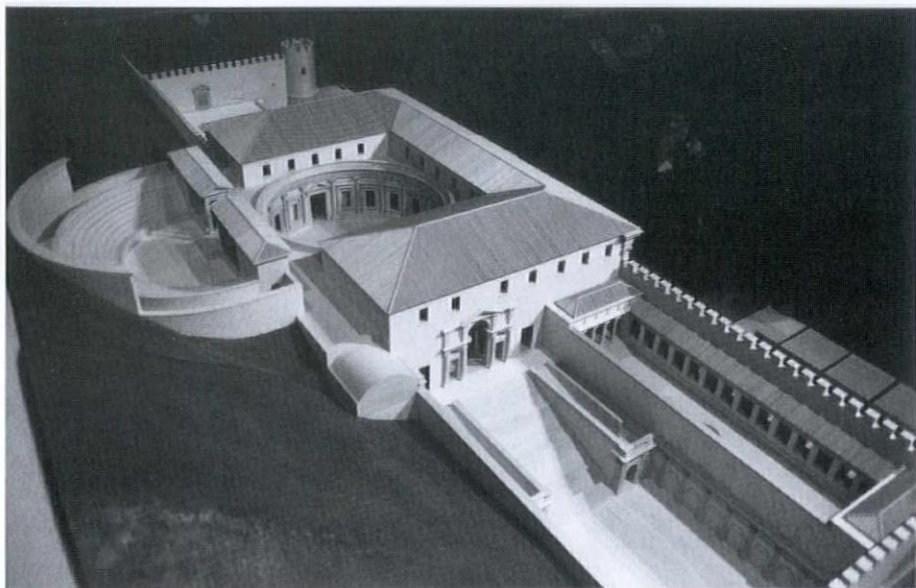
Villa Madama (Sede di Rappresentanza, Ministero degli Affari Esteri)

Roma, 1517-20, Architect, Raffaello Sanzio

後の法王クレメンテ7世、ジュリオ・デ・メディチ枢機卿がラファエロの設計で、ローマ北西のモンテ・マリオ中腹の「ヴィッラ・マダーマ」建設に着手したのは、1517年である。枢機卿からヴィッラを遺産相続したアレクサンドロ・メディチは、カルロス5世の実娘マダーマ・デ・マルゲリータ・ダウストリアと結婚したため、ヴィッラは後にヴィッラ・マダーマと呼ばれるようになった。ラファエロの計画案は、中央に配した円形平面の中庭など、建築の構成やスケールにおいて、大浴場、パラティーノ、黄金宮殿等の遺構に残る古代建築を直接想起させる、ローマ・ルネサンスにふさわしい壮大な意匠だった。彼の死後、建築はA・ダ・サンガッロらが、天井フレスコ画等の装飾はG・ロマーノらが造営を続行したが、ローマ劫掠で中断し、その後、着工部分のみの建設で未完に終わった。元来の中庭部分の円形平面の外壁のうち、北東側半分が現在の主建築エントランスの半円状の外観になっている。主建築の北側へは段丘の南北軸に沿って、「象の噴水」や古代胸像などを配したテラス状幾何学庭園が長く延び、直行する東向きの谷側には、主建築および庭園基壇部分にグロッタを配した池と噴水がつけられた。



平面図 A・サンガッロ・イル・ジョヴァネ



全体復元模型（山側から見る）

クイリナーレの庭園

(現大統領官邸)

ローマ 1504-

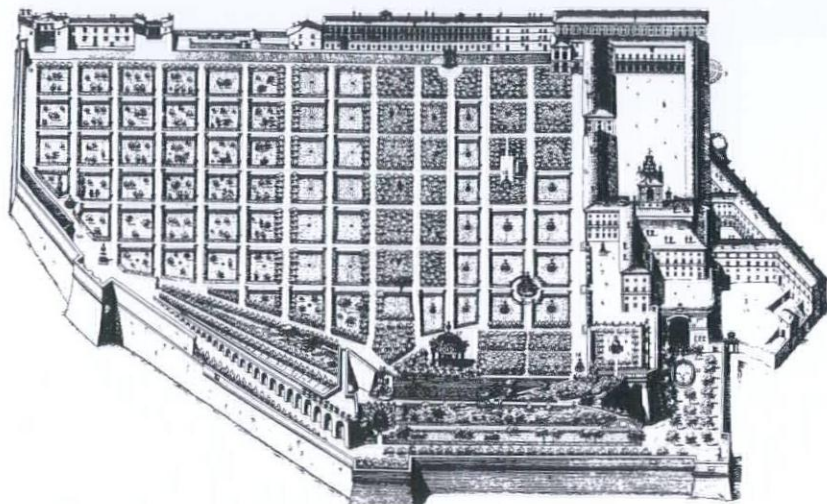
建築：P・リゴリオ、D・フォンターナ、F・フーガ
Giardini del Quirinale (residenza del Presidente della Repubblica)
Roma, 1504-, Architect, P. Ligorio, D. Fontana, F. Fuga



庭園内のグロッタとグレゴリオ15世の家紋をかたどったモザイク

〈クイリナーレ〉は、古代以来のローマの「7つの丘」のひとつである。現在、大統領官邸である建築と庭園は、1504年にナポリの枢機卿オリヴィエロ・カラファが整備したヴィッラを起源にしている。ジロラモ・ダ・カルビの構想による当初のヴィッラは、木造のパヴィリオンや小神殿、古代彫刻を収めたツル植物のニッチなどを配した庭園だった。その後、1550年から枢機卿イッポリート・デステに貸与され、ダ・カルビの死後、リゴリオが主建築と庭園とを再整備し、庭園はモンテ・カヴァッロからトリートネ広場へ向って下降しながらテラス状の三段構成に分節され、最下段には、デッラ・ポルタ、デル・ドゥーカラが協同して〈ミューズの噴水〉を設けた。1583年、グレゴリオ13世の時代にクイリナ

ーレは法王の〈夏の宮殿〉となり、O・マスカリーノ設計の新しい主建築が建設された。クレメンテ8世の時代には数多くの噴水がつくられたが、神話世界を主題にした色彩豊かなオルガン噴水(1596年)は、後のピオ4世の時代にウルカノ工房の代表作となる大理石彫刻が付加され、最も著名なものになっている。その後もグレゴリオ15世の時代に〈鏡の噴水〉など多くの噴水がつくられたが、それらは現存しない。また、ベネディクト14世は1743年にフェルディナンド・フーガの設計で、庭園からピンチオの丘を展望するカフェテラスを建てた。当時のノッリの地図(1748年)には、イタリア式幾何学庭園が描かれているが、グレゴリオ16世の時代に庭園の大半が英国式に改修された。



全体配置図

ピオ4世のカジノー

(ヴィッラ・ピア)

ヴァチカン、ローマ 1559-

建築：P・リゴリオ
Casino di Pio IV (Villa Pia)
Vaticano, Roma, 1559-, Architect, P. Ligorio



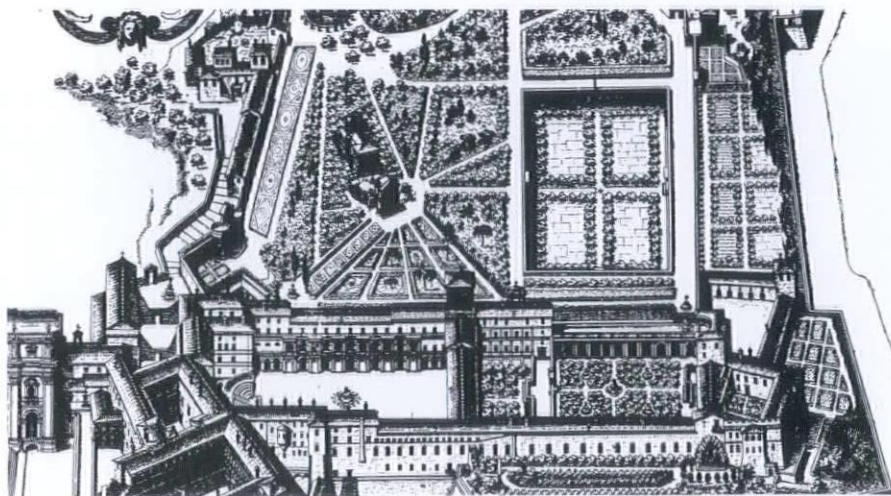
ヴィッラ・ピア全景



中庭へのエントランス

歴史に登場するヴァチカンの最初のヴィッラは、15世紀末のインノチェント8世のベルヴェデーレである。サン・ピエトロ大聖堂北側に隣接するベルヴェデーレは、その後百年ほどの期間に、建築家ブラマンテらが三段の中庭を取り囲む壮大なロジャとして構築していったが、当初は簡素なロジャが部分的に整備され、法王の散策や野外休息に利用された。1559年に即位したピオ4世は、このベルヴェデーレ西側に、P・リゴリオらを起用して新たなヴィッラと庭園となる〈ピオ4世のカジノー(ヴィッラ・ピア)〉を整備した。楕円平面の中庭へのアプローチとなる対象配置の外階段周辺は後に改変され、ヴォールト屋根のバラツェット前の当初は矩形平面だった池は半円形になった。バラツェット(小建築物)は主軸線に沿って矩形の池の上に張りだして野外劇場

の舞台背景となり、池の手前は半円形の階段状客席になっていた。その周囲へは、バラツェットを基点にして放射状に遊歩道が延びて、刈込んだ生垣庭園の独特な平面パターンを形成している。ヴィッラ・ピアの建築群は、周囲のこれらの庭園から隔離するかのよう、障壁に囲まれた楕円平面の中庭に面して配置されて、親密な閉じた領域を生み出しているが、内部(中庭)対外部(幾何学庭園)の強い対比関係や、平面形状における閉じた円弧と開いた円弧との対立など、盛期バロックに繋がるリゴリオの先駆性を感じられる。主建築の外壁一面には、それ以前は内壁の装飾技法だったスタッコの端正なレリーフが応用されて施され、独特な絵画的な光の効果を生んでいる。



全体配置図

サクロ・ボスコ

(ヴィッラ・オルシーニ)

ボマルツォ (ヴィテルボ近郊)、ローマ北 1579

Sacro Bosco (Villa Orsini)

Bomarzo (Viterbo), Roma, 1579



「世界の頂上」を示すオルカ像

1950年頃、P・ド・マンディアルグ、A・ヒナステラ、S・ダリらが相繼いで怪奇的な彫像群と野性的な風土を紹介し、ボマルツォの〈サクロ・ボスコ (聖林の意)〉は世界的に知られた。ローマの北約100kmに位置する山岳都市ボマルツォは、古代ギリシャ植民地ポリマルティウムを起源とし、歴史的軍事拠点でもあった。サクロ・ボスコは、ルネサンス期のオルシーニ家のヴィッラの遺構として、街の西斜面の小川沿いの庭園の一角として対岸に広がる。庭園の主ヴィッチーノ・オルシーニ (本名ビエール＝フランチェスコ) は、レッテラート・ソルダート (教養を身につけた戦士) の誉れ高く、フランドル地方などへ遠征した人物だが、1532年に父ジャン・コッラードからボマルツォの城塞 (カステッロ) と封地を譲り受け、1550年頃には街にそびえる城塞をヴィッラ・オルシーニとして整備するべく、庭園とサクロ・ボス

コをつくりはじめ、1563年頃に大半が出来上がっていた。サクロ・ボスコ以外の庭園部分は今はほとんど失われて、史実が謎に包まれてしまい、かつて急流だった小川は水量が減り、サクロ・ボスコも第2次大戦後の所有者が怪奇的な彫像群の配置等を変更して、当初の状態から改変してしまった。当初のサクロ・ボスコは、エトルリア芸術、古代エジプトおよび古代ギリシャ神話、オランダ・フリオーゾ (アリオスト作の中世騎士物語)、巨亀、熊 (オルシーニのもじり) といったさまざまな題材に基づく怪奇的な彫像群や噴水、そして傾いた家、「谷間のマドンナ」教会といった庭園内小建築物によって構成されており、ヴィッチーノの野性的な力のイメージ、おどけた諧謔性、永遠のイメージといった主題が相克しながら表現されている。



猛獣たちと戦うドラゴンの像



ニンフェオ (手前) と〈傾いた家〉 (奥)

パラッツォ・ファルネーゼ

カブラローラ (ヴィテルボ近郊)、ローマ北 1530-73

建築: A・サンガッロ、ヴィニョーラ

Palazzo Farnese

Caprarola (Viterbo), Roma, 1530-73

Architect, A. Sangallo, Vignola



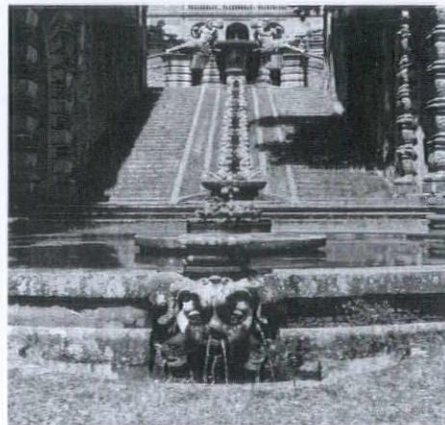
パラッツォ・ファルネーゼとジャルディーノ・グランデ

五角形の建築と円形の中庭という特異な平面形状で著名なカブラローラのパラッツォ・ファルネーゼは、この山岳都市を所有したアレッシンドロ・ファルネーゼ (法王パオロ3世) が、1530年頃、サンガッロ、ベルツィに命じ、当初は純粋な城塞として着工した。工事が中断した後、相続した孫の枢機卿アレッシンドロは、尾根沿いに広がる山岳都市の中央を貫く長い坂の頂上にそびえ立つ建築物として、ヴィニョーラに委託してヴィッラに改築する整備を再開した。円形内部階段の意匠も著名だが、城塞の形状を継承した五角形の主建築の中央には〈ヴィッラ・マダーマ〉を連想させる重厚な円形中庭が実現した。5連アーチのロジャが特徴づけるピアノ・ノービ

レに対称的に配置した「夏の間」「冬の間」に呼応して、主建築の背後には、ブリッジを渡った一段高い基壇上の夏冬ふたつの庭園が繋がる。さらにその後へ小道を登ると、野外会食のためにデル・ドゥーカが設計した〈ジャルディーノ・グランデ〉 (大庭園の意、1584年) があり、その後1620年頃にライナルディがそれらを増改築した。〈ジャルディーノ・グランデ〉は主軸線に沿って上る外部階段と中央を貫いて流れる噴水装置 (カテナ・ダクワ)、両側を囲むテラス状の基壇、ウィスタを受け止める最上段のカジーノ、カジーノ前方のロジャに面する幾何学庭園、そしてカジーノ後方の幾何学庭園からなる。



ジャルディーノ・グランデのテラス部分



ジャルディーノ・グランデの入り口部分の円形水盤

ヴィッラ・ランテ

バニャイア（ヴィテルボ近郊）、ローマ北 1568-78

建築：ヴィニョーラ、C・マデルノ

Villa Lante

Bagnaia (Viterbo), Roma, 1568-78

Architect, Vignola, C. Maderno

1566年にG・F・ガンバラがヴィテルボ司教になり、16世紀初頭の狩場に新ヴィッラを建設するため、ヴィニョーラに設計を委託し、建築家の死後、1578年にほぼ完成した。ヴィッラの呼称は、17世紀半ばからランテ家の所有だったことに因んでいる。ヴィッラ全体は、西側の広大な不整形部分と、その東側に南北主軸に沿って展開する4段の幾何学庭園とに分節され、それぞれに街の広場から街路が延び、正門がある。不整形部分は、正門近くの〈ペガサスの噴水〉と狩猟ロッジが現存するのみで、当時の庭園は文献史料でしか残っていないが、「どんぐり」「ユニコーン」「バッカス」「ドラゴン」といった多数の噴水や水のオペリスク（貯水池）が山林に点在し、遊歩道で結ばれていた。これらの装置を自然の中に配置することで、庭園は「オウディウスの転生物語」の「黄金時代」を主題にした文学的空間領域を形成した。狩場だった原生林は、愉快な噴水のネットワークで「庭園化」されたが、その背景には、給水装置という都市基幹構造と、古代神話へのオマージュという文学的主题がある点で、その後、法王シスト5世と建築家D・フォンターナが遂行したバロック・ローマ都市整備の空間構成の先駆となる「古代神話＝寓意＝ネットワーク」「庭園＝都市」という特質が見出される。

不整形部分東側に南北主軸に沿って展開する4段テラス状の幾何学庭園は、最上段の一对のミューズ神殿に挟まれた、中央のグロッタから流れ出る水流に沿って展開する。〈ノアの洪水〉のグロッタ前方には、〈イルカの噴水〉があり、当初はその上に、サンゴを模したネプチューン神殿風の木造バヴィリオンがあったという。周囲の石造ベンチには不意に吹き出す噴水が仕込まれ、「驚き」を好んだローマ・ルネサンス文化人が思いやられる。軸線に沿って2段目のテラスへ下降していく斜路の中央には、〈水の鎖（カテーナ・ダクワ）〉という水流装置があり、最下部のテーヴェレとアルノとの〈2大河川神像の噴水〉へと流れ込む。〈水の鎖〉の造形モチーフは、領主ガンバラをもじった、冗談めいた「ザリガニ（gambero）」である。第2のテラス中央にはワインクーラー付の石造食卓があり、自然から人工（文明）へと向かう、水を媒介にした神話的歴史の寓意の展開において、前半に対応している。3段目のテラスは〈キャンドルの噴水〉の下に揺がり、キュービクな双子のカジノのピアノ・ノービレに対応している。東側カジノは、当初の計画に基づいて、後にマデルノが建設した。両カジノ中央から主軸線上に最下段テラスを、そしてその先の中世の集落と彼方の自然景観を見渡せば、足元に広がる最下段の幾何学庭園が、水流を媒介にして上段テラスから主軸線上に展開してきた「循環軸」の、自然から芸術へのクライマックスとして、一点透視図法の空間秩序の中に、至上の「人工芸術空間」を具現していることに気づく。こうしてヴィッラを一巡すると、太古の「黄金時代」からのローマ・カトリック的な神話性や歴史的連続性が「楽園のプログラム」として空間化されていることを体験する。それは、古代からルネサンスへの発展の賛歌であると同時に、アルベルティのような、ノスタルジックな古代への回帰でもあった。



ペガサスの噴水から双子のカジノ、最下段テラスを見る



マデルノのカジノから最下段テラスと旧市街を見渡す



2 河川神像の噴水

ヴィッラ・ジュリア

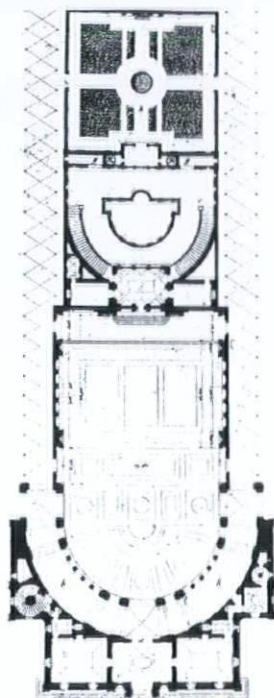
ローマ 1551-55

建築：ヴァニョーラ、G・ヴァザーリ

Villa Giulia

Roma, 1551-55, Architect, Vignola, G. Vasari

法王ユリウス3世は、ポポロ広場北門を出てまもない南北を丘陵に挟まれた低地に、市街と田園の中間に位置するいわゆる「ヴィッラ・スプルバーナ」として〈ヴィッラ・ジュリア〉を建設した。このあたりには15世紀初頭から、法王の兄弟、A・デル・モンテ枢機卿のヴィーニャ（初源的なヴィッラ）があった。1911年の万博の大規模造成とその後の市街地化で、景観が変貌してしまっただが、フラミニア街道からのヴィッラ入口を示す噴水があるくビオ4世のカジノ、テ・ヴェレ川まで達していた旧アプローチ路、ヴィニョーラ設計のサンタンドレア教会など、当時の関連施設を見いだしながら進むと、ヴィッラ・ジュリアの主建築入口に達する。1889年以来、国立エトルリア博物館となっているヴィッラ・ジュリアは、エントランス・ホールがある主建築、第1の中庭、ニンフェオ（第2の中庭）、幾何学庭園が、視覚的に貫通する主軸線上に沿って続く。主建築から第1の中庭へ出ると、フレスコ装飾天井が美しい半円平面のロジgiaが展開する。中庭の両側は自立障壁に閉ざされ、ニンフェオに面する第2のロジgiaが正面に続く。地下2階まで展開するニンフェオは、第2のロジgiaから半円形状の外部階段で地下1階へ降りるが、その中央に、地下2階の池に面して4体のカリヤチッド（女人柱像）が配置されている。ニンフェオは、ローマ北部に現存する古代アグリッパの地下水道「アクア・ヴェルジネ」にちなんで水を象徴し、ヴィッラの中心的場所になっている。ニンフェオ後部の第3のロジgia後方には、正方形平面の幾何学庭園があり、主軸線上中央に小噴水、最後部中央には神殿モチーフを配して、ヴィッラを貫く主軸線上のヴィスタ（透視図法的視線）をそっと受け止めている。



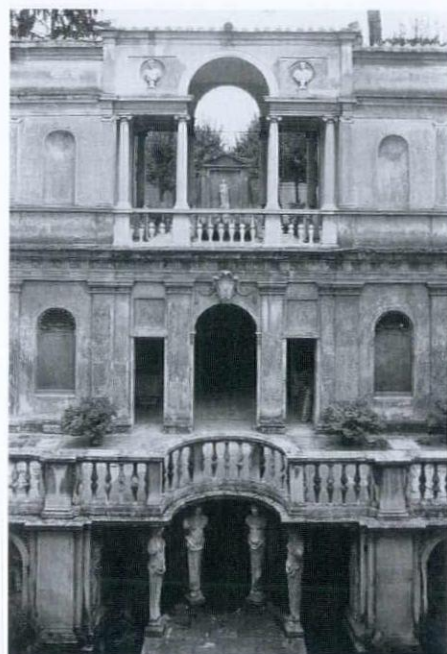
全体平面図



ヴィッラ最後部の方形幾何学庭園から軸線上に振り返る



ニンフェオから第2のロジgiaを見る



ニンフェオを囲む3層の壁面構成と第3のロジgia



第1の中庭を囲むロジgia

ヴィッラ・メディチ

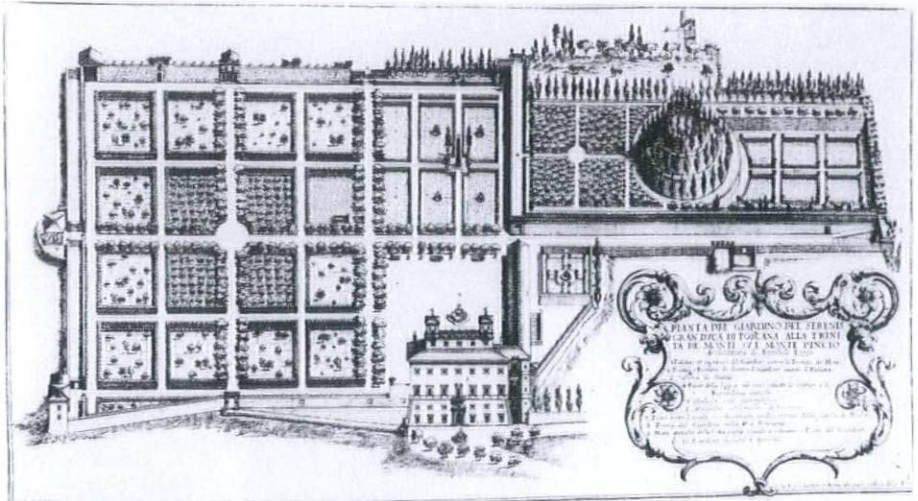
(現在、在ローマ・フランス・アカデミー)

ローマ 1572 建築：G・リッピ、A・リッピ

Villa Medici (Accademia francese)

Roma, 1572, Architect, G. Lippi, A. Lippi

〈ヴィッラ・メディチ〉は、スペイン階段を上った小高いピンチオの丘の左側に位置するが、ここは古代ローマ期にドミティアヌスの庭、ポンペイウスの庭、ルクルスの庭、アチリウスの庭が続く「庭園の丘」だった。帝国衰退によってアウレリウス帝が丘を分断する都市城壁を築き、城壁内はその後も庭園に特徴づけられて「ピンチオの丘」と呼ばれた。古代の「庭園の丘」は中世期に荒廃したが、16世紀初頭になって枢機卿ミキエルのヴィーニャ（初原的なヴィッラ）が営まれ、約50年続いた動乱期に荒廃した後、1564年に廃墟同然で枢機卿リッピの手に渡った。彼は約10年間に建築家リッピ父子とともに建物の増改築、庭園整備・拡張、給水など、ヴィッラの骨格を整備した。リッピの死後、地所を譲り受けた枢機卿フェルディナンド・デ・メディチは、既に華麗な噴水庭園で名声を博していたティヴォリの〈ヴィッラ・デステ〉に対抗するかのよう、円熟した建築家アンマナーティをフィレンツェから呼び寄せ、建物を庭園側に1スパン増築し、新規南側翼部とともに、庭園に面した凱旋門のようなロジヤ、晴れやかな2基の物見塔を付加した。庭園も丘の東端まで拡張し、主建築正面と庭園中央との交差軸線にしたがって、西側には4列4行のグリッド状の刈込んだ生け垣で囲まれた幾何学庭園を、東側へは5m高いテラス状の段差をニッチで解決しながら、古代のアチリウスの庭園だったボスコ（灌木林）中央に「聖なる山」を築き、古代の「庭園の丘」の記憶を蘇らせた。1803年のナポレオン遠征以来、ヴィッラは在ローマ、フランス・アカデミーとなり、若き日の建築家ガルニエや音楽家ドビュッシーら、今日に至るまで、多数のローマ大賞受賞者達が留学、滞在する文化交流の場でもある。



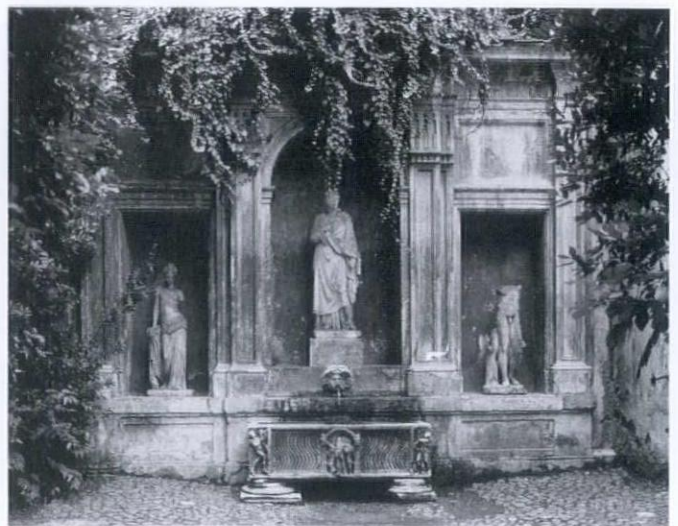
全体配置図 ファルダの版画より



庭園中央部奥から主建築ロジヤを見る



スペイン階段上から主建築ファサードを見る



庭園内の古代彫刻がある噴水

ヴィッラ・アルドブランディーニ

フラスカーティ、ローマ南東 1601-21

建築：G・デッラ・ポルタ、C・マデルノ

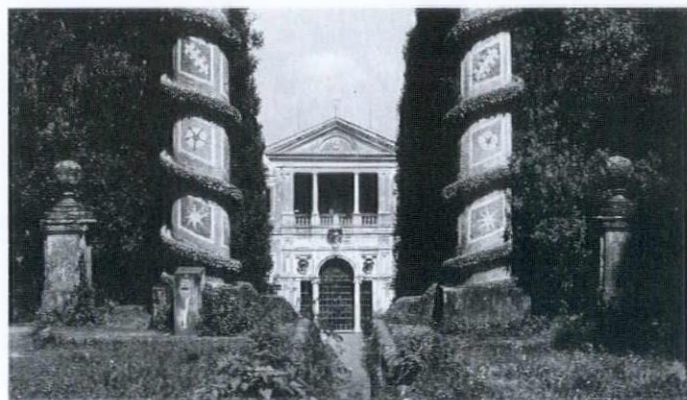
Villa Aldobrandini

Frascati, Roma, 1601-21

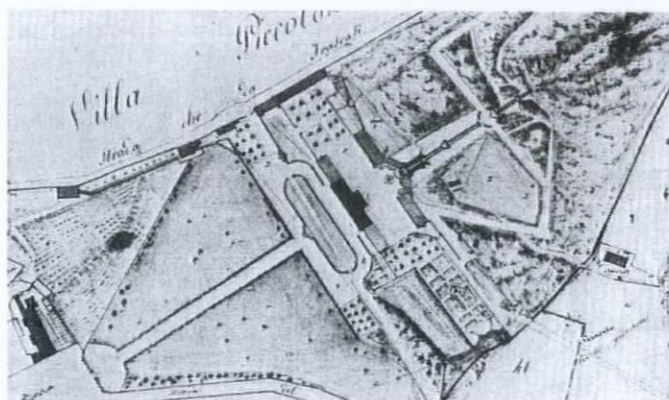
Architect, G. della Porta, C. Maderno

法王クレメンテ8世の甥、P・アルドブランディーニ枢機卿は、1598年に〈ヴィッラ・ラ・ルフィーナ〉西側にあったヴィッラ・コントゥージを譲り受け、G・デッラ・ポルタと後継者のC・マデルノに委託して大改修に着手し、フラスカーティ市街を見張らす斜面に〈ヴィッラ・アルドブランディーニ〉を建設した。デッラ・ポルタの計画は、敷地正門から放射状に広がる3軸線構成など、1570年のヴィッラ・モンタルト（ローマ、現存せず）の配置に負うものが多い。中央の主軸線は、正門から主建築と背後のロジヤを貫きルスティカへと達する、全体の空間構成原理である。主建築から直交方向に延びる軸線に沿って南側へ矩形の幾何学庭園が延びる。主建築の前後ふたつのファサードには「楽園」と「地獄」との2面の仮面性があるといわれ、主建築前方に対称配置した一対の独立煙突、主建築後方のロジヤといった装置を楕円形の中に構成することによって、諧謔的な二面性を統合したともいわれている。また

街に向けた主建築の正面側ファサードが「楽園＝天国」を示す一方で、背後の雑木林につくられた「仮面の部屋」が「地獄」を表す、といったアンビヴァレントな諧謔的精神が重なりあっている。主建築とその背後のロジヤやルスティカを貫く主軸線上の装置の意匠には、ヴィッラの田園生活が16世紀初頭の「静かな古代への瞑想」から、「古代神話の寓意」による「驚きの表現」、「喧噪や諧謔」へと移っていった意匠と主題の変貌が読みとられる。斜面頂上のルスティカから「ヘラクレス（法王を示す）の柱」を経て、ロジヤへ流れる一連の水流装置は、水を媒介にした「循環軸」となって神話世界の寓意を表現し、ルスティカから流れ出す水が「文明の歴史」に入った後、ロジヤ中央の「ヘラクレスの噴水」へと達する、という文脈によって、ヴィッラの演劇的な意匠と神話的寓意との関係をつくり出している。



ヘラクレスの柱と主建築のロジヤ



全体配置図

ヴィッラ・ファルコニエリ

フラスカーティ、ローマ南東 16-17世紀後半

建築：G・リッピ、F・ボッロミーニ

Villa Falconieri

Frascati, Roma, 16-17th Century

Architect, G. Lippi, F. Borromini

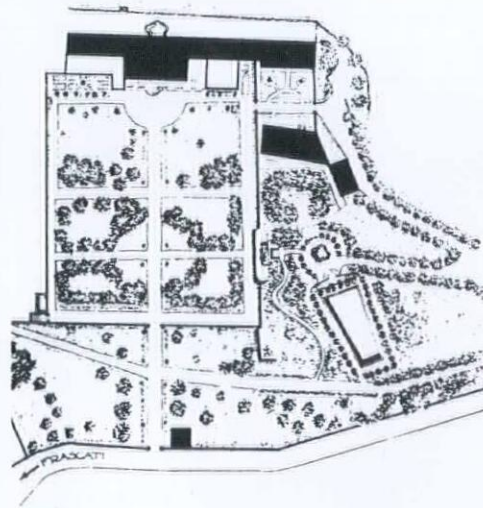
バロック期1628年にファルコニエリ家の所有になった後にボッロミーニが大改修した〈ヴィッラ・ファルコニエリ〉は、当初16世紀半ばにルフィーニ司教がG・リッピ（ローマのヴィッラ・メディチの作者でもある）に委託して整備した〈ラ・ルフィーナ〉であり、ローマを見渡すその北西側ロジヤは田園都市トウスクルム復興の先駆だった。南西側のエントランス・ロジヤ、新しい左翼部など、アプローチ軸線を強調したボッロミーニの意匠と配置とが、表側の幾何学庭園に一層の華やかさを加えた。主建築の変貌に比べて、庭園はあまり変化なく、旧ラ・ルフィーナの特質を保ち、正面側幾何学庭園（前庭）、テラス状に1層低い北西側幾何学庭園、南側雑木林（ボスコ）、北東側遊歩道に分節されている。北西側庭園の擁壁は、古代遺構を利用している。上り勾配の南側雑木林は古代トウスクルム遺構へと続くが、糸杉の林を進むとニンフェオに出会い、そして僅かに逆バースをつけた矩形の池、バロック的意匠の水盤が自然の静けさの中に現われる。この頃、復興したトウスクルムの「ヴィッラの自然に囲まれた生活」は再び静けさを回復し、洗練されるとともに、農本的生産を進めた。このヴィッラでも大量のワイン製造が行われ、古代田園都市の復興を体現していた。



ボッロミーニ改築後のファサード



ボッロミーニ設計のオリーブ園の門



全体配置図

ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ

(現在、市立公園および国立彫刻ギャラリー)

ローマ 1640-64

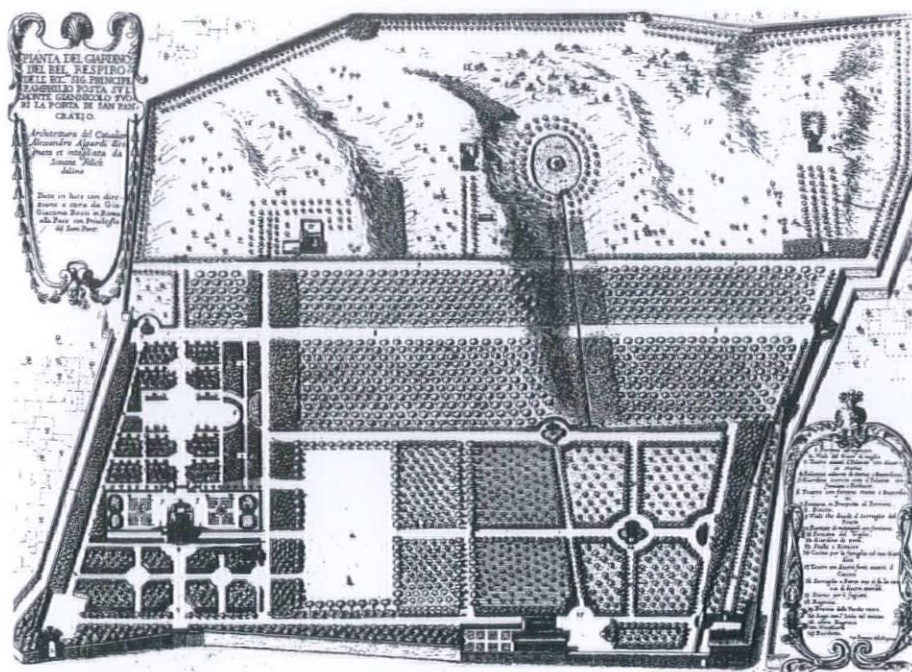
建築：A・アルカルディ、G・F・グリマルディ

Villa Doria Pamphili (Parco pubblico, Galleria nazionale delle Statue)

Roma, 1640-64, Architect, A. Algardi,

G. F. Grimardi

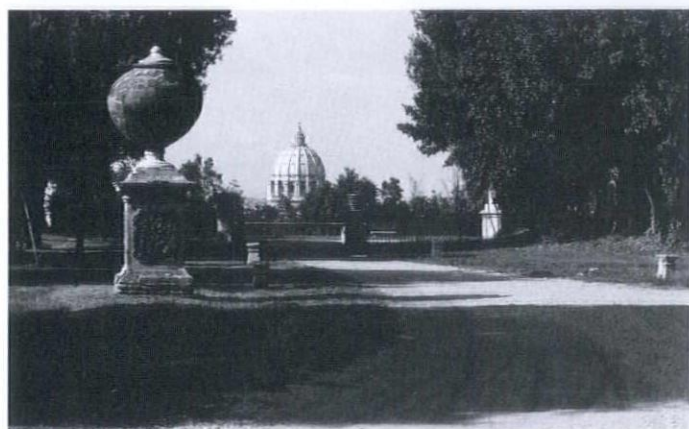
戦後、ローマ最大の市立公園になった「ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ」は、テヴェレ河左岸のサン・パンクラツィオの丘陵に、アウレリア街道に沿う古代ローマのトラヤヌスの水道橋（アクア・パオラ）を北側境界として広がる。古代水道橋の架橋体を利用したささやかな「旧ヴィッラ」は、1630年にパンフィーリ家所有となり、インノセント10世が即位した1640年に、その甥カミッロ・パンフィーリ枢機卿が隣接する23のヴィーニャを買取り、1.5倍になった敷地約90haに、庭園の整備と新ヴィッラ（現在は国立彫刻ギャラリー）の建設を開始した。新ヴィッラは、敷地からの出土品を含む古代彫刻や新しい彫刻のギャラリーとして、そして庭園や自然景観、ローマ市街を見渡す展望台として利用された。その設計にはボッロミーニの案もあったが予算超過により採用されず、ベルニーニの後継者として彫刻家の名声を博したアルカルディの案が採用された。アルカルディ案は鳥小屋付の両翼部が実現しなかったものの、簡素なヴォリュームと彫刻を配した端正な立面とが、ローマのヴィッラの新しい意匠を生みだしている。北にサン・ピエトロ寺院のクーポラを捉える南北の主軸線上に、3段の幾何学庭園を配置し、その中央に新ヴィッラがある。幾何学庭園の西側には柑橘類の果樹園があり、主軸線と直行する数本の東西軸線がそれらを分節し、軸線の各交点にはベルニーニ作のカツムリの噴水や家紋を主題にしたユリの噴水等、彫刻噴水やグロッタを配置して庭園領域化している。敷地の南半分は、小川が18世紀末にカスケードに改修されたほかは、17世紀以来自然の豊かな地勢がほぼ残され、鹿、兎、カワウソなど野生動物が棲息する。19世紀中頃に、3段中央部に現存する幾何学庭園以外は、当時隆盛した「英国式自然主義庭園」に改修されたため、当初の幾何学グリッドによる広大な庭園領域の分節と南側の自然の地勢の重層といった構造的なイメージは弱められた。その後、東へは隣接する旧ヴィッラ・コルシーニ（現在の凱旋門の場所）が対仏紛争で破壊された際に買収し、西へは森林を敷地に加えて、ヴィッラの拡張は約210haに達し、ローマ・オリンピックの記念道路で東西に二分されたが、近代的な自然公園の様相を呈して今日に至っている。



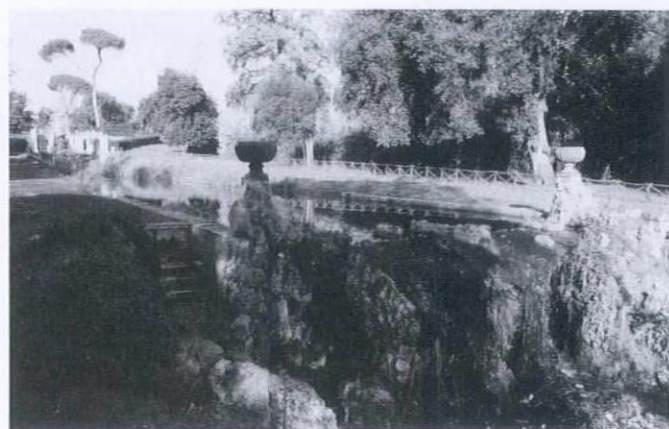
全体配置図 ファルダの版面より



〈新ヴィッラ〉庭園側ファサード



エントランス・アプローチ正面からサン・ピエトロ大聖堂を見る



百合の噴水とカスケード

ヴィッラ・アルバーニ

(現在、トルローニャ財団所有)

ローマ 1750- 建築：C・マルキオンニ

Villa Albani (Amministrazione Torlonia)

Roma, 1750-, Architect, C. Marchionni

ローマ北東の市街の、サラリア街道とノメンターナ街道の間に位置するこのヴィッラは、法王クレメンテ11世の甥、アレクサンドロ・アルバーニ枢機卿のヴィッラとして、1750年に降整備された。それ以前は、サラリア街道側の主敷地と、エゼードラ(半円平面の庭園付属建築物)がある南側の小敷地とに分かれていたようだが、後の主建築およびエゼードラの原型は敷地統合以前から既に存在したといわれている。枢機卿は所有する膨大な考古学品を研究・収蔵するためにヴィッラの整備に着手したが、「生きた博物館」として、建築物や庭園には考古学品の断片をふんだんに利用し、枢機卿と親交があったヴィンケルマンら考古学者、歴史家のサロンとして、名声を博していった。それは単に考古学研究や歴史家達の交流の場だったばかりでなく、音楽会、仮面舞踏会、演劇といった貴婦人達が集う、ローマ社交界の催しのためにもしばしば利用され、近代にはローマがイタリアの首都に決定した際、調印式が行われた場所でもある。

〈ヴィッラ・アルバーニ〉の建築や庭園の整備は、

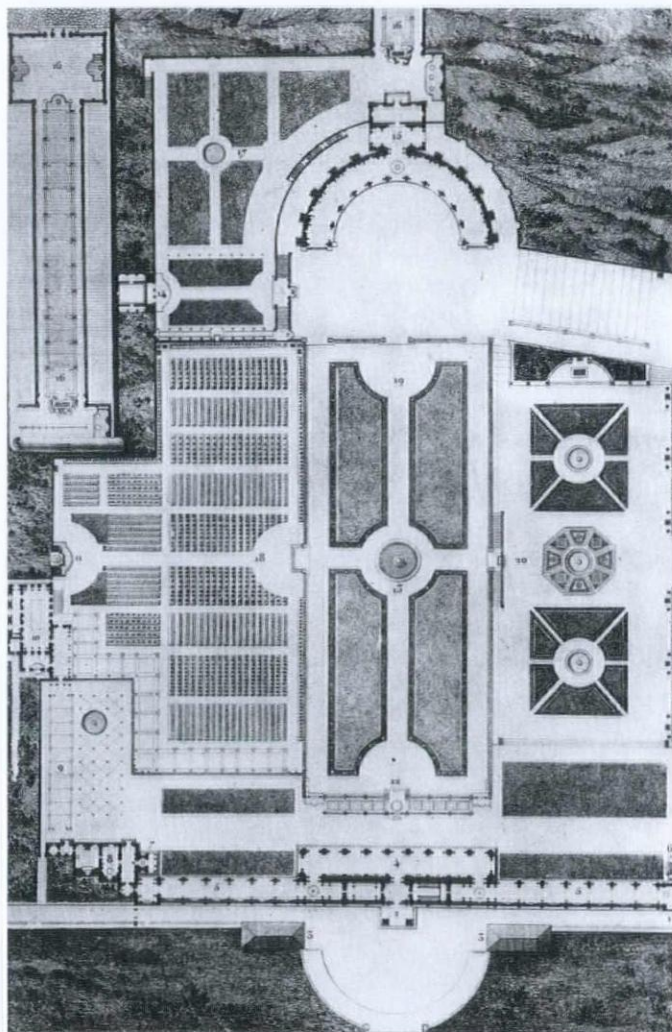
18世紀半ばの「考古学の復興者」としても知られる枢機卿自身が建築家マルキオンニの補佐を受けながら構想し、巨費を投じて実現したものである。端正な中央の幾何学庭園は中心に水盤式噴水を配し、主軸線上の北辺に面して彫像を配した主建築中央のロジャが連なり、南辺は後にカフェテリアとして利用された2層のエゼードラが呼応している。主軸線と交差する東西軸に沿って中央の幾何学庭園の西側には1層分高い幾何学庭園が、東側には一段低い庭園が整備され、それぞれの北辺には主建築中央から対称に、1層のロジャが敷地一杯まで拡がり、両端には考古学品を散りばめたテンピエットを配置している。ヴィッラの耽美的な特質をシンボライズするかのよう、カフェテリアの脇には考古学品の断片を集めて〈テンピエットの廃墟の噴水〉がつくられた。18世紀の対仏紛争の際に資産が没収され、294の彫刻が持ち去られたが、後に返還された。19世紀にトルローニャ家所有になった後、庭園は大改修されたが、ヴィッラの特質と豊かな収蔵品は今日なお失われていない。



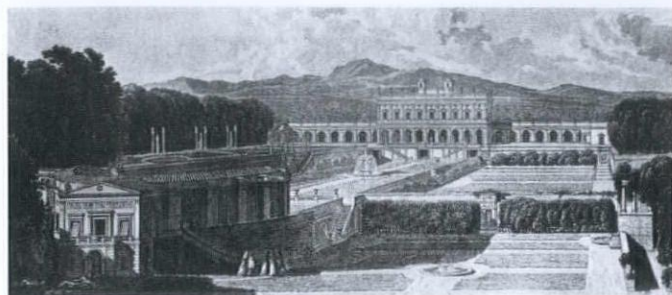
庭園側ファサード



考古学発掘品を構成した〈神殿の廃墟の噴水〉



全体配置図



「庭園と噴水」1824年

いいものだけを世界から



清らか、
爽やか、
和やかな環境づくり。



■空調設備工事 ■給排水衛生設備工事 ■給湯設備工事 ■その他建築付帯設備工事

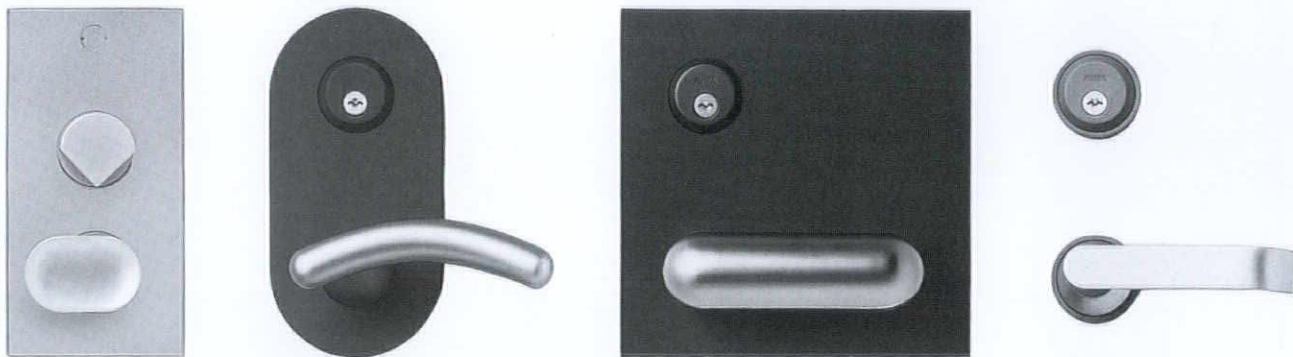
ヤナセ設備工業

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

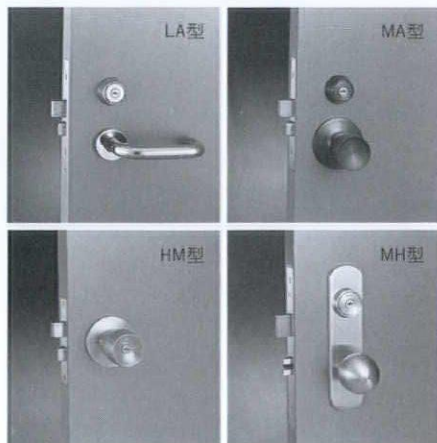
株式会社ヤナセ設備工業
〒105 東京都港区芝浦1-11-4
電話(代表)東京(03)3455-8091

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用していただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的にやってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。



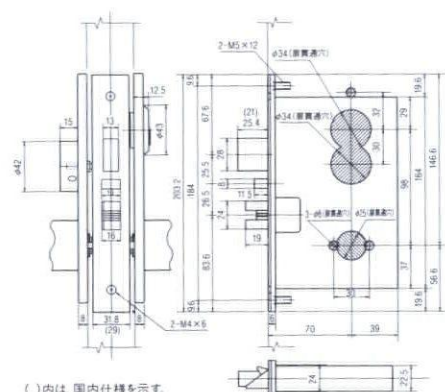
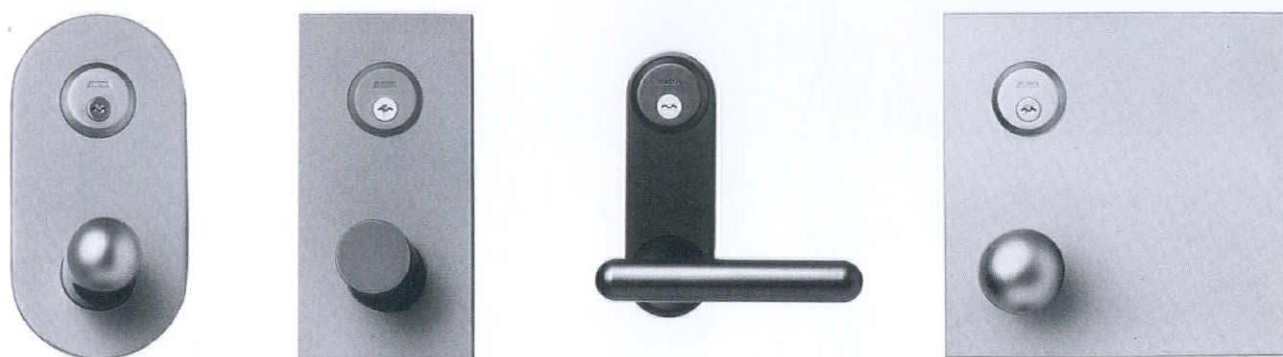
最新鋭の設備をそなえた創立50周年記念工場が竣工し
生産力がさらにアップしました。



ありがとうございます。おかげさまで50周年。

美和ロック株式会社 〒105 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551代

生まれたのか。



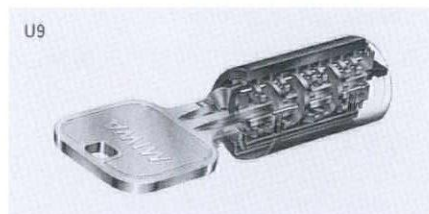
●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとはほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少ありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

カチオンは自由な組み合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることで、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

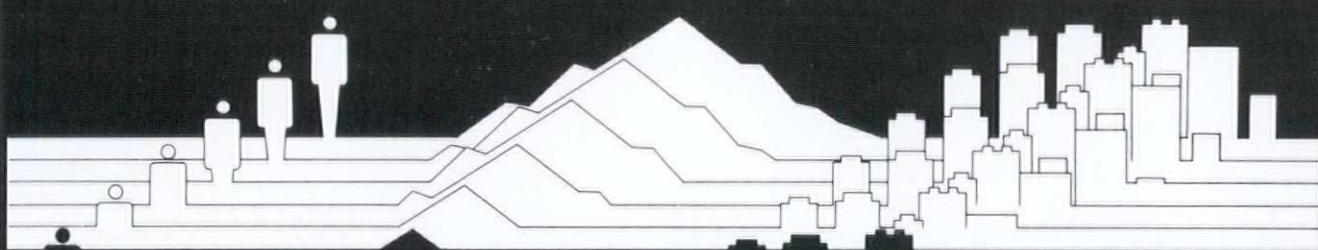
記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side 室内側 Interior side	常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 を操作すると、外ノ
F21	一般居室用		ラッチボルトは内外のハンド ーで、内からはサムターンで
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンド ターンの操作で施錠される のハンドル操作により外ハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

INTERFACE

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

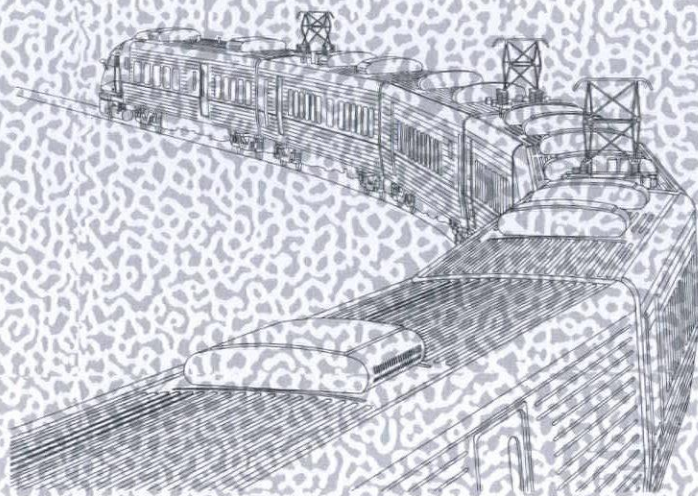
多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

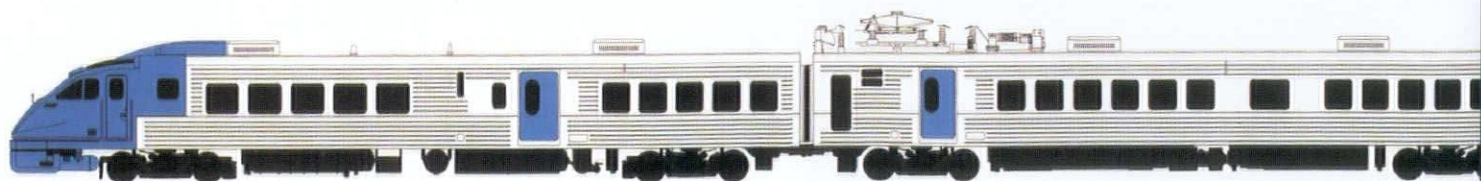
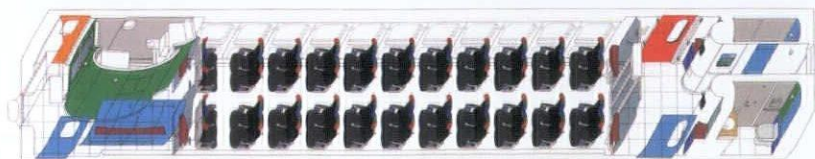
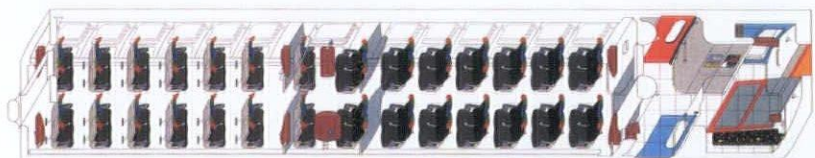
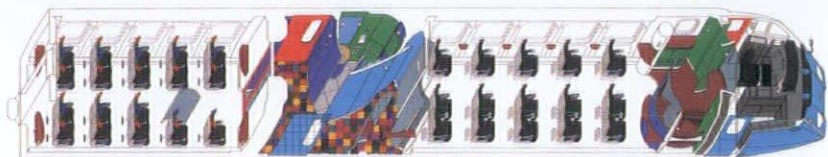
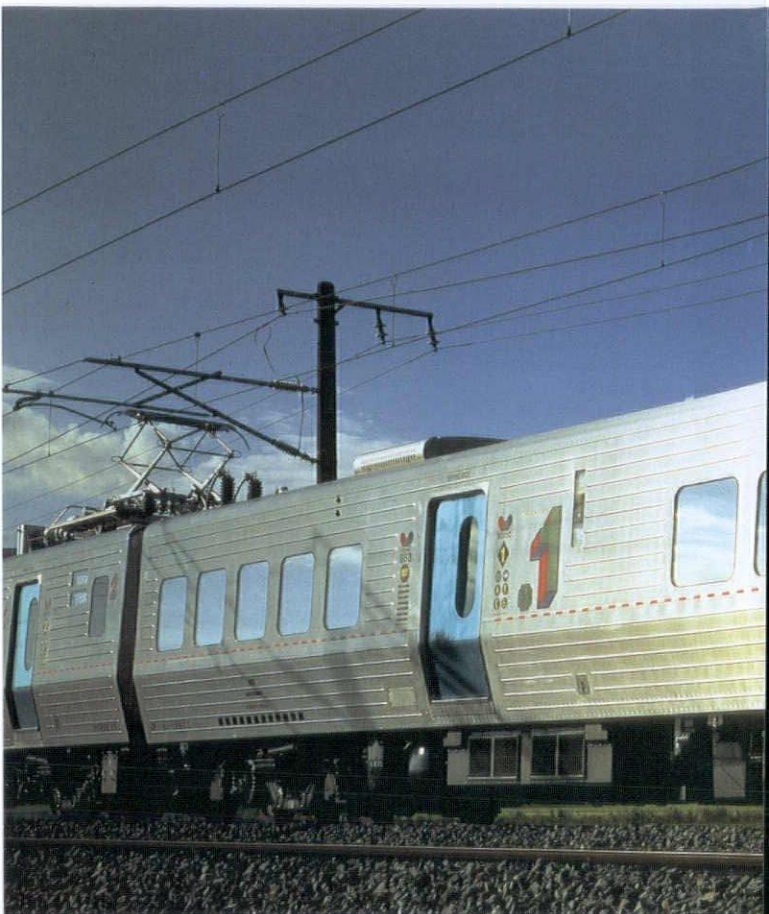
水戸岡鋭治の
TRANSPORTATION
DESIGN

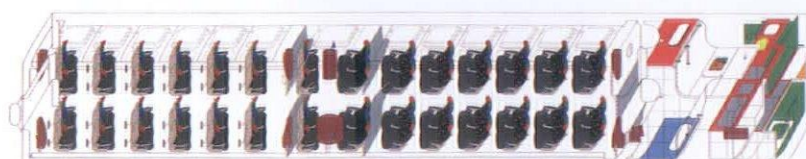
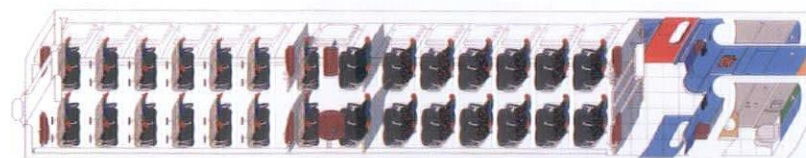
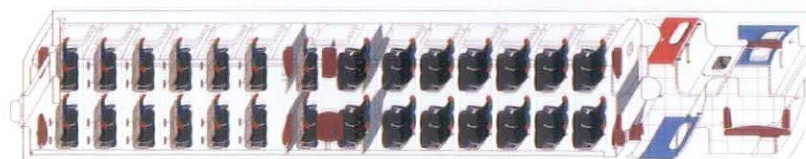


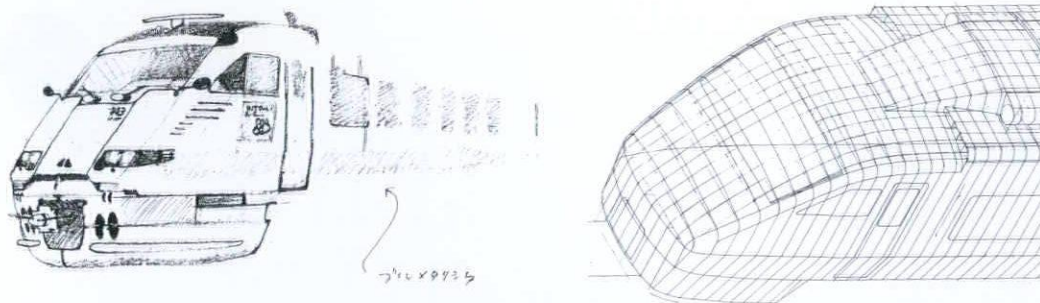
Transportation Design by Eiji Mitooka

特急<ソニック883>

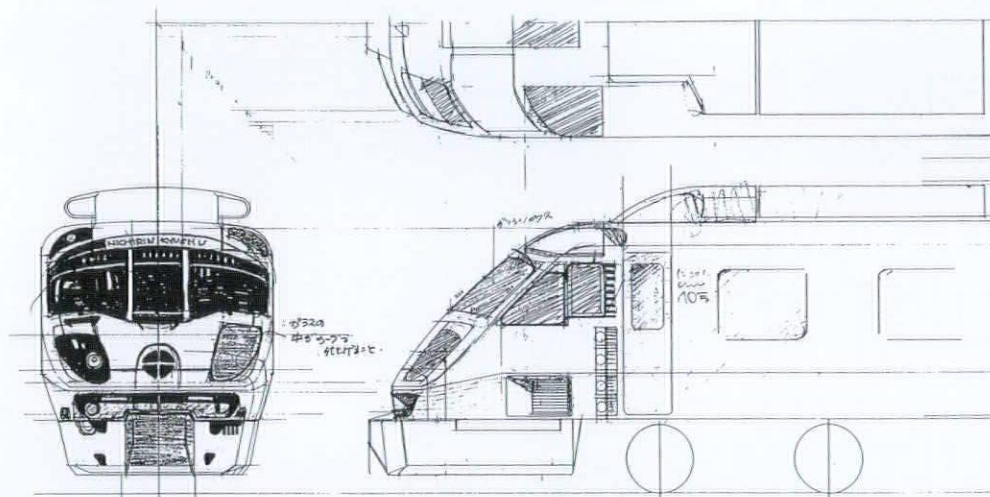
Sonic883 express 1995



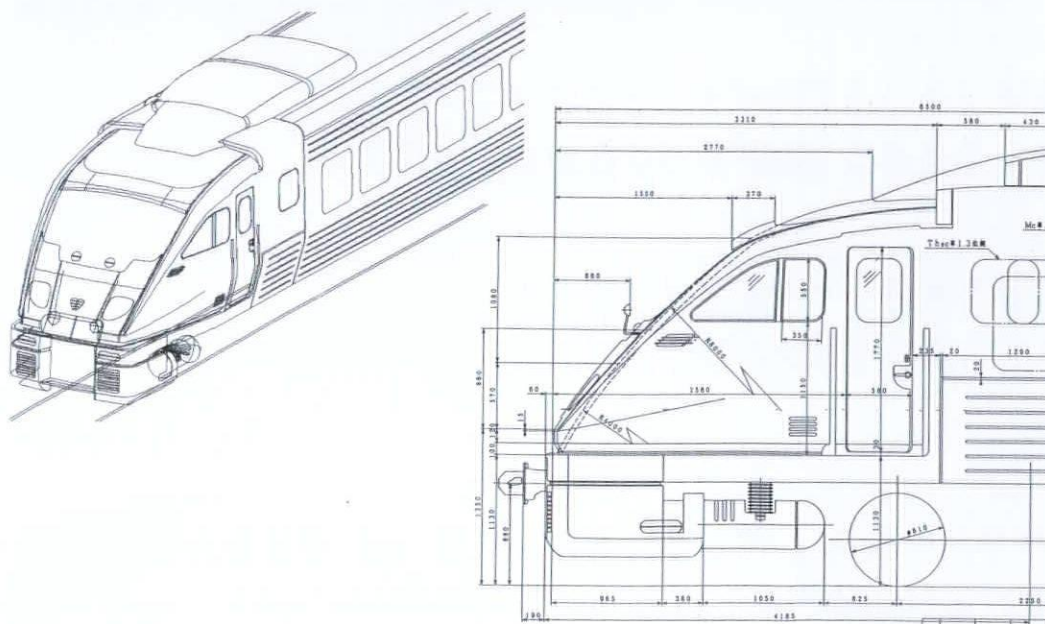




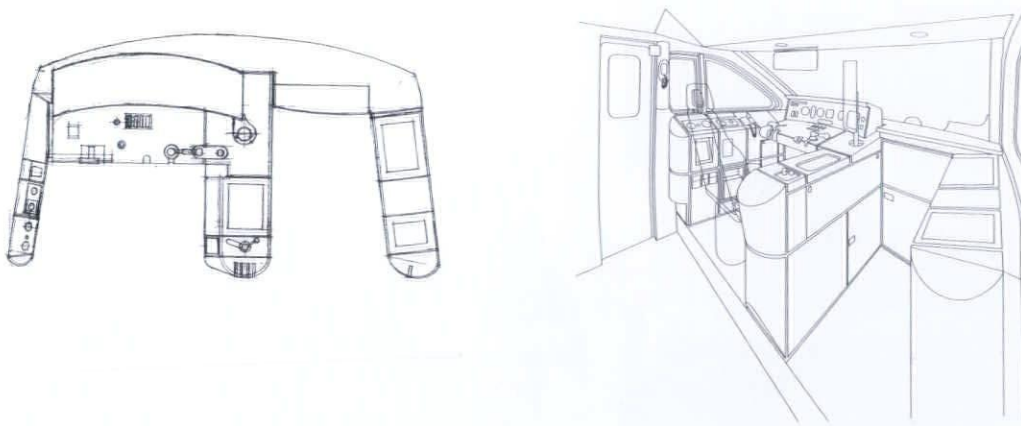
車両限界寸法の中での先頭車イメージスケッチ。イメージを正確に伝えるために、アクリルでコンタラインを表現し、再度3立面の上で検討、基本設計に入る。



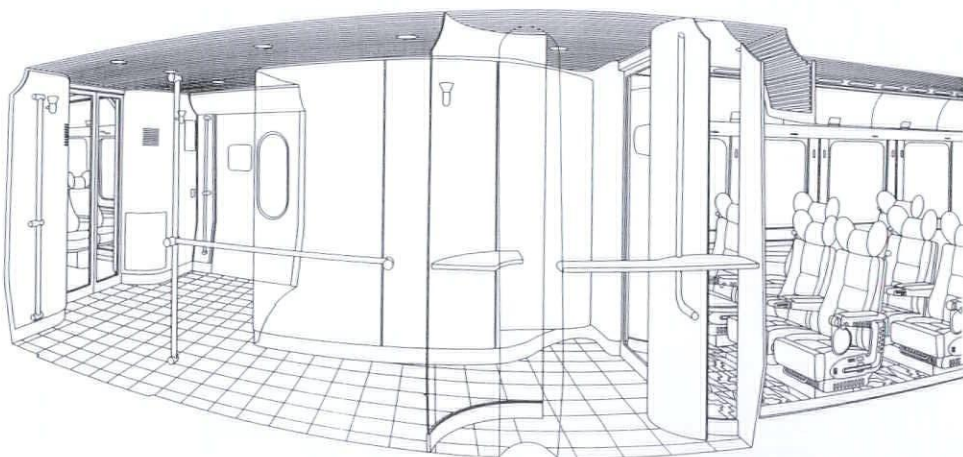
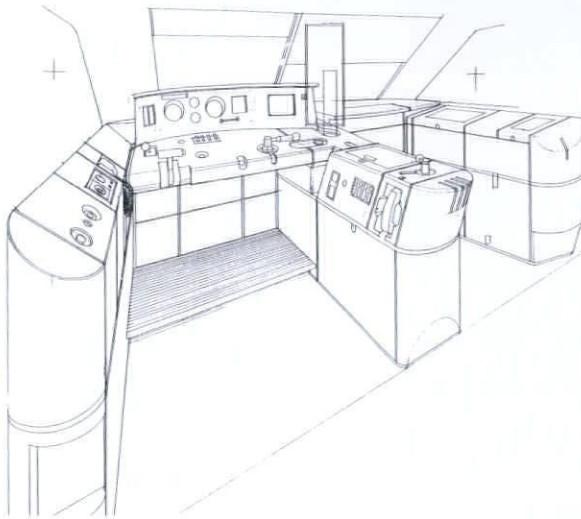
最終設計を基にモックアップを作成し、色彩計画と形状の詳細をチェック。さらに撮影したものを見ることによって、スケール感とバランスを確認する。



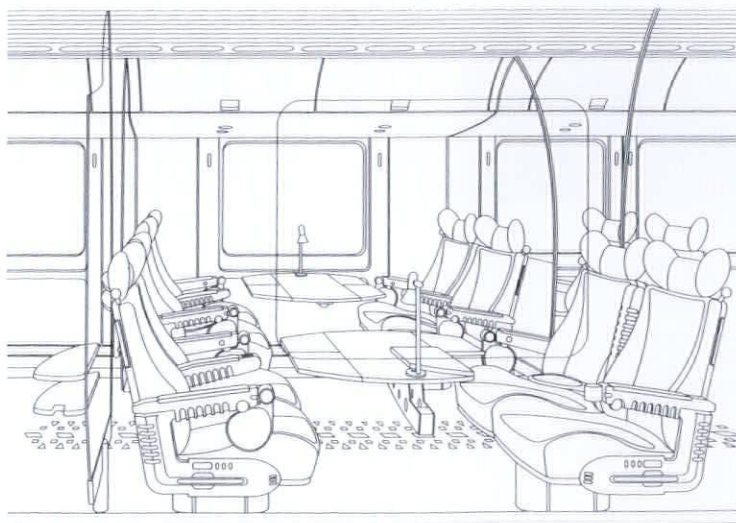
3立面・模型・写真からCADによる図面化へ。この段階で製作上の問題点が修正され、製作図面に移される。



コックピットのデザインはイメージからではなく、必要条件の整理整頓から始まる。機能・素材・形・予算とあらゆる条件をクリアすべく、混乱しながらもできるだけ多くの角度からレンダリングを重ね、3立面とパースで最終実施図面までもっていく。イメージしている形がはっきりと見えてくるまで何枚もパースを正確に描く。パースはその時点からすでに図面そのものになる。



グリーン車デッキのデザインの検討に正確なパースを描き、完成予想図の中で色彩計画・サイン計画・サービスシステムをチェックしてしまう。私たちにとって、パースは誰にでも正確に情報を伝えうるビジュアル・コミュニケーションである。と同時に、最終段階の広告展開にまで活躍する。



正式名称：クモハ883系
 空車重量：265t(7両編成)
 最大寸法：L21×W2.853×H3.45m(パンタグラフの高さを除く)
 最高速度：時速130km
 車輛編成：通常時7両座席定員：394人(7両編成)
 発注者：九州旅客鉄道株式会社
 設計者：水戸岡鋭治+ドーンデザイン研究所
 協力者：シティ建機工房
 高田洋一
 製作者：株式会社日立製作所(笠戸工場)



グリーン席からパノラマ・キャビンを見る



コックピットとパノラマ・キャビン



コモシ・スペース



センターブースと指定席



乗降口デッキとショーケース



身障者対応トイレ

迷い込んで「不思議の国」

博多から大分までは約2時間。九州初の振り子式特急は長距離列車というより、軽快なインターシティである。乗客の皆さんにはしばし、ちょっと違う世界で遊んでいてもらいたい。子供は子供らしく、大人は子供に帰って。コンセプトはワンダーランド・エクスプレス。旅への期待感をアミューズメントパークの楽しさでふくらませようという計画だ。

編成全体を街並みのように考えた。ゆっくり休むゾ

SD9512
90

ーンがある。仲間とたむろする広場がある。特に乗降口を広く美しくした。扉が開いている時以外は結構おしゃれなオープンスペースである。本当に「公園」の多い贅沢な街ができあがった。

見た目からはわかりにくい、座席まわりの充実に力をいれた。心地よいシート、テーブルが2つ、コップ受け、高さが変わるヘッドレスト、読書灯……2時間座席にへばりつくのもたまよし。

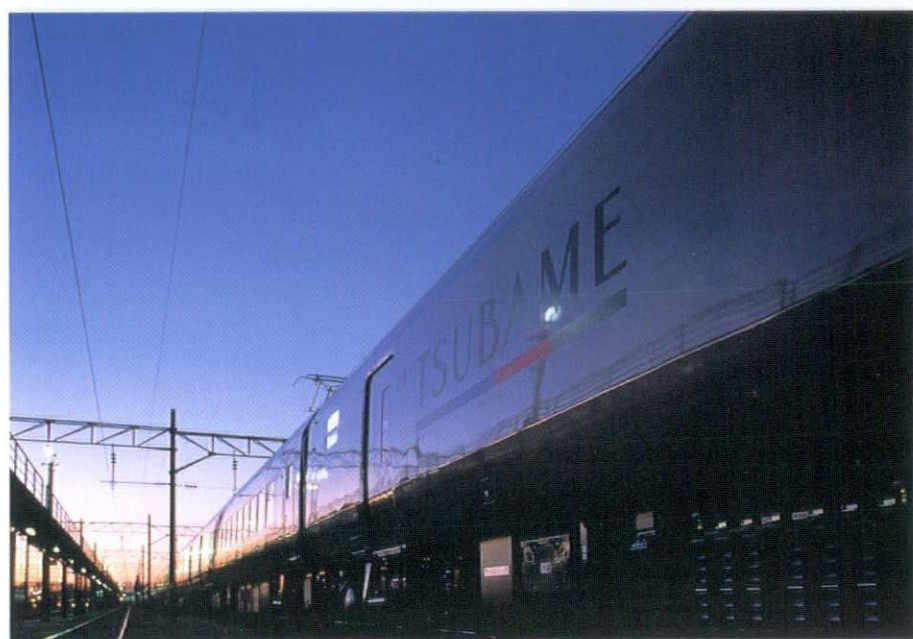
作業を進めていくうちにこちらの遊び心もふくら

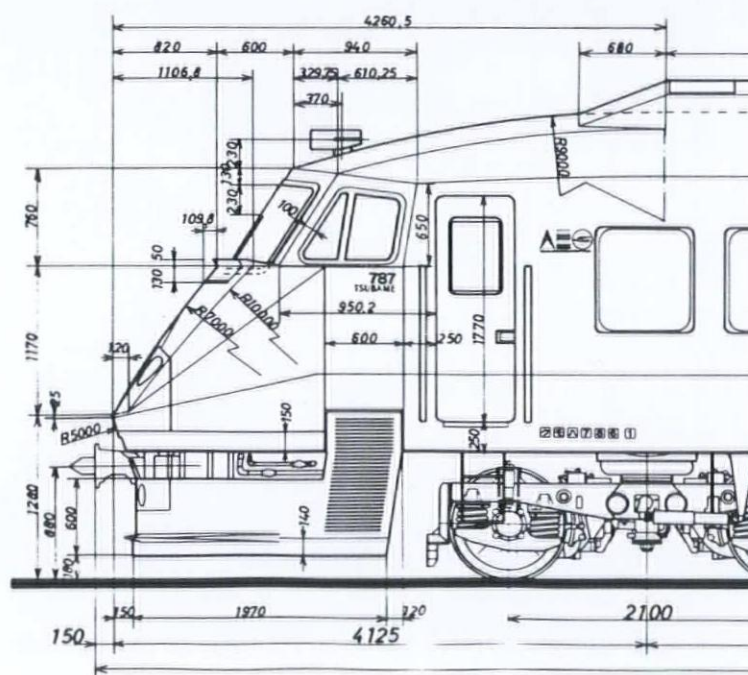
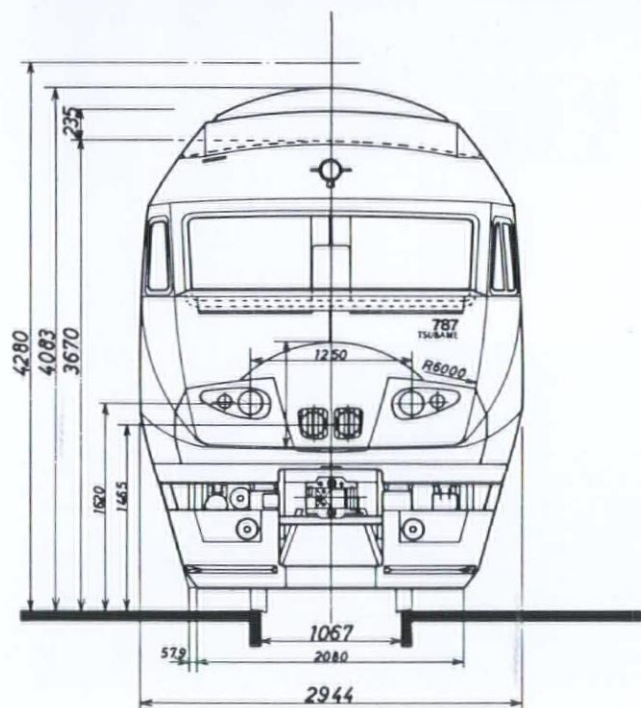
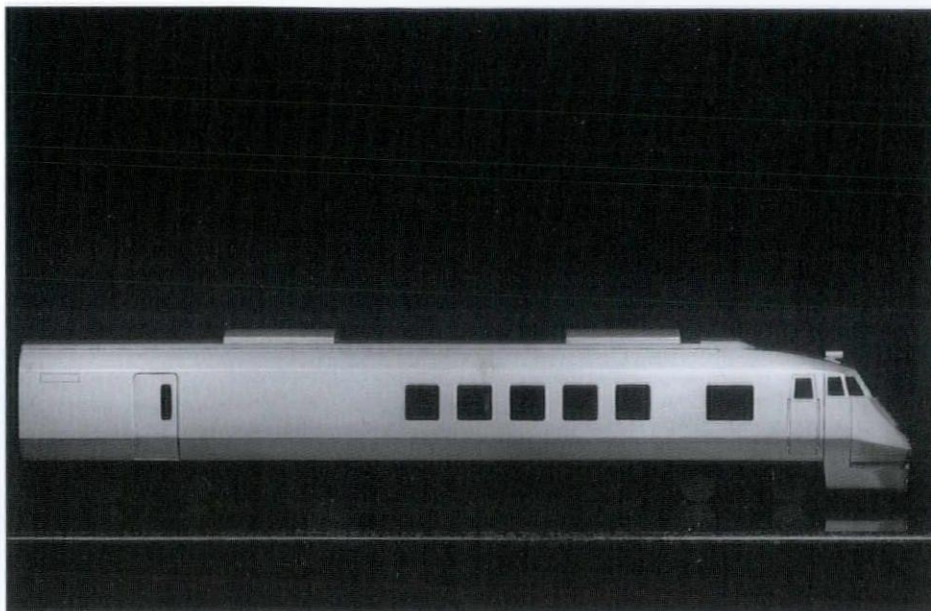
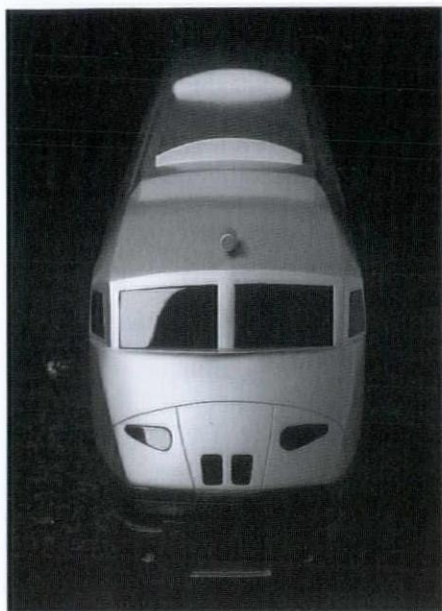
で、モダンというよりポップになった。車体のロゴやサイン、動物の耳のようなヘッドレスト。車庫で眠っているはずの真夜中も、「動物たち」のにぎやかなおしゃべりは続いているに違いない。

ふたつ目の特急ということで、ガラスなども大胆に使った。子供っぽい印象だが、反面「大人」になった部分もあるらしく、なぜか落ち着くという声を聞く。

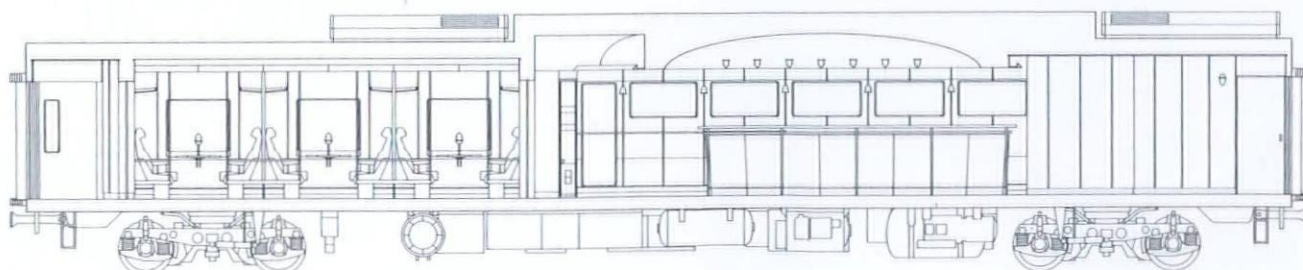
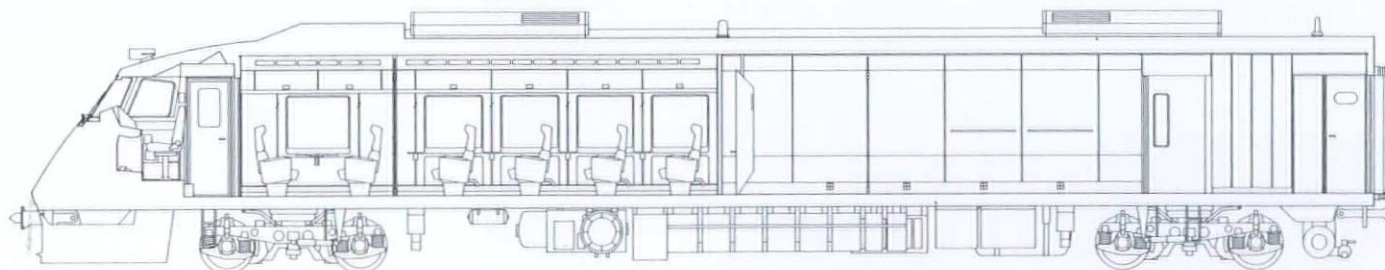
特急くつばめ

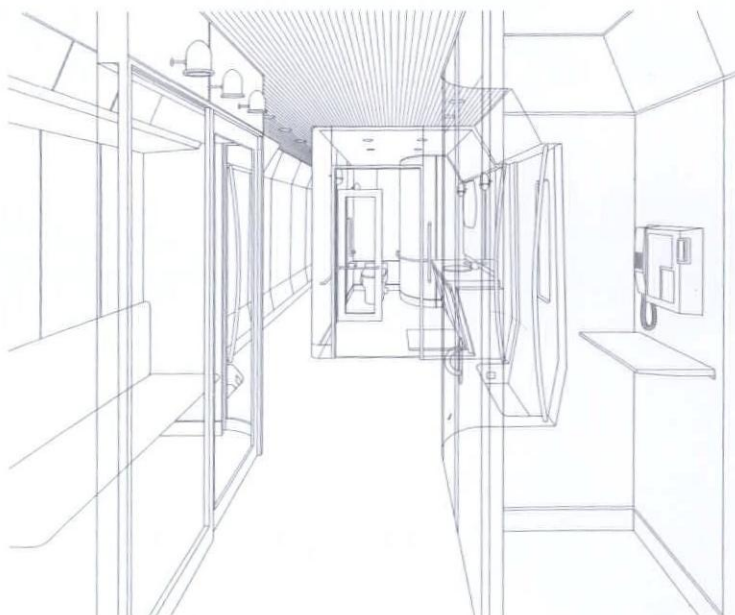
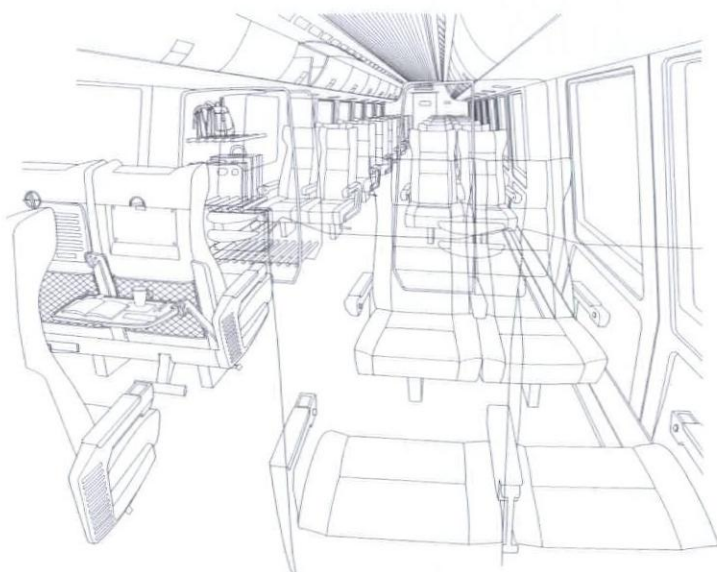
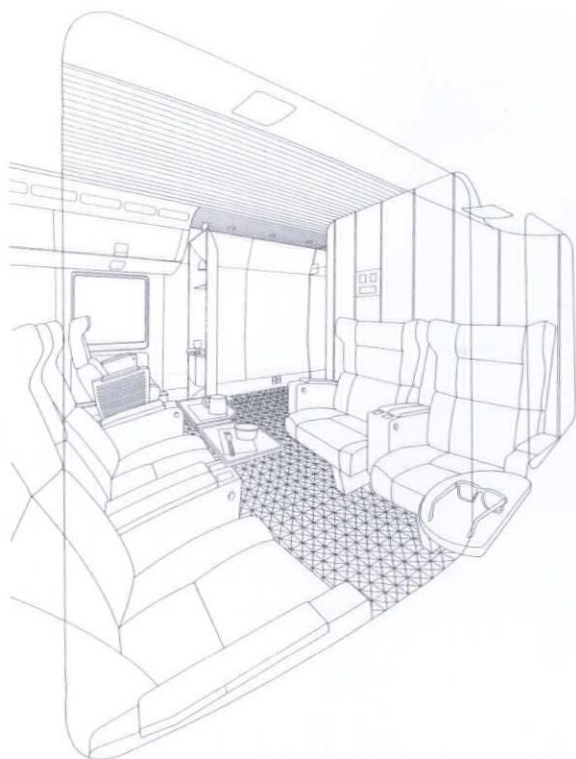
Tsubame express 1992





作図：レイルロード(T.Takama)





来るか「大鉄道旅行時代」

列車が入線する。ゆっくりと視界を圧倒していく雄姿。ホームに立つだけで、旅人のように胸が高鳴る。特急列車を丸ごとデザインするという僥倖に恵まれて、旅心を誘う車両、鉄道旅行の格調高き「愉しみ」を目いっぱい体現する列車を作りたいとまず思った。

「いかに速く効率よく運ぶか」もよいが、移動そのものを積極的に楽しみたい。公共輸送のデザインはまだまだだ。列車はもっと美しくなれる、そしてもっと豊かな時間を提供できるはずだ。居住性もサービスもホテルの水準を目指した。レイアウトでは徹底して乗客の立場にたった。

ビュッフェがある。飲食は旅の欠かせない楽しみだ。多目的スペースとしてベンチを設けた。座席を離れて車内を動き回れることは鉄道の強みである。女性にも敬遠されない清潔で美しいサニタリー、それぞれの旅のニーズに応える多様な座席配置。

「つばめ」と、往年の名門列車の名を冠することになったが、決してレトロではない。電解着色のアルミのモダンな素材、ガラス、石、木などの天然素材、シートとカーペットにはオリジナルパターンを計23……要素の豊かさと細部への無数のこだわりが「快適」を紡ぎだす。鉄道は21世紀の旅の主役、「つばめ」はそんな予感のモダンな表現である。

正式名称：クモロ787系

空車重量：361t(臨時9両編成)

最大寸法：L21.2×W2.948×H3.67m(パンタグラフの高さを除く)

最高速度：時速130km

車輛編成：通常時7両(臨時9両)

乗車定員：最大420人(臨時9両編成)

発注者：九州旅客鉄道株式会社

設計者：水戸岡鋭治+ドーンデザイン研究所

協力者：シティ建築工房

高田洋一

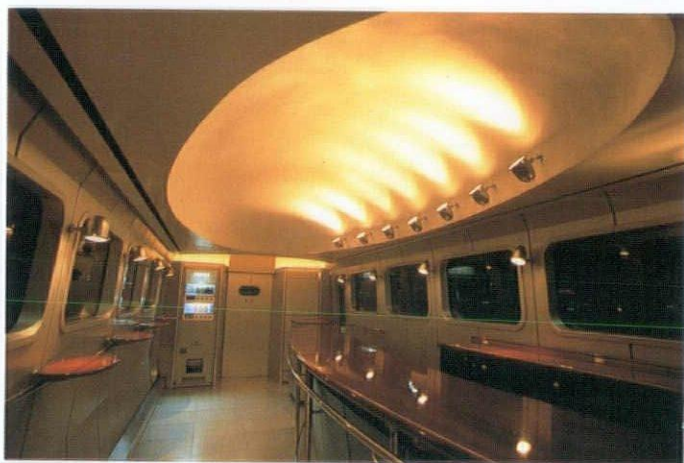
製作者：株式会社日立製作所(笠戸工場)

近畿車輛株式会社





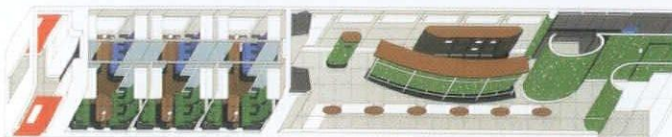
グリーン車サロンコンパートメント



ビュッフェ



グリーン席





デッキよりグリーン席を見る



普通車センターロッカー



マルチ・スペースと身障者トイレ



普通指定セミコンパートメント



水戸岡鋭治

イラストからデザインへ

デザイナーになるために、人はどういう手順を踏むのか。高校を出てすぐに内装デザイン会社に入り、以後パースを描き続けて、いつの間にか公共空間デザインの仕事を提供されるようになった私は、自分の肩書きをいまだ決めかねている。だから、94年度毎日デザイン賞に「水戸岡鋭治のインダストリアルデザイン」という件名で最終戦?にノミネートしていただいた時は、すがるものがひとつできて、素直に嬉しかった。それでも、やはり、私は先ずイラストを描く職人である。

イラストを見て私を抜擢して下さった方々のお陰でデザイナーへの道が拓かれたのだが、列車や駅という公共の空間をデザインすることに、生意気にもさほどの不安はなかった。「こんなのができたらいいな」という絵のイメージは頭の中でいくつでも描ける。美しいものは数限りなくある。仕事は、したがって私の絵の中での取捨選択が第1。それらをひとつひとつモノに形づくるのが第2。そして第3は、そこに人を容れ、人に助けられて完成する私の「立体画面」のために、デザイナーの矩を越えたおせっかいを焼くこと。

第1については、予算をはじめとする諸々の制約があるから、死守すべき「絵柄」を別にすれば他はおのずと諦めがつく。公共度が高ければ高いほど要求は多岐にわたり、チェックは微細に及んで、しばしば立ち往生。第2段階ではかなり強気になる。私は家具屋の息子なのでモノをつくる苦労もわかるつもりだが、同時に「もっとできるはず」と押し通す図々しさもある。「ヘンなモノをつくってみるのも面白いじゃないか」と説得にこれ努め、我ままをかなり聞いてもらった。そして最後は「誰にどんなふうに使ってもらえるか」にこだわることである。一作、気前よく放り投げて、「あとは君の感性に任せよう」とは決して言えない。車両や駅舎というハードな器からこぼれた「落ち穂拾いワーク」と勝手に名付けて、弁当や制服や広告宣伝、果てはサービス要員の応対に至るまで口出しせずにはいられない。思いきりの悪さ、素人のおせっかいが、私のデザイン作業の仕上げとなる。

消耗されるデザイン

あらゆるモノのデザインは公共的な側面をも

つとはいえ、公共空間には利用者の側に選択の余地がない。利用者の本当の満足度は量り難く、デザインへの言及となれば、ほとんどが好みの問題に収斂する。「用の美」というデザインの本質をついた簡潔な言葉は、日常の手のひらサイズモノについて語る時、きわめてわかりやすい。例えば、気のきいた味付けの、つましい道具による「遠慮がちな付加価値の表明」というように。醤油差しが醤油差しであるように、そうした小さなモノの「用」の途は不動であり、多彩な「美」の効力は軽々と表出する。

スケールが違うだけで、車両にせよ建築空間にせよ、デザインはまさしく「用の美」の追求であるけれど、公共空間の「用」に期待するところは人それぞれ、しかも「時代」とも呼べぬ短期間のうちに大きく変化する。先日、新幹線に乗って誠に感動的なシーンに出会った。下車する中年男性数人が、飲み物の空き缶やゴミをまとめた袋を手にしていたのである。私のようなオジサン達といえば、車内でいぎたなく眠る、タバコの吸い殻や新聞や空き缶をそこらに平然と捨てる……と散々なイメージで語られることが多い。ゴミ問題の深刻さから、またたく間に公共マナーが向上したのか。また、喜ばしいことにあちこちで車椅子用トイレの新設が目につく。普段は施錠しているところもあるのは情けない限りだが。

92年に開業した「つばめ」で、私はトイレを男女別とし、車椅子対応でチェンジテーブルも備えた真空式トイレを設けたが、中には洗面室があればトイレは男女一緒でいいという利用者もいる。ビュッフェ無用という意見は当初から多かった。いつか車内から大きなゴミ箱がなくなる日が来るのか、分別用に二分された形で残るのか、それも微妙である。利用する側のリアクションがデザイナーに正しく伝われば、次からは無駄を省くこともできる。最終的には利用者が本当に必要なモノを決める。デザイナーはそれらをあくまでも合理的に美しく形づくり、快適で楽しい空間と時間を提供できるよう努力するのみだ。

デザインがビジネスと切り離せない現状で、デザインに期待されるもうひとつの効果は「人寄せ」である。例えば「ソニック」には、車一辺倒の行楽から列車の旅に人々の関心を振

り向ける役目がある。メーカーとともに苦勞した椅子の座り心地はさて置き、一般には「派手で攻撃的なデザイン」と強調されるばかりだが、そのように取り上げられること自体は成功だと思っている。面白がってもらえることが何より大事な段階がある。それが終われば、デザインにはまた別な役目、次元がある。

公共デザインの使命は、人々より半歩先を進みつつ、人々の「平均的美意識」に挑戦すること、そして、人々がデザインについて語り、考えるきっかけを与えることではないだろうか。特定の「高感度な」層ではなく、ごく普通の老若男女に「こんなものもできるんだ」と感じてもらう。それを私はデザインの「底上げ作業」と称しているが、ワタクシの空間における過剰なばかりのトレンド志向に比べて、日本のオオヤケの空間の想像力の貧しさ・猥雑さは目を覆うばかり。超豪華市役所や公民館のような例はあるが、なぜか市民は金のかかり過ぎを謂っても、いいデザインか否かには言及しない。また、それをよいことに、既成のスタイルに当てはめるだけでお茶を濁したような作品もしばしば目にする。

確かに、社会に鍛えられ、歴史を生きのびてきた様々な伝統的様式は、和洋を問わずいずれも品格備わり、心地よく、落ち着く。だが、デザイナーの仕事は提案することである。人より半歩先を行く者として、その作品にはおのずと「斬新であること」が内包されていなければならない。例え「定番」を組み合わせようとも、どこか新鮮な驚きを感じさせることがデザインではないだろうか。

完結した、永久保存に耐えるデザインは人と時間によってつくられるものである。社会が成熟して「ひとまずこれでよし」という都市環境が整うまで、空間デザインはひたすら浮遊し、消耗される。モニュメントを建てるのと違って、常に変容させられることを宿命とする他ない。人々の新しい行動様式や必要な改修にいつもニコニコ、やすやすと応じられるよう、すべての面でフレキシブルであること。私は、あたかもポリシーなきが如く、間口あくまで広く、次なる段階に備えたいと思っている。

●みとおか・えいじ

リニューアル・デザイン

Renewal Design

特急〈ハウステンボス号〉 Huis Ten Bosch express 1994



特急〈ゆふいんの森2世〉 Yufuinomori express 1992



リニューアルの醍醐味

JR九州との初めての仕事は、かなり老朽化した車両のリニューアルだった。それが私にとって何よりのテストケースとなったのは、どう料理しても構わず、思いきって大胆につくれるからである。古いものだからこそこできることも多い。原色を使うのは、イメージチェンジのインパクトがあることに加え、比較的楽に上手に古傷が隠れる仕上がりのためである。機能的にはすでに遅れたものを「渋さ」とか「重厚さ」で包み直そうとしても、どこかうら寂しい。一度役目を果たしたものを色鮮やかにパワーアップして、再び送り出す醍醐味。どれもフォトジェニックということで、ホームではいつもちゃっかり記念撮影に収まっている。

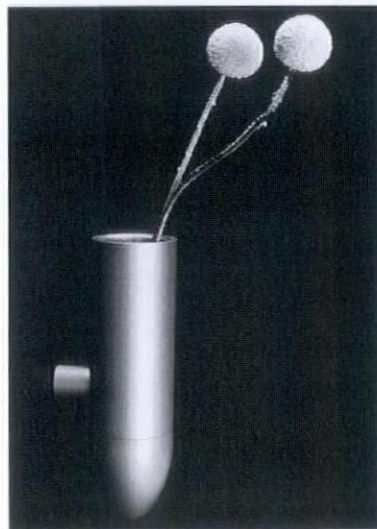
サイン・デザイン

Sign Design 〈Tsubame〉 1992



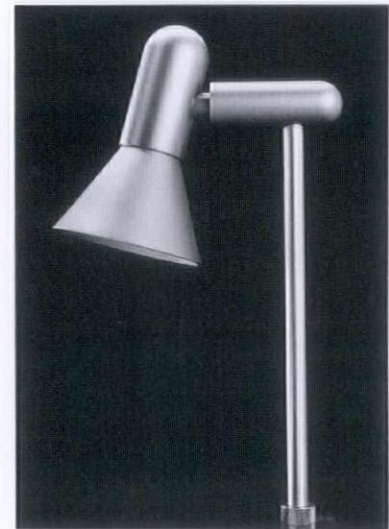
一輪挿し

Flower vase 〈Sonic〉 1995



テーブルランプ

Table lamp 〈Sonic〉 1995



高速船<ビートル2>

Beetle2 1991



わずか3時間の大航海

なぜビートル、なぜ2なのかと問う向きもあろう。実は、この前に全身真っ黒・前代未聞のジェットフォイルをデザインし、海飛ぶカブトムシ「ビートル」と命名した(現在は休航中)。さて、B2は博多と韓国の釜山港をわずか3時間弱で結ぶ。旅は国内旅行並みの気楽さでも、いざ外洋へという期待感には応えたい。由緒正しき客船らしく、船体は黒白赤の配色にした。船室に連絡船の印象はない。白を基調に明るく、ちょっとラグジュリアスでもある。



バス<レッドライナー>

Red Liner 1989



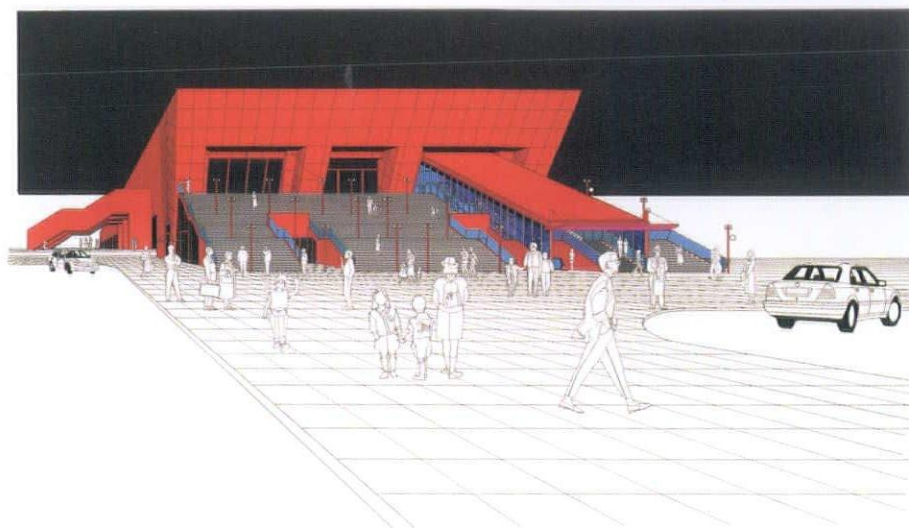
街に「赤い衝撃」

バスといえば「薄ぼけた中間色にストライプ」が相場であったが、JR九州のコーポレートカラーである赤一色でいこうと即座に決めた。ロンドンのバスに近い赤、計算しつくされ、愛され続けるあの赤である。室内はモノトーンでまとめ、コントラストを強調した。横腹に大きくロゴと数字を入れた鮮明なイメージに、街行く人が振り返る。レッドライナーは、その後の485系のリニューアル「赤い特急」シリーズの先駆けとなった。



JR九州西鹿児島駅計画

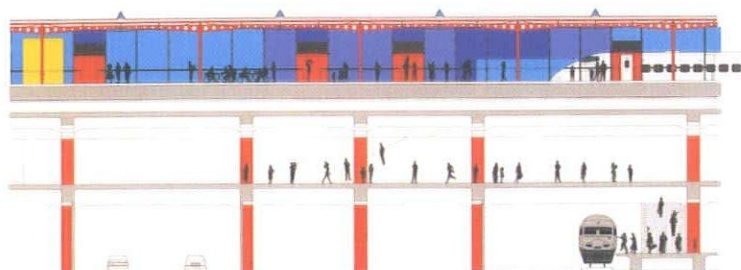
JR Kyushu Nishikagoshima Station Project 1995



街と視線を交わし合う駅

鉄道のデザインは車両だけではなく、駅のコncourseなどは随分立派になってきたが、ホームについてはデザインに「見放された」感さえある。新幹線用の新しい駅のプロジェクトと聞いて、ホームそのものを美しくデザインし、それを駅の看板にしたいと思った。提案したのは吹きさらしでないガラスボックス型である。冷暖房が効き、ショッピングや飲食も楽しめ、何より安全。街から見上げれば楽しい旅のショーケースでもある。

地元の人が誇れるようなオリジナリティのある「駅の顔」を演出するために、西欧の建物に見られる玄関前の大階段「スカリナータ」を提案した。陽光あふれる階段は上り下りするためではなく、人が座り、語り合い、花を飾って、南国の街の舞台になる。「スカリナータ」の下は天井の高さに応じて、小さな宝くじ売り場からショッピングアーケードまで、まとまった商業空間になる。街の隘路をはさんで小売店が軒を連ねるような風情がほしい。



堀内広治(新写真工房)

資料提供
九州旅客鉄道株式会社
株式会社JR九州エージェンシー
写真提供
林十郎
株式会社JR九州エージェンシー
株式会社スタジオ・バク

木村一男

近頃、鉄道のデザインが注目を集めている。8年前国鉄の民営化が行われJRとなって新しく発足して以来、各社が競って独自のデザインをもった車両やサイン、駅施設などを次々に作り出し始めたことがその要因である。その影響はJRばかりでなく、在来私鉄にも広く及ぶところとなった。

鉄道におけるデザインを考える時には、ロンドン地下鉄の فرانク・ピック (1878-1941) を忘れる訳にはいかない。副総裁まで務めた彼は積極的にデザインの導入を図った。ポスターからサイン、車両、建築までトータルなデザイン施策を繰り広げた先駆者である。彼の功績を記念して、今もロンドン・コベントガーデンのロンドン交通博物館には彼のコーナーが設けられている。

戦後、国有化により新しくスタートしたイギリス国鉄は、1964年、ダブルアローと呼ばれる新しいアークの採用をはじめとする一連のデザイン政策をスタートさせた。アメリカのニューヘブン鉄道での試みもあったが、本格的なデザイン活用策はこれが初めてである。その著しい効果に注目したヨーロッパ各国の国鉄は次々にデザインの導入に踏みきった。1971年にデザイン・ディレクターを決めたデンマーク国鉄もそのひとつである。

現在、欧州各国鉄のデザイン部門の研究・交流組織として「ワトフォード会議」(ワトフォードは最初の会議が行われた、イギリス国鉄の研究があるロンドン郊外の地名)があり、定例会議を催すほか、優れたデザインの車両、駅施設や広報活動に与えられる「ブルネル賞」を制定している。最近では日本やアメリカも参加し、昨年水戸岡鋭治氏によるJR九州の787系(つばめ)も、長距離列車部門で受賞している。その時、総会賞が贈られたのは

スイス国鉄であった。

これまで総合的なデザイン政策を熱心に展開してきたヨーロッパの各国鉄であったが、最近進められている民営化による運営体の分割などによって若干混乱が見られるところもあり、民営化によってデザイン導入に拍車がかかった日本と較べて皮肉なことである。

列車のデザインでは各国鉄のデザイン部門のほか、フリーランスデザイナーが参画する例も多く見られる。一連のTGVを手掛けているフランスのロジェ・タロンのほか、ドイツのアレキサンダー・ノイマイスター、ポルシェ・デザイン、イギリスのディビッド・カーター、ジョン・ガラード、ベルギーのフリップス・ニールマン、ノルウェーのテリー・マイヤーなどが、高速列車から地下鉄や路面電車まで、多くのデザイン開発に関わっている。話題のバリ、ブリュッセルとロンドンを結ぶ「ユーロスター」は政策的配慮から英、仏、ベルギーの3カ国のデザイナーが担当した。

日本とヨーロッパとのデザイン開発におけるもっとも大きな違いは、その開発期間の長さだろう。数年前だが、香港地下鉄路公司から空港アクセス列車のデザイン開発の企画書、見積書の提出を求められたことがある。まず第1段階として実物大のモックアップを作って、実際に人々が乗降する実験をした上で、扉や荷物置場の配置を決めること、第2段階がそれに基づく車内インテリア・デザイン、最後が外観デザインと運転台という順序である。日本ではまず外観となる。

こうした開発ステップの違いもあって、海外では通常、日本の3~5倍の開発期間がかけられている。日本では企画から試運転まで1年~1年2カ月というケースも珍しくない。それは日本の技術開発のレベルの高さを示す

例でもあるのだが。ドイツのICEの開発では、6両全車のモックアップがつくられ、デザイン検討が成されたほどだ。日本では1/3~半車程度に留まる。

高速列車では、TGV、ICEらの第2世代の開発が始まった。オール2階建TGVデュプレクス、これまでの集中動力方式をやめて新幹線と同じ分散動力方式に変更したICE2の試作編成がすでに登場している。TGVデュプレクスに代表される2階建車両の開発も活発で、オランダ国鉄のインターシティ、シティナイトラインと名付けられた2階建寝台列車が運用を始めた。近郊用ではデンマーク国鉄の通勤電車が異色だ。車体を10mと短くし、車体幅を3.6mと広げて大きな車室空間をつくらせて片側3人掛の座席配置を可能としている。

一方、路面電車にも注目すべきものが多く、バスとともに超低床化を競っている。当初は中央部のみを低くしたものが多かったが、単輪支持、単輪駆動という複雑な機構を採用して、全面低床化を図ったものが生まれている。中でもフランス・ストラスバークのそれは、宇宙船を思わせる外観デザインとともに素晴らしい。郊外へ出ると線路間には芝生が植えこまれ、まるで緑のカーペットの上を走るような具合である。環境も含めたトータル・デザインだ。

先に述べたデンマーク国鉄の通勤電車は、すべての材料をリサイクルできるものにするという。これからの交通体系の中でも、鉄道はますます大きな役割を担いつづけることだろう。そこでのデザインの果すべき使命もまた大きいのである。

●きむら・かずお/国際デザインセンター



フランス・ストラスバークの路面電車、94年11月開通

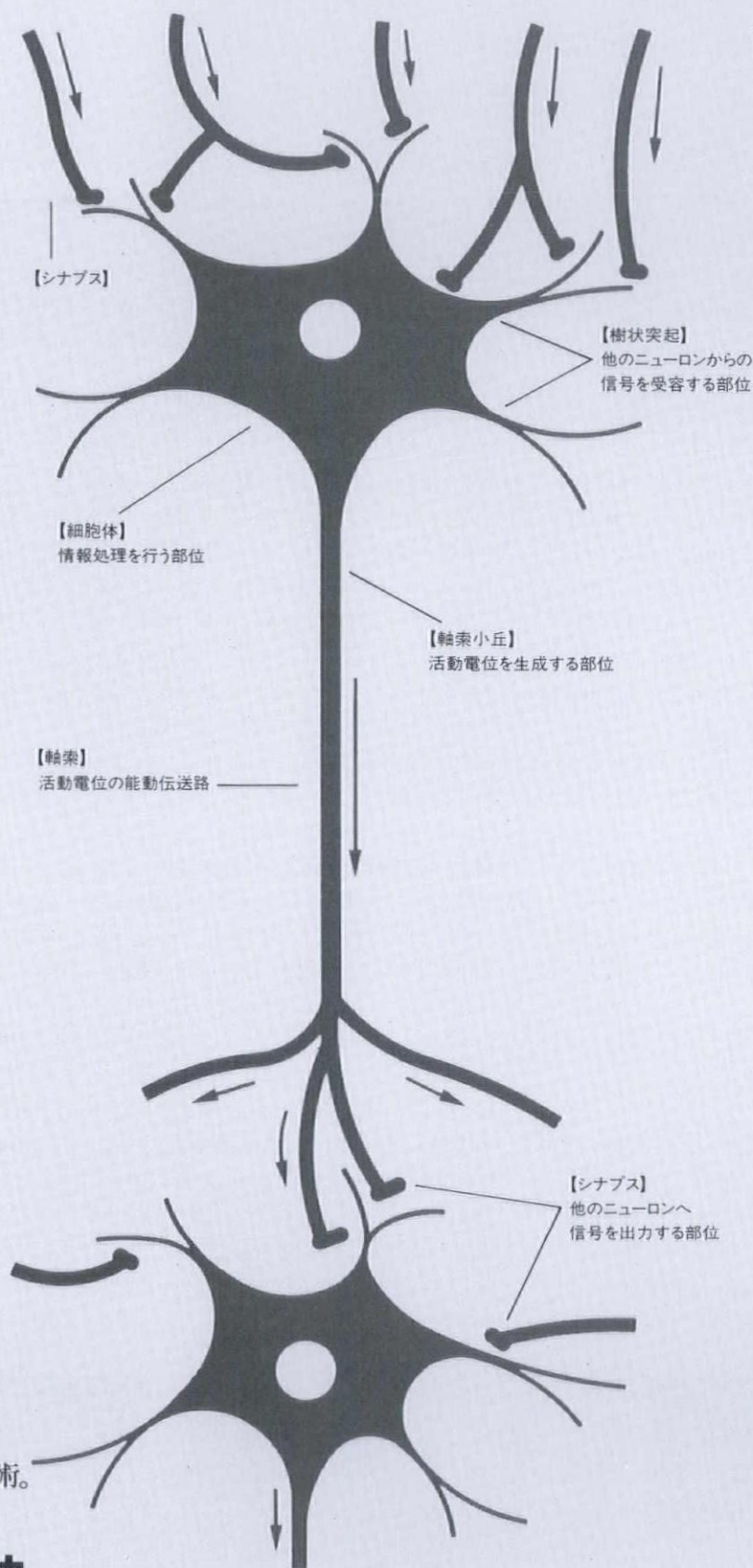


デンマーク国鉄、新・通勤電車の車内モックアップ



オランダ国鉄オール2階建てインターシティ

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-35562113 51

時代の呼吸に応える技術。



東 熱

「生命のある都市」の可能性

安藤忠雄建築展「明日へ—震災復興と大阪湾ベイエリア—」より

安藤忠雄建築展

会期：1995年10月14日(土)～11月26日(日)

会場：サントリーミュージアム[天保山]

建築が「都市に形態を与える」

今回の展示は、震災復興計画と他の完成した建築や現在進行中の関西におけるプロジェクト及び海外プロジェクトに分けられている。このことによって、かえって我々は、震災によってもスタンスを決してかえない安藤氏独自の建築との向き合い方に気づかされる。

提案された計画は神戸市東部臨海地区の工業地帯を対象とした「海の集合住宅」と、宝塚市内の丘陵地を対象とした「丘の集合住宅」である。特に東部臨海地区は、現在仮設住宅に避難している避難住民の将来受け入れ住宅として3万人の新都心づくりが急ピッチで進行している場所だから、その提案の着眼点の良さには驚かされる。これを彼は1月17日の震災直後から誰に依頼されることなく事務所員を総動員して作り始めたという。

「海の集合住宅」では、住まいを中心とした7000戸の集合住宅が提案された。住戸の構成は低層、中層、高層を一体化し、その間に階段状のオープンスペースが組み込まれている。低層には高齢者が専有の中庭をもって住み、中層には屋上庭園をもつ家族型住宅、高層棟はツインの単身者用住宅である。「丘の集合住宅」もほぼ同じ発想で、ここでは丘の緑が屋上庭園のあるセットバック住宅に浸透して行くような配置となる。

一見すると、まるでウォーターフロントや山岳地帯に立つ典型的なリゾート建築のような明るさと空間構成の明解さがある。

ここで共通しているのは、あくまで建築が「都市に形態を与える」という姿勢だ。そこには六甲の集合住宅以来、彼が手がけてきたふたつの都市形成手法が見て取れる。ひとつ

は、単体としての建築を都市スケールに拡大すること。それは「壁」を環境に挿入することによって規定される住まいの領域を単位空間とし、これが直行座標の空間軸に沿って増殖するか、一部の空間軸をずらし重ね合わせ、均質な空間構成に新しい骨格と動きのある形態を挿入する方法である。

第二に、「ステップ」のレベル差によって、都市の広場を発生させること。この方法は米国のフリードバーグのようなモダニズム・ランドスケープアーキテクトにより試みられてきたが、安藤氏の場合は常に方向性のある「ステップ」である。それは囲われなく一方の海に開いている。格子状に植えられた樹木とこの「ステップ」が重なり合って、都市に挿入された「壁」の強い境界感覚は消され、公園ではなく広場が果たすであろう未来都市の骨格としての役割を予感させている。ここには、都市を建築的につらえから生みだそうとする彼独特の空間造形原理が強く表れている。

震災から安藤氏が見たものと可能性

震災によって安藤氏が見たものは何か。いつか彼はこのプロジェクトに込めた思いを「生命のある都市」と「参加できる都市」という言葉で語ってくれたことがある。生命とは、樹木のような生き物を育てていくことで、人の思いでつながれた都市のことだ。この街は様々な職業と世代、家族構成の人々が交流できる場所にしたい、街の公園の管理もここに住むお年寄りが日当を得ながら参加できればなおいい。そして、その管理事務所こそ街が誇れる立派なデザインであってほしい、と。ここには、都市に大きな骨格を与える理念先行の姿勢はない。被災者の眼から直感的でプ

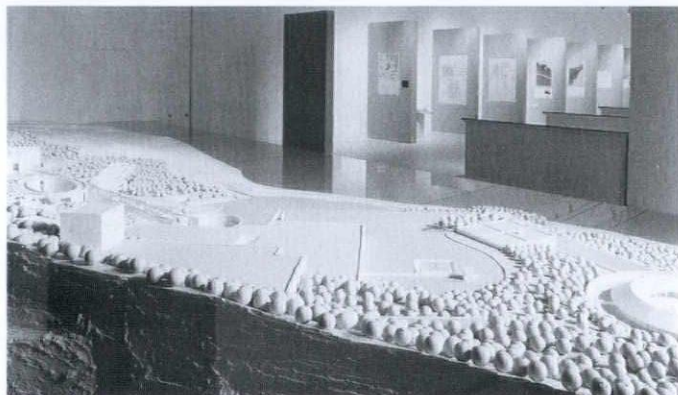
ライベートな生活のディティールを発見し、そこからパブリックな都市への可能性を引きだそうとする姿勢がある。

ここで重要なことは、その結果都市の中に呼び込まれた具体的な空間の質のことである。展示されている他のプロジェクト、淡路「夢舞台」、六甲の集合住宅、サントリー・ミュージアム、真言宗本福寺水御堂、直島コンテンポラリーアートミュージアム、さらにベネトンアートスクールなどに共通しているものは、徹底して形態を寡黙にすることにより、囲われた建築の領域に立ち現われる光や影などの現象へと、人々の関心を移行させるデザイン手法であった。それは建築に輪郭を与える自然によって精神の高揚を目指した空間であり、そのラディカルさは成功している。

これらの空間は、住む人または使い手が選択できる空間であった。ところが多くの高齢者や多様な価値観をもつ人々が住む震災復興住宅では、住み手が住宅の質を選択できない。ここに現在の公共住宅が、選択の多様性という新しいプログラムを必要としている「状況」がある。その解決方法こそ、安藤氏の空間の本質にある「自然」が人間と都市との間でより大きな触媒の役目を果し、今日的な意味でのパブリック空間となることではないだろうか。その時は、「建築が」ではなく「自然が」都市に形態を与えることになるだろう。

震災から9ヵ月後の展覧会において私達が目にしたのは、安藤氏がこれら個性を封印されがちな公共住宅や都市のパブリック空間に、人間の場としての意味を持たせる新しい闘いをはじめた後ろ姿であった。

●佐々木葉二／ランドスケープアーキテクト



海の集合住宅

photos : T.Ando

トロントの四畳半

4+1/2 The Internal Landscapes of Tokyo展より

9月17日から11月26日まで、トロントのハーバーフロントセンターにおいてTODAY'S JAPAN（現代日本芸術祭）が行われていた。この芸術祭はカナダにおける史上最大の日本芸術イベントといわれるように、パフォーマンスアート、ビジュアルアート、工業デザイン、現代生花、映画、音楽、建築など多様なプログラムを持ち、その中のひとつとしてこの展覧会は企画された。

全体のキュレーションは建築・都市ワークショップが行い、参加した山本理顕+上野千鶴子、都築響一、ATE（キュレーター、コンピュータアーキテクト、デザイナーのユニット）、ジョン・シニア（カナダ人建築家）、伊東豊雄の5チームには2.7m×2.7mの空間が用意された。

この展覧会で私が最も注目したのは、それぞれの案が東京における個人の内的な心象風景と、日本の伝統的な生活空間である四畳半を重ね合わせ、一体として表現しようとする点であった。

都築チームは、スタイリストの女性が代官山で数カ月間実際に生活した四畳半の部屋を、部屋の形から食器やポスターなどの小物にいたるまで忠実に会場に再現し、ATEは黒い木製フレームの中に本物の畳を敷き詰め、東京の大学の研究室とインターネットで結び付け、パーソナルメディアによって時間や距離を超えて広がりつつある個人の部屋を展示していた。ジョン・シニアは東京ではもはや見ることでできない大自然のメタファーとして、カナダの森から切り出された一本の大木をガラスで覆われた四畳半に入れ、日本と西欧の生活スケールを対比させていた。そして、四畳半を時間や人、物の通過点ととらえ、廊下状の空間の壁に様々な時代の家族写真や東京の交差点の雑踏の映像を映し出していたのが山本・上野チームであった。

我々伊東チームは7つのテーマによって東京を切断し、その切り口の映像で四畳半を充填させることで、個人の空間と都市の境界が曖昧になり、身体とイメージの世界が混然となった東京と四畳半の関係を表現しようと考えた。このテーマに沿ってサンプリングされたスライドを、抽象的に再現された個人の部屋越しに外壁のポリカーボネイト製中空ハニ

カム板に映写した。

中空ハニカム板は構造性能と同時に、映像の解像度を上げるために二重とした。これがある種のプリズムのような効果を生み、窓のようにはめ込まれた調光液晶シートや、フェイドする映像と相まって、この薄い板に実在以上の奥行きを与え、さながら東京において様々なメディアからにじみ出るエキスを固めた2.7mキューブのゼラチンのようであった。

それぞれが東京の全く違った心象風景を個人の部屋に再現しようとしていたわけだが、結果的にお互いが表現しなかった部分を補完し合うようになり、展覧会全体としてあるまとまりが生じたようである。これは展覧会のテーマのおもしろさによるところが大きいと思う。

準備を手伝ってくれた現地スタッフの頑張りと、ハーバーフロントや国際交流基金の人々の努力によって、9月28日からの展示を大盛況で行うことができた。この一生懸命さからTODAY'S JAPANが押し付けられたものではなく、カナダの人々による手作りのものだと感じたのは私だけではないだろう。

●福島加津也／伊東豊雄建築設計事務所

Today's Japan
4+1/2 The Internal Landscapes of Tokyo
会期：1995年9月28日～11月26日
会場：Harbourfront Centre

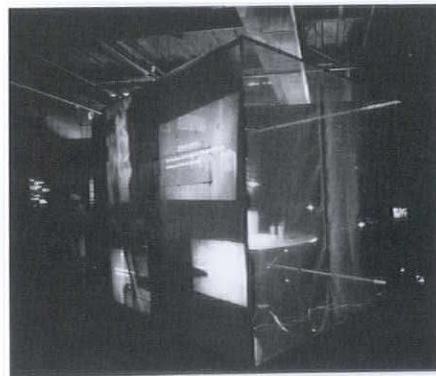


photo: K. Fukushima



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の
三建設備工業株式会社

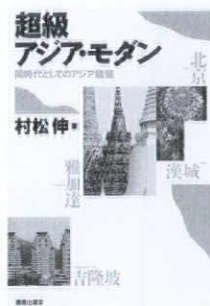
本社 東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

『超級アジア・モダン
——同時代としてのアジア建築』

村松 伸=著

四六判 270頁

鹿島出版会 2575円



評者＝

青井哲人

「建築のアジア」を超えて？

北京、上海、香港、台北、ソウル、シンガポール、バンコク、ジャカルタ、クアラルンプール、ハノイ、そして那覇。これら東アジア、東南アジアの大都市の風景と、そこに生きる建築家に注がれた村松氏の眼差しが、この本にはつづられている。軽やかなフットワークと広いネットワーク、そして建築のみならず街ゆく女性のファッションから政治にいたる広い視野と観察眼。1年の3分の1をこれら諸都市との往復に費やしているという近年の村松氏は、アジア諸都市の動向と、とりわけ現代建築家の生きざまを広範に紹介することのできる、日本ではほとんど唯一の存在と言ってもよさそう。逆に、アジア研究の隆盛の中にあっても、それほど僕たちは近現代アジアを知らない。

そもそも著者のアジア熱は、中学生の頃、北京放送のラジオに乗った毛沢東思想が村松少年をすっかり「洗脳」してしまったことに遡るという。「西洋の近代が生んだ特殊な成果」に対するオルターナティブ、著者の言葉を借りれば「東方の建築力」の断片を探し求めること。しかし……と、この本の終章は著者の自己批判とも言うべき内容になっている。アジアをめぐる僕たちの認識やコミュニケーションに対して抑圧的に働く言説の諸制度についていかに批判的であり続けるか、それはつねに僕たちの課題だ。村松氏は、「東方の建築力」というような構えがすでに、その種の抑圧＝オリエンタリズムの一形態にすぎなかったかもしれない、そこへ陥らないためにも「旅を継続する」のだ、そして「建築のアジア」を超えようと思う」と本書を結ぶ。

だが、この本を読んだ僕の感想の中心を占めるのは、むしろ、ここに記述されている都市の急激な変貌の姿や建築家の営みが、ほとんどすべて、どこか既知のものとして見えてしまうことから来るやるせなさである。安易

な「東方の建築力」を回避したとしても、逆にもし、この本を読む時、近代建築史を先に経験している(?)僕たちが、似た悩みを抱えた後輩たちが次々と遅れてやってくるのを前方から振り返って試みているかのような感覚を伴ってしまうとしたら、それは最悪だろう。確かに、国や都市によって状況の差異はあって興味深い。しかし、それは既知の領域を水平に広げるだけのようにも思える。そして多分、これは著者の責任ばかりではない。

「そもそも本書の企図こそ、中国を含めた経済発展がその国の建築にもたらした変化を是とし……僕の立場はそここのところすでに決している」。これは、資本主義に迎合し、「後現代主義」＝ポストモダニズムすら流行する北京を前に、かつての村松少年を捉えた幻想を振り払う(いささかナイーブな)決意を書いた一文だ。しかしこの一文から僕は、村松氏が、救い難い既視感に対して、それを「是」とせざるを得ないという、ある種の諦念をどこかで抱きつつ、このアジア現代建築行脚の旅を行ってきたのではないかと感じた。

確かに、そのような既視感を、僕たちはいったん認めるべきかもしれない。歴史はもはや何も質的に新しいものをもたらさないかもしれない。今思えば、そんな状況からアジアへと眼を向けた人々が、そこでも既視感に襲われているというのが本当かもしれない。それに耐えられない者は、どんな形態であれ、オリエンタリズムに陥るだろう。

だが問題は、これらを前提とした時の、その先である。ラフに言えば、こうした文脈で、「他者」(ここでは「他者としてのアジア」)をいかに見出すかが問われている。これは言語の問題だ。僕たちは「旅を継続」しなければいけないが、それ以上に、旅の継続に耐えられる言語を鍛えなければいけない。

●あおい・あきひと／神戸芸術工科大学助手

Metropolitan Library

12月の評者＝
難波和彦

モダンな思想や文化が、明治以後の近代日本にどのように根を下ろしてきたかというテーマを追いつづけている。今回は、その概論と今後の展望に関する本を取り上げてみたい。とはいえ、どのような立場に立つかによって、見方は大きく異なっている。

いつも中立的な印象を持つのはダニエル・ベルの著書である。彼の『イデオロギーの終焉』(創元社、1969)は60年代の丹下健三やメタポリズムに大きな影響を与え、『脱工業社会の到来』(ダイヤモンド社、1975)は70年代のオイルショック以後の日本の産業構造の転換を先取りしていた。最近の『知識社会の衝撃』では「情報と技術」「イデオロギーと知識人」「現代と未来」の3部構成で、最近の世界の潮流を幅広く論じている。彼は技術と経済、文化と思想、政治という3層構造で社会を見る。本書の第3部に納められた「21世紀は『太平洋の世紀』か」

では、まもなく日本で開催されるAPEC(アジア太平洋経済協力閣僚会議)の歴史的な意義や、「近代化」がアジアにもたらす文化的影響について論じている。

『超近代の衝撃』はやや右寄り、新保守主義的である。伊藤氏は、第2次大戦から今日までのアメリカ、中国、ロシアの3大国の歴史を日本との関係で概観し、21世紀における世界の力と論理を予測しながら、その中で日本の役割について論じている。多角的な視点で議論を展開しているが、つまるところ、西洋対東洋という構図に基づく「ヨーロッパの時代の終焉」と「近代の終焉」の変奏である。

『龍の契り』は歴史書ではなく、書店でたまたま手にしたベストセラー小説だが、全体が同じような歴史観で貫かれている。1997年の香港の中国返還をめぐる英国と中国の確執に、アメリカと日本が介入して展開されるスパイ合戦で、エキサイティングな読

『これが建築なのだ』

OJ会=編

菊判 320頁

TOTO出版 1500円



評者＝

榎本弘之

地域への情熱

本書は象設計集団の設立メンバーのひとり、大竹康市の建築論集、及びスケッチ集である。1962年早大大学院に入学、U研究室を経て1971年に象設計集団を設立後、1983年にサッカーの試合中に急死するまでの21年間を、大竹は胸のすく勢いで駆け抜けた。建築が本来あるべき姿を熱っぽく語る60年代70年代の建築論は、死後12年を経て、もはや歴史の一断面の感もある。だが地域を、建築を語るたぎる想いは決して色あせることなく、むしろバブル崩壊後の強力なイデオログなき現在、いっそう力強く我々に迫ってくるようにさえ感じられてくる。

1960年代そして70年代——「若者」は自らのパワーに疑うことなき信頼を置いていた。打破すべき目標と実現すべきよりよき理想に對して、明確な理念をもち、改革をなすうるのは自らをおいて外にないと感じていた。安保闘争を始めとする学生運動は、その最も明らかな姿である。建築を目指す者にとっても、大きな限界を見せ始めていたモダニズムに對して、それを超克し、単なる形態の戯れでないより根源的なものを希求しようというエネルギーが沸々とわき上がっていた。何も大竹や象を全学連と同一視しようというのではない。しかし、より良きものを求めて躊躇することなく突っ走ろうというパワーには、共通するエネルギーを感じざるを得ないのだ。

多くの人々が硬直したモダニズムを乗り越える為の、新しい理念を求めて苦悩していた。あるものは非合理の世界へ踏み込もうとし、あるものは建築に外在的な言語学やアートにおける新しい概念を取り込もうとし、あるいは純粋な「建築性」を求め、個人的な世界認識を持って空間を把え直そうとしていた。こうした中で大竹康市は、吉坂研究室・U研究室での活動の中から、確実な手応えを得てゆく。U研究室では、大島元町復興計画に携

わる中から、「発見的方法」と呼ぶ方法論の端緒をつかむ。人々のための真の建築とは、深く地域に沈潜し様々な観察と思考の中から創造の糧を得る「発見的方法」によって生み出し得るのだ、という実感である。象設計集団を設立してからは、沖縄という濃密なコミュニティにおける一連の地域計画・公共建築において、大竹は、他のメンバーと共に様々な概念を組み立ててゆく。本書ではそれが11編にまとめられ、彼が早大産業技術専修学校にて行った講義名にちなんで「番外地講座」と名付けられている。

11の番外地講座各論は、主に、実際のプロジェクトの進行を大竹がレクチャーした文章を並べ、その中から、様々なレベルのキーワードや理念を浮かび上らせるという形をとる。沖縄の自然から読み取った「洞窟」の空間的イメージや環境構造線という概念、「露地の素」や「風の道」「呼吸する外皮」といった設計手法、いかに地域にとびこみ建築に取り組むかという地域論や自力建設論、複数の人間により密度の高い集団設計方法論、等々——そしてこれらはすべて真に人々の精神を解放する建築を作るための、現実的かつ精神的建築論へと昇華されてゆく。その語調はあくまで精神的で、「これが建築なのだ」と熱っぽく語りかけてくる。

象の建築がもつ独特のどろどろした体臭と相俟って、泥臭く、また特別な忍耐力が必要とされるこうした建築論は、一見特異な、周縁地域のものとも見える。時流からも隔たってしまっているかもしれない。しかし、本書を読み進んでゆくと、それでしか実現し得ない世界の大きさが実感され、方法の正統性があらためてわかるだろう。そして建築の素晴らしさのもうひとつの側面が、輝かしく見えてくるに違いない。

●えのもと・ひろゆき／建築家

物ではあるが、結局は中国と日本が協力し、ヨーロッパ文明に對抗するという構図で終始している。物語は錯綜しているが、発想の核は単純である。

『かくて昭和史は甦る』は極めつけの右派で、人によっては反動的とも感じるかもしれない。渡部氏の考えでは、現在一般に流布している日本の昭和史は、第2次大戦の戦勝国が捏造した「東京裁判史観」であり、米ソという大国の論理に屈した亡国史観である。氏は今こそ日本の近代化を見直し、新たな昭和史観を再構築して日本人としての「気概」（ヘーゲル）を取り戻すべきだと主張する。本書で展開されている昭和史解釈は、ほくたが教わったものの裏返しであり、大東亜共栄圏を頭から悪とみなすような先入観を少しは中和してくれるかもしれない。ちなみに、渡部はフランスシス・フクヤマの『歴史の終わり』（三笠書房、1992）の訳者でもある。

国際化と地域ブロック化をバランスよく捉えるダニエル・ベルの思想に比べると、上に挙げた日本人のそれは、どれも西洋対東洋、ヨーロッパ対アジアという図式の後者に重点を置き、近現代史を前者から後者への流れとして見ている。現実にはそのような世界の政治経済のブロック化が進行しつつあるとはいえ、これは戦前の「近代の超克論」のパターンの反復に見える。『批評空間II-7』所収の柄谷行人の「歴史における反復の問題」は、まさにこの問題について論じている。氏によれば、こうした歴史的潮流は「経済のグローバル化」と「国内の代表制の瓦解」がもたらしたもので、アジアや日本に注目する上記のような思想、すなわち地域主義は「現実には国際的な資本が支配する市場の形成でしかないものを美化する言葉」である。柄谷氏が言うように「歴史において反復されるのは、出来事そのものではない

く、形式である」。人は過去の形式に従って歴史を解釈し、その解釈に従って行動する。

『知識社会の衝撃』

ダニエル・ベル=著、山崎正和=解説

TBSブリタニカ 2000円

『超近代の衝撃——21世紀世界の力と論理』

伊藤憲一=著

東洋経済新報社 1500円

『龍の契約』

服部真澄=著

祥伝社 1800円

『かくて昭和史は甦る』

渡部昇一=著

クレスト選書 1800円

『批評空間II-7』

浅田彰+柄谷行人=編集

メトロポリスVSアーキテクチャ

OMA in Tokyo: レム・コールハースのパブリック・アーキテクチャ展

10月20日より六本木のTNブロープにおいて、レム・コールハースの「パブリック・アーキテクチャ」展が開かれている。これは、昨年大変話題になったニューヨーク近代美術館で行われた“OMA at MOMA: Rem Koolhaas and The Place of Public Architecture”展の巡回展であり、オープニングではTNブロープによって六本木のさまざまな場所にインスタレーションがつけられ、都市のイベント的性格が演出された。このように海外で話題になった建築の展覧会をできるかぎりの同時性をもって日本でも見せるという例は今まであまりなく、興味深い試みである。様々な国の美術館、ギャラリーのネットワーク化が言われる今日、建築においても今後このような試みがコールハースの様なスーパーアーキテクトに限らず、様々なスケールで行われることを期待する。

会場には、これまでのOMAの重要なプロジェクトの多くの模型が一同に展示されている。スライドがプロジェクトされた「ZKM (カールスルーエ・メディアテクノロジー・アートセンター)」のファサード、ボイドをマスとして表現した「フランス国立図書館」の模型、実際は全長数kmのスパイラルになるという「ジュシーの図書館」の模型などは特に印象深く、OMAのこれまでの試みが、言語やドローイングのみではなく、いかに3次元的力を持つものであるかということを十分に証明している。

10月21日には、飯倉のラフォーレミュージアムでシンポジウムが行われたが、立ち見でホワイエまでいっぱいになるほどの盛況ぶり、今さらながらコールハースの日本における人気を実感した。ニューヨーク近代美術館の建築デザイン部門のチーフ、テレンス・ライリーのアカデミックなイントロダクションの後、コールハースはOMAのプロジェクトをメトロポリスVSアーキテクチャという非常に明快な構図をもとに説明していった。つまり、OMAは建築と都市という矛盾するふたつの世界を対峙させる。何もかも決定せずには気がすまず、ポテンシャルを食い尽くすエゴイスティックな建築は、常に変化にさらされ、ポテンシャルを生成することのできる都市との緊張関係によって救われる、ということである。それは、ZKMでの内部活動、あるいはそこに広告やニュースが投射されて固有性と匿名性が無秩序に変化するファサードであり、また国立図書館での5つの図書館の内部に浮遊し、建築内部に公共空間を形成するヴォイドなのである。レクチャーの後のディスカッションにおいてバーチャル・リアリティによって建築の意義が弱められるのではないかという質問に対して、コールハースは現実のアジアにおける都市の発展を例に挙げながら、現実の建築と都市に対して全く悲観していないことを断言し、建築と都市の対峙という戦略に対する強い自信を見せつけた。

これらの世界中で多くのインパクトを与え

展覧会 会期：1995年10月20日(金)～1996年1月20日(土)
会場：TNブロープ

講演会 日時：1995年10月21日(土) 14:00～16:30
会場：ラフォーレミュージアム飯倉
講師：レム・コールハース、テレンス・ライリー

た設計競技の作品がひとつとして実現されていないのは非常に残念なことである。これらのエキサイティングな戦略が果たして現実はどう機能するのか、実際に体験したかったものだ。また、それらの作品が発表されてからすでに数年経っており、私たちとして興味をもたれるのはこれからのOMAの行方である。昨年出版予定であった『S, M, L, XL』も待ち遠しい。今回の講演で個人的に残念だったのは今後のOMAについて、またカタログには書かれていた、これからコールハースの活躍舞台になるであろうアジアについて何も語られなかったことである。折しもOMAは、今後オランダの国際的エンジニアリング事務所からの資本が入り、韓国での巨大なプロジェクトが始まるとも言われている。最近注目されつつある欧米の若手の建築家グループで、言葉やダイアグラムなどの分析、デザインをもっと設計のプロセスのなかで相互に関連づけながら展開していく人々からは、コールハースに対してその明快な、とすると彼の言語を証明するために建築があるかのような手法に対して厳しい批評を聞かれるようになった。スーパーアーキテクト、コールハースをめぐる状況も都市と同じように変化し続けている。果たして彼のメトロポリタン・アーキテクチャはその中で、今後どのようなポテンシャルを生成していくのだろうか。

●吉良森子／建築家



屋外インスタレーション (乃木坂の工事現場の養生シートへのスライドプロジェクション)

SD9512
106



展覧会会場



10月21日講演会

『家事の政治学』

柏木博＝著
B6判 299頁
青土社 2200円

フリーエなどのユートピア思想に示された家事空間の共有化や協同家事のイメージは、時を経て「キッチンのない住宅」、「家事ロボット」などに姿を変えていった。本書では、近代以降の「家事」に対する考え方、感じ方、そして実践の仕方を分析するとともに、家事の商品化が進む現代を読み解く。



『都市と建築の解剖学』

——形態分析によって「設計戦略」を読む——
ジェフリー・ペイカー＝著 富岡義人＝訳
B5判 278頁
鹿島出版会 5974円

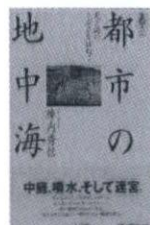
先に邦訳された「ル・コルビュジエの建築——その形態分析」の続編ともいえるべきもの。集落や都市、さらに現代の優れた建築に目を向け、それらの建築手法を解き、豊富な図版を効果的に用いて建物の複雑な構成を「解剖」する。



『都市の地中海——光と海のトポスを訪ねて』

陣内秀信＝著
B6判 272頁
NTT出版 1800円

8つのコンセプトを軸に、地中海都市の成り立ちとその魅力を論じる。生産性のみを迫及する産業都市に対して、人とモノと情報が集まる場としての地中海都市を紹介する。生活のリアルな場という面を忘れた都市作りが反省される中、日本の都市を考える上でも示唆に富んだ「ガイドブック」。



『ヨコハマ建築・都市物語』

吉田鋼市＋久我万里子＝著
四六判 224頁
丸善 2060円

横浜の都市や建物の歴史に触れながら、横浜の主要な通りやスポットを紹介する、街を散策するための知的ガイドブック。同時に、現在の街並みや都市の風景の骨格となっている背景についても触れ、その魅力や楽しみの原点を探っていく「モダンシティ横浜」の案内記でもある。



『建築ガイド5——フィレンツェ』

野口昌夫＋石川清＝訳
A5判 144頁
丸善 2060円

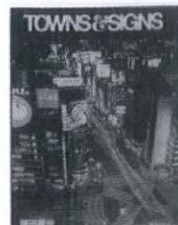
各都市の歴史と100以上の建物を細部にわたって解説するシリーズの5巻目は、中世都市として独特の発展を遂げたフィレンツェを取り上げる。起源から近代に至るまで、各時代ごとの代表的な建築を解説し、成熟した都市を紹介。フィレンツェでは特にボルタレー（入口まわり）に焦点をあてる。



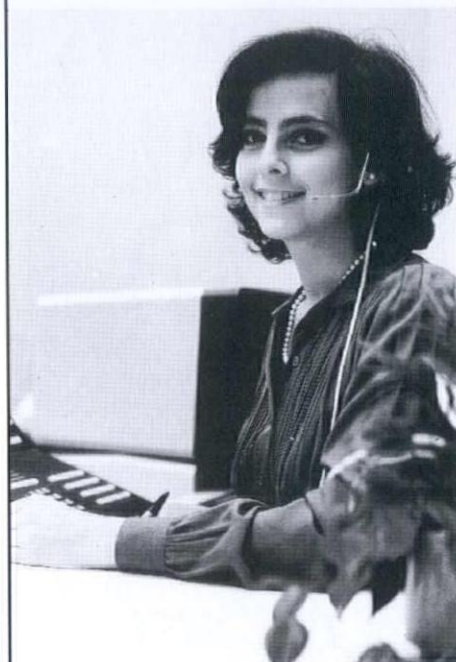
『Towns & Signs』

鎌田経世＝著
A4判 226頁
美術出版社 15000円

季刊誌『Signs in JAPAN』に連載されている都市のサインを中心に未掲載写真を加えてまとめたもの。大都市のサイン、ファサード、ストリート・ファニチャー、建造物、さらにそれらが構成する都市の景観を取材・撮影している。サインデザインのコンセプト設定の参考書として。

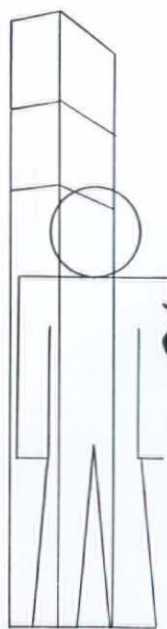


情報とエネルギーの
ネットワークをつくる
日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまあるくつむぐ」。日立電線は、いま、快適で豊かなくらしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないのでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空調などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生れると思います。

しかし……

それだけで終わったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴らしいことではありませんか。

集中管理或は集中制御によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能をフルに発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社
KAWASAKI ELECTRIC CORP.

東京本社 〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5271(代)
本社 〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011(大代)

お知らせ

照明探偵団12回連続実践講座 「あなたも照明探偵団!」

第2回「夜景の見方教えます——高所からの夜景に隠された都市構造を発見しよう」

日時：1996年1月19日(金) 18:30～20:30

ゲストパネラー：深谷哲夫

コーディネーター：面出薫

応募締切：1996年1月8日(月)必着

第3回「世紀末の辻行燈——日々増殖する自動販売機の光りに未来都市を想像しよう」

日時：1996年2月29日(木) 18:30～20:30

ゲストパネラー：如月小春

コーディネーター：面出薫

応募締切：1996年2月15日(木)必着

上記2回とも会場、会費等は以下の通り

会場：東京デザインセンター地下「ガレリア」

会費：一般2500円、学生1500円

12回通し券 一般27500円、学生16500円

応募方法：往復はがきに住所、氏名、年齢、職業、連絡先を明記の上、〒141東京都品川区東五反田5-25-19 東京デザインセンター「照明探偵団シンポジウム」まで

ギャラリー・間10周年記念イベント

[10周年記念展]

出展作家の原点作品展「The 53 Origins」

会期：12月5日(火)～1996年1月31日(水)日曜・

祝日および12月23日～1月7日休館

会場：ギャラリー・間 11:00～19:00 入場無料

[10周年記念]

安藤忠雄北九州講演会「震災を機に都市を考える」

日時：1996年1月23日(火) 18:00開演

会場：北九州市立小倉市民会館大ホール 入場無料

申し込み：往復はがきに住所、氏名、年齢、職業、Telを明記の上、下記まで。はがき1枚につき1人有効

〒802 北九州市小倉北区中島2-1-1

TOTO広報部 安藤忠雄講演会事務局

Tel.093-951-2901

締め切り：12月22日 当日消印有効

「博多デザイン倶楽部特別フォーラム」

テーマ：わたしのデザイン作法——日本&イタリア
両デザインの現場から

ゲスト：喜多俊之(環境・インダストリアルデザイナー)

進行：池亀拓夫(デザインプロデューサー)

日時：12月16日(土) 特別フォーラム/15:00～17:00

懇親会/17:30～20:30

会場：博多デザイン倶楽部 福岡市東区箱崎ふ頭4

-4-4 Tel.092-651-8008 Fax.092-651-9556

会費：一般5000円 学生3000円(懇親会参加費込)

申し込み：氏名、勤務先/学校名、Tel.、Fax.を記入の上、博多デザイン倶楽部までファックスにて

30周年記念ヘーベル・デザインコンテスト

旭化成建材㈱の主催によるデザインコンテストが行われた。テーマは「ヘーベルまたはグランデを使用した建築物・構築物で、その特性を生かし新しい時代に向けてのデザイン性、機能性、快適性を追求し、感性豊かに表現した作品」。2400点余りの応募の中から、審査委員長、東孝光(建築家・大阪大学教授)を始め、鈴木エドワード(建築家)、樋口修(建築家)、岡田治(旭化成建材・専務取締役)の審査の結果、入選者が下記の通り決定した。

最優秀賞：白川直行

優秀賞：柳川陽文+湯浅武夫/西本博/七沢基/

佐藤秀之/徳山長英

東孝光賞：郵政大臣官房建築部

鈴木エドワード賞：ワークショップ

樋口修賞：真鍋建男

岡田治賞：井口義行

ドイツヘーベル社リッシェ会長賞：児玉耕二

「ドナウの夢と追憶 ハンガリーの建築と応用美術」

会期：1996年1月5日(金)～2月12日(月)

10:00～17:00 (入場は16:30分まで)

月曜休館(1月15日・2月12日は開館、1月16日休館)

会場：東京国立近代美術館

北の丸公園/営団地下鉄東西線竹橋駅下車

観覧料：一般790円、高校・大学生450円

INAXギャラリー大阪企画展 「鋪地・中国庭園のデザイン展」

会期：12月8日(金)～1996年2月24日(土)

10:00～18:00 水曜日および12月29日(金)～1996年

1月4日(木)休館

会場：INAX大阪ショールーム2階

大阪市西区新町1-7-1 Tel.06-539-3518

[講演会]

テーマ：「中国庭園と鋪地」

会場：INAX大阪ショールーム8階会議室

日時：1996年2月8日(木) 18:00～19:30

講師：田中淡(京都大学教授)

是枝開展「光という実在」

会期：1996年1月9日(火)～2月3日(土) 11:00～

18:00 月曜日休館

会場：ギャラリーαM 入場料無料

[ギャラリートーク]

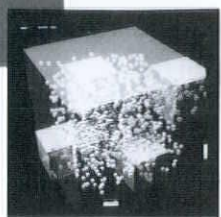
作家によるスライドレクチャー、対談、フリートーク

日時：1996年1月9日(火) 18:00～19:30

会場：ギャラリーαM 武蔵野市吉祥寺本町1-20-1-

401 Tel.0422-22-1399

出席者：是枝開、高島直之



これまでテーマとしてきた「値段」と「タイポグラフィ」では、建築に関わる直接の経済の関わり方を主題として、建築に働く様々な力やその力に対しての距離の取り方を分析的に見ることを目的としてきた。これは例えば、単純に経済効率的に有利な方法を模索したり、あるいは建築に関わる経済原理を整理するといった、建築と経済の直接の関係そのものを確認しようとするものではなく、建築が社会（政治経済）と接触する時に見せる硬直化したいろいろな側面（言うまでもなく、経済などの側が要求する形式とそれを受けとめるための建築側の形式は一对一対応し安定している）を分解し編集し直す眼差しが、どのようにしてリアリティを持ちうるのかを析出することを目的としてきたといってもいい。

さて今回の目標は、「ぐにゃぐにゃ」した形態を持つことで単位体積当たりの表面積が格段と大きくなり、かつ全体を構成する分節されたヴォリュームの数が極めて少ない（基本的には一単位の）ものが生まれてくる文脈の再トレースを試みることだ。細かく分節されたヴォリュームを構成することで複雑な形態をもち、結果として表

なのだろうか。建築に関わる経済的な事柄は直接建設にかかるコストに関わるものばかりではない。はるかに広範かつ大量な情報がそこには関わっている。

文脈はいろいろな水準へと広がる。例えば、建築以外のものへの形態上の直接のリファレンスとして、メタボールなどコンピュータ上でのモデリングのツールや、一連のフラクタル図形を代表とする数学的な概念を思い浮かべることができる。また、建築の内部空間の扱い方を通してもいろいろな文脈が見えてくる。例えば、たくさんの性格の異なる空間を並列しながら、壁などで物理的に分節することなく空間相互の独立性が保たれるような状態をつくるために内部に凹凸をつけ、その結果として全体がぐにゃぐにゃ化したようなものもあるだろうし、全ての単位（空間）の関係を一次元的でヒエラルキーのない状態に保って各機能を配置していくことを目的とした結果、限られたエリアの中でぐねぐねと蛇行せざるを得なかった場合もあるだろう。もちろんこれらのことを、機能単位でヴォリュームを分節し再構成することを前提としてきた機能主義的な方法に対しての問題提起と見ることも可能だ。さまざまな水準の文脈が働いた結果として、「ぐにゃぐにゃ」建築を捉えることができる。もちろん、採光、換気のための表面積を大きく確保するといっ

海外建築情報ミックス

面積が大きくなったようなものを対象としているのではない。どちらかという、操作の少ない（分節の少ない）建築を標榜しているながら、同時に扱わなくてはならない何か他の条件のために必然的に選択されたある方法が、結果として単位体積当たりの表面積を大きくすることになっているようなものだ。

建物の表面積を大きくすることを必要なこととして説得するのは簡単ではない。建築を実現させるために誰もが確認するコストに関わる条件や、設備的、構造的なフィジカルな条件（このハードルを越えなければ基本的に実現は難しいというような条件）を考えてみても、困難なものばかりだ。総工費の中で、外装仕上費が占める割合が大きいことは言うまでもないし（大吹抜をつくる場合に中庭的に外部として開放せず、屋根をつけてアトリウムとして内部化するの、機能的な理由や一般的なイメージの良さのためだけではなく、コストもその重要なファクターとなっている）、空調の負荷を考えてみても外装面積が大きくなればなるほど温度的な負荷は大きくなる一方だ。あまり深く検証しなくとも、直接の経済効率（工事費）だけを評価軸として判断する場合、建物の表面積を大きくすることで良いことはあまり見つかりそうにない（もちろん集合住宅など小さなユニットの集合体の場合、商品としてのファクターが働くこともあって、直接の経済効率上の理由のために表面積が広げられることもある）。こういった多くの不都合を抱えながら、結果として建築の表面積を大きくしなければならない文脈（計画を構想する中で生まれる衝動）とは、どのようなもの

Theme: 政治・経済 その3「ぐにゃぐにゃもの」

た直接の経済効率からぐにゃぐにゃしている場合もあるだろう。（しかし、そういう説明のほとんどは簡単に説得することができないため、口からデマカセで出てきたエクスキューズだ）。

前2回では、建築の上に共通して成立するある経済的な側面から詳細に分析を深めるといって方向で進められていたため、どうしてもある限定された側面に分析力が偏向していったのに対し、今回は建築の生産に関わる直接の経済性だけから考えると不利になるという特性をもつ（という共通点だけで選択された）「ぐにゃぐにゃ」した建築の上に成立している文脈をあらわにするという方法で、ある具体的な経済的側面ひとつに限定せず、建築に関わる多層的な環境を横断しうる視点を獲得することを目標とした。最終的に建築として現れる姿に、あるフレームをかぶせて限定することで、最終的な姿へと至る道筋を、そこに関わる条件を強引に単純化することなく、多くの条件が関係している状態のままあぶりだすことが意図されていた。予想されたことだが、この程度の限定の仕方では建築の構想に関わる条件がそれほど整理されるわけではなく、当然のことながらそれほど明快な物語はつくられない。あまり積極的な見方ではないが、建築に関わるいろいろな条件は教条主義的な視点で簡単に切り捨てられるほど単純なものではないことが、再確認されたといってもいい。

これまで建築と社会が接点を持つ一側面として、経済に関わることをモチーフとして扱ってきた。経済と完全に断絶した建築の要素は基本的には存在し得ない。今回は一般的には経済的に不利だと判断されるであろう、表面積をあえて大きくしているような建築に限定して、そこに働いている建築を構想する側の文脈を探る。

コア・スタッフ'95
今井公太郎
岩下暢男
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

AA: L'architecture d'aujourd'hui
AD: Architectural Design
EC: EL CROQUIS

曾我部昌史

「線、一本の活性化された線は散策の軌跡である」(パウル・クレー)

エンリック・ミラーレスのドローイングを眺めていると、えも言われぬめまいのような感覚におそわれる。それは建設を前提とした設計図であるにもかかわらず、不思議なことにほとんど抽象絵画が現代音楽のスコアにしか見えない。それらの線は恐ろしいほど濃淡がなく、均一な太さによって描かれているが故に建築の設計図が持つべきメリハリ(ヒエラルキー)を失い、描かれたものは同一に平板化され、そこに何が描かれているか判別させにくくしている。それぞれの要素はヒエラルキーを失い、無関係にあるいは相互に微妙な関係を保ちながら紙の上で戯れているといった風采であり、それは何かドゥルーズの書物を思い起こさせる。

特異なその図面によって、彼の建築に対する根本的な考え方を読み取ることができよう。ところで柄谷行人が指摘するように、「空間についての我々の思考は、つねに内部と外部の分割を前提とする」。例えば古典的な建築などは、まさに外部からその内部を分節化することによって成立していたと考えることができる。それに対して、ミラーレスの建築は分節化をあえて宙吊りにし、内部と外部の弁別し難い曖昧模糊とした状況を建築によってつくろうとしているのではないか。彼の建築には、空間的な分節化と歴史的な建築言語の組み合わせによって、建築を組み立ててゆく手法の転倒を見て取ることが可能であろう。ドローイングには、そのような内部と外部の分節の意図的な流動化が記述されている。恐らくそれは、ポシェを有する古典的な建築図面からは最も

速いところに存在する建築図面であろう。リベスキンドの「マイクロメガス」と同様の質を醸しながらも、ぎりぎりのところで建設のための設計図としての範疇にとどまっており、そこに彼の実体としての建築に対する強い信頼が窺える。

内部と外部の無分節化は図面上の表現にとどまるものではもちろんない。敷地(ランドスケープ)と建物は非常に密接な関係を保ち、ほとんど分節化され得ないような状態になっている。ミラーレス自身が表明するように彼の建築にとって平面図が最も重要であり、建築を形作る表情豊かな線は緻密な敷地の分析から抽出されたものであるからだ。ある意味で考古学的な発掘ともいえる敷地の分析から建築を建ち上げる自身の建築行為を説明するために、考古学の発掘調査の写真を提示してさえいる。彼の平面図とは、考古学的な発掘によって発見された現前たる事実にはかならないといえるだろう。

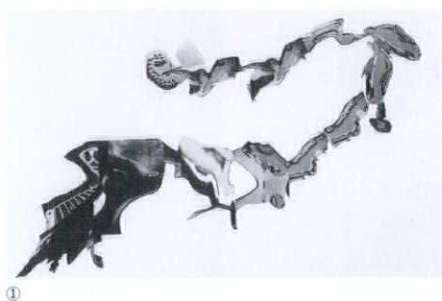
このように敷地(テキスト)に対して、既存する枠組みとらわれず即物的にその物自体を見つめようとする姿勢は、彼の場合あらゆるテキストに対して同様に働いているとみることができる。フォトコラージュやインクによる荒いスケッチ、また画像のトポロジカルな変形操作等の手法は、様々なテキストの水準の間にプロジェクトを置き、複数の水準に照らし合わせることによって、常にプロジェクトを客観視し批評にさらそうとする彼の姿勢の現れにほかならない。このような彼の姿勢を表すドローイングに対して、ウィリアム・カーティスは次のように述べる。「ミラーレスのドローイングは正しく『精神的地図』であり、溢れんばかりの思想や意味が隠され

た象形文字、若しくは人間活動と地域社会が奏でる交響曲を期した譜面と捉えねばならない。故にドローイングに描かれた線には、光をはじめ空間や眺望、建築的ディテールと同様、素材と構造が黙して存在するのである」。彼の建築(ドローイングも含め)は、様々なレベルのテキストによって織りなされたひとつのタペストリーといえるだろう。トポロジカルな変形操作によって、パンから木の葉そしてストリートに落書きまでも、あらゆるものが建築のモチーフとして扱われ、またフォトコラージュによってプロジェクトは一旦解体され新たな組み合わせが行なわれ、ときに別のプロジェクトと組み合わせられることによって、さらなる新しい局面を切り開いてゆく。そのような流動的なテキストの移動によって、彼の建築は形作られているといっている。文頭において彼のドローイングのなかの様々な要素が平板化されていることを述べたが、それは極限まで圧縮された薄さの中に様々なテキストが織り込まれ、ドゥルーズの言葉を借りれば、ひとつの「平滑空間」が形成されていることを述べているのである。ミラーレスの建築における線とは、多種多様なテキストが複雑に絡み合う線であり、その結び目あるいは縫いが現前したものを読み変えることも可能ではないだろうか。そのときにミラーレスの建築は建築の領域にとどまらず、より大きなテキストの編み目の中に解き放たれ作動しているといえるだろう。

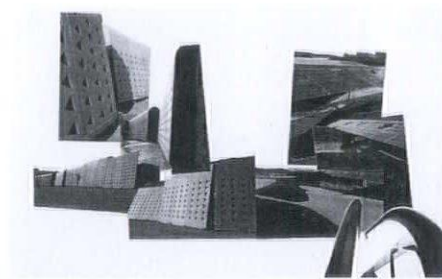
方法

丸橋 浩

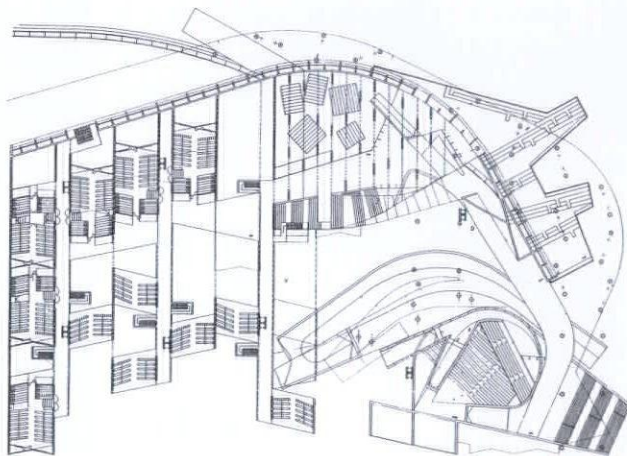
Photomontage of a car showroom—①
Photomontage of Archery Competition Building—②
<University classroom building in Valencia Illustration>—③
<Blots>—④
architect: Enric Miralles
EC72 [II]
AD Architectural Monographs No.40



①



②



③



takachi



unazaki



copeland



roma

④

その属性から建築をビルディングタイプ、様式、建てられた年代、所在地等のパラメーターで分類することは可能であり、広く試みられている。「現代中国建築」とか「ルネサンス建築」とかいった具合に。実体としてはひとつの建築が、パラメーターの設定いかんによって、それぞれ違ったフェーズの建築として現れてくる。

今回、「大表面積建築——ぐにゃぐにゃしたもの」という、あまり聞き慣れない言葉をパラメーターとして建築を抽出するわけだが、仮に「大表面積建築」を「空間の重層性」と読み替えてみよう。それにより、空間の重層性を建築のメカニズムのなかで再現前化した建築を大表面積建築として拾い上げることができる。ドゥースブルグの〈ムードンのスタジオ住宅〉や、スティーブン・ホールによる〈ネクサスワールドの集合住宅〉などがそれだ。これらの建築では、可動式のドアの位置によって、物理的に空間のヴォリュームの構成が変わり、2通りの空間構成をもつことで空間の重層性が獲得されているわけだ。

それに対して、現象として立ち現れる重層空間いわず大表面積建築がある。それは、実体としては変わらない建築が、人間の行為をはらんで、見かけ上複数の空間として現象するというようなものだ。10月初旬に完成した荒川修作の〈養老天命反転地〉では、見る者の位置により、地平線が2重、3重になって現れたり、物と関わる位置関係により物の見え方（空間の現象の仕方）が違う場所があるようだ。物の見え方というひとつの認識の地が変わるごとに、現象としての空間がたち現れ、この空間の重層性が高いほど建築は虚の大表面積建築へと向かうことに

なる。ではどのような建築ほど空間の重層性が高いのだろうか。結論を急ぐ前に少し歴史を紐解こう。

アビニョンクールの海でコルビュジェが没してから、今年でちょうど30年が過ぎた。そのコルビュジェが生前唱えた4つの平面形式について覚えのある人も多いに違いないが、念のため、そのうちのひとつについて簡単に復習しておきたい。それは、総体として想定されたヴォリュームから、不必要な部分を消去（引き算）することにより、平面を構成するという形式だったと言ってよいだろう。ここで、便宜的に足し算建築と引き算建築なるものを定義しておこう。足し算建築とは、いわゆる機能主義的に分節された機能と空間を統合することによって、つくられる建築で、その合理的な構成を表現するために機能と空間の分節があるもの。また、引き算建築とは、ひとつのあるいは少数の大きなヴォリュームが規定され、その内部にヴォイドが穿たれるもの。足し算建築に於いては、壁・天井（場合によっては屋根）・床という形ある建築の構成要素が、空間を分節するのに対し、引き算建築ではヴォイドという空間そのものが、空間を分節していると考える。先のコルビュジェの平面形式は、引き算建築の系譜のひとつに数えてよいだろう。

今回取り上げる作品「ジュシューキャンパスのふたつの図書館案」は、ヘルツォーク&デ・ミューロンによる同プロジェクトのコンペ応募案である。その案の全体計画は、既存建築群に3つのヴォリュームを接ぎ木することにより、既存部分を連結してひとつの全体を形成し、当選案や他の建築家がヴォリュームを置いた位置を、植栽を施したヴォイドとす

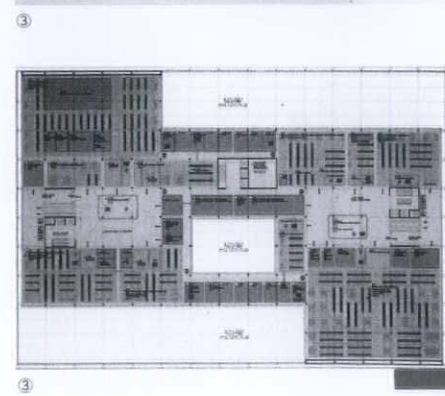
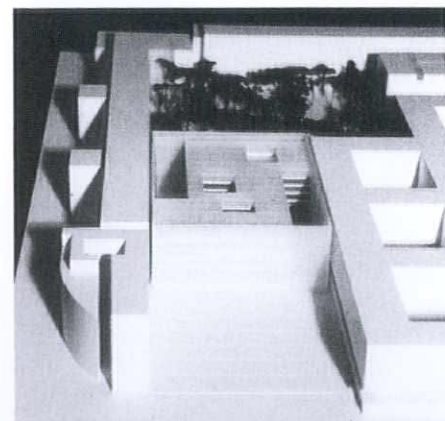
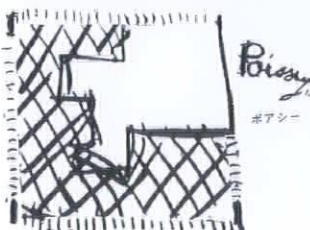
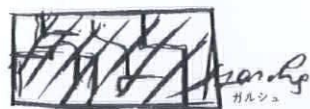
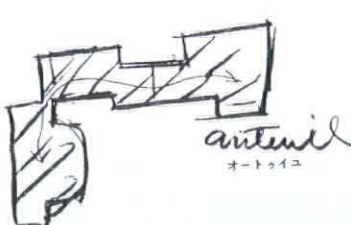
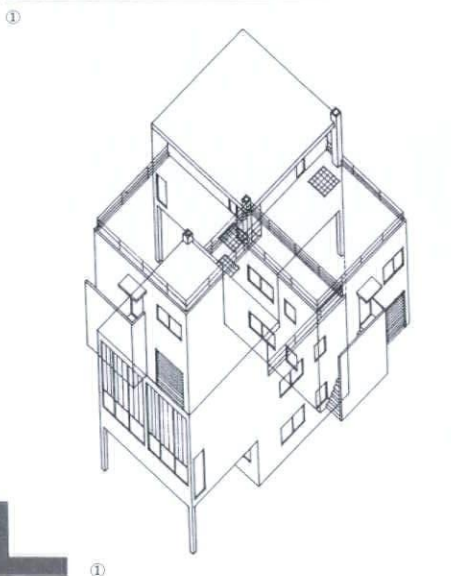
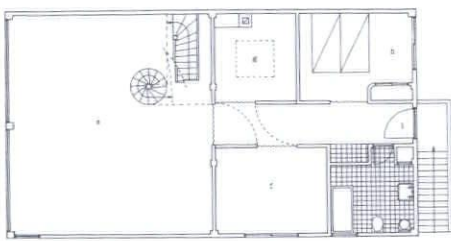
るものだ。メインとなるヴォリュームにおいては、縦横にリニアなヴォイドのアベニューを穿ち、引き算的に空間を記述している。その効果として、人間の立つ位置より、建物のエッジが1本になったり2本になったり、連続する視線のなかで隣の空間が見えたり見えなかったりと、現実の隣にあるもうひとつの現実の空間が見え隠れするように、実体としてはひとつの建築が視点の位置の違いにより、空間の見え方を変える。建築を物理的に動かすのではなく、その構成によって、空間の見えがかりを変える虚の大表面積建築というわけだ。また、地上6階建ての1階からは、大きな天井面に空けられた穴を通して、図書館に囲まれた空を見上げることができようし、水平に穿たれたヴォイドのアベニューを貫通する斜めの動線からは、歩行者の位置によって、幾つもの建築のヴォリュームの稜線が見えたりもしよう。

ヴォリュームにヴォイドを穿つ引き算的空間の構成により、所々に得られる建築の中の空間の引きが、空間と私の関係の認識を我々に促すように作用する。この認識が多いほど空間は多層化し、建築は虚の大表面積建築へと向かうだろう。大表面積建築などという新しいパラメーターを用意することは、与条件の中から創作の論理に反転し得る何かを探求しようとする場合、ひとまずひとつの有効な手段であるように思う。また個人的には、大表面積建築という言葉が指すものが、直喩的にのみではなく、実に地味な関係性の認識を通して抽出し得たとき、有効射程をのばすように思うのだが。

引き算

岡部克哉

4つの平面型式から
ル・コルビュジェ設計〈ボワシーのサヴォア邸〉——①
「プレジジョン(下)」ル・コルビュジェ著、鹿島出版会
ドゥースブルグ設計、「近代建築の空間再読」、彰国社
〈ムードンのスタジオ住宅〉——②
〈Two Libraries for the Jussieu Campus〉——③
architect: Herzog & de Meuron
EC60



ここ数十年、カオスやフラクタルといった自然を巧妙に記述できる数学の発展により、秩序（数学）VS混沌（自然）といった図式が崩れ、まさにその自然との親和性のゆえにこれらの数学は大流行することとなった。そういった自然との関わりにおいて注目されている数学のひとつに、トポロジーを挙げることができるだろう。トポロジーは、フラクタルやカオスと比較すると歴史は古いが、近年はそのアイデアや手法が生物の発生や形態形成、脳の研究などに用いられ、成果をあげている。大まかにいえば、トポロジーとは位相空間という空間一般を扱う現代幾何学であり、集合論をも包括した非常に広範な領域を扱っている。従って、「トポロジカルな」という言葉は、「空間的な」といった表現同様何も言っていないに等しい。

世間で流行する数学には、大抵その数学的概念を象徴的に表現した図像が伴い（これは数学者の意図的戦略であろう）、ほとんどの人々は、数学的定義云々よりもその図像をもって概念を漠然と了解している（つもりになっている）。建築は、言葉でいかにその概念を深遠に語ろうとも、結局ほとんどがこういった図像（イメージ）を参照しているに過ぎない。それがフラクタルではマンデルブロ集合のサイケデリックなカラーグラフィックスであったり、カオスではアトラクターに引き込まれる不気味な渦巻きであったりしたが、トポロジーにおけるそれは、トーラス体やクラインの壺といった柔らかな閉曲面の3次元表現の図であった。この、理想的な弾性膜でできた閉曲面は、数学的な同型性を保ったまま、自由自在な変形を許容する（ホメオモルフィズム）。トポロジー上では、球、立方体、円錐といったプラトン立体は、すべて同じものとして扱われるのだ。そこには、境界となる閉曲面と、それによって分けられた内側と外側の空間があるだけである。内と外という分節、限りない可塑性をもった皮膜。これは、最

も純粋な建築モデルのひとつである。壁の開放には成功したが、柱、スラブ、純粋形態や比例といった従来の建築言語のくびきからはついに解放されたことのなかった近代建築との関わりで捉えるならば、トポロジーを参照した建築においては、ホメオモルフィズムによる形態の相対化、柱、壁、天井といった分節の無効化が意図されている、といってもいいであろう。

以上のことを踏まえつつ、最近多く見られる次のような特徴をもった建築を、建築家の意図に拘らず強引に「トポロジカルな」（もちろん数学的にはなく、「フラクタルな」という言葉同様に「……っぽい」という意味で）建築と呼んでしまおう。①細長い（引き延ばされている）②3次元的に曲げられている（折畳まれている）③壁、屋根、床、天井（床裏）の仕上がりが同じ④地面から離れている。①、②、③はホメオモルフィズムの表現であり、④は②、③を強調するための手法であるといえる。これらの特徴を一言で言うなら、「チューブ状の建築」であろうか。

チューブ建築の系譜は、キースラーの無限住宅にルーツをたどることができるだろう。その後も、いわゆる「トポロジカルな」形態を直接的、間接的に建築化したものが多く見られる。その中でなんといっても参照される頻度が高いのは、クラインの壺とメビウスの輪である。クラインの壺は4次元空間におけるメビウスの輪であり、不可符号多様体の代表的なものである。どちらも、同じ平面上を移動していくといふのまにか裏側に出るといった反転性、そして無限性の象徴であり、神秘的想像をいたく掻き立てる。数学的記述が可能でありながら、「有限な建築空間に内包された無限」といった中沢新一の修辭をも許容する懐の深さが人気の秘密か。

さらに最近では、トポロジーの生物学における成果

からの参照も窺える。例えば、最も複雑な生物である人体も1枚のシートが折畳まれてできたものであり、人体とトーラス体はホメオモルフである（従って肺、胃、腸の中は外部である）といった、生物に対する刺激的な視点をトポロジーは提示してくれる。そして、人体とゴムの浮袋との違いは、人体を構成する細胞のシートが外部と内部の物質とエネルギーを選択的に透過させる機能をもっていることである。境目もなく連続したインターフェイス——必要なものは通し、不必要なものは通さない、そして領域によってある程度の選択性の相違を示し、それが場所（機能）を緩やかにかたちづくる。このような物理的冗長性をもったインターフェイスによって内と外を分割している存在。それは建築のひとつの理想に違いない。アレハンドロ・ザエラ・ポロ／ファシッド・ムサヴィの横浜港国際客船ターミナル案はそのような建築像への接近を予感させる。もちろん人間も光も銅板を透過する事はできないので、シートに切り込みを入れる必要があったが、その内部空間は、鯨に飲まれたピノキオや『ミクロの決死圏』を髣髴とさせてくれるではないか！

そういった意味で、究極の「トポロジカルな」建築とは？ 『風の谷のナウシカ』で「森の人」が王蟲の卵胞を膨らませてつくるインフレイタブルシェルター、でしょう。

*1：これは、一般的人間の思考（あるいは建築）の限界である2次元または3次元空間に射影された断面に過ぎない。その背後に広がる豊穡な可能世界は抽象されているのである。

*2：トポロジーではなく、一般的意味での境界。

*3：必ずしもこれらの特徴を全て満たしていなくても良しとする。

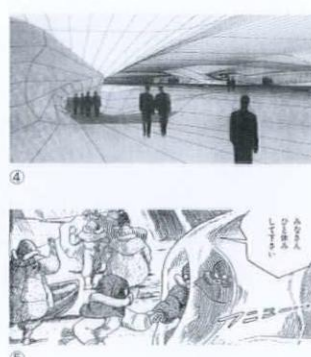
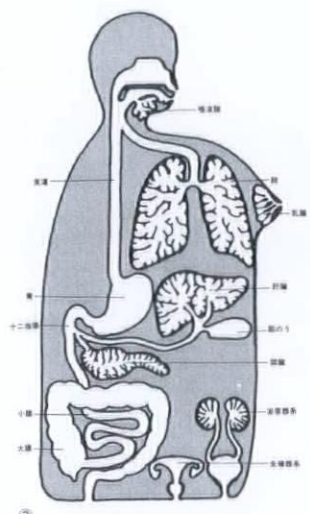
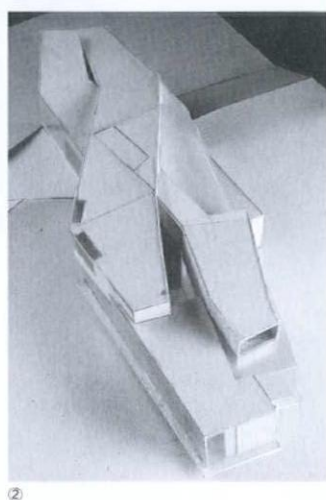
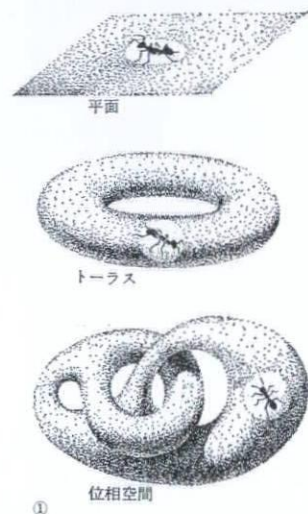
*4：向きが指定できない曲面。ちなみにクラインの壺を切開くとメビウスの輪になる。

ホメオモルフィズム

清水裕二

「柔らかな閉曲面」——①
「トポロジー——基礎と方法」野口宏著、日本評論社
「そのまんま系」(Möbius house)——②
architect: Ben van Berkel
EC72 [1]
「折畳まれたシートとしての人体」——③
「かたち科学」、本田久夫、他著、朝倉書店

「血管を流れる血球、もしくは消化管を通る食物」——④
横浜港国際客船ターミナルコンペ
SD9504
「可塑性と選択性（人間は過剰な有害な胞子は通さない）をもったインターフェイス」——⑤
『風の谷のナウシカ』宮崎駿作、徳間書店



最近建物の中で表面積の大きいものが目立ってきている。ここで表面積が増えた理由をいろいろ考えて見ると表面の数が増えた、ということが一番単純に思い浮かぶが、(ここでは幾何学的な表面の数だけにふれるけれども、ヌーベルのアラブ研究所やメディアパークのように実際に表面が動いたり変わる例も相当表面の数が多いといえるだろう)。最近の建物の多くでは通常の「4つの面」の他に第5、第6の面の利用が増えてきている。次に取り上げる3つの作品では4面だけではなく、屋上や持ち上げられた建築の下面によってさらに建築がぐにゃぐにゃ状態に近付いていく。これは現代建築の表現の多様さ、材料の多様さにもよるだろうが、これらの作品のぐにゃぐにゃが取る形態や作用を探ってみるとその自由さの中には自然との密接な関係が発見できる。ここでは「自然」を取り込む方法としての面のぐにゃぐにゃ化について述べたい。

Housing

スティーン・ホルの〈Spatial Retaining Bars〉の集合住宅プロジェクトでは長く引き延ばされた長方形たちが、縦や横に自由に地面から浮き上がって組み立てられている。建物の下面(第6の面)鉄筋コンクリートはつややかに磨かれ、明け方や暮れ時に砂漠に赤く輝く太陽に照らされ映える。浮いている事やぐにゃと四角く曲がっている事によって、全体は額縁のように山並みと砂漠の景色を切り取る。巨大なプロジェクトになるほど建物が長く延ばされることや、浮くこと(つまり表面積が延びること)によって個々の住宅の環境(光、風等)も改善されるであろう。ここではこのような環境的な自然の取り込みだけではなく、下面に写しだされる太陽の光

による再現された自然の取り込みもまた見られる。だが逆説的にも浮く事によって周囲の本物、すなわち「生」の自然とは隔離される。

Hotel

レム・コールハースの〈Agadirのホテル〉を見てみよう。この建物は上(ホテル)、中(屋外プラザ)、下(会議センター)に分かれていて(面が3つも増えたということである)、ホテルは会議センターの上にプラザの中の柱の「森」によって支えられている。プラザの床や天井は周囲の砂漠と同じく(作品集によればこの砂漠自体が型枠となっているそうだが)、「丘」や「谷」のぐにゃぐにゃの起伏があり、周辺の砂漠が続いているような感じである。これはまさに文字通りの自然再現である。上のホテルの部分は加えてまた大きい表面で覆われており、ここに客室個々のパティオになるスペースが四角く切り取られていてさらに表面積が増えている。この屋上の切り取りによって周囲の自然景観を確保していると同時に、また前に述べた環境的な自然を取り込んでいる。このようにこの建物はいろいろな「自然」を含んでいるのだが、一方では自己完結的なキューブに閉じこもっている。つまり、建物と周囲の環境との関係は一番密接(太陽・景観)であると同時に、また一番離れてもいるのだ(砂漠に降りたUFOのように)。このプロジェクトもまた「生」の自然とは切り離されている。

Terminal

アレハンドロ・ザエラ・ポロ+ファシッド・ムサビの横浜港国際客船ターミナルの案では、屋上の「庭」の表面が海/砂漠/芝生のようにぐにゃぐにゃの起

伏を持ちながらひろがっていく。さらにこの外皮が内部にエンドレスに畳み込まれることで、外側の「面」とそれによって囲われた「内部」という構成は破棄される。このことは結局、外部に当たり前にある「自然」とそこから分離された「内部」という構成さえも危うくさせる。物理的なものとして建物の表皮のあちこちに散在し始めているのだ。

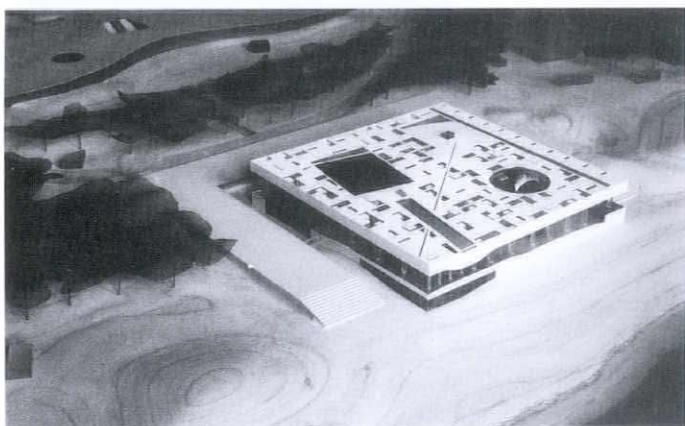
Nature

以上の3つのプロジェクトでは様々な自然の取り込みが行われている。一番身近な物理的な自然環境の確保から、自然の再現(直接的な複製/抽象化)、写し、フレーミング、自然景観確保まで……ここで建物の表面は「ぐにゃぐにゃ」になることによって自然(環境的な)との距離が実際に近くなったり、「ぐにゃぐにゃ」のパラダイムである自然自体の形態的なまね(?)になったりするのである。だが、ここで着目してほしいのは「生」の自然との関係である。4つプロジェクトが実際に見せてくれるのは、この「生」の自然との隔離である。浮くという事によって建築は自然から「浮く」——さわってはいけない物かのように。また再現される自然によって追及されているのは、「自然そのもの」ではなく「自然のイメージ」なのである。ここから私たちは現代の自然観をもうひとつ読みとることができないだろうか。もはや自然は我々にとって身近な存在でなくなってしまっている。自然は崇拝されるべき視覚的なイメージであり、博物館化(触ってはいけないちょっと恐いもの)されなければならないものになった。ぐにゃぐにゃ建築が表す自然は、現代文化によって濾過されたプラスチックの安全な自然なのである。

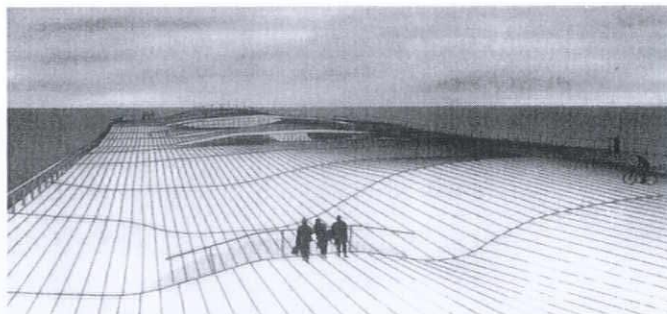
自然

宋 知殷

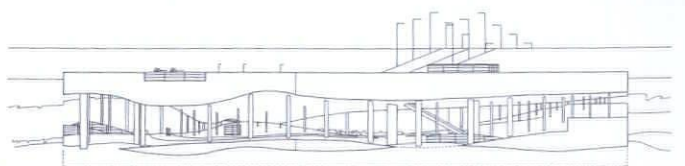
〈Hotel and Convention Center, Agadir〉——①
architect: Rem Koolhaas
EC53
〈横浜港国際客船ターミナルコンペ〉——②
architect: Zaera-Polo+Moussavi
〈Spatial Retaining Bars, Arizona, 1989〉——③
architect: Steven Holl
AA NO.291



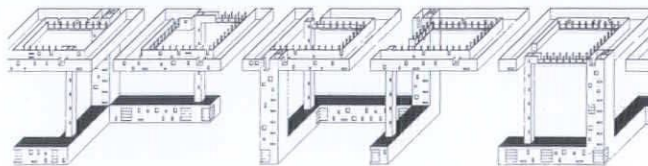
①



②



③



③

本来建築計画は、1次元の動線計画を基にして、2次元の床、壁、天井が配置を配置し、3次元空間として囲い取られるという順序を踏む。しかし、1次元の動線を管として捉え、2次元の計画を行う前に3次元の空間として組み上げてしまったらどうなるだろうか。それは、前後あるいは上下の2方向にのみ奥行きのある1次元的空間となる。さらに、じっとしている居場所(点)を球として捉え、3次元空間中に点をさせると、全方向に奥行きのない、線(管)の交点の空間ができる。

これは建築計画的に見れば、内部空間が制限され、動線も長くなる上に、外壁面がとて増えるので、効率が悪いということになるが、反対に外部空間を見れば、様々な形の外部空間ができ、外部のヴァリエーションがそれだけ広がっているということになる。ここで、スティープン・ホールによる、フェニックスの集合住宅計画を見てみる。

アリゾナ州、フェニックスの町外れに計画されているこのプロジェクトは、フェニックスに隣接する砂漠との境界線に沿って、全長約6kmに渡るものである。敷地内に60m四方の升形の基樁が線状に配置され、その上空に基樁の一辺の長さの直方体が組ま

れている。直方体の上空部分にはロフト型の住居が並んでおり、下階の部分はスタジオや、商店になっている。スティープン・ホール自身によれば、この計画全体の目的は、都市のスプロール現象と砂漠の風景がオーバーラップすることを防ぐ門を作ることなのだという。

配置図を見ると、町と砂漠との境界線に、下層の升形の基樁を所々つなぐように途切れなくねくね模様が並んでいる。立面も同様にL字型、T字型、門型が途切れ途切れに並ぶ。このように、平面図と立面図で見ると途切れて、つながりのない建物のように見えるが、立体的に模型のモニタージュ写真を見ると、全体的には数本の四角断面の管が折れ曲がりながら、実は1本につながっている様に見える。

この建築が数本の長い四角断面の管を水平、垂直に折り曲げることによって作られていると考え、まず1本の長い管を想定し、パブリック・スペースの長さ、ロフト住居スペースの長さに切断し、動線の交錯するパブリック・スペースの管を地上に捉えて、四角く折り曲げ、ひとつの巨大な立方体を囲むように組み上げたと捉えることができる。

管を水平に折り曲げた時は配置図のみに表れ、垂

直に折り曲げた時は立面のみに表れるため、片方の図面を見ていると、もう片方の様子が解らないということになる。すなわちこの建築は、2次元の平面図なり、立面図なりを操作する過程を省略した建築と言えないだろうか。

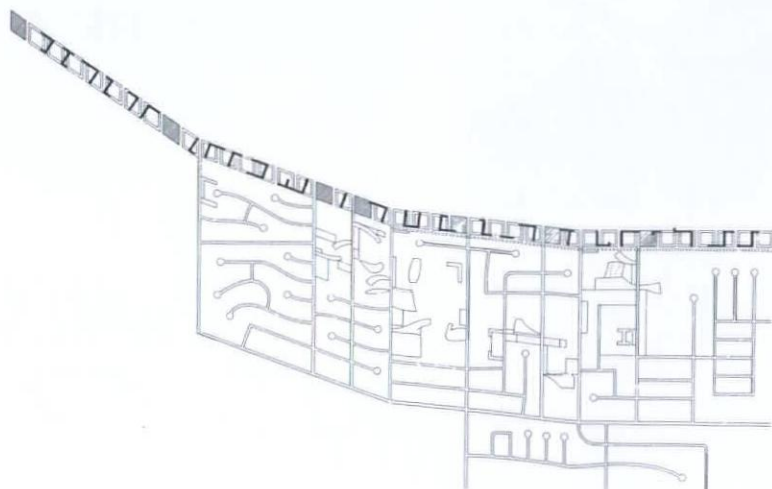
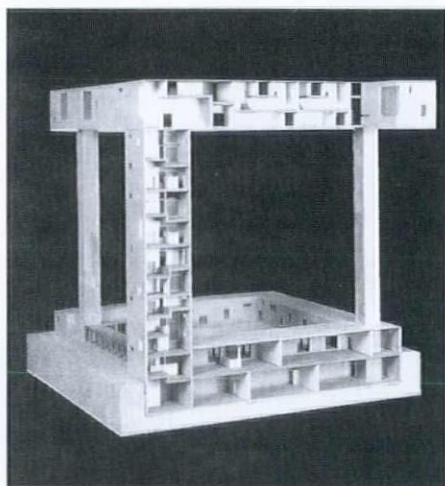
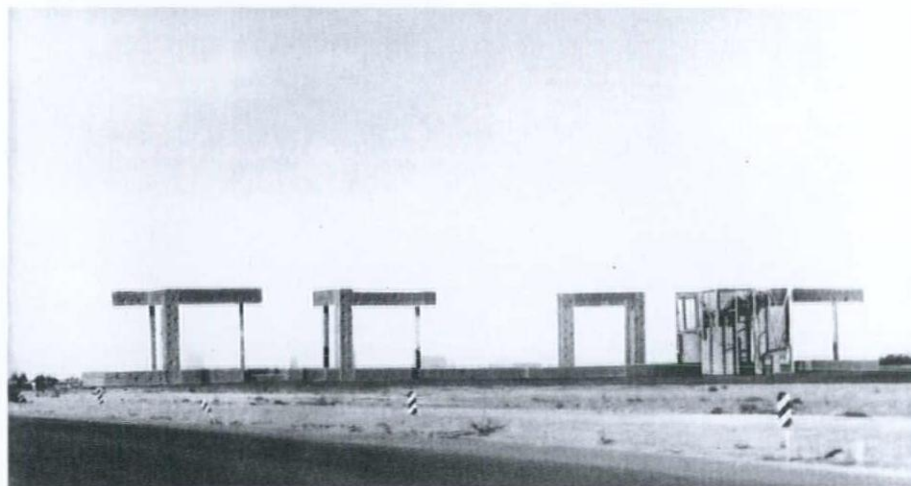
反対に内部から見れば、前後、あるいは上下の奥行きがあり、残りの4面は外気と接している。平面的な自由度がない代わりに、外部空間に対する自由度が生まれてくる。また、管を折り曲げる方向の選択によって、管の中にあるロフト住居のユニットには、隣の建物との関係性の自由度が広がり、隣の建物からの視線の接触等も避けられる。

この、途切れた管によって暗示される立方体のひとつひとつは、都市的スケールをもち、大きな建物によってではなく、大きな外部空間によってモニュメンタリティを主張している。大きな壁や、建物でもなく、完結したフレームでもない。表面積は最大でも、最小のヴォリュームで大容積の空間を囲いとするこのできる建築の1例を見ることができるのではないだろうか。

1次元 / 3次元

岡本美樹

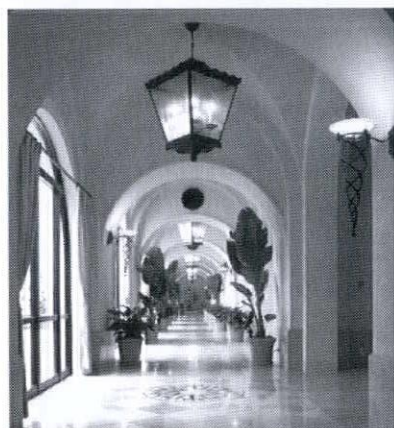
〈Spatial Retaining Bars, Arizona, 1989〉
architect: Steven Holl
AA NO.291



表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



ホテル日航アリビラ（沖縄）

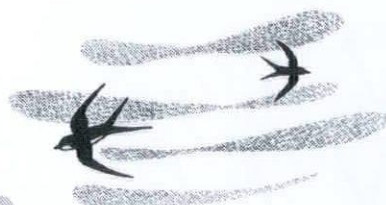


山田照明株式会社

本 社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635 名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル) TEL.052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三条 4-2-3 TEL.011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL.043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市福川 3-12-4 (山中ビル) TEL.054-283-9788
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (運兵衛ビル) TEL.0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムラビル) TEL.0188-65-2550
宇都宮出張所 〒842 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420

空氣の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元氣である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイ、ピュイ。
澄みわたった空氣に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。

額に汗をにじませながら、

一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齡は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空氣のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで

季節の深まりを知る。

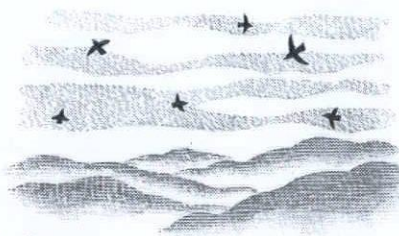
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサガサという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空氣のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空氣を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

算用数字のうち、前者は月号数、後者は当該記事開始ページを表す

特集

- 1●5 山本理顕 山本理顕設計工場 Inter-Junction City
 1●10 緑園都市=<Inter-Junction City> 山本理顕 北嶋俊治=写真 ジスタス、G.F.ビル、アーカス、オペリス、ロッジア、ブラード、コート・コート
 1●79 プログラム 山本理顕 大野 繁=写真 岩出山町立統合中学校、横浜市博覧会：高島町ゲート周辺施設、痴呆性老人デイケアセンター、日仏文化会館設計競技応募案、加茂町文化ホール設計競技応募案、熊谷市第2文化センター設計競技応募案、埼玉県近代文学館・桶川市民ホール設計競技応募案
 1●103 住宅 山本理顕 鎌倉の住宅、岡山の住宅、葛飾の住宅、若槻邸、HAMLET、熊本県営保田窪第一団地
 1●6 表記された建築=平面図という思想 山本理顕
 1●71 鼎談：触発する空間を仕掛けること 横文彦・植田 実+山本理顕
 1●127 美の執刀 トム・ヘネガン 安藤和浩=訳
 1●131 山本理顕の丘 宇野 求
 1●135 ドローイング 岡山の住宅、緑園都市、熊本県営保田窪第一団地、GAZEBO
 1●143 作品リスト

- 2●5 南イタリアのバロック建築 小野一郎=写真
 バラツォ・ベネヴェンターノ、サンティ・アヌンツィアータ聖堂、サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂（キエーザ・マードレ）、サン・パウロ聖堂、サンタ・ツィータ聖堂、シラクサのドゥオーモ、サンタ・キアラ聖堂、コレジョ・ディ・ジェズイーティ（イエズス会神学校）、サント・スピリト聖堂、旧ベネディクト会修道院、モディカのサン・ジョルジョ聖堂、サン・ニコロ聖堂、ノートのドゥオーモ、サン・ベネット聖堂、バラツォ・スバダーロ、ジェズイーティ教会堂（サン・フランチェスコ・ポールジヤ聖堂）、ラグーサ・イブラのサン・ジョルジョ聖堂、サン・ジュリアーノ聖堂、バラツォ・イウディカ、カタニアのドゥオーモ、サンタ・クロチエ聖堂、サン・マッテオ聖堂、バラツォ・マッレーゼ、レッツェのドゥオーモ、サンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂、サンタンジェロ聖堂、キエーザ・マードレ（聖母教会堂）、クロチフィツォ聖堂、サン・ドメニコ聖堂、サン・マルティノ聖堂
 2●17 バロックの誘惑 竹山博英
 2●41 辺境の二重性 長谷川正允
 2●74 南イタリアのバロック [都市+建築] 岡田哲史+長谷川正允
 3●5 集合住宅の現風景
 3●19 集合の経済効果によって生まれる豊かな住環境 荒木正彦
 /LIVING ALLEY、押切の社員寮
 3●30 集合住宅の計画とその背後にある条件 集合住宅の空間形式 遠藤剛生
 /大阪府営東大阪吉田住宅、シェラビア東山台四番街
 3●42 図式とリアリズム 大野秀敏/YKK滑川寮、YKK市川寮
 「頼りになる生の土台」として 富永 譲/熊本市営新地団地C、茨城県営長町アパート
 3●54 超機能都市「PROJECT 951」 松永安光/PROJECT 951
 3●72 集合住宅のテーマはどこにあるだろう 元倉眞琴/静宏荘、FH-II HOYA
 3●6 座談会：集合住宅を総合的にスタディする重要性
 植田 実+室伏次郎+松隈 洋
 3●84 くまもとアートポリスと公営住宅 田上文徳
 3●86 実験住宅 FH (Future Housing)・HOYA 佐々木正明

- 4●5 テクノスケープ：テクノロジーの風景
 4●13 Chapter 1：テクノスケープ 人工の大地
 カリフォルニア風力発電施設、カーランド運河の防風壁、オースター・スヘルデ、万場調整池、テムズ・バリア、常陸那珂港運輸省ケーソンヤード、ソーラー・チムニー、上五島石油備蓄基地、アレシボ電波望遠鏡
 4●39 Chapter 2：テクノスケープ 都市のドライブマシン
 黒部ダム・黒部第四発電所、東京湾横断道路：シールドトンネル・川崎人工

島、豊稔池ダム、本州四国連絡橋 塩原発電所・新高瀬川発電所、鶴見つばさ橋、久慈地下石油備蓄基地、東京外郭環状道路ジャンクション、袖ヶ浦火力発電所、安浦下浦擁壁、横浜市北部第二下水処理場、第四世代コンテナクレーン、日本冶金工業川崎製造所製鋼工場建屋集塵施設、ららぽーとスキードーム ザウス、東京都下水道局葛西処理場、横浜シャーシターミナル、日本石油精製根岸工場、種子島宇宙センター吉信射点、新交通システム・金沢シーサイドライン、石油掘削リグ（ジャッキ・アップ型、半潜水型）、JR京葉線京橋トンネル

- 4●117 Chapter 3：環境拡張計画
 ダイソン・スフィア、大陸間架橋都市計画、スペース・コロニー、アブ・シンベル神殿保存・逆ダム案、軌道工エレベーター、服、ベアリング海峡横断ダム、縮小の技術
 4●129 Chapter 4：テクノスケープ 風景のフロンティア
 カミオカンデ、ジーバング、トリスタン、Threo-3 イソプロピルリンゴ酸デヒドロゲナーゼの分子構造、地下無重力実験センター、円形農地、無響室・電波無反室、養殖所
 4●14 テクノロジーの風景 人工世界の現在 宇野 求
 4●40 テクノロジーの天地創造 岡河 貢
 4●82 風景と環境 その「言分け理論」をめぐる アラン・ロジェ 三宅京子=訳
 4●129 瓶の中の都と惑星と 人間/自然系変容プロジェクトの系譜 永瀬 唯
 4●88 座談会：景観の現在 中村良夫+三谷 徹+宇野 求
 4●95 三つの視線 TERRAへ 柴田敏雄=写真、機械仕掛けの風景 大野 繁=写真、LIME WORKS 畠山直哉=写真
 4●145 東京湾岸インダストリアルマップ
 4●153 著者略歴
 4●154 データ

- 5●5 メガ・アーキテクチャ：ポール・アンドルーの新作
 5●10 シャルル・ド・ゴール国際空港 TGV-RER駅、シャルル・ド・ゴール国際空港ターミナルビル2F棟、シャルル・ド・ゴール国際空港ターミナルビル1、シャルル・ド・ゴール国際空港ターミナルビル2、カイロ国際空港ターミナルビル、ニュース国際空港ターミナルビル2、ジャカルタ国際空港ターミナルビル、グラン・アルシュ、英仏海峡トンネルターミナル、英仏海峡トンネルターミナル内モール、久美浜ゴルフリゾート、デュエー・エキジビジョンセンターコンペ案、パリ・ワールドカップ多目的スタジアムコンペ案、オリンピックスタジアムコンペ案
 5●6 動きと光がつくる空間 ポール・アンドルー 倉西幹雄=訳
 5●32 対談：光が織りなす空間 安藤忠雄+ポール・アンドルー
 5●64 ポール・アンドルーの空港群 ファンタジーの実現 ホルヘ・グリユスバード 入江正之=訳

- 6●5 デジタル・アーキテクチャの可能性
 6●6 明日の建築CADシステムを探る 渡辺仁史
 6●10 デジタル・アーキテクチャへの視線
 1. 原 広司、2. 伊東豊雄、3. ビーター・アイゼンマン、4. ハニ・ラシッド、5. ARX、6. 入江正一、7. ニール・ディナーリ
 6●30 座談会：コンピュータと建築・都市をめぐる新たなシーン
 佐藤健司+隈 研吾+渡辺 誠
 6●50 あるひとつの物語：データベース化されたデザイン/CD-ROM
 岡 正明+末野宏行
 6●51 インター・ラボ：大学における建築CG/CADの先駆者たち
 大阪大学笹田研究室、熊本大学両角・位寄研究室、京都工芸繊維大学山口研究室、早稲田大学渡辺研究室、筑波大学渡辺研究室

- 7●5 柳澤孝彦：美術館の空間とディテール
 7●8 窪田空穂記念館、東京都現代美術館、真鶴町立中川一政美術館、郡山市立美術館、富山市立美術館博物館・福沢一郎記念美術館
 7●6 空間のシルエット 柳澤孝彦
 7●15 切断と接続の構図 内藤 廣
 7●33 現代美術と空間 青木 淳
 7●55 誠実が生み出す上質な味わい——郡山市立美術館印象記 大野秀敏
 7●105 美術館という場所 鈴木博之
 7●62 鼎談：美術と建築が生む表現空間をめぐる
 宇佐美圭司+柏木 博+柳澤孝彦
 7●69 空間のパラメーター（光、素材、地勢、シルエット）

805 まちのパブリックスペース 小さな公共施設たち

8020 KANBAN KOBAN / セラヴィアソシエイツ/加茂紀和子+マニエル・タル
ディッツ、光の交番（新橋駅前交番）/横河 健/横河設計工房、東日本橋
交番/北川原 温/建築都市研究所、池袋二又交番/林 賢次郎/建築設計事務
所、桜田門の交番/日建設計、荒川遊園前交番（バラの交番）/平倉直子
建築設計事務所、愛川町中津交番/北村修一/キタムラ・アソシエイツ、調
布駅北口交番/妹島和世建築設計事務所、篠崎駅前交番/藤木隆男建築研
究所、マイコム/若林広幸建築研究所、つくば南駐車場/伊東豊雄建築設
計事務所、吉祥寺駅末広通り自転車駐車場/黒川哲郎+デザインリーグ、
Cycle Station 米原/遠藤秀平建築研究所、ゆうステーション屋外トイレ/
葉デザイン事務所、SYP（新横浜駅前公園便施設）/鈴木和貴/PAX建築
計画事務所、湯の香橋/岸和郎建築設計事務所、白川橋景観整備/藤江和
子アトリエ、江東区水上バス乗船所/象設計集団、知る区ロード休憩
所/六角鬼文計画工房、中村冒險パーク/長島孝一+AUR建築・都市・研究
コンサルタント、旭川市春光台公園「風の子館」/仙田満/環境デザイン
研究所

8038 「建築」は拡張するか 中川理

8052 座談会：「公共性」と「表現」をめぐって 中川理+花田佳明+青木淳

8070 こどものあそび環境のデザイン 仙田満

905 丹下健三 丹下健三・都市・建築設計研究所

906 新宿パークタワー、国際連合大学本部施設、幕張プリンスホテル、ベイ・ス
クエア・よこすか、広島平和記念公園、日光東照宮 宮殿・社務所、山口県立
萩美術館、香川県新庁舎、東京ファッションタウン、FCGビルディング、
グラン・テクラン（パリ・イタリア広場）、パリ・セーヌ左岸計画、ナポリ市
新都心計画、BMWイタリア本社ビル、サイゴン・サウス・プロジェクト、台
中市千城商業地区マスタープラン、UEスクエア（ユナイテッド・エンジニア）
テレテック・パーク、UOB（ユナイテッド・オーバーシーズ・バンク）プラザ

90149 近代建築の50年と新時代への提言 丹下健三

90161 作品年表・作品データ

90172 経歴

1005 環境に呼応する建築 シーザー・ベリの最新作

10010 NTT新宿本社ビル、シーホーク ホテル&リゾート、クアラルンプール・シ
ティー・センター、デル・ボスケ、香港コンベンション・センター、リパブリ
カビル、キャナリー・ワーフ・タワー 駅舎および複合施設、新台中シティー・
センター、ハイグ・タワー、アバンドイバラ、埼玉アリーナコンベンション、
生産性国際交流センター

1006 アジアおよび海外諸国での設計を通して シーザー・ベリ

10030 シーザー・ベリの建築 横文彦

10056 シーザー・ベリ——そのデザインの変遷 片岡博之

1105 長谷川逸子 1985-1995

11012 山梨フルーツミュージアム、すみだ生涯学習センター、大島町絵本館+ふ
れあいパーク、滋賀県立大学体育館、氷見市海峰小学校、氷見市仏生寺小
学校、氷見市海浜植物園、STMハウス、フットワーク コンピューターセ
ンター、岩木山プロジェクト、富ヶ谷のアトリエ、世界デザイン博覧会イ
ンテリア館、奈良シルクロード博覧会浅茅原休憩施設、横浜グランモール
プロジェクト、湘南台文化センター、熊本の住宅、練馬の住宅、東玉川の
住宅、自由が丘の住宅、葉っぱの住宅、不知火病院、菅井病院、コナ・ビ
レッジ、熊本市営託麻団地、茨城県滑川アパート（仮称）、長野市今井
ニュータウン（オリンピック村）、KJ プロジェクト、マレーシアの住宅、
天草ローズガーデン、CP防波堤プロジェクト、T市庁舎プロジェクト、横
浜港国際客船ターミナル国際コンペ、カーディフベイ・オペラハウスコン
ペ、新潟市民文化会館および周辺整備計画（仮称）

1106 世界に開く建築を求めて 長谷川逸子

11024 公共建築の新時代と新しいモダニズムの生命力の予感 岡河 貢

11036 解放と発見 クリスティーン・ホーレイ

11046 アクティビティを喚起する等身大の公共建築 小嶋一浩

11059 氷見の建築文化 長谷川逸子

11094 進化し続ける才能——長谷川逸子 ピーター・クック

110115 住宅建築をつくり続けたい 長谷川逸子

110149 対談：形式としての建築から公共としての建築へ 多木浩二×長谷川逸子

110157 作品1986-1995

1205 SDレビュー1995

1208 由田 徹+岡本美樹、李 鐵男/CHI'S WORKSHOP、トム・ヘネガン+安藤和
浩+梶直樹/アーキテクチャー・ファクトリー、西沢大良、佐藤光彦、手塚
貴晴+手塚由比、大林直高/KAJIMA DESIGN、長坂 大/Méga、市原 出、
遠藤秀平、中東壽一/乃普創設計工房、長田直之+篠 真司/I.C.U.、佐々
木聡+中村宏美、山口 賢+BEAM STUDIO、藤本壮介、吉田 進+松本哲弥+
有馬浩一+森吉直剛/大成建設設計本部

1206 審査員総評 高橋誠一、坂本一成、内藤 廣、妹島和世

12055 SDの時代 新居千秋

12056 SDレビュー1995経過報告

作品・その他

5077 異国情緒のある町並みが語るもの——神戸外国人居留地の形成とその展開
坂本勝比古=文+構成

序章、1章：東アジア開港都市の活況、2章：神戸外国人居留地の成立、3
章：神戸外国人居留地の発展、4章：大正期の旧神戸外国人居留地、5章：
昭和戦前期の旧神戸外国人居留地、終章

6077 自然と共存・共生する家具 ミステリアス・デザイン・ドローイング展より
エットレ・ソットサス、グリエルモ・レンツィ、玄ベルトー進来、マルコ・
ザヌーソ・ジュニア、アドルフォ・ナタリーニ&マルコ・マギー、ジョアン
ナ・グラワンダー、ファブリスト・ドメルク、松島由美子、マイク・ライ
ン、久田修司、飯島直樹、ダビッド・バルテラー、荒知幾、内田 繁、ジミ
ー・リム、ファブリツィア・スカセラータ、クリスティアーノ・トラルド
ディ・フランシヤ、榎本文夫、ジェームス・アービン、岡本輝男、川上元美

6080 デザインにおける自然との「共存と共生」 荒知幾

6096 ミステリアスな大あくび 伊東順二

8077 デジタル・アーバンデザイン 都市をデザインする新たな言語

8078 デジタル・アーバンデザインの5つの方法論 石塚雅明

8080 シミュレーション・プロセス

8086 インタラクション・プロセス

8088 シンセティック・アーバンデザイン

10061 ランドマーク・グラフィティ

「タワーアートin 通天閣：ヴァナキュラーな電腦都市」展より

野村正則、大高 亨、中野節子、鈴木達郎、持田純章、植松美早、中崎宣弘、
橋本 清、塔本賢一、高田有子、中川周士、石原 薫、ウエダリクオ、林 宣
子、太田直樹、原田 要、永井清一郎、細田みぎわ、丸谷勝也、吉村史郎、
原田 明、末松利紀、吉井歳晴、戸田潤也、小山隆治、橋本 完、植本菊實、
中村勇大、中井清志、遠藤秀平、川北健雄、長坂 大、新宮 明、高瀬義夫、
鹿間厚次郎、平田洋一、橋 昭信、戸崎崎満雄、濱田龍明、大野良平、夏原
晃子、葉山勉、新田正樹、土居英夫

10072 見える塔、見えない塔「タワーアートin 通天閣：ヴァナキュラーな電腦都
市」の提起するもの 鴻英良

10084 塔とリアリティ 飯島洋一

10093 対談：新世界と通天閣をめぐって 東 孝光×橋爪紳也

12061 Villa Romana——ローマのヴィッラと庭園

長谷川正允=文+写真

ヴィッラ・アドリアーナ、ヴィッラ・デスケ、ラ・ファルネジーナ、ヴィッ
ラ・マダーマ、クイリナーレの庭園、ピオ4世のカジノ、サクロ・ボスコ、
パラッツォ・ファルネーゼ、ヴィッラ・ランテ、ヴィッラ・ジュリア、ヴィッ
ラ・メデイチ、ヴィッラ・アルドブランディニ、ヴィッラ・ファルコニエ
リ、ヴィッラ・ドリア・パンフィーリ、ヴィッラ・アルバーニ

12065 地誌としての楽園 長谷川正允

12085 水戸岡鋭治のトランスポーター・デザイン

特急ソニック883、特急つばめ、リニューアル・デザイン、サインデザイン、
高速船「ビートル2」、バス「レッドライナー」、JR九州西鹿児島駅計画

12096 私のデザイン作業 水戸岡鋭治

120100 鉄道とデザイン——その流れと今 木村一男

- 連載：時分の花 ディテール写真館
下村純一＝写真+文
- 1●155 6. 石工の技
サンタ・マリア・ノヴェラ聖堂、ジオット
の鐘塔、シャルトル大聖堂
- 3●89 7. 薔薇と音楽
カタルーニャ音楽堂、カサ・ナールバス
- 4●157 8. シンデレラの床
ウィーン郵便貯金局、ガレリア・ヴィット
リオ・エマヌエーレII
- 5●69 9. ハイテク・トイレ
ファン・ネレ工場
- 7●10 10. ラミネート願望
ヴァヴァン街のアパート、芸術家のアトリエ
- 8●73 11. 「レス」と「モア」
シュレーダー邸、バルセロナ・パビリオン
- 9●185 12. (最終回) プリコラージュ3題
大野教会堂、聖福寺瓦塀、日本26聖人殉教
記念施設
- 連載：建築における美学の応用
エメリッヒ・シモンチッチ＝文
竹内祥子＝訳
- 1●126 2. 音楽と建築 (1)
- 3●973 3. 音楽と建築 (2)
- 4●165 4. 舞踏と建築 (1)
- 5●109 5. 舞踏と建築 (2)
- 7●131 6. (最終回) 即興と建築、漢字と日本建築
- 連載：apple tomology トムの時空形象学
戸村浩＝文
- 10●98 1. MOVE FORM
——DONONACONTAHEDRON
- 11●166 2. MOVE FORM——動—ム
- 12●58 3. MOVE FORM——不安定構造論
- シリーズ：現代建築の新世代
飯島洋一＝文 浅川敏＝写真
- 2●94 8. (最終回) 小林克弘
東京都臨海副都心清掃工場基本デザイン、
新潟港トンネル立坑基本デザイン
- ◇海外建築情報ミックス
- 1●183 ビルディングタイプの立体化：
その1 集合／管理建築
アトリエ・ワン＝出題
集合住宅 機橋 修
刑務所+学校 丸橋 浩
上海／都市計画 陸 鐘鏡
マンション 堀井義博
刑務所 山口 賢
- 2●127 デテール研究：その1 表面
今井公太郎＝出題
トボロジカル・ウォール 田中大介
インゴット 清水裕二
ふつうの建築外装材 堀井義博
コンテナ 山口 賢
ファッションとしての外套 岡本美樹
- 3●117 都市のインフラストラクチュアと建築：
その1 交通
山本想太郎＝出題
規制 橋本直明
効率 堀井義博
- 屋根 岡本美樹
結合 岡崎泰之
解析 田中大介
政治経済／値段：その1
曾我部昌史＝出題
作用と反作用 田上健一
流通のメカニズム 岡崎泰之
巨大資本 馬場正尊
価格破壊 小坂 幹
建築家が関わる資本？ 堀井義博
ビルディングタイプ：その2 住宅
アトリエ・ワン＝出題
通信販売の家 田上健一
プロトタイプ別荘 岡部克哉
サイロの家 浜田龍哉
エッチなアパート 永山明男
ホームレスの家 堀井義博
- 6●111 デテール研究：その2 平天井（フラッ
ト・シーリング）
今井公太郎＝出題
それでも建築は「機械」である 堀井義博
すきまは裏じゃない 三村大介
95天井裏通信 丸橋 浩
ひっくり返って天井を見よう 浜田龍哉
スーパーモダンフラットシーリング
日高 仁
- 7●153 都市のインフラストラクチュアと建築：
その2 都市は超高層を生まない
山本想太郎＝出題
世界で一番小さい超高層 五十嵐太郎
超高層という宗教建築 岡本美樹
消化される超高層 丸橋 浩
都市につくられる超高層 田上健一
スカイスクレーパー＝超高層建築
堀井義博
- 8●99 政治経済：その2 タイポグラフィ
曾我部昌史＝出題
「看板」を越えて 金塚英雄+機橋 修
ポップの王様 堀井義博
言葉と建物 丸橋 浩
過剰の建築をめざして 五十嵐太郎
文字の文脈 永山明男
- 9●213 ビルディングタイプ：その3 公共建築
アトリエ・ワン＝出題
いわゆるひとつのドイツの国会議事堂のロ
ングストーリー 清水裕二
広場が公共であるということ 山内彩子
美術館ハコの内部 図書館というミニマ
ル・アーキテクチャ 岡本美樹
メディアテークは何を表徴しようか
田中大介
- 10●115 デテール研究：その3 屋根
今井公太郎＝出題
モノコック 山口 賢
柔らかな毛深いもの 丸橋 浩
進入する屋根 田中大介
ごっつい風船やね 堀井義博
非建築的屋根 永山明男
- 11●185 都市のインフラストラクチュアと建築：
その3 インフラをつくる
山本想太郎＝出題
枠組みへの介入 新井大介
リ・インフラストラクチュア 五十嵐太郎
Feng Shui (風水) 大川信行
インターフェイスの構築 田上健一
- インフラを包み込む 村上誠一
- 12●109 政治・経済：その3 ぐにゃぐにゃの
曾我部昌史＝出題
方法 丸橋 浩
引き算 岡部克哉
ホメオモルフィズム 清水裕二
自然 宋知殷
1次元／3次元 岡本美樹
- ◇書評
- 1●176 建築ジャーナリズム無頼
宮内嘉久＝著 晶文社
難波和彦＝評
- 1●177 壁の探求——安藤忠雄論
古山正雄＝著 鹿島出版会
中尾 寛＝評
- 2●118 建築家のドロローイング
香山壽夫＝著 東京大学出版会
前田忠直＝評
- 2●119 中国 都市と建築の歴史——都市の史記
張在元＝著 鹿島出版会
藤原惠洋＝評
- 3●110 「アーバン・アーキテクチャ」の時代へ
ジョセフ・ベルモン＝著
菊竹清訓＝監訳 彰国社
鈴木 明＝評
- 3●111 新・建築入門——思想と歴史
隈 研吾＝著 新曜社
谷川 暉＝評
- 4●174 TERRA 写真集テラ——創景する大地
柴田敏夫＝写真 中村良夫＝文
都市出版
平木 収＝評
- 4●175 都市の政治学
多木浩二＝著 岩波書店
隈 研吾＝評
- 5●118 デザイン・ドリームス
——映画に見る近代建築
ドナルド・アルブレイト＝著 萩 正勝＝訳
鹿島出版会
渡辺武信＝評
- 5●119 小遊星物語——付・宇宙の輝き
パウル・シェーアバルト＝著
種村季弘＝訳 作品社
長谷川 章＝評
- 6●98 メディア時代の文化社会学
吉見俊哉＝著 新曜社
高島直之＝評
- 6●99 建物が壊れる理由
マッシス・レビイ、マリオ・サルバドリー＝著
望月 重、横谷栄次＝訳 建築技術
佐々木睦朗＝評
- 7●142 数寄屋の森——和風空間の見方・考え方
中川 武＝著 丸善
大江 匡＝評
- 7●141 アダムの家——建築の原型とその展開
ジョセフ・リクワート＝著
黒石いづみ＝訳 鹿島出版会
土居義岳＝評
- 8●92 伊東忠太動物園
藤森照信＝編・著 増田彰久＝写真
伊東忠太＝絵・著 筑摩書房
川向正人＝評

- 8●93 庭の綺想学
——近代西洋とビクチャレスク美学
高山 宏=著 ありな書房
進士五十八=評
- 9●204 三井の土地と建築
——R・W・アーウィンの事業にもふれて
石田繁之介=著 日刊建設通信新聞社
坂本勝比古=評
- 9●204 テクノスケープ
——都市基盤の技術とデザイン
片木 篤=著 鹿島出版会
窪田陽一=評
- 10●106 残像のなかの建築
——モダニズムの〈終わり〉に
田中 純=著 未来社
浜田邦裕=評
- 10●107 バウハウス叢書12
デッサウのバウハウス建築
ヴァルター・グロピウス=著
利光 功=訳 中央公論美術出版
梅宮弘光=評
- 11●174 都市の鑑賞法
別役 実=著 大和書房
元倉眞琴=評
- 11●175 都市と建築のパブリックスペース
——ヘルツバルハーの建築講義録
ヘルマン・ヘルツバルハー=著
森島清太=訳 鹿島出版会
湯本長伯=評
- 12●104 超級アジア・モダン
——同時代としてのアジア建築
村松 伸=著 鹿島出版会
青井哲人=評
- 12●105 これが建築なのだ
OJ会=編 TOTO出版
榎本弘之=評

◇洋書紹介

- 3●113 VIIPURI LIBRARY——ALVAR AALTO
Michael Spens
ACADEMY EDITIONS, England, 1994
- 3●113 The Master Architect Series
TERRY FARRELL
——Selected and Current Works
image Publishing, Australia, 1994
- 5●121 Vertical Lift Elevator Patemoster
A Cultural History of Vertical Transport
Vittorio Magnago Lampugnani, Lutz Hartwig,
Jeannot Simmen
Ernst & Sohn, Germany, 1994

◇ビデオ紹介

- 1●173 「光で書く 撮影監督ストラーロ」映画の街
ローマとストラーロの残像
長谷川正允=文

◇ニュース

- 1●162 "Sculpture City" 展 アートと建築の融合を
めざして

- 石上申八郎=文
- 2●123 フランク・ロイド・ライト復刻照明コレクシ
ョン
- 2●124 技術を生かす「現代家具のつくり手たち。
職人+デザイナー展」より
- 3●116 いま、新たに柴畑荘への途を
崔 康勲=文
- 4●176 横浜港国際客船ターミナル国際建築設計競
技審査結果
- 4●180 復興に翔ける／関ボラ活動メモ
久保清一=文
- 5●106 音楽専用の「紀尾井ホール」4月2日オープン
- 5●107 国際コンテンポラリーアートフェスティバル・
シンポジウム
- 5●108 送電鉄塔の工業デザイン：IVSランドスケ
ープタワー
- 6●106 建築をつくること、生きること
姿を消す「お茶の水日仏会館」
齊藤祐子=文
- 9●181 細江勲夫の新作プロダクト
- 10●101 ひそやかな空間の詩
——ダニエル・リリュエの現代ダンス
佐藤まいみ=文
- 11●178 昼と夜とを描き分ける
ジャン・ヌーベル展「リュミエール」と講演
会より
面出 薫=文

◇展覧会レポート

- 1●175 「戦後日本の前衛美術」と「Japanese Art
After 1945」とのあいだに
The exhibition "Japanese Art After 1945 :
Scream Against the Sky"
土志田ミツオ=文
- 3●114 アメリカ・フィラデルフィア美術館で開催
「日本のデザイン：1950年以來」展
羽原肅郎=文
- 6●108 モダニズムのゆりかごのゆらぎ
岡河 貢=文
- 7●148 戦後文化の意味
戦後文化の軌跡展
岡村多佳夫=文
- 7●150 図と地のあいだで
日光アースワーク展
積田 洋=文
- 9●191 拮抗と鼓舞 インスタレーションの挑戦
渋谷和彦=文
- 9●210 有機的デジタル 山口英夫「織の記憶」展
- 10●110 デジタルな非物質性
"digit"展
北村 淳=文
- 10●111 ものの存在性
「1970年——物質と知覚」展
松畑 強=文
- 11●169 アジアの隣人たちをもっと知るために
「E.T.C.J.A.——現代日本建築における新た
な潮流」マレーシア展
クラバット・ヤントラサ=文
- 12●102 「生命のある都市」の可能性
明日へ——震災復興と大阪湾ベイエリア
安藤忠雄建築展
佐々木葉二=文
- 12●103 トロントの4畳半

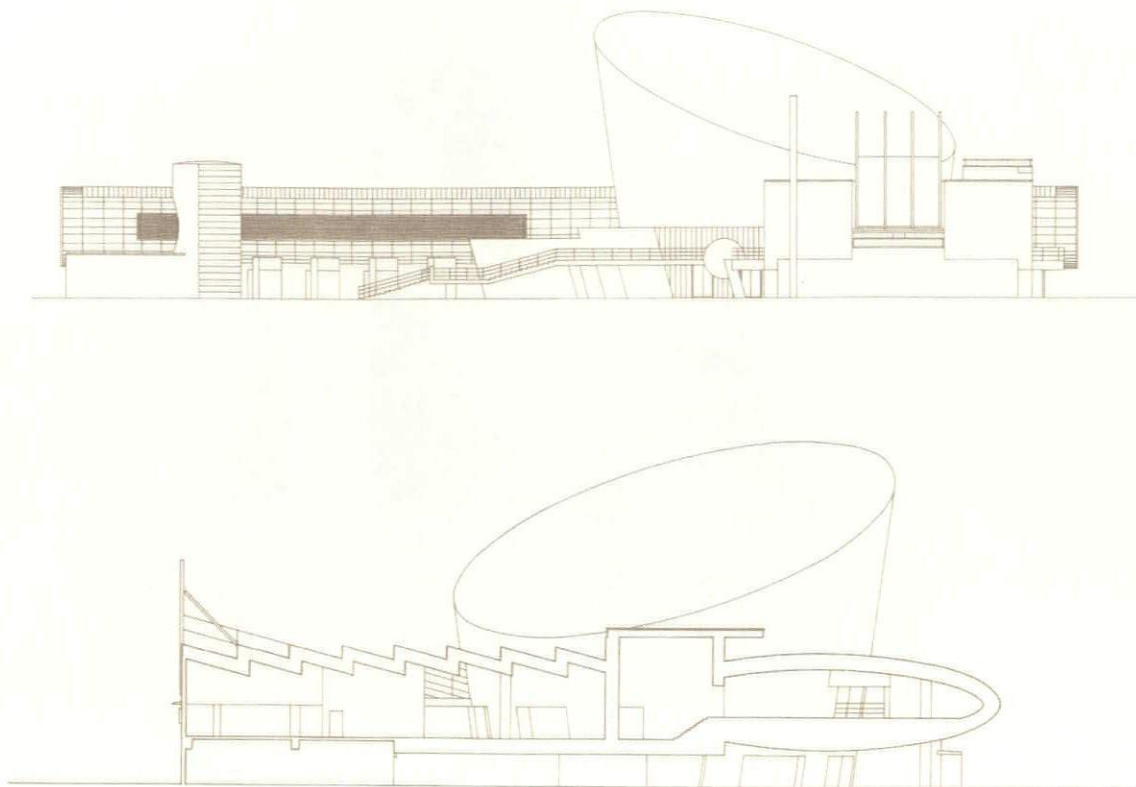
- 4+1/2 The Internal Landscapes of Tokyo展
福島加津也=文
- 12●106 メトロポリス vs アーキテクチュア
O.M.A. in Tokyo レムコールハウスのパプ
リック・アーキテクチュア展
吉良森子=文

◇レポート

- 9●197 環境芸術大賞'95

◇METROPOLITAN LIBRARY

- 1●176 橋爪紳也=評
- 2●118 高島直之=評
- 3●110 難波和彦=評
- 4●174 橋爪紳也=評
- 5●118 高島直之=評
- 6●98 難波和彦=評
- 7●142 橋爪紳也=評
- 8●92 高島直之=評
- 9●204 難波和彦=評
- 10●106 橋爪紳也=評
- 11●174 高島直之=評
- 12●104 難波和彦=評



長崎港ターミナルビル／高松伸建築設計事務所+三菱地所

9601

特集

都市づくりを仕掛ける：建築家たちの実践

くまもとアートポリス（SD9101参照）を機に、建築家がコミッショナーあるいは顧問としてまちづくりを提案する試みがなされてきた。そこでは建築家が公共建築、施設をデザインすることにより、周辺のまちづくりをリードし、触発することがもくろまれている。本特集は、地方自治体を主体としたプロジェクト、くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石まちづくりを取り上げ、行政側のねらいと共に、建築家たちのまちづくりの実践を紹介する。

[事例]

くまもとアートポリス（コミッショナー：磯崎新）：

熊本市営新地団地、牛深漁港連絡橋、鮎の瀬大橋、県営竜蛇平団地、花の温泉館、杖立橋、牛深水産観光センター、馬見原橋、有明フェリー長州港ターミナル、他

クリエイティブTOWN岡山（コミッショナー：岡田新一）：

県営住宅中庄団地、倉敷市立玉島北中学校、作陽音楽大学、水島サロン、グリーンヒルズ津山センター・ビレッジ、倉敷市西部学園地区給水塔、加茂川町民体育館、岡山県バイオテクノロジー研究所ひるぜんジャージーランド・ビジターセンター、他

長崎アーバン・ルネッサンス（顧問：堀池秀人）：

長崎港ターミナルビル、長崎港B棟上屋倉庫、他

白石メディア・ポリス（プロデューサー：堀池秀人）：

白石市第二小学校、しらさぎ橋、白石市北保育園、他

[論文]

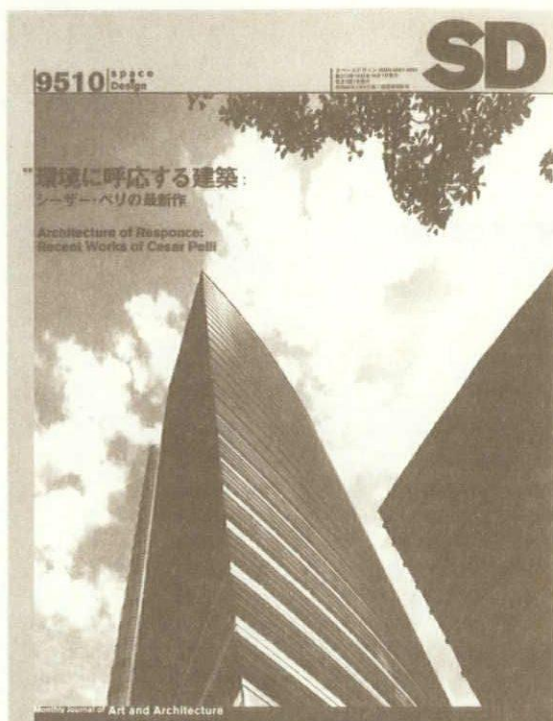
三宅理一、国吉直行

[鼎談]

岡田新一、八束はじめ、堀池秀人

SD

バックナンバー



9510

特集

環境に呼応する建築： シーザー・ペリの最新作

近年、海外、特にアジアでのプロジェクトが注目されているシーザー・ペリ。本特集は、日本国内での最新作NTT新宿本社ビルや福岡シーホークホテルを始めとするアメリカ国外の新作を紹介しながら、ペリの現代都市への視線を探る。

【作品】

NTT新宿本社ビル、シーホーク ホテル&リゾート、
クアラルンプール・シティ・センター、デル ポスケ、
香港コンベンションセンター、リパブリカビル、
キャナリーワーフ・タワー駅舎および複合施設、
新台中シティ・センター、ヘイグ・タワー、アバンドイバラ、
埼玉アリーナコンベンション募案、生産性国際交流センター

ランドマーク・グラフィティ

「タワーアート in 通天閣：
ヴァナキュラーな電脳都市」展より

関西在住の若手建築家、造形作家44人が、21世紀の通天閣を提案。この作品群を通天閣3階フロアで展示した展覧会を紹介。

【文】 鴻 英良、飯島洋一

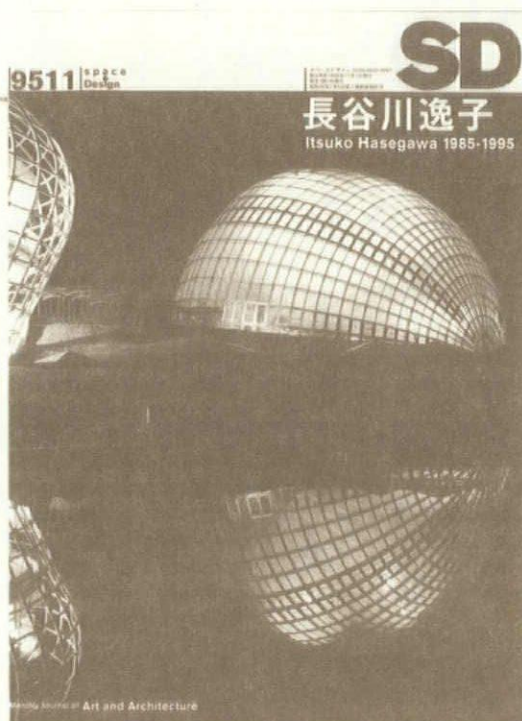
【対談】 東 孝光×橋爪紳也

【写真】 堀内広治

連載：トムの時空現象学 1

文＝戸村 浩

定価＝1,950円／本体1,893円



9511

特集

長谷川逸子 1985—95

1990年の湘南台文化センター竣工を機に、長谷川逸子の建築は規模も徐々に大きくなり、また公共のものを多く手掛けることとなった。それらの作品には従来の、自立する建築を追求していた時代とは違った、建築の公共性を重視しようという現在の意識が込められている。本特集では、過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介する。

【作品】

山梨県フルーツミュージアム、すみだ生涯学習センター、
大島町絵本館、氷見市海浜植物園、氷見市立仏生寺小学校、
熊本市営託麻団地、フットワークコンピュータセンター、
新潟市民文化会館、他全30作品。

【論文】 ビーター・クック、クリスティヌ・ホーレイ、岡河貢、
小嶋一浩、長谷川逸子、他

【対談】 多木浩二×長谷川逸子

【撮影】 大橋富夫、他

連載：apple tomology トムの時空現象学 2

文＝戸村 浩

特別定価＝3,000円／本体2,913円



新刊

サントリーミュージアム 天保山

大阪・天保山に昨年完成した安藤忠雄設計のサントリーミュージアムの全貌を余すところなく伝える建築の書。

三宅理一の書き下ろし論文、項目別の簡潔な解説文、大橋富夫による多数の写真、スケッチ、そして新たに描き起こされた詳細図などによって、大胆な構想、精緻な設計、様々な建築技術が明らかにされている。

ひとつの作品を通して、建築家安藤忠雄の全てに迫る。

安藤忠雄十三宅理一 共著

A5版

80頁

定価1950円



SD 別冊

既刊 好評発売中

SD別冊は、
ひとつのテーマを深く掘り下げ、
ユニークで役に立つ情報を提供します。

SD別冊23

照明探偵団

面白さ溢る照明探偵団の一行が世界各地を精力的に歩き回り、夜間の多種多様な照明現象を克明に記録し、解読したユニークな書。都市空間に欠かせない照明にまつわる不思議、魅力、効果を豊富なカラー写真と軽妙な文章で紹介。文：川添登、伊東豊雄、藤森照信。



定価=3,500円

SD別冊25

近未来型集合住宅 NEXT 21

大阪市内に建設された集合住宅(設計=内田祥哉、他)。エネルギー、リサイクル、環境共生、都市居住、建設システム、素材など、あらゆる面から次世代の集合住宅のあるべき姿を求めて検討が重ねられ、実行に移された意欲的な計画。その全貌を関係者が総力を挙げて編集。



定価=4,500円

SD別冊26

アパートメントの インテリア

ロンドン、パリ、ミラノ、ニューヨーク、ウィーン、東京。世界の主要都市の、建築家が設計したアパートメントのインテリアを精選。予想外の素材を用いたり、アートを積極的に取り入れるなど、自由闊達な空間構成がみられる。リフォームのアイデア集として最適。

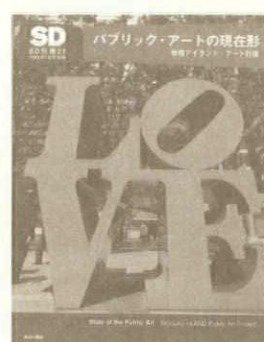


定価=4,300円

SD別冊27

パブリックアートの 現在形

超高層ビルを中心とした複合建築群「新宿アイランド」の足元の公共空間を舞台に、国内外の現代抽象美術を代表する10人のアーティストが競作。彼らと設計者、アートコンサルタントとの緊密な共同作業や制作から設置までの作業を詳細に記録。文=六鹿正治、南條史生、他。



定価=4,050円

テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片木篤著

四六判・248頁 定価2,987円

鉄道、水路、上下水道、ガス等近代都市基盤を構成する要素を、移動する物、経路、起点・終点の3点に着目して、その技術とデザインを分析する。近代技術が生み出した新たな都市空間の特性を概観し、近代の枠組を問う試み。

庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、
W.ターンブルJr共著 有岡孝訳
A5判・304頁 定価4,841円

主に中国、日本、イスラムの庭園を取り上げ、庭園の空間を構成する基本的な手法を解明する。目次：①場所の精神、②デザイナーによってつくられる場所、③過去の場所(しつらい・収集・巡礼・パターン)、④私たちの場所

ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アランJ・ブルックス、クリス・クレグ共著
難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・148頁 定価4,635円

本書は、建築デザインの今日的潮流と、先進的工法を新しい技術とともに紹介し、ここ10年の技術的な発展に関する総合的な最新情報を提供している。話題の33事例のデザインとディテールを豊富な写真・図面と簡潔な説明で概観する。

超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松伸著
四六判・272頁 定価2,575円

本書はアジア各都市で活躍するアジアの若手建築家達の紹介を通して、急激に変貌を遂げつつある隣国の都市、建築界の状況を述べるもの。筆者は数年をかけて現地取材し、足で歩いたアジア現代都市論にもなっている。

[SDライブラリー]②⑩

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハービンソン著 浜田邦裕訳
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開
島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立ちを探り、また現代建築の巨匠であるアアルト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

ハイテック・コンストラクション3 スーパーシェッズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史的変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

インテリアデザイナーのための 住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。

人気急上昇

予約申込殺到!!

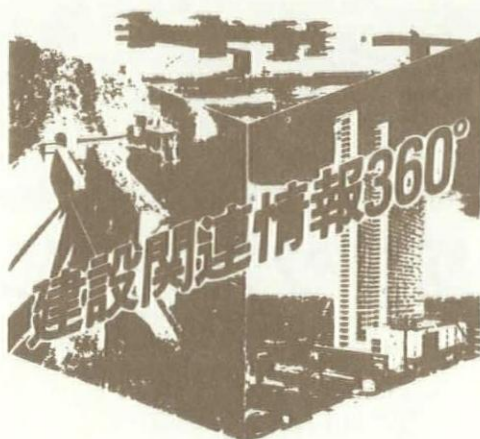
年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT



9511号 目次

●特集●「つくる側」の技術から「つかう側」の技術へ転換

- わいどあぐる ●レトロ志向一蛟帳が通信販売で売れてます／狙いはOL—この秋、コンビニ各社が弁当大戦争
- 霞が関ホットライン ●企業収益大幅にダウン／基準地価、バブル初期まで戻る／総事業費14兆超える経済対策決定
- 阪神復興 ●神戸市・東部新都心再開発、神鋼遊休地先行整備へ／復興住宅大量供給へ兵庫県が「買取り制度」活用
- 列島を拓く ●大分・愛媛両県が豊予海峡結ぶ架橋調査委／大阪国際会議場、今年度実施設計
- ビッグ・プロジェクト進行中 ●新尾道大橋、来年度に上部工発注／関空2期入札に米が一般競争排し指名適用を要求
- 海外建設事情 ●栗原工業シンガポール支店がISO9002取得／マレー半島横断パイプライン計画、来年にも建設着手
- こんな方法考えました ●余掘りを解消—先受工法改良／交通制限なしで既設道路橋を免震化
- こんなモノつくりました ●落差もOK—移動室内足場／香りで漏水検知
- コンピュータ ●2×4住宅の構造設計／足場用CADを発売
- ハウジング ●花粉もシャットアウト—健康快適住宅を発売

▶今月の「拾出し」◀加速度増す情報ネットワーク化

●用語・語録 ●雨宿り族

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに！
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

㈱鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

□新規購読申込

SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先

(職種)

該当の
ものに
○印を

ご専門
ご担当

建築 土木 機械 電気 事務 ほか
設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください)

□1年

□3年



9408 Massimiliano Fuksas: His recent works; School Saint-Exupéry, Graffiti's Museum of Niaux's Cave, Brest City Center university, Sports Complex, Housing, Parking, etc. Text; Doriana O. Mandrelli, Otto Steidle, Hideto Horiike. **Rumanian Orthodox Churches in Mordovia:** Four churches built 16th century. Photos; Takeshi Taira. Text; Yoshi Yamazaki, Riichi Miyake. ¥1,950



9409 Ideas and Approaches to Architecture and the City: A New U.S. East Coast Movement; Introduces 11 architects. B. Shirdel / J. Kipnis, Michael Sorkin Studio, S. de Martino, A. Wall, RAAUm, W. Jones, A. Zago, Pollari X Sornol, G. Rynn, D. Garofalo, M. Rakatansky. Texts; Tsuyoshi Matsuhata. **Recent Work by TAO ARCHITECTS / Shuntaro Noda:** Photos; Kouji Horiuchi, Text; Youichi Iijima. ¥1,950



9410 Torroja's Legacy of Structure and Space: The contemporary meaning of Eduardo Torroja. Works; Madrid Racecourse at Zarzuela, Market at Algeciras, Pont de Suert Church, etc. Discussion; Norihide Imagawa, Keiichi Irie. **Rebirth As a City of the Arts: Gibellina Nuova, Italy:** Urban development and architecture in Italy. Photos, Texts and Interviews; Masaru Miyawaki. ¥1,950



9411 Airport Architecture as the Nexus of the City: Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. And 21 airport terminal buildings in the world; Stansted, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts; Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥3,500



9412 SD Review 1994: Featuring SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text; Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux par Takubo 2.** ¥1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos; Ichiro Ono. Text; Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9504 Scenes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9405 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and its Development.** ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sotssass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriama City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhashi Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Kelo University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●
ドア

スライドドア

●
株式会社ユニフロー



株式会社ユニフローでは、従来販売していた、スライドドアを大幅にモデルチェンジし、外付けタイプと戸袋タイプを新発売した。

特長

- ①従来の傾斜レールを使用したタイプから、ドア本体の後ろに錘を内蔵したウエイトバランス方式に変更し、ドア下部と床の間隔を一定に保つことで、足の先を挟み込むという万が一の事故防止を図る。
- ②レールカバーもワンタッチでの開閉が可能になり、メンテナンスが容易におこなえる。
- ③ドアの開閉は、特殊ベアリング付きの滑車とガイドピンによる3点支持機構により、ガタツキなく音も静かに軽い力で開けることができる。
- ④閉まる時には、全閉する手前でエアブレーキが作動するので、指を挟むことも、跳ね返りもない。
- ⑤スライド方式のドアのため、開き戸のように開閉スペースを必要とせず、空間を有効利用できる。

※10月号の株式会社ユニフローの記事に誤りがありました、ここにお詫びして訂正致します。

●
オーニングシェルター

エクジスフォー

●
新日軽株式会社



新日軽株式会社では、発売以来、豊富な品揃え、施工性・使い勝手の良さが定評のある、エクジスシリーズのカーポート、エクジスRに続き、根強い需要がある両支持タイプのカーポート、エクジスフォーを20万円台という低価格帯で新発売した。

特長

- ①間口3000mm×奥行5100mmで276,000円と両支持カーポートとしては今までにないリーズナブルな価格である。
- ②前後100mmの柱移動ができるので、設置プランに応じた納まりが可能である。
- ③屋根（アクリル板）は、たたき込み押さえ材（樹脂製）のノックイン方式の採用により、ビス止めの手間が省ける。
- ④屋根の取付け部材・部品を大幅に減らした。
- ⑤本体は、高級感のあるセピアブラックとこはく色の2色を用意、また屋根のアクリル板はブルースモーク色とライトブロンズ色の2色を用意。
- ⑥デザイン性も高い袖パネル、長柱に対応可能なサイドパネルなどのオプションを用意。

●
張床

フロアタイル カーペットタイル

●
株式会社サンゲツ



株式会社サンゲツでは、床材の新製品を収録した見本帳「1995—1997フロアタイル」と「1995—1997カーペットタイル」の2冊を発表し、同時に発売した。床材の中でもフロアタイルやカーペットタイルは、施工が簡単でデザインが豊富なため、主にオフィスや店舗、ホテル、病院などに使用される。また、価格を合理化し、個性的なデザインをより身近なものとした。「1995—1997フロアタイル」総点数79柄309点（うち新製品38柄138点、約45%）は、業界初の常備在庫のデザインカットタイルやメダリオン（メダル型のアクセント柄）を始め、低価格対応のコンポジションタイル（耐久性、施工性に優れ、低価格）、耐タバコタイル、ノンスリップ性のゴムタイルなどバリエーション豊かな新製品を収録している。また、タイルの厚みを従来の3mmから2.5mmにし、価格をダウンさせた。「1995—1997カーペットタイル」総点数31柄235点（うち新製品18柄152点、約65%）は、8柄（総点数の58%）の商品について、3%—20%の値下げを実行し、8,000円/㎡以下の商品を増やした。また、コーディネートしやすいように柄・色のバリエーションもいっそう豊富に取り揃え、発色性や耐久性、防汚性などの機能も向上した。

株式会社ユニフロー

東京都渋谷区富ヶ谷1丁目9番16号

〒151 Tel 03-3469-9251

新日軽株式会社 エクステリア事業部

東京都江東区木場2丁目7番23号

〒135 Tel 03-3820-2552

株式会社サンゲツ

愛知県名古屋市中区西区下1丁目4番1号

〒451 Tel 052-564-3314

電動シャッター降下時非常停止装置

タッチオフ(アンドアップ)

株式会社日本シャッター製作所



株式会社日本シャッター製作所では、このほど施行された製造物責任法（PL法）に対応する商品として、電動シャッターの降下時非常停止装置、タッチオフを開発、新発売した。

特長

- ①メンテナンスフリーを実現するため、電池などの消耗部品を使用せず、画期的な自己発電方式である。
- ②発電・発光部は座板端部のサイドユニットに収納、発光器が露出しないシンプルな納まりにした。
- ③光式無線信号伝送のため、小型の受光器をマグサ下面に取付けて施工が完了する。
- ④受信器（ケース内）に搭載したCPUのプログラムで、シャッター制御。開閉機からの余分な配線の取出しは不要である。
- ⑤障害物検知のセンサー部は、座板を兼ねるアルミ型材。美観に配慮し、シャッター全長を分割せずに「通し」にした。（6mまでは1本で製作可能）
- ⑥新機構の回転バーが、どの位置の障害物接触も確実にキャッチする。（検知範囲が広がった）
- ⑦装置の異常も簡単に検証し、応急操作もできる。
- ⑧他メーカー製品や既存のシャッターにも取付け可能な汎用設計である。

株式会社日本シャッター製作所
東京都大田区上池台1丁目14番21号
〒145 Tel 03-3726-4800

塗料

DNT弾性フィラー

大日本塗料株式会社



大日本塗料株式会社では、コンクリート、モルタルの保護・補修用としてユニークな機能を備えた下地調整材、DNT弾性フィラーを新発売した。同製品は、弾性樹脂（有機）とセメント（無機）からなり、下地追随性は勿論、セメントがコンクリートの表面にアルカリ性を付与して中性化を抑制する効果があるほか、カチオン系樹脂により下地あるいは上塗りとの密着性が格段に高まったため、シーラー工程なしに直接下地（コンクリートや旧塗膜）への塗装、更には同フィラーへの上塗り塗装が可能となった。

特長

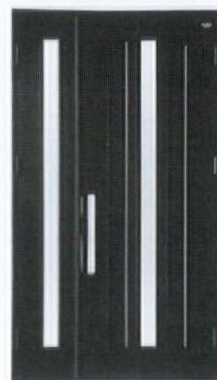
- ①強溶剤系や水系の各種上塗り塗料をシーラーなしで直接塗装できるため、工程の短縮が可能である。
- ②弾性があり下地や旧塗膜のヘアークラックによく追随する。
- ③セメントのアルカリが表面をアルカリ性に保ち、コンクリートの中性化を抑制する。
- ④有機（弾性樹脂）と無機（セメント）の長所を兼備し、耐久性に優れている。
- ⑤硬質塗材、弾性塗材のいずれの旧塗膜へも密着性が優れている。
- ⑥水系で安全である。

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

ドア

エブリバ2200・2000

立山アルミニウム工業株式会社



立山アルミニウム工業株式会社では、モダンなデザインで好評の玄関ドア、エブリバ2200・2000に新デザインを追加した。同製品は、ベーシックでありながら、モダンな印象を漂わせた現代的なデザインを採用し、多くの住まいに対応するため、2200mmと2000mmの高さがある。

特長

- ①優しく人を迎えるベーシックでモダンなデザインである。
- ②ドアデザイン5タイプ、子ドア4タイプ、袖パネル4タイプなどを追加、住まいに合わせて選べる多彩なラインナップである。
- ③ツーロック方式、コンストラクションキー、内蔵式ガードロック、3連3バルブ使用のドアクローザなど、充実した機能を装備している。
- ④カラーは、ブロンズ・ホワイト・アーバングレー・ブラックの4色を用意した。

価格（写真タイプ）

312,000円

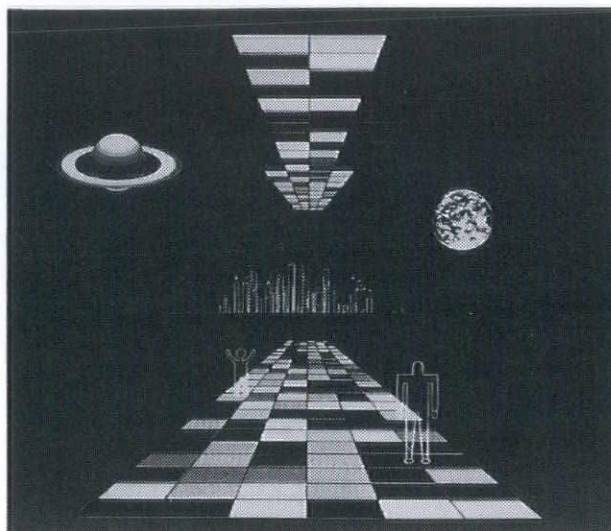
立山アルミニウム工業株式会社 住宅建材事業部
富山県高岡市早川550番地
〒933 Tel 0766-20-3559

快適な環境を
つくります。

人と都市の

営業種目 設計・施工・監理

- 電気設備
 - 受変電、幹線
 - 動力、制御装置
 - 電話、放送、インターホン
 - 防犯、防災
 - 中央監視制御
 - システム計装



- 空調・給排水・衛生設備
 - 空気調和
 - 工場配管
 - 水処理
 - コージェネレーション
 - クリーンルーム
- プラント
 - プラント計装
 - システムエンジニアリング
- 情報通信設備
 - 情報通信ネットワーク
 - 情報処理
 - 通信システム
 - 放送システム
- 電力流通設備
 - 受変電
 - 架空送配電
 - 地中送配電

活力和魅力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03) 3454-7311

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

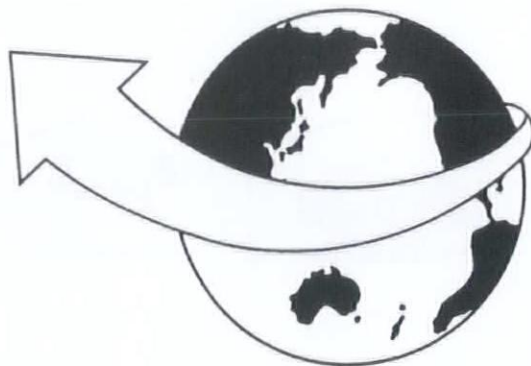
取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 〒101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

未来に向かって…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



奥山化学工業株式会社

本 社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL 03(3571)2703 代 FAX 03(3571)0264
大阪事務所 TEL 06(391)1081-2 FAX 06(395)2109 名古屋出張所 TEL 052(811)3660
横浜営業所 TEL 045(320)4832 FAX 045(320)4765 厚木出張所 TEL 0462(21)1761 FAX 0462(23)1341
埼玉営業所 TEL 048(774)2845-6 茨城出張所 TEL 0292(28)0878 FAX 0292(28)2614

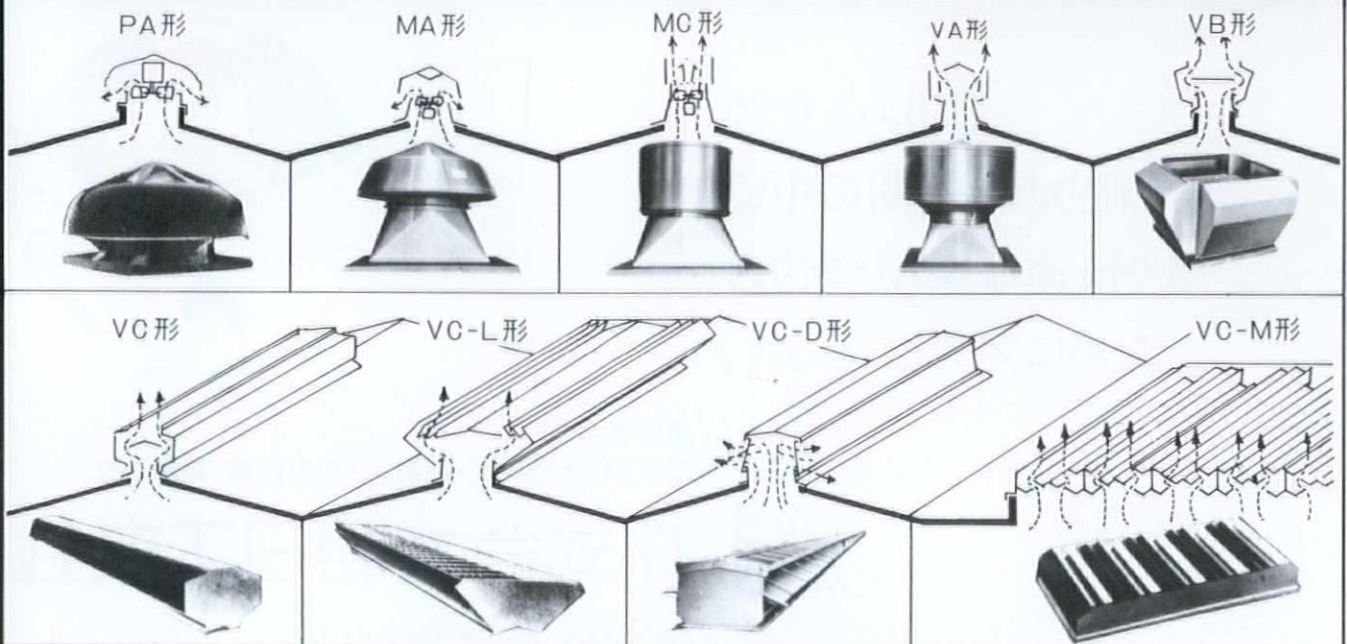
テトカッパー防水層

カッパー防水帯
コーパータイト・オクロン防水帯

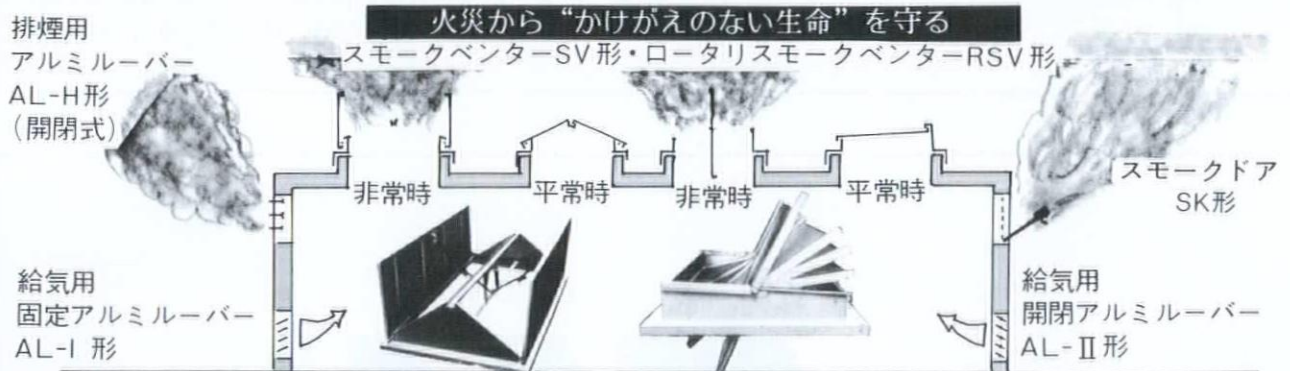
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

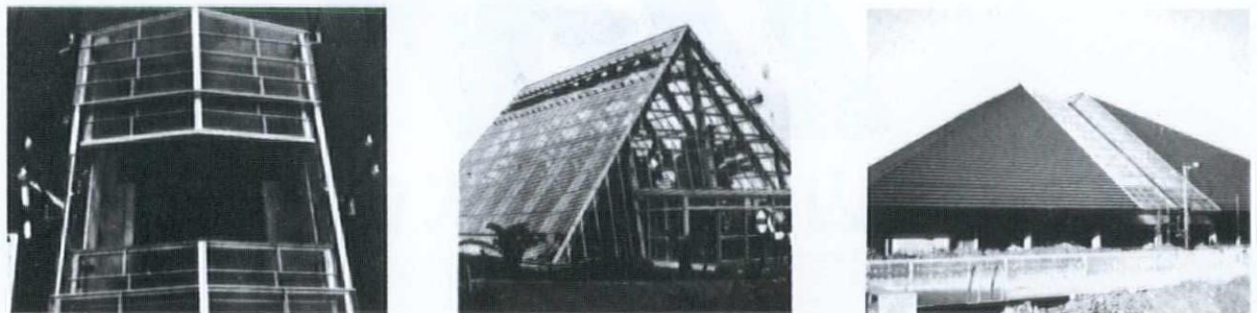


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03 (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ボンビアンビル (3863) 6011(代)

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	株朝日工業社	A 21
オ	奥山化工業株	A 21
カ	株関電工	A 3
	鹿島	A 4・A 5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A 6
	川崎電気株	108
キ	株きんでん	A 13
サ	三機工業株	84
	三建設備工業株	103
	株坂本商会	A 22
シ	J R九州	57
	昭和銅機株	A 14
	新菱冷熱工業株	116
ス	住友電設株	A 19
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A 7
	大成温調株	A 15
ト	東陶機器株	A 1
	株トーエネック	A 15
	東洋シャッター工業株	60
	東洋熱工業株	101
	東光電気工事株	A 20
	株東芝	A 24
ナ	中立電気株	A 10
ニ	日本電気株	A 9
	株西原衛生工業所	A 11
	日新工業株	A 12
ヒ	株日立製作所	表2
	日立電線株	107
ホ	ホテルイースト21	A 8
マ	松下電器産業株	A 2
ミ	三菱電機株	表4
	美和ロック株	82・83
ヤ	矢崎総業株	A 16
	株ヤナセ	81
	山田照明株	115

TOSHIBA

エネルギー・エレクトロニクス
E&Eの東芝

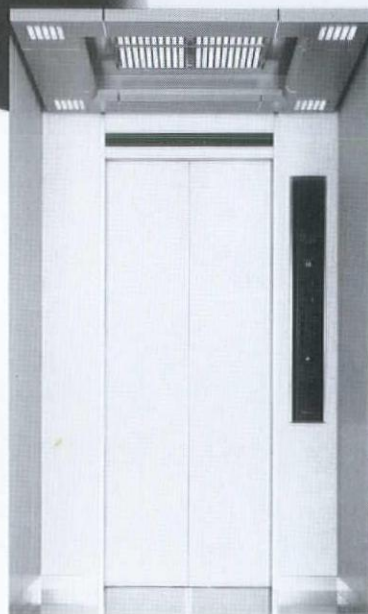
優しくきかれて、人は輝やく
人と環境のあたたかなふれあい。
ルミナスの美学が、ここにある。

—— ルミナス・アメニティ。 ——

- 人と環境の美しい調和をモチーフに設計された、ゆとり感覚あふれるニューデザイン。
- 快適な移動のために情報システムで制御された数々のインテリジェント機能を搭載。
- ヘリカルギヤを新採用し、大幅な省エネルギー化とランニングコストの低減化を実現。
- IGBTの採用と制御回路のデジタル化により、より静粛で滑らかな走行性能を発揮。

—— 人と環境のあたたかなふれあい ——
—— 東芝ニューコンセプト標準形エレベーター ——

エレメイト ルミナス・
Luminous



●お問い合わせは… 株式会社 東芝 昇降機事業部 本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) ☎(03)3457-4613

北海道支社(011)214-2451 東北支社(022)264-7640~1 東関東支社(043)299-1017 神奈川支社(045)664-8611 北陸支社(0762)24-2815 中部支社(052)564-8510~4
関西支社(06)440-2261~3 中国支社(082)246-3090~1 四国支社(0878)25-2440~2 九州支社(092)735-3056